鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書（32）

新奄美空港建設に伴う埋蔵文化財報告書

長浜金久遺跡

1985年3月

鹿児島県教育委員会

序　　文

この報告書は，鹿児島県教育委員会が，新奄美空港建設に先だって，昭和57年度から59年度にかけて実施した長浜金久遺跡の発掘調査の記録です。

長浜金久遺跡は，南西諸島に多くみられる砂丘遺跡の一つで，縄文時代，弥生～古墳時代，奈良～平安時代に相当する三つの時代の遺跡がある複合遺跡で，縄文時代の住居跡，弥生時代の人骨，大量の貝殻や貝製品など，地域的特色を示す遺物などが多数発見されました。

本書は，南西諸島の先史・古代史の解明に貴重な手がかりを提供することができると考えます。

本書を，地域の歴史研究や，文化財の保護のために活用していただければ幸いです。

終わりに，この発掘調査に終始御協力くださった県土木部空港対策室，大島支庁・港湾課，笠利町教育委員会並びに地元の皆さんに心から感謝いたします。

昭和60年３月

鹿児島県教育委員会

教育長　山　田　克　穂

例　　言

1．この報告書は新奄美空港建設事業に伴う長浜金久遺跡の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は鹿児島県土木部空港対策室の依頼で鹿児島県教育委員会が行った。

3．本書で用いたレベル数値は海抜絶対高である。

4．本遺跡調査においては梅光女学院大学教授国分直一氏，鹿児島県考古学会々長河口貞徳氏の指導助言を得た。

5．放射性炭素測定においては京都産業大学理学部教授山田治氏に依頼した。

6．人骨の取り上げおよび所見については鹿児島大学歯学部教授小片丘彦氏と長崎大学医学部講師松下孝幸氏に依頼した。

7．獣骨の同定および所見については鹿児島大学農学部助教授西中川駿氏に依頼した。

8．魚骨の同定および所見については鹿児島大学水産学部講師四宮明彦氏に依頼した。

9．貝殻の同定については宮之城中学校教諭行田義三氏に依頼した。

10．実測，トレース，挿図・図版作成，写真撮影については弥栄・青崎・牛ノ浜・長野・堂込峯崎が行い，編集は弥栄が行った。執筆分担は次のとおりである。

第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ章・Ⅵ章1）……弥　栄　久　志
第Ⅰ章第2節2－1）……青　崎　和　憲
第Ⅵ章2－1）……小　片　丘　彦　他
2）……分　部　哲　秋
3）……松　下　孝　幸
3　……松　元　光　春　他
4　……四　宮　明　彦
5　……行　田　義　三

目　　次

第Ⅰ章　調査の経過…… 7
第1節　調査に至るまでの経過…… 7
第2節　調査の組織と経過…… 7
1　調査の組織…… 7
2　調査の経過…… 7
3　日誌抄…… 8
第Ⅱ章　遺跡の環境と立地……11
第1節　遺跡の環境と周辺遺跡……11
第2節　遺跡の立地……11
第Ⅲ章　遺跡の概要……14
第1節　長浜金久第Ⅰ遺跡の概要……14
1　遺跡の概要……14
2　人工遺物……18
1）土器……18
2）石器……26
3）貝製品……45
1有孔貝，2貝匙，3円孔貝
4貝製容器，5穿孔貝，
6螺貝利器，7貝札
4）鉄製品……81
第2節　長浜金久第Ⅱ遺跡の概要……88
1　遺跡の概要……88
2　遺構……88
1）住居址……88
2）炉址……88
3）土壙……88
4）集石遺構……88
5）埋葬……95
3　人工遺物……96
1）土器……96
2）貝製品…… 115
1貝輪，2．貝筒状貝製品
3垂飾品，4貝鍬，5螺蓋利器
6貝匙状貝製品，7その他の
貝製品
3）石器…… 128
4）骨角器…… 128
第3節　長浜金久第Ⅲ遺跡の概要…… 130
1　遺跡の概要…… 130
2　遺物…… 130
1）土器…… 130
2）螺蓋利器…… 130
第4節　近代墓の概要…… 130
1　概要…… 130
第Ⅴ章　まとめ…… 137
第Ⅵ章　自然遺物の同定について…… 188
1　放射性炭素測定について…… 188
2　長浜金久第Ⅰ遺跡出土の人骨
3　笠利町長浜金久第Ⅱ遺跡出土の
弥生時代小児骨
4　笠利町長浜金久遺跡出土の人骨
5　長浜金久遺跡出土の動物骨
6　長浜金久遺跡出土魚骨および
甲殻類鉗脚について
7　長浜金久遺跡出土貝類について

挿図目次

第1図　長浜金久遺跡の位置と周辺遺跡……12
第2図　長浜金久遺跡の地形と調査地区……13
第3図　長浜金久第Ⅰ遺跡の土層図……16
第4図　長浜金久遺跡の遺物出土全体図(1)……付図1
第5図　長浜金久遺跡の遺物出土全体図(2)……付図2
第6図　長浜金久遺跡遺跡の遺物出土全体図(3)…付図3
第7図　長浜金久第Ⅰ遺跡の遺物出土状況図(1)…付図4
第8図　長浜金久第Ⅰ遺跡の遺物出土状況図(2)…付図5
第9図　長浜金久第Ⅰ遺跡の遺物出土状況図(3)…付図6
第10図　長浜金久第Ⅰ遺跡の遺物出土状況図(4)…付図7
第11図　長浜金久第Ⅰ遺跡の遺物出土状況図(5)…付図8
第12図　長浜金久第Ⅰ遺跡の遺物出土状況図(6)…付図9
第13図　長浜金久第Ⅰ遺跡の遺物出土状況図(7)…付図10
第14図　長浜金久第Ⅰ遺跡の遺物出土状況図(8)…付図11
第15図　長浜金久第Ⅰ遺跡の遺物出土状況図(9)…付図12
第16図　長浜金久第Ⅰ遺跡の遺物出土状況図(10)…付図13
第17図　長浜金久第Ⅰ遺跡の遺物出土状況図(11)…付図14
第18図　長浜金久第Ⅰ遺跡の遺物出土状況図(12)…付図15
第19図　長浜金久第Ⅰ遺跡の遺物出土状況図(13)…付図16
第20図　長浜金久第Ⅰ遺跡の遺物出土状況図(14)…付図17
第21図　長浜金久第Ⅰ遺跡の遺物出土状況図(15)…付図18
第22図　長浜金久第Ⅰ遺跡の土器実測図(1)……27
第23図　長浜金久第Ⅰ遺跡土出の土器実測図(2)……28
第24図　長浜金久第Ⅰ遺跡土出の土器実測図(3)……29
第25図　長浜金久第Ⅰ遺跡の土器実測図(4)……30
第26図　長浜金久第Ⅰ遺跡の土器実測図(5)……31
第27図　長浜金久第Ⅰ遺跡の土器実測図(6)……32
第28図　長浜金久第Ⅰ遺跡の土器実測図(7)……33
第29図　長浜金久第Ⅰ遺跡の土器実測図(8)……34
第30図　長浜金久第Ⅰ遺跡の土器実測図(9)底部……35
第31図　長浜金久第Ⅰ遺跡の土器実測図(10)底部……36
第32図　長浜金久第Ⅰ遺跡の土器実測図(11)底部……37
第33図　長浜金久第Ⅰ遺跡の土器実測図(12)底部……38
第34図　長浜金久第Ⅰ遺跡の土器実測図(13)……39
第35図　長浜金久第Ⅰ遺跡の土器実測図(14)……40
第36図　長浜金久第Ⅰ遺跡の土器実測図(15)……41
第37図　長浜金久第Ⅰ遺跡の石器実測図(1)……43
第38図　長浜金久第Ⅰ遺跡の石器実測図(2)……44
第39図　長浜金久第Ⅰ遺跡の貝製品実測図(1)有孔貝……48
第40図　長浜金久第Ⅰ遺跡の貝製品実測図(2)有孔貝……49
第41図　長浜金久第Ⅰ遺跡の貝製品実測図(3)有孔貝……50
第42図　長浜金久第Ⅰ遺跡の貝製品実測図(4)有孔貝……51
第43図　長浜金久第Ⅰ遺跡の貝製品実測図(5)有孔貝……52
第44図　長浜金久第Ⅰ遺跡の貝製品実測図(6)有孔貝……53
第45図　長浜金久第Ⅰ遺跡の貝製品実測図(7)有孔貝……54
第46図　長浜金久第Ⅰ遺跡の貝製品実測図(8)有孔貝……55
第47図　長浜金久第Ⅰ遺跡の貝製品実測図(1)……57
第48図　長浜金久第Ⅰ遺跡の貝製品実測図(2)……63
第49図　長浜金久第Ⅰ遺跡の貝製品実測図(3)……64
第50図　長浜金久第Ⅰ遺跡の貝製品実測図(4)……65
第51図　長浜金久第Ⅰ遺跡の貝製品実測図(5)……66
第52図　長浜金久第Ⅰ遺跡の貝製品実測図(6)……67
第53図　長浜金久第Ⅰ遺跡の貝製品実測図(7)……68
第54図　長浜金久第Ⅰ遺跡の貝製品実測図(8)……69
第55図　長浜金久第Ⅰ遺跡の貝製品実測図(9)……70
第56図　長浜金久第Ⅰ遺跡の貝製品実測図(10)……71
第57図　長浜金久第Ⅰ遺跡の貝製品実測図(11)……81
第58図　長浜金久第Ⅰ遺跡の貝器(1)……82
第59図　長浜金久第Ⅰ遺跡の貝器(2)……83
第60図　長浜金久第Ⅰ遺跡の貝器(3)……84
第61図　長浜金久第Ⅰ遺跡の貝器(4)……85
第62図　長浜金久第Ⅰ遺跡の貝器(5)……86
第63図　長浜金久第Ⅰ遺跡の鉄製品実測図……87
第64図　長浜金久第Ⅱ遺跡のトゞンチ配置と砂丘形成…89
第65図　長浜金久第Ⅱ遺跡の土層図……90
第66図　長浜金久第Ⅱ遺跡の遺構遺物検出状況図(1)……91
第67図　長浜金久第Ⅱ遺跡の遺構・遺物検出状況図(2)… 93
第68図　長浜金久第Ⅱ遺跡の遺構・遺物検出状況図(3)…付図19

図版目次

第69図　長浜金久第Ⅱ遺跡の住居址・炉址・土壙A検出状況図 …… 94
第70図　長浜金久第Ⅱ遺跡の土壙B図（新砂丘）…… 92
第71図　長浜金久第Ⅱ遺跡の埋葬状況図 …… 95
第72図　長浜金久第Ⅱ遺跡の土器実測図(1) …… 105
第73図　長浜金久第Ⅱ遺跡の土器実測図(2) …… 106
第74図　長浜金久第Ⅱ遺跡の土器実測図(3) …… 107
第75図　長浜金久第Ⅱ遺跡の土器実測図(4) …… 108
第76図　長浜金久第Ⅱ遺跡の土器実測図(5) …… 109
第77図　長浜金久第Ⅱ遺跡の土器実測図(6) …… 110
第78図　長浜金久第Ⅱ遺跡の土器実測図(7) …… 111
第79図　長浜金久第Ⅱ遺跡の土器実測図(8) …… 112
第80図　長浜金久第Ⅱ遺跡の土器実測図(9) …… 113
第81図　長浜金久第Ⅱ遺跡の土器実測図(10)底部 …… 114
第82図　長浜金久第Ⅱ遺跡の土器・土製円盤実測図(11) …… 118
第83図　長浜金久第Ⅱ遺跡の貝製品(1)貝輪 …… 119
第84図　長浜金久第Ⅱ遺跡の貝製品(2)貝輪 …… 120
第85図　長浜金久第Ⅱ遺跡の貝製品(3)貝輪 …… 121
第86図　長浜金久第Ⅱ遺跡の貝製品(4)貝輪 …… 122
第87図　長浜金久第Ⅱ遺跡の貝製品(5)貝輪 …… 123
第88図　長浜金久第Ⅱ遺跡の貝製品(6)貝輪 …… 124
第89図　長浜金久第Ⅱ遺跡の貝製品(7)貝輪 …… 125
第90図　長浜金久第Ⅱ遺跡の貝製品(8)貝輪，垂飾器，貝鍬，螺蓋利器 …… 126
第91図　長浜金久第Ⅱ遺跡の貝製品(9)貝匙状貝製品 …… 127
第92図　長浜金久第Ⅱ遺跡の石器実測図 …… 129
第93図　長浜金久第Ⅱ遺跡の石器，骨格器実測図 …… 130
第94図　長浜金久第Ⅲ遺跡のトレンチ配置図 …… 132
第95図　長浜金久第Ⅲ遺跡の第4・5トレンチ出土状況図 …… 133
第96図　長浜金久第Ⅲ遺跡の出土遺物実測図（土器，貝器） …… 134
第97図　長浜金久近世墓の出土遺物 …… 135
第98図　長浜金久第Ⅰ遺跡近世墓の人骨検出状況図 …… 136
第99図　長浜金久第Ⅰ遺跡の牛骨検出状況　付図20
第100図　長浜金久第Ⅰ遺跡の編年図 …… 141
第101図　長浜金久第Ⅱ遺跡の編年図 …… 142

図版目次

図版1　長浜金久遺跡全影第Ⅰ遺跡近影 …… 143
図版2　長浜金久第Ⅰ遺跡調査風影 …… 144
図版3　長浜金久第Ⅰ遺跡地層断面 …… 145
図版4　長浜金久第Ⅰ遺跡第19層出土状況 …… 146
図版5　長浜金久第Ⅰ遺跡の出土状況（頂上部） …… 147
図版6　長浜金久第Ⅰ遺跡の出土状況 …… 148
図版7　長浜金久第Ⅰ遺跡の出土状況（第19・第13層） …… 149
図版8　長浜金久第Ⅰ遺跡の出土状況（第13，19層・第19層） …… 150
図版9　長浜金久第Ⅰ遺跡の有孔貝・穿孔貝出土状況 …… 151
図版10　長浜金久第Ⅰ遺跡の螺蓋利器出土状況・焼跡 …… 152
図版11　長浜金久第Ⅰ遺跡の土器出土状況 …… 153
図版12　長浜金久第Ⅰ遺跡の土器・土師器出土状況 …… 154
図版13　長浜金久第Ⅰ遺跡の出土状況（第13・第19層） …… 155
図版14　長浜金久第Ⅰ遺跡の出土状況（第13層） …… 156
図版15　長浜金久第Ⅰ遺跡の出土状況（第13層） …… 157
図版16　長浜金久第Ⅰ遺跡の出土状況（第13層） …… 158
図版17　長浜金久第Ⅰ遺跡の牛骨出土状況 …… 159
図版18　長浜金久第Ⅰ遺跡の黒色土 …… 160
図版19　長浜金久第Ⅰ遺跡の第Ⅰ・Ⅱ類甕形土器 …… 161
図版20　長浜金久第Ⅰ遺跡の第Ⅱ・Ⅲ類甕形土器 …… 162
図版21　長浜金久第Ⅰ遺跡の第Ⅳ・Ⅴ類甕形土器 …… 163
図版22　長浜金久第Ⅰ遺跡の第Ⅴ類甕形土器・鉢形土器・甕形土器底部 …… 164
図版23　長浜金久第Ⅰ遺跡の甕形土器底部と壺形土器 …… 165
図版24　長浜金久第Ⅰ遺跡の土師器・石器 …… 166
図版25　長浜金久第Ⅰ遺跡の有孔貝 …… 167
図版26　長浜金久第Ⅰ遺跡貝製品 …… 168
図版27　長浜金久第Ⅰ遺跡の貝製品 …… 169
図版28　長浜金久第Ⅰ遺跡の貝製器 …… 170

図版29　長浜金久第Ⅰ遺跡の貝器…… 171
図版30　長浜金久第Ⅰ遺跡の貝器と鉄製品…… 172
図版31　長浜金久第Ⅱ遺跡の近影・出土状況…… 173
図版32　長浜金久第Ⅱ遺跡の出土状況…… 174
図版33　長浜金久第Ⅱ遺跡の住居址・集石……175
図版34　長浜金久第Ⅱ遺跡の出土状況・埋葬人骨…… 176
図版35　長浜金久第Ⅱ遺跡の出土状況・出土遺物…… 177
図版36　長浜金久第Ⅱ遺跡の出土遺物…… 178
図版37　長浜金久第Ⅱ遺跡の出土遺物…… 179
図版38　長浜金久第Ⅱ遺跡の出土遺物…… 180
図版39　長浜金久第Ⅱ遺跡の出土遺物…… 181
図版40　長浜金久第Ⅱ遺跡の出土遺物…… 182
図版41　長浜金久第Ⅱ遺跡の出土遺物……183
図版42　長浜金久第Ⅲ遺跡の近影・出土状況…… 184
図版43　長浜金久第Ⅲ遺跡の出土状況・出土遺物…… 185
図版44　近世人骨出土状況(第1号・第2号)…… 186
図版45　近世墓の副葬品…… 187

表　目　次

第1表　第Ⅰ表類甕形土器諸訳……18
第2表　第Ⅱ類甕形土器諸訳類……19
第3表　第Ⅲ類甕形土器諸訳……20
第4表　第Ⅳ類甕形土器諸訳……22
第5表　第Ⅴ類甕形土器諸訳……22
第6表　鉢形土器諸訳……23
第7表　甕形土器底部諸訳……23
第8表　壺形土器諸訳……25
第9表　土師器諸訳……26
第10表　石器諸訳……26
第11表　有孔貝諸訳……45
第12表　貝匙諸訳……56
第13表　貝製容器諸訳……58
第14表　穿孔貝諸訳……72
第15表　螺蓋利器諸訳(Ⅰ類)……75
第16表　鉄製品諸訳……77
第17表　第Ⅰ類土器諸訳…… 77
第18表　第Ⅱ類a土器諸…… 80
第19表　第Ⅱ類b土器諸…… 81
第20表　第Ⅱ類c土器諸…… 96
第21表　第Ⅱ類d土器諸…… 97
第22表　第Ⅲ～Ⅹ類土器諸訳…… 100
第23表　底部諸訳…… 101
第24表　貝輪諸訳…… 101
第25表　研磨器諸訳…… 103
第26表　タタキ石，凹石諸訳…… 104
第27表　土製円盤と外耳土器諸訳……104

第Ⅰ章　調査経過

第1節　調査に至るまでの経過

鹿児島県は大島郡笠利町万屋・和野地区に新奄美空港の建設を計画し，その建設用地内に周知の埋蔵文化財包蔵地が所在することから，県土木部空港対策室からその取り扱いについて県教育委員会文化課に協議があったので試掘調査を行ない2ヶ所の遺跡を確認した。そして空港対策室と再協議し，一部の現状保存と記録保存を行うため本調査にはいった。

第Ⅰ次調査は確認を主として行ない昭和58年1月24日より2月12日まで現場調査を行ない，第Ⅰ遺跡と第Ⅱ遺跡の確認をみる。第Ⅱ次調査は第Ⅰ次調査をうけて全面調査に昭和58年10月12日～58年12月26日まで行なったが遺跡が拡大したので第Ⅲ次調査として残りの全面調査を行なった。第Ⅰ遺跡は全面記録が終了した。なお第Ⅱ遺跡は住居址を含め現状保存が得られ，空港の緑地帯となる計画である。また，今回の調査で第Ⅲ遺跡が確認され調査の必要があることが確認された。

第2節　調査の組織と経過

1．調査の組織

調査主体者	鹿児島県教育委員会教育庁		山田克穂
調査責任者	鹿児島県教育庁文化課	課　長	猿渡侯昭（昭和57年・58年度）
	〃	〃	桑原一廣（昭和59年度）
	〃	課長補佐	本田武郎（昭和57年・58年度）
	〃	〃	坂口　肇（昭和59年度）
	〃	主　幹	中村文夫（昭和59年度）
調査企画	〃	主任文化財研究員	諏訪昭千代（昭和57年・58年～59年9月）
	〃	〃	向山勝貞（昭和59年9月～　　）
調査者	〃	主　事	弥栄久志（2・3次）
	〃	〃	青崎和憲（1次試掘）
	〃	〃	長野真一（2次）
	〃	〃	堂込秀人（1次試掘）
	〃	文化財調査員	峯崎幸清（3次）
事務担当	〃	管理係長	寺園　晃
	〃	〃	安藤幸次（昭和59年9月）
	〃	〃	濱松　巖（昭和57年・58年度）
	〃	主　事	畑　征治（～昭和59年8月13日）
	〃	〃	山下玲子（昭和57年・58年度）
	〃	〃	田中孝子（昭和59年～　　）

2．調査の経過

1．第1次調査……試掘調査

昭和58年１月24日より，昭和58年２月12日まで現場調査を行ない，昭和58年２月14日より，昭和58年３月31日まで整理作業を行う。

日誌抄による経過……現場作業は１週間単位で，整理作業はひとまとめに記す。

昭和58年10月11日（火）～15日（土）

調査開始が11日で長浜金久第Ⅰ遺跡からはじめる。第Ⅱ次調査の開始。

Ａ～Ｇ―17～22区の表土剝ぎを行い，Ａ～Ｇ－９～16区，Ａ～Ｅ－４～８区と進む。Ａ～Ｅ－４～８区には貝殻集中箇所が４ヶ所検出される。Ａ～Ｇ－９～16区には貝製容器や螺蓋利器の他にヤコウガイ・シャコガイ・マガキガイが多量に検出，また土器片も検出，貝殻集中箇所は砂丘の頂上部より海岸へ傾斜して検出される。

10月17日(月)～22日(土)

Ａ～Ｇ－９～16区とＡ～Ｇ―17～22区を行う。貝殻の検出作業と表土剝ぎが主体となる。ユンボで表土剝ぎを行ったが現地表面下約７ｍ下まで掘り下げた。ここは端岸よりの所で旧砂丘がここまであったことが判明した。Ａ～Ｇ―17～22区の清掃作業の後，写真撮影を行う。Ａ～Ｇ－９～16区は$\frac{1}{10}$実測へはいる。また22日に長浜金久第Ⅱ地点の表土剝ぎにかかる。

10月24日(月)～29日(土)

長浜金久第Ⅰ遺跡はＡ～Ｇ－９～16区の$\frac{1}{10}$実測，Ａ～Ｇ―17～22区の実測のための遺物検出作業，Ａ～Ｇ―17～22区，Ａ～Ｅ－４～９区の割り付け作業を行う。長浜金久第Ⅲ遺物は土拡検出後図面：写真撮影し掘り下げを行い，貝塚の一部まで調査を行う，貝殻・獣骨等が検出。

10月30日(月)～11月５日(土)

11月３日(木)は現場作業休止，遺跡が指定以外に拡がるため文化課と空港対策室と協議を始める。長浜金久第Ⅰ遺跡はＡ～Ｇ－９～16区に於いては実測のための遺物検出作業と$\frac{1}{10}$実測他は実測のための遺物検出作業，地形測量を行う。長浜金久第Ⅱ遺跡は第Ⅰ次調査よりも拡張するため伐採作業と拡張区の表土剝ぎを行う。

11月７日(月)～11月12日(土)

長浜金久第Ⅰ遺跡はＡ～Ｇ－９～16区の$\frac{1}{10}$実測，実測のための遺物検出作業。地形測量を，Ａ～Ｇ―18～22区の$\frac{1}{10}$実測，９月と10日にヘラ状鉄製品と鉄製つりばりが出土。長浜金久第Ⅱ遺跡は拡張区の表土剝ぎと遺物検出作業を行う。

11月15日(火)～11月19日(土)

長浜金久第Ⅰ遺跡はＡ～Ｇ－９～16区とＡ～Ｇ―17～22区の$\frac{1}{10}$実測と全区の遺物検出作業。Ａ～Ｅ－４～８区の掘り下げ。長浜金久第Ⅰ遺跡は第１次調査（試掘）で指定範囲された以外に広がるため文化課と空港対策室と協議し，試掘調査した地域の再度トレンチを入れ遺跡の範囲確認作業を行うことを決定。そして範囲の再確認と来年度で完全掘りすることになる。この原因としては試掘時の深掘りが砂丘のため限界があり，５～７ｍまで掘れなかったためである。まず８列に海岸まで幅４ｍのトレンチを入れる。長浜金久第Ⅱ遺跡は写真撮影のための清掃と写真撮影を行う。

11月21日(月)～11月26日(土)

長浜金久第Ⅰ遺跡はA～G－9～22区の$\frac{1}{10}$実測と実測のための遺物検出作業。A～E－4～8区の遺物検出作業。長浜金久第Ⅱ遺跡は土手の作業。

11月28日(月)～12月3日(土)

長浜金久第Ⅰ遺跡はA～G－9～22区の$\frac{1}{10}$実測と実測のための遺物検出作業。A～E－4～8区の遺物検出作業。9列の土手の遺物検出。16列の土手の遺物検出。9・16列の断面図作成。

12月5日(月)～12月10日(土)

全区の$\frac{1}{10}$実測。A～G－9～22区の$\frac{1}{10}$実測。遺物取り上げ。遠影写真撮影。

12月12日(月)～12月16日(金)

長浜金久第Ⅰ遺跡は全区に於いて遺物取り上げを行いA～E－4～8区においては$\frac{1}{10}$の実測を行う。長浜金久第Ⅱ遺跡は実測のための遺物検出と$\frac{1}{10}$実測，地形測量を行う。

12月19日(月)～12月26日(月)

長浜金久第Ⅰ遺跡はA～G－4～16区における$\frac{1}{10}$実測終了後，遺物取り上げを行う。長浜金久第Ⅱ遺跡は$\frac{1}{10}$実測後遺物取り上げ遺構検出を行う。そして土壙と住居址の検出を見る。住居址の写真，実測を行い埋めもどす。土層断面図作成。本年度の現場作業を25日で終了し，26日に帰鹿。

昭和59年1月5日(木)～3月31日(土)

整理作業は文化課の収蔵庫で行う。土器洗い，図面整理を行い概報を作成する。3月31日に概報の印刷製本ができあがる。

長浜金久第Ⅰ・Ⅱ遺跡の第3次調査

昭和59年4月4日(水)～13日(金)まで収蔵庫にて整理作業を行う。

4月16日(月)～4月20日(金)

第Ⅲ次調査の現場調査を4月16日より始める。

F・G－10・11区の表土剝ぎを行う。

4月23日(月)～4月28日(土)

G・H－15～22区の表土剝ぎを行う。3枚の包含層を確認。16列の土層写真のための断面調整，写真撮影。

5月7日(月)～5月12日(土)

H－12～15区の第13層に遺物検出。Ⅰ・J－35～40区の表土剝ぎを行う。第13層に遺物検出。R－49区の人骨検出作業。

5月14日(月)～5月18日(金)

H・Ⅰ－18～25区の表土剝ぎ，遺物検出。J－19区遺物実測。R－49区の人骨処理，鹿児島大学歯学部小片・川路両先生の取り上げ。(人骨実測)

5月21日(月)～5月26日(土)

K・L—19～25区遺物実測。K・L—22～25区の掘り下げ，第Ⅲ遺跡は前年度の包含層土をふるいにかける。骨製品・貝輪14点出土。

5月28日(月)～6月2日(土)

長浜金久第Ⅰ遺跡はJ～M—22～26区の図面作成。J・K—21～28区の掘り下げを行う。長浜金久第Ⅱ遺跡はふるいでの遺物採集。

6月2日(月)～6月8日(金)

J・K—24～26区の掘下げ，遺物多量に出土。G～Ⅰ—17～20区平板図作成。遺物取り上げ。J—18区図面作成。K・L—27～28平板図作成。写真撮影。G・H—13～16区グリッド設定。G・F—12・13区遺物実測。F・G—12～15区遺物取り上げ。H～K—24～26区の遺物検出。E・F—12区の遺物実測。J・K27・28区の土手はずし。遺物検出。J・K—25・26区のグリッド打ち。

6月11日(月)～6月17日(日)

K・L—29～41区の掘り下げ。E—10・11区の実測と遺物取り上げ。L—30区の遺物実測，E・F—10・11区，F—14～19区，G—15～18区，D·E—11区の取り上げ。G・H—9～12区の掘り下げ。F・G—8～10区の掘り下げ。E～G—13区の実測。L—30区の実測。E—18区の地点で第19層より約下に40cmの層で兼久式以外の土器出土。

6月18日(月)～6月23日(土)

Ⅰ—13・15区，L・O—31区，Ⅰ—11～13区，M・O—29～32区，H—9・10区，G・H—12・13区，B—14区の遺物実測，取り上げ。K・L—26～31区，M・O—30～32区の掘り下げ。O—35・36区の写真撮影。河口貞徳氏の指導。

6月25日(月)～6月30日(土)

O・P—39～43区，H—12区，R—45区，L・M—30・31区，J・K—25・26，K—20区の遺物実測，取り上げ……第Ⅰ遺跡。住居址の拡張……第Ⅱ遺跡。第Ⅲ遺跡の確認（1～5のトレンチを入れる)。　国分直一氏の指導

7月2日(月)～7月6日(金)

第Ⅰ遺跡はJ・K—23～30区の遺物実測，取り上げ。第Ⅱ遺跡は住居址拡張区の実測，埋めもどし。第Ⅲ遺跡の図面作成。

7月9日(月)～7月14日(土)

第Ⅰ遺跡はJ・K—24～26・30区の遺物実測，取り上げ。第Ⅱ遺跡は埋めもどし，杭打ち。第Ⅲ遺跡は杭打ち。器材運搬，遺物搬出，14日で現場作業終了。

7月16日(月)～7月31日(火)

文化課の収蔵庫にて遺物・図面を整理し，報告書を作成する。報告書は第1次調査，第Ⅱ次調査，第Ⅲ次調査を合せて作成した。なお報告書のでき上りは60年3月である。

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境

第1節　遺跡の位置と環境

長浜金久遺跡は鹿児島県大島郡笠利町和野長浜金久に所在する。奄美大島は鹿児島の南約400kmの洋上にある島で南西諸島の中の奄美諸島に属する。その奄美諸島は大きく分けて喜界島，奄美大島，徳之島，沖永良部島，与論島からなり，奄美大島はその中で最も大きい島である。奄美大島は北部に平地が多く，南部は山がちで湯湾岳の標高694mの山を最高峰として，標高400m～500m級の山々が連なっている。

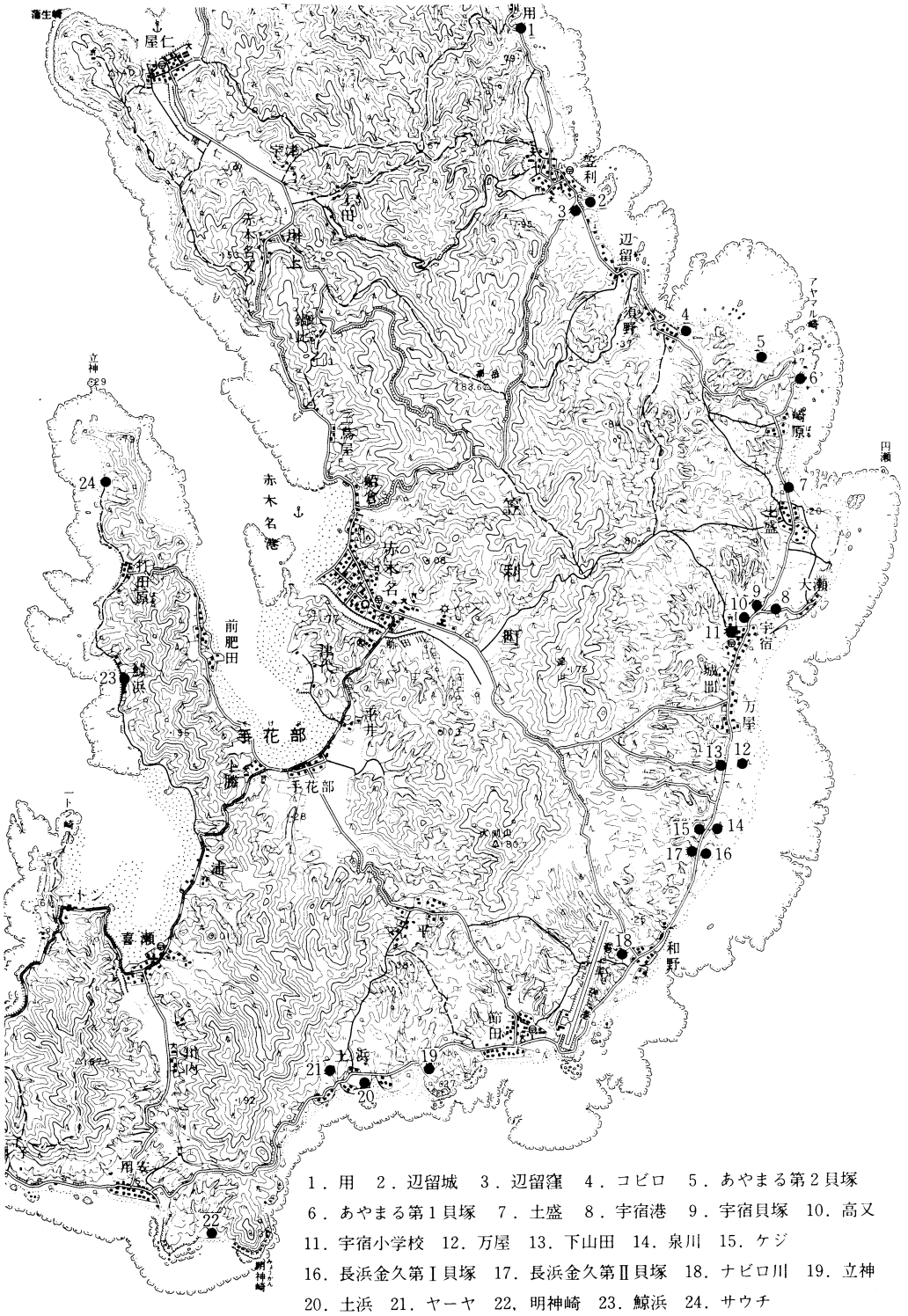
長浜金久遺跡のある笠利町は奄美大島の中では北部に位置し，南北約15km，東西約4.5kmの細長い半島である。そして，この地域の地形を見ると標高約150mの淀山や高岳等が南北に連なり，西側や北側は海岸まで山麓が延びている。この西・北海岸はリアス式海岸の様相を提し，赤木名湾，喜瀬湾等がある。集落としては赤木名をはじめ，喜瀬，屋仁，佐仁等がみられる。

なお，赤木名は藩制時代の奄美の代官所が置かれたところで現在も笠利町の行政の中心地である。

東海岸は大平洋に面し，用，笠利，宇宿，万屋，和野，節田，用安等の集落がみられる，東海岸は砂丘が発達し，とくに宇宿，城間，万屋，和野の間は発達が大きい。また，この地域は後に平地をかえ，遺跡も多く宇宿貝塚，宇宿港遺跡，万屋下山田遺跡，ケジ遺跡等が知られている。長浜金久遺跡は万屋と和野の間の砂丘上にある。

第2節　遺跡の立地

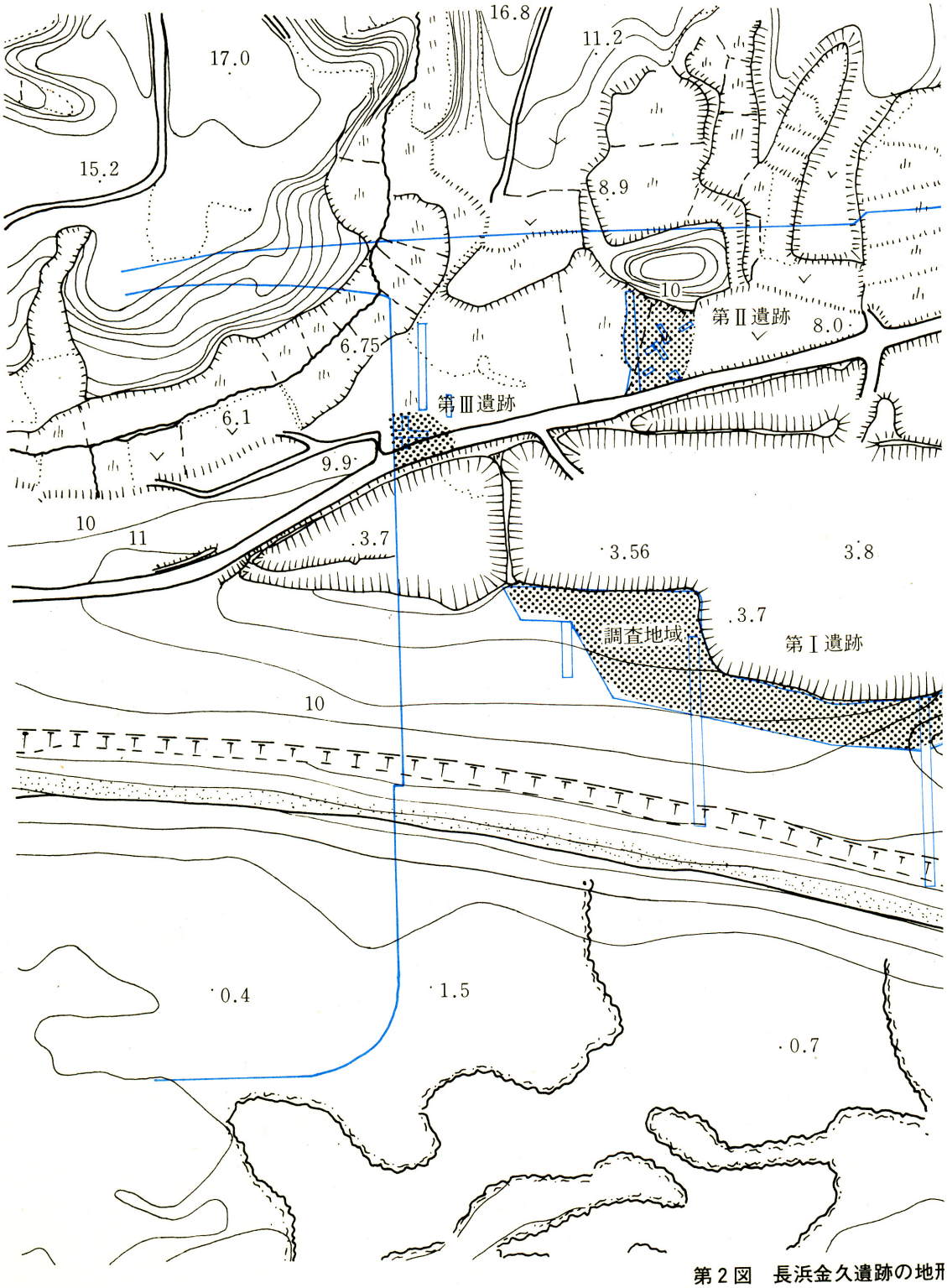
長浜金久遺跡の地形は後背地標高15m～50mの丘陵の前面に砂丘が発達し，海に約250m進んでいる状態である。万屋と和野の間には5本の小河川が流れ，その中でも長浜金久と泉川の間を流れる小河川が形成した砂丘に遺跡が立地している。この砂丘は堆積岩が風化した赤土の上に旧砂丘が形成され，一部にはクール（砂が固ったもので地元の名称）もみられる。地形上からみると（第2図参照）砂丘の形成は第1段階が，海岸線が現在の県道位までで，川は逆L字状に曲がり海へ注ぐ，対岸の砂丘（北側）も形成され現在の県道よりも若干東側（海より）にあたると考えられる。その砂丘の発達は約30m位であろう。第2段階は大半が砂取りでなくなっているが南側に若干残ている。それから判断すると，県道から海岸へ約70m位の幅の砂丘が考えられる。次の第3段階は砂丘が若干北へ延び海岸へ約150m発達し川はL字に曲り砂丘の頭をおさえるように海へ流れこんでいる。次の第4段階は大きく，砂丘が北へ延び川はL字になり，北へ約150m発達して，頭がおさえられるように曲って海へ流れる。ここでは別の北側の川も合流し，現在の河口となっている。対岸の砂丘も同じように発達し，南側へ進んでいるが比較的新しい時期に形成されたものとみられる。第1段階の砂丘上には縄文後期相当の遺跡が数ヶ所みられる。長浜金久第Ⅱ遺跡やケジ遺跡，万屋遺跡，下山田遺跡，宇宿貝塚等がこの線上に並び，長浜金久第Ⅲ遺跡も含まれる。第3段階としては長浜金久第Ⅰ遺跡，泉川遺跡等がある。この第4段階の遺跡は現在のところ見あたらない。



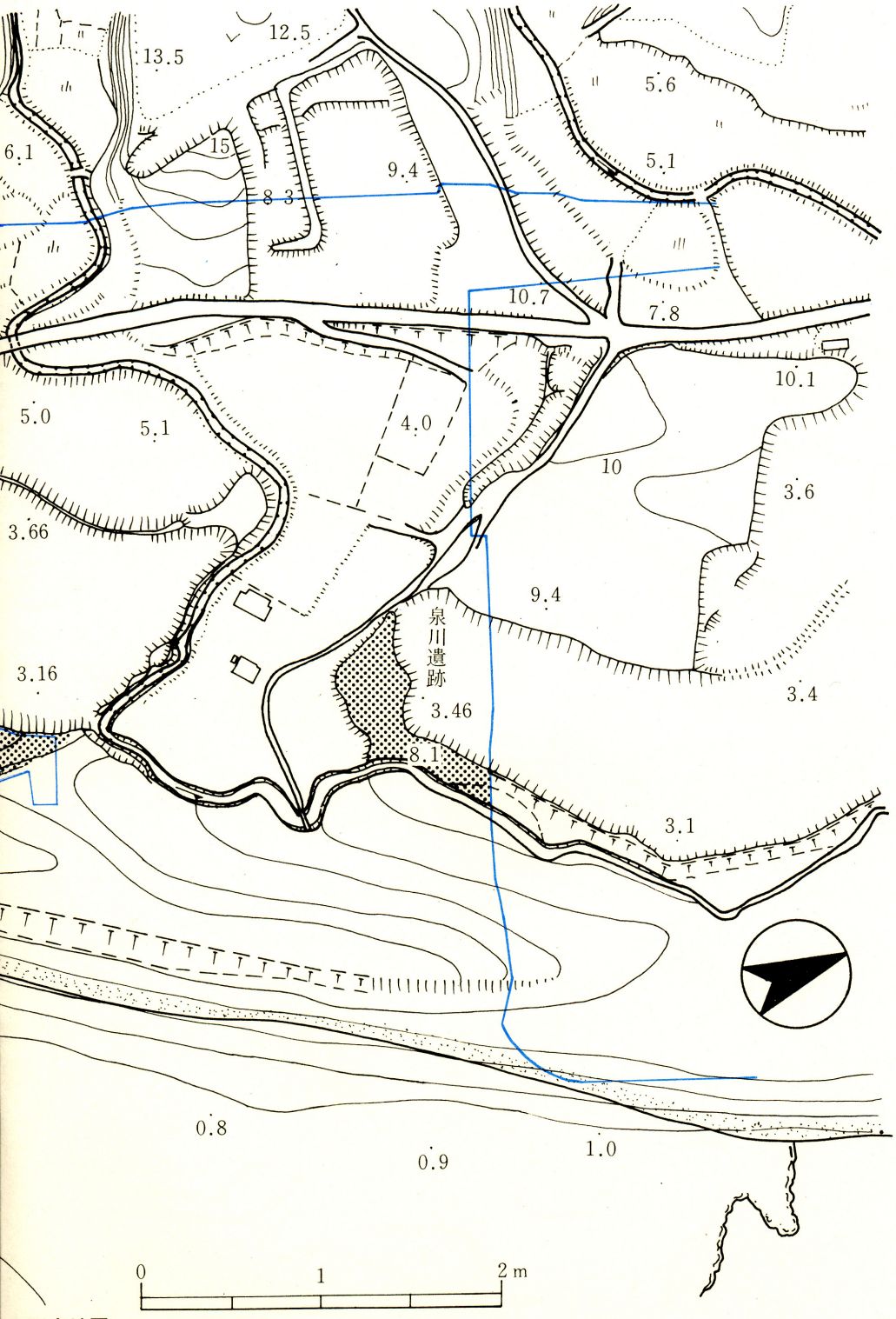
1．用　2．辺留城　3．辺留窪　4．コビロ　5．あやまる第2貝塚
6．あやまる第1貝塚　7．土盛　8．宇宿港　9．宇宿貝塚　10．高又
11．宇宿小学校　12．万屋　13．下山田　14．泉川　15．ケジ
16．長浜金久第Ⅰ貝塚　17．長浜金久第Ⅱ貝塚　18．ナビロ川　19．立神
20．土浜　21．ヤーヤ　22，明神崎　23．鯨浜　24．サウチ

1000m　0　1000　2000　3000

第1図　長浜金久遺跡と周辺遺跡



第２図　長浜金久遺跡の地形


12.5
13.5
5.6
6.1
15
9.4
5.1
8.3
10.7
7.8
10.1
5.0
5.1
4.0
10
3.6
3.66
9.4
泉川遺跡
3.16
3.46
3.4
8.1
3.1
0.8
0.9
1.0
0
1
2 m

形と調査地区

第Ⅲ章 遺 跡 の 概 要

第１節　長浜金久第Ⅰ遺跡の概要

１．遺跡の概要

本遺跡は，砂丘に形成された貝塚を伴った遺跡である。

貝塚が残存する砂丘は海岸線と平行してほぼ南北に形成され，その距離は約１kmに達している。この砂丘は大きく２分され，南側は標高13m で高く，中央部の小川が急に北へ曲る部分で低くなっている。そしてその北側は砂丘が舌状に北へ延び標高は８ｍラインが頂上附近を走っている。（第２図参照）　これは砂丘の形成が大きく２回みられたと考えられ，南側の砂丘から北側の砂丘へ延びたことを示している。

遺跡は南側の砂丘に立地し，砂丘の山手側の大半は砂取事業で剝られ，頂上附近より海側の部分が残存していた。

調査方法は４ｍ×４ｍのグリッドで東西方向へＡ・Ｂ・Ｃ……，南北へ１・２・３……とし49区まで設定した。また遺物の取り上げは４ｍ×４ｍ各グリッドをさらに１ｍ四方に16細分し，Ａ－４区－１，Ｂ－15区－16として註記した。また貴重品と思われるものについては，通し番号で取り上げ，土器・石（石器）・貝殻等は出土面を$\frac{1}{10}$で実測した。

調査面積は約3,600㎡で試掘も含め３回の調査を行った。最も浅い頂上部は現地表面より約30cmで最も深いところは約７ｍで遺物の出土をみた。

古代の遺物の出土する地域はＡ－５区・Ｂ－４区より，Ｑ－39区まであった。またＲ－49区には近世の墓が２基あった。

この遺跡はクール（砂丘が石灰化したもので硬い砂丘＝地域の名称）の上に黄白色の砂層が１～３ｍあり，その上に砂の腐植化した黒色砂層と腐植化していない黄白色砂層が10～50cmの各層が互層となり現地表面までは20枚数えられた。遺物は第19層と第13層と第７層にみられた。これは頂上附近では分層されておらず海側によって確認された。この３層は放射性炭素測定の結果第19層が1,120±20Ｂ，Ｐ，絶対年代換算ではＡＤ830 ～ 890年，第13層が930 ±20Ｂ，Ｐ，絶対年代換算ではＡＤ1,020 ～ 1,050年，第７層が 690±20Ｂ，Ｐ，絶対年代換算ではＡＤ1,240 ～ 1,290年の数値が出た。第19層には土器・石器・貝器・鉄器・貝殻が出土し，第13層には土器が数点（器形不明）・石器・貝器・貝殻が出土し，第７層には貝殻が出土した。これは第１次，第２次調査では明確に検出されなかったが第３次調査の結果から判明した。

第４・５・６図（付図1・2・3)は出土状況とレベル数値によって作成した検出状況図で第２次調査では頂上附近が調査範囲であったため概報では同一面として取り上げた。分けられなかった理由としては３文化層が頂上附近で，約30～50cmの中の腐植土層中に包含されているためであった。よってＡ～Ｄ－11～16区や，Ｂ～Ｆ－19～21区は３文化層が重なっていることも考えられる。一応第19・13・７層の３文化層で判明できたものは第3・4図に上げている。また概報では長浜金久第１貝塚と称したがここでは長浜金久遺跡と変更した。

第７層の文化層はＪ・Ｋ—18・19区に検出された約140点の貝殻でマガキガイだけであった。出土状況は貝殻が２ヶ所に集中しており，炭粉もあり，これは貝を採集してこの場で料理したことがうかがえられる。なお時代を示す遺物は出土していないが放射性炭素測定値からみればＡＤ1240～1290年の13世紀のものと考えられる。

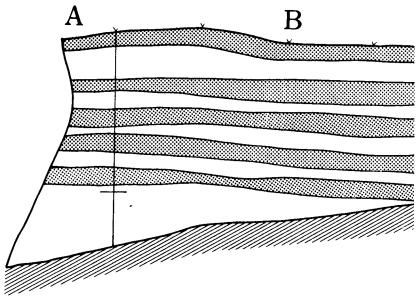
第13層の文化層はＣ～Ｄ—５～９区に５ヶ所，Ｇ～Ｉ—７～15区に10ヶ所，Ｄ～Ｆ—13・14 5～６ヶ所，Ｆ—17・18区に１ヶ所，Ｋ～Ｒ—26～39区に14～15ヶ所の小規模の貝殻集中（概報では“貝だまり”と称した）がみられ，Ａ～Ｅ—11～16にも数ヶ所みられるが層位的に不明確であった。

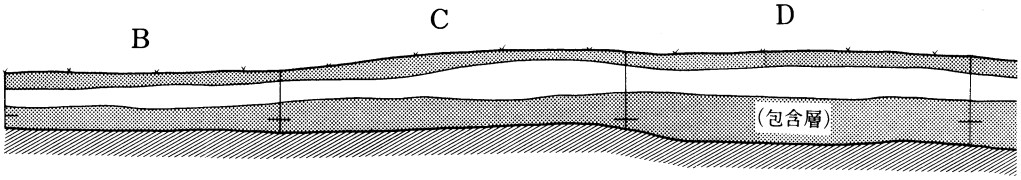
この貝殻集中箇所は35以上あり，ともに炭粉と伴っている。これらは第７層文化の貝殻集中箇所と同じで貝を採集し，火を入れ，中身を取り出し，貝殻を棄てた跡と考えられる。貝殻はマガキガイが大半であり，一部オニノツノガイ等も含まれている。時代を示すものとしては土器片がＨ—12に２点出土しているが細片で時代の判断が困難であった。しかし，この貝殻集中箇所の貝殻を放射性炭素測定した結果ＡＤ1020～1050年の11世紀の数値がえられた。

第19層の貝殻は第13層の貝殻集中箇所と比較して規模が大きく，貝殻もヤコウガイ・シャコガイ等大形貝が混入している。貝殻としてはニシキウズ・チュセンサザエ・サラサバテイ・クモガイ・ホラガイ・ホシダカラ・オオベッコウガサ・イソハマグリ・ツキガイ・サメザラ・マガキガイ・オニコブシ・オニノツノ等が出土している。

出土地域としては４列から26列までみられ，土器・石器・金属器の人工遺物と，石・サンゴ貝殻の自然遺物が出土した。

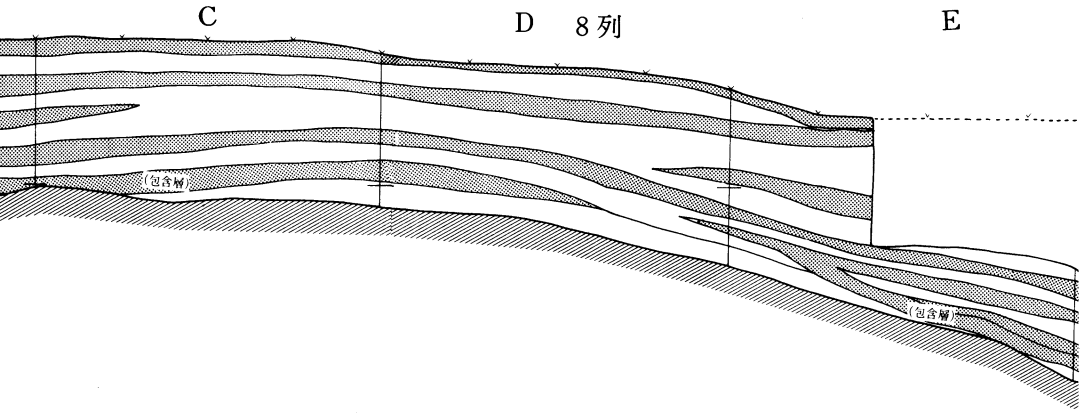
出土状況は第７～21図にみられるように，４列から26列まで検出され，Ａ～Ｃ—４～10の地区はヤコウガイ・ジャコガイ・クモガイ・サララバティの大形貝類とマガキガイ・イトマキボラ・オニゴブシ等の小形の貝類が頂上部に検出されている。レベル的にも10m 50cm～12m 50cmの尾根部にあたるところに分布している。なかでもＢ—６，Ｃ—８区は密度が濃い，11列から16列までの分布状況は部分的に第13層の文化と同様な小規模の貝殻集中箇所がＤ—10，Ｃ・Ｄ—13，Ｃ・Ｄ—13・14，Ｂ・Ｃ—14，Ｂ・Ｃ—Ｂ・Ｃ—15，Ｃ—15区の７ヶ所にみられる。またＣ—12・13区には50×30cmの台石がありその囲りにはマガキガイ・アマオブネ等の小形貝の破片が土のう袋３袋分の貝殻が検出されている。他は部分的には貝殻の集中があるが大形貝も混り，貝殻集中箇所がみられない形態である。なお貝殻集中箇所は全体として上部に検出された状況でとくにＣ—15区は顕著にみられた。Ｄ～Ｆ・10～12区は傾斜地で大形貝と小形貝の混在で集中箇所がみられないところである。16列から23列は頂上部より海岸側へ傾斜するところで，Ａ～Ｆ—16～20区とＢ～Ｈ—20～22区の２つが舌状にみられる。Ｆ—20区とＦ—16・17区に貝殻集中箇所がみられ，貝殻はマガキガイを主にオニノツノ・イトマキボラ・ヤコウガイ・シャコガイ等がみられる。この地区ではＢ～Ｄ—21区に出土遺物の空間地帯がみられる。Ｉ～Ｍ—20～26区においては海岸側の傾斜地で標高9.5m～7mに出土している。Ｌ・Ｍ—20～24区には第13層にみられるような貝殻集中箇所が４ヶ所みられ，ここは若干なだらかな部分であり，Ｉ～Ｌ—



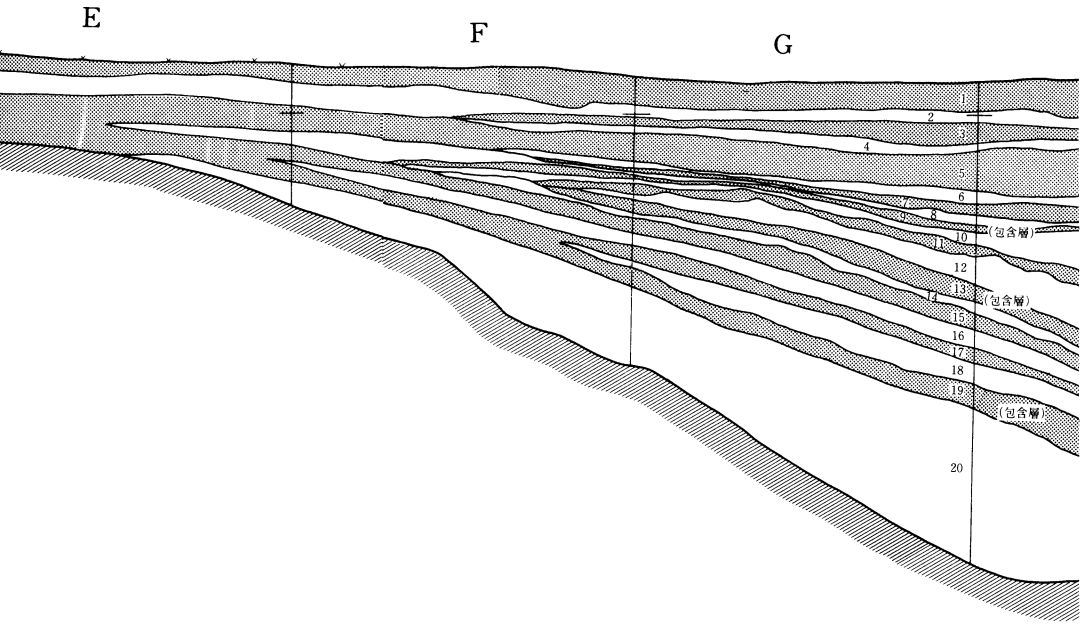


非腐植土層　　腐植土層

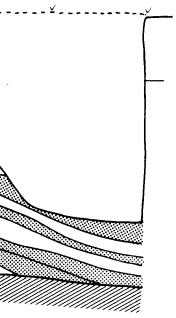
第3図　長浜金久第1

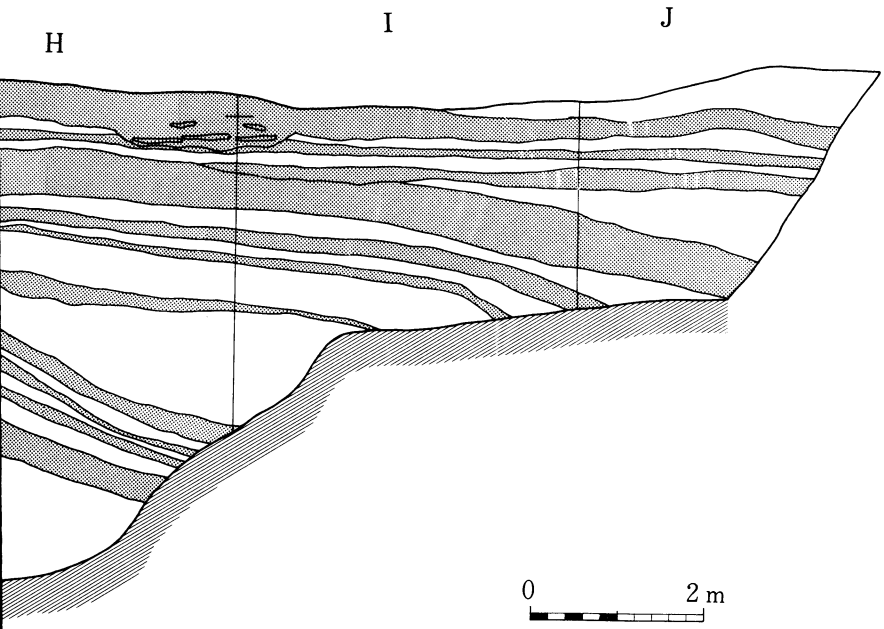

C
D
8列
E
(包含層)
(包含層)

16列


E
F
G
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
(包含層)
(包含層)
(包含層)

遺跡の土層図




H
I
J
0
2 m

22～26区においては部分的に集中がみられ，あまりまとまりはない。貝殻はマキキガイを主にシャコガイ・イトマキボラ・ヤコウガイ等であった。とくにJ—23・24区はシャコガイが主にみられた。またK—22区ではカメの焼骨（甲羅）があり，カメの料理をした跡がうかがえられる。またこの地区には土師器の甕形土器がみられた。

以上が4列から22列までの出土状況である。前にも述べたが，砂丘の頂上部は第13層と19層の遺物が混在している状態で不透明であるが，海岸側の傾斜の第19層と第13層では間層があり，出土状況も異にしている現象が伺えられる。すなわち，第13層はブロック状に検出し，貝殻が集中する貝殻集中箇所をみることができる。これらは粉炭がみられることからその場で火熱し，その場に棄てた跡と考えられる。この傾向より考えると，A～E—12～16区における貝殻集中箇所は第13層文化と考えて良いと考えられる。そしてこれらは貝が小形のマガキガイやオニノツノが中心である。第19層の遺物は大形貝のヤコウガイ・シャコガイ等が多く混在し，火熱されたヤコウガイやシャコガイは頂上部より傾斜地に投棄された状況と頂上部に於いてはまとまりのない放棄状況であり，第13層と異にしていることが注目される。しかし，第19層にもマガキガイの貝殻集中箇所もかなりあり，2種の貝殻投棄跡があることは確認された。

遺跡の土層は第3図に上げたが砂丘の基盤となるクールを除き確認されたのが22層であった。第1層は表層で現草木の樹根がみられる層でその下に黄白色の砂層，その下に黒褐色の腐植砂層と2つの砂層が互層となり砂丘を形成している。この層はF・G区より東側が顕著にみられI・J区では腐植砂層が10枚，黄白色砂層が10枚確認された。またA～E区は砂丘の頂上部であるため，表層以下の腐植土層が1枚となっている。（この層序は16列に限り，8列では頂上部において腐植砂層が3枚みられた。）

この土層からみると，砂丘の形成後，砂丘の堆積は頂上部よりも海側に拡がり，幅広くなっていることがわかる。

なおC・D—19～22区においては第20層の下に一枚腐植土層がみられ，第21層とした。その下に砂丘があり，基盤はクールになっていた。

層の傾斜としては，第17層が4～16区において，海岸側で急に傾斜し，17～23区においてはややなだらかになっていた。第13層は4～16区に於いては急傾斜がみられ，下位のレベルにあり，23区より北側は平担面に近い傾斜で上位のレベルに検出した。そして23区以北は第19層の遺物は出土しなかった。このことは砂丘の形成が南側から北側へ延びる発達を示していることがうかがえられる。

2．人工遺物

1）土器

甕形土器

Ⅰ類　（1・2・97）

第Ⅰ類の土器は沈線を施している。

1の土器はD－18区に出土した土器で第Ⅱ類の包含層より約30cm下の黒褐色腐植土砂層より出土した土器である。口縁部は外反し，頸部は若干締りぎみに内向し，肩部は緩やかな「く」字形をなし，胴部から底部近くまでふくらみの少い直線的な傾をもつ器形の土器である。

文様は肩部に一条の横行する沈線と，その沈線と組み合せた台形枠を沈線で描き，中を沈線で埋め，頸部には斜行する平行沈線の中を沈線で埋める施文をくりかえしている。また胴部には文様がみあたらない。器面調整は篦ナデ調整で胎土は長石・石英・細石等が混入し，焼成も良い。色調は暗茶褐色を呈している。なお口径は29cmである。

2の土器はB－7区に出土した土器である。口唇部は平坦な断面をもち，口縁部から肩部にかけて緩やかな「く」字形を呈し，胴部は若干ふくらみをもつ器形である。

文様は頸部に一条の沈線を廻らし下向に沈線で台形枠を施している。器面調整は篦ナデ調整で肩部より上部は横ナデで，下部は縦ナデを行っている。胎土は長石・石英を含み，焼成は良い。色調は茶褐色を呈している。なお口径は23cmである。97は外反する土器で肩部に横位の沈線があり，頸部と口縁部にも縦と横の沈線がある。

第1表　第Ⅰ類甕形土器諸訳

番号	出土区	層位	色調	胎土	焼成	番号	出土区	層位	色調	胎土	焼成
1	D－18	21	暗茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良	97	一般	(19)	茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良
2	B－7	(19)	暗茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良						

Ⅱ類（3～25）

この類の土器は沈線と刻目突帯を組み合せた土器である。

3は頸部が締り，口縁部が外反し，胴部から沈線を施している。4～7は破片の小さい口縁部の沈線施文の部分だけである。Ⅰ類の施文と異なり，Ⅱ類の施文と類似しているのでⅡ類に含めた。4は鋸歯状の施文と思われる。8は口縁が内向し，頸部に刻目間隔の広い断面三角形の突帯を廻らし，肩部に沈線を施している。9は口縁部が外反し，肩部に刻目の間隔の広い断面三角突帯を付けた口縁から肩部にかけての土器である。文様は沈線を頸部から肩部にかけて縦位に施している。10は口縁部が若干外反し，間隔の広い刻目で断面三角突帯をつけ，肩部に波状の沈線を施している。また厚味のある土器である。11は口縁部が外反し，肩部に断面三角刻目突帯を付け口頸部に沈線施文がみられる。12は間隔の広い刻目を施した断面三角突帯を肩部に付け，口縁部は縦位に沈線を施す土器である。13は突帯が一部剝げているか突帯のげ上に沈線を施こした文様で直行する口縁部である。14は直行する口縁部で肩部に大きな突帯を施し，口縁部に縦2条と横位に1条の組み合せの沈線文を施こしている。突帯の刻目は大き

い。15は完形土器で口径が12cm，底径が65cm，器高14.5cmの法量をもつ。口縁部は若干外反し，胴部はふくらみをもち，底部は平底で肩部に刻目突帯をもつ器形である。器面にはハケ目調整痕がみられ，口縁部と胴部に曲線を描いている。底部は木葉痕が付いている。また，この土器は他と比べ小型の土器である。16は口縁部が内向，口縁端部で外曲し，胴部は孤状にふくらむ器形をもつ土器である。頸部には刻目突帯を付け，突帯の上位には鋸歯文，下位には鋸歯文のくずれも施している。口径は27cmでやや本遺跡では大きい方である。18は刻目突帯の下に2条の沈線を施す土器で突帯は高さが高い。19は刻目の大きい突帯で胴部に沈線がみられる。17は直行する口縁部で太い刻目突帯で口縁部に沈線を施している。器面にはハケ目調整痕があるが荒い器面の土器で2個の補修孔がみられる。口径は24cmである。20は太めの刻目で突帯の下に沈線を鋸歯状に施している。21は頸部に刻目突帯のある胴部は丸味をもち，突帯の下に鋸歯文を施し，器面は篦調整痕がみられる。22～25は刻目突帯の上に沈線がみられる土器の頸肩部である。

第2表　第Ⅱ類甕形土器諸訳

番号	出土区	層位	色調	胎土	焼成	番号	出土区	層位	色調	胎土	焼成
3	A・B・C—15	(19)	暗茶褐色	サンゴ・細石	良	15	E — 15	19	茶褐色	サンゴ・細石	良
4	B — 14 15	〃	暗茶褐色	サンゴ・細石	良	16	E — 15	(19)	茶褐色	サンゴ・細石	良
5	G — 24	〃	暗茶褐色	サンゴ・細石	粗	17	E — 18 A・B・C—15	〃	黒茶褐色	サンゴ・細礫	良
6	C — 12	〃	暗茶褐色	サンゴ・細石	良	18	A～D—9～16	〃	燈茶褐色	サンゴ・細石	良
7	C — 15	〃	茶褐色	サンゴ・細石	良	19	B — 8	〃	燈茶褐色	サンゴ・細石	良
8	E — 22	〃	暗茶褐色	サンゴ・細石	良	20	B — 15	〃	茶褐色	サンゴ・細石	良
9	C — 14	〃	茶褐色	サンゴ・細石	良	21	C — 13	〃	茶褐色	サンゴ・細石	良
10	D — 16	〃	暗茶・茶褐色	サンゴ・細石	良	22	D — 13	〃	茶褐色	サンゴ・細石	良
11	G — 15	〃	茶褐色	サンゴ・細石	良	23	B — 15	〃	暗茶褐色	サンゴ・細石	良
12	C — 11	〃	暗茶褐色	サンゴ・細石	良	24	B — 15	〃	暗茶褐色	サンゴ・細石	良
13	D — 18	〃	暗茶褐色	サンゴ・細石	良	25	C — 14	〃	暗茶褐色	サンゴ・細礫	粗
14	J — 24	〃	燈茶褐色	サンゴ・細石	良						

Ⅲ類（26～69）

この類は刻目突帯を付ける土器である。

26は直線的に外反する器形で間隔の広い刻目を施した口径が25cmの土器である。口縁部では厚味がみられ，内側に粘土の一部が凹みとなっている部分もある。27は頸肩部で間隔の広い刻目突帯がみられる。28は口径が13.5cmで若干外反する器形で突帯には一部分刻目がある。器面はハケ目調整痕が薄くある。29～31は口縁部で間隔の広い刻目突帯が頸部にある土器である。32は刻目突帯が頸部にあり，胴部は若干丸味をもち，ハケ目調整痕が器面に縦走している。33は刻目が一部にある突帯が付いた頸部から胴部にかけての土器で器面にはハケ目がある。34も刻目が一部にある突帯が付く土器である。35は刻目の施文が胴部の一部にも付いている土器で

口径が15cmで直線的に外向している器形である。36は口径が14cmで直行した口縁部に胴部が若干丸味をもつ器形の土器である。刻目突帯は頸部より若干下に付き，やや太い刻目突帯である。37は口径23cmで直行した口縁部に間隔の広い刻目突帯を付けた土器で器面は篦状施文具で荒く調整している。突帯の大きさは太目で低い。38・39は直行した口縁部で突帯で刻目は竹管で付けている。40は口径12.5cm，直行した口縁部に刻目突帯を付けた土器である。器面調整は横位に行なっている。41はやや外反した口縁部で刻目突帯を付け，器面調整は縦位に行っている。42は口径28cmで直線的に外反した口縁部にやや太目の刻目突帯をもつ土器で，器面は横走するハケ目調整痕がある。43はやや外反する口縁部で頸部に刻目突帯がみられる。44はやや口縁端部で外反するが直線的な口縁部で，やや太目の刻目突帯を付けている土器である。器面は縦走するハケ目調整痕がみられる。45～47は直線的な口縁部で背の低いやや太目の突帯に細長い刻目を施したものである。器面調整は横位に行なっている。48～50は間隔の広い刻目突帯を頸部に付け，口縁部はやや外反するが直線的に傾きを示す土器で器面調整は横位に行なっている。51は直行する口縁部に太目の刻目突帯を付けた土器で横走するハケ目調整痕がある。52・53はやや太目の背の低い刻目突帯を付けた土器である。52は突帯が切れた部分で横位の調整痕があり，53は縦走するハケ目調整痕と補修孔がみられる。54は口径11cmの直行した口縁から胴部で，部分的に刻目を付けた土器である。胴部では厚味がある。55は太目の刻目突帯であり縦位のハケ目調整痕がある。56は刻目の太さが大きい突帯で横位の器面調整がみられる。57は口径31cmで口縁部は若干外反するが胴部まで直線的な傾をもつ土器で太目の断面三角突帯に幅の広い刻目を付けている。器面調整は縦走するハケ目調整痕があり，58～60は刻目突帯の部分で58は口縁部に向って内行する土器である。61は内湾ぎみに直行土器で断面三角突帯に一部の太目の刻目がある土器である。62は口径27cmで61と同形の口縁部であり，断面三角突帯に部分的な刻目が付く土器で縦走するハケ目調整痕がある。63は外反する口縁部で断面三角突帯に刻目が一部付けられている土器で，横位に調整がなされている。64は太目の突帯で63と同形である。65は口径23cmで頸部が締り，口縁部が外反し，胴部が丸味をもつ土器で肩部に背の低い突帯を付け部分的に指圧痕の刻を入れている。器面調整は横位に行なっている。66は口径24cmで65よりも頸部の締りが浅い。器形は65と同形で突帯は細味で指圧痕で刻んでいる。67～69は刻目突帯の部分である。

第3表　第Ⅲ類甕形土器諸訳　(1)

番号	出土区	層位	色調	胎土	焼成	番号	出土区	層位	色調	胎土	焼成
26	F—15	13	茶褐色	サンゴ・細石	良	32	C—18	(19)	暗茶褐色	サンゴ・細石	良
27	F—11	19	茶褐色	サンゴ・細石	良	33	C—11	(19)	茶褐色	サンゴ・細石	粗
28	H—17	(19)	茶褐色	サンゴ・細石	良	34	G—4	(19)	茶褐色	サンゴ・細石	粗
29	G—5	(19)	黒茶褐色	サンゴ・細石	良	35	C—18	(19)	暗茶褐色	サンゴ・細石	良
30	B—14	(19)	暗茶褐色	サンゴ・細石	良	36	C—14	(19)	明茶褐色	サンゴ・細石	良
31	C—13	(19)	暗茶褐色	サンゴ・細石	粗	37	G—15 C—13 E—19	(19)	暗茶褐色	サンゴ・細石	良

第3表　第Ⅲ類甕形土器諸訳 (2)

番号	出土区	層位	色調	胎土	焼成	番号	出土区	層位	色調	胎土	焼成
38	G－5	(19)	明茶褐色	細砂・雲母	良	54	J－23	(19)	黒茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良
39		表	明茶褐色	細砂・雲母	良	55	E－16	(19)	暗茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良
40	F－18	(19)	茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良	56	A・B・C－15	(19)	茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良
41	G－1	(19)	暗茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良	57	B－12	(19)	黒茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良
42	G－5	(19)	暗茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良	58	G－30	(19)	暗茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良
43	B－15	(19)	茶褐色	細石・雲母	良	59	C－7	(19)	暗茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良
44	F－18	(19)	茶褐色	サンゾ・細礫・雲母	良	60	A－14・15	(19)	暗茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良
45	G－5	(19)	茶褐色	サンゴ・細礫・雲母	良	61	C－21	(19)	暗茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良
46	B－15	(19)	黒茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良	62	C－22	(19)	茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良
47	D－16	(19)	暗茶褐色	サンゴ・細礫・雲母	良	63	G－50	(19)	暗茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良
48	D－13	(19)	茶褐色	サンゴ・細礫・雲母	良	64	B－17	(19)	茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良
49	B－15	(19)	暗茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良	65	F－14	19	暗茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良
50	C－15	(19)	茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良	66	J－23	(19)	暗茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良
51	D－17	(19)	茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良	67	D－16	(19)	暗茶褐色	サンゴ・細石・雲母	粗
52		(19)	暗茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良	68	D－18	(19)	暗茶褐色	サンゴ・細石・雲母	粗
53	C－15	(19)	暗茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良	69	B－17	(19)	黒茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良

Ⅳ類 (70～86)

この類は横位の突帯に縦位の突帯を組み合せたものや，横位の突帯が変化したものがある土器である。

70は口径32cmの土器で口縁部が外湾し，肩部から胴部は直線的に外反する器形である。肩部に横位の突帯を付け頸部に逆U字の突帯を付けている。器面調整は荒く縦位に調整痕がみられる。71は縦位に刻目突帯が付けてある土器である。72・73は直行する口縁部で内面から外面まで突帯をまわしている。74は直線的に外反する口縁部で逆U字の突帯を貼り付けている。75は直行する口縁部で縦位に2本の突帯を貼り付けている。76は外湾する口縁部で口縁端部に小さな逆U字の突帯を貼り付けている。77は内湾する口縁部で縦位に突帯を貼り付け中央には孔を設けている。78は若干外反する口縁部で1本の縦位の突帯がある。突帯の半分の部分が割れている。79は直行する口縁に縦位の突帯を貼り付けている。80は横位の突帯に小円の突帯を下に貼り付けている。81は弧状に突帯を貼り付けている。82は横位の突帯の上に小円の突帯を貼り付けている。83は縦位の突帯を貼り付けている。84は若干内湾する口縁部に縦位と横位を組み合せた突帯を貼り付けている。この土器は桃褐色で粒子の荒い胎土であるため他の地域からの移入土器としての性格が強い。85は口径18.5cmで口縁部が直行し，若干肩部が張り，胴部は丸味をもつ土器である。突帯は弧状をなし，4本で1周すると思われる。86は85の形の2本が離れている部分である。

第4表　第Ⅳ類甕形土器諸訳

番号	出土区	層位	色調	胎土	焼成	番号	出土区	層位	色調	胎土	焼成
70	D—22	(19)	暗茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良	79		表	暗茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良
71	C—14	(19)	暗茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良	80	F—15	19	茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良
72	C—14	(19)	暗茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良	81	D—18	(19)	暗茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良
73		(19)	黒茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良	82	D—15	(19)	暗茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良
74	I—23	19	茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良	83	E—22	(19)	明茶褐色	細砂・雲母	良
75	E—21	(19)	暗茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良	84	C—12	(19)	桃茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良
76	G—16	19	暗茶褐色	細砂・サンゴ・雲母	良	85	E—12	19	暗茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良
77	B—16	(19)	茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良	86	C—15	(19)	暗茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良
78	K—23	19	暗茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良						

Ⅴ類（87～96・98～112）

この類は無文土器の土器である。

87は如意状の口縁部で口径19.5cmの土器である。88は口径13.5cmの口縁部から胴部までの土器で頸部が締まり口縁部はやや外反する。胴部は若干丸味をもつ。89は頸部が締まりやや外反する口縁部で口径は17cmである。90は頸部がやや締まり口縁部で器面調整は横位に調整している。91は口縁部がやや外反する口径18cmの土器で，胴部は丸味をもつ，器面調整は横ナデである。92はやや外湾する口縁部である。93は口径16cmで口縁端部が外反し，頸部が締まり，胴部は丸味をもつ土器で器面調整は横ナデのハケ目痕がある。94は口径16.5cmで頸部がやや締まり，胴部は若干丸味をもつ土器である。95は93と同形の口縁部であるが胴の丸味が少ない。口径は20cmで，器面は縦走のハケ目調整痕がある。96はやや外反する口縁部である。98は口径20cmで口縁部がやや外反する土器で胴部は若干丸味をもつ。器面調整は内外面とも縦走のハケ目痕がみられる。99は口径13cmで直行する口縁部で胴部は若干丸味をもつ，器面調整は横位である。100は口径16cmで頸部がやや締まり，口縁部はやや外反，胴部はやや丸味をもつ，器面調整は下位に縦走のハケ目痕がある。102は口径14cmの口縁部で頸部がやや締まり，縦走の器面調整痕がみられる。103・104は直行する口縁部である。105は口径17cmで頸部が若干締まり，口縁部がやや外反するが全体的に直行する土器である。器面調整は縦位である。106・107は直線的な口縁部で107は口唇部が平坦で器面調整は横位のハケ目調整痕がある。108は口径13.5cmで105と同形である。器面調整は横位である。109は口径20cmで直行する口縁部で口唇部は平坦である。110はやや外向する土器で縦走の調整痕がある。111は口径12cmで直行した器形で頸部が締っている土器である。112は口径11.5cmで頸部が締り，口縁部は外反する土器である。

第5表　第Ⅴ類甕形土器諸訳

番号	出土区	層位	色調	胎土	焼成	番号	出土区	層位	色調	胎土	焼成
87	C—21	(19)	暗茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良	89	C—15	(19)	暗茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良
88	J—23	19	暗茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良	90	G—4	(19)	暗茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良

第5表　第Ⅴ類甕形土器諸訳

番号	出土区	層位	色調	胎土	焼成	番号	出土区	層位	色調	胎土	焼成
91	B—14	(19)	暗茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良	103	D—13	(19)	暗茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良
92	B—15	(19)	茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良	104	B—5	(19)	暗茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良
93	F—17	(19)	茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良	105	J—23	(19)	暗茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良
94	F—11	19	暗茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良	106	F—C—14	(19)	暗茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良
95	C—12	(19)	暗茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良	107	J—24	(19)	暗茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良
96	B—15 土手	(19)	暗茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良	108	D—17	(19)	暗茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良
98	B—4	(19)	暗茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良	109	C—15	(19)	暗茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良
99	B—14	(19)	茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良	110	C—11	(19)	暗茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良
100	C—15	(19)	茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良	111	J—23	(19)	暗茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良
101	F—12	(19)	茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良	112	E—21	(19)	黒茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良
102	D—17	(19)	茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良						良

鉢形土器（113・114・160）

114は口縁部が外行する土器で口径は16cmである。115は口径20cmで肩部で「く」字形に外反するもので，内面にハケ目調整痕が横位にみられる。160は鉢形土器の底部と思われる。底径は55cmで薄手の土器である。

第6表　鉢形土器諸訳

番号	出土区	層位	色調	胎土	焼成	番号	出土区	層位	色調	胎土	焼成
113	C—14	(19)	暗茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良	160	C—15	(19)	暗茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良
114	C—15	(19)	暗茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良						

甕形土器底部（115～161）

底部の底面は葉痕が付く。厚手の底部は 121・127・130・131・133・134・141・144・147・153・157・158・159が上げられ，他は薄手のものである。全体的に底部の縁が張り出した形で，157は2方に角張った底部である。しかし，155・156・158・159・161は丸味をもつ底部である。厚味のある土器は2～2.5cmの厚さで底部をつくっている。

第7表　甕形土器底部諸訳

番号	出土区	層位	色調	胎土	焼成	番号	出土区	層位	色調	胎土	焼成
115	G—17	(19)	茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良	122	G—16	13	茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良
116	G—38	(19)	茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良	123	B—17	(19)	暗茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良
117	G—38	(19)	茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良	124	F—22	(19)	茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良
118	C—15・14 B—15	(19)	茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良	125	D—17	(19)	茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良
119	B—14	(19)	茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良	126	C—14	(19)	茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良
120	C—14	(19)	茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良	127	G—54	(19)	茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良
121	B—6	(19)	茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良	128	G—38	(19)	茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良

番号	出土区	層位	色調	胎土	焼成	番号	出土区	層位	色調	胎土	焼成
129	C—11	(19)	茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良	146	K—24	19	茶褐色	サンゴ・細砂・雲母	良
130	F—21	(19)	茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良	147	一般	(19)	茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良
131	G—38	(19)	暗茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良	147	G—50	(19)	茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良
132	B—15	(19)	茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良	149	14 C—15	(19)	茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良
133	C—14	(19)	茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良	150	C— 7	(19)	茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良
134	G—50 B— 8	(19)	茶褐色	サンゴ・細砂・雲母	良	151	J—23	(19)	茶褐色	サンゴ・細砂・雲母	良
135	C—14	(19)	茶褐色	サンゴ・砂石・雲母	良	152	C—14	(19)	茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良
136	一般	(19)	茶褐色	サンゴ・砂砂・雲母	良	153	E—10	19	茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良
137	一般	(19)	茶褐色	サンゴ・細砂・雲母	良	154	C—13	(19)	茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良
138	F—10	19	暗茶褐色	サンゴ・砂砂・雲母	粗	155	E—12	(19)	茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良
139	一般	表	茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良	156	B—15	(19)	黒茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良
140	G— 6	(19)	茶褐色	サンゴ・細砂・雲母	良	157	G—51	(19)	茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良
141	J—25	19	茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良	158	B—15	(19)	茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良
142	B—14	(19)	茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良	159	D—13	(19)	茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良
143	G—56	(19)	茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良	160	C—15	(19)	茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良
144	D—17	(19)	茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良	161	B— 7	(19)	茶褐色	サンゴ・細砂・雲母	良
145	C—14	(19)	茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良				茶褐色	サンゴ・細砂・雲母	良

壺形土器

Ⅰ類（162）

162は口縁が締まり，口径が6cmである。頸部に2本の平行沈線文を付けている。

Ⅱ類（163）

この類は突帯文と沈線文を組み合せた土器で163があたる，口径が7.5cmで直行する口縁部で頸部に断面三角突帯を付け口縁部の文様と突帯部の刻目を連結している。器形としては肩部が張る土器である。

Ⅲ類（164・166～175）

この類は刻目突帯を付けた土器を示す。164は口縁部が比較的長く，背の低い刻目突帯を付けている。口径は6.5cmである。166は口縁部が比較的短く，間隔の狭い刻目突帯を頸部に付けている。口径は5.5cmである。肩は強く張らない。167は内行した口縁に刻目突帯を付けている土器である。168は直行する口縁部で頸部より屈曲している。169～175は頸部に刻目突帯が貼り付けられたナデ肩の肩部をもつ土器である。175は頸部から胴部にかけての土器で球状の胴部である。

Ⅵ類（181・165）

この類は突帯文のある土器である。口径は11.5cmで広口である。突帯は背が低く，めり張り

がない。壺形土器Ⅴ類に入れたが，165は頸部に段があり突帯に近い形をしているので，この類に近いと思われる。

Ⅴ類（176～180，182・183）

この類は無文土器である。

165は口径4cmでナデ肩の土器である。器形は，Ⅰ・Ⅱ類の土器と同じく，口径が比較的小さい。167は口径が10.5cmで口縁端部は外反している。177は口径11cmで，176より口縁部は短く肩は張るタイプと思われる。178は口径9cmで口縁部は直行し，短い肩張りの土器と思われる。179は口径12.5cmで，口縁部は短く外曲している。180は口径6.5cmで小壺で，ナデ肩である。182は口縁部が大きく外曲する土器である。183は口径7cmでナデ肩の土器と思われる。

壺形土器の胴部ないし底部（184～194）

194はナデ肩の土器で頸部から胴部にかけての土器である。185・186は胴部である。187は胴部から底部近くまである土器で胴部に穿孔がある。器面調整は表が横位で，裏は上部が縦位・中部が横位・下部が縦位である。イカリ肩の器形である。188はナデ肩の壺の肩部，胴部である。肩が張らない丸味のある胴部の器面調整は横位である。189・190は肩部でイカリ肩の器形である。横調整と縦調整で器面が整っている。191～194は底部である。191は若干上げ底気味の平底で，底径が9.5cmである。192は平底で底径が6.5cmある。193は小形の壺の底部で底径が4.2cmの平底である。194は丸底気味の平底で底径が6.5cmある。立ち上りは急である。

第8表　壺形土器諸訳（1）

番号	出土区	層位	色調	胎土	焼成	番号	出土区	層位	色調	胎土	焼成
162	K－24	19	茶褐色	サンゴ・細砂・雲母	良	178	F－17	(19)	茶褐色	サンゴ・細砂・雲母	良
163	G－50	(19)	茶褐色	サンゴ・細砂・雲母	良	179	F－21	(19)	茶褐色	サンゴ・細砂・雲母	良
164	D－13	(19)	茶褐色	サンゴ・細砂・雲母	良	180	G－21	19	茶褐色	サンゴ・細砂・雲母	良
165	E－15	(19)	茶褐色	サンゴ・細砂・雲母	良	181	J－23	(19)	茶褐色	サンゴ・細砂・雲母	良
166	C－11	(19)	茶褐色	サンゴ・細砂・雲母	良	182	C－19	(19)	茶褐色	サンゴ・細砂・雲母	良
167	C－11	(19)	茶褐色	サンゴ・細砂・雲母	良	183	G－26	(19)	茶褐色	サンゴ・細砂・雲母	良
168	C－14	(19)	茶褐色	サンゴ・細砂・雲母	良	184	C－7	(19)	茶褐色	サンゴ・細砂・雲母	良
169	A・B・C-15	(19)	茶褐色	サンゴ・細砂・雲母	良	185	C－7	(19)	茶褐色	サンゴ・細砂・雲母	良
170	・般	(19)	茶褐色	サンゴ・細砂・雲母	良	186	B－6	(19)	茶褐色	サンゴ・細砂・雲母	良
171	B－14	(19)	茶褐色	サンゴ・細砂・雲母	良	187	C－15	(19)	茶褐色	サンゴ・細砂・雲母	良
172	B－13	(19)	茶褐色	サンゴ・細砂・雲母	良	188	B－5	(19)	黒茶褐色	サンゴ・細砂・雲母	良
173	B－16	(19)	茶褐色	サンゴ・細砂・雲母	良	189	F－15	19	暗茶褐色	サンゴ・細砂・雲母	良
174	G－50	(19)	茶褐色	サンゴ・細砂・雲母	良	190	G－18	(19)	茶褐色	サンゴ・細砂・雲母	良
175	C－22	(19)	茶褐色	サンゴ・細砂・雲母	良	191	G－18	(19)	暗茶褐色	サンゴ・細砂・雲母	良
176	D－22	(19)	茶褐色	サンゴ・細砂・雲母	良	192	B－8	(19)	暗茶褐色	サンゴ・細砂・雲母	良
177	・般	(19)	茶褐色	サンゴ・細砂・雲母	良	193	B－8	(19)	茶褐色	サンゴ・細砂・雲母	良

第8表　壺形土器諸訳 (2)

番号	出土区	層位	色調	胎土	焼成
194	G－4	(19)	茶褐色	サンゴ・細砂・雲母	良

土師器 (195～209)

195～205はは土師器の甕形土器，206は黒色土器の坏である。207～209は布目痕のある土器である。195は口径22.6cmで厚味のある口縁が,「く」字に曲り内面はヘラケズリがみられる。196は口径18cmで厚味のある口縁が「く」字に折れ内面はヘラケズリがみられる。197は口径14cmで「L」字に近い口縁部である。内面はヘラケズリ調整している。この土器は 175・196 より胴部は直行する，198～205 は「く」字状の口縁部で内面は，ヘラケズリ調整がある土器である。206 は口径16.5cmで口縁部が丸味をおびた若干外反する坏である。胎土も黒色で器面も黒色である。207～209は内面に布目痕がみられる土器で硬質の土器である。器形は不明。

第9表　土師器諸訳

番号	出土区	層位	色調	胎土	焼成	番号	出土区	層位	色調	胎土	焼成
195	L－23	19	暗茶褐色	サンゴ・細石・雲母		203	C－14	(19)	暗茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良
196		(19)	黒茶褐色	サンゴ・細石・雲母		204	C－14	(19)	暗茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良
197	B－6	(19)	茶褐色	サンゴ・細石・雲母		205	G－26	(19)	茶褐色	サンゴ・細石・雲母	良
198	C－14	(19)	暗茶褐色	サンゴ・細石・雲母		206	C－14	(19)	黒色	サンゴ・細砂・	硬質
199	C－14	(19)	暗茶褐色	サンゴ・細石・雲母		207	C－14	(19)	茶褐色	サンゴ・細石・雲母	硬質
200	D－11	(19)	暗茶褐色	サンゴ・細石・雲母		208	C－14	(19)	暗茶褐色	サンゴ・細石・雲母	硬質
201	・般	(19)	暗茶褐色	サンゴ・細石・雲母		209	C－14	(19)	暗茶褐色	サンゴ・細石・雲母	硬質
202	G－38	(19)	暗茶褐色	サンゴ・細石・雲母							

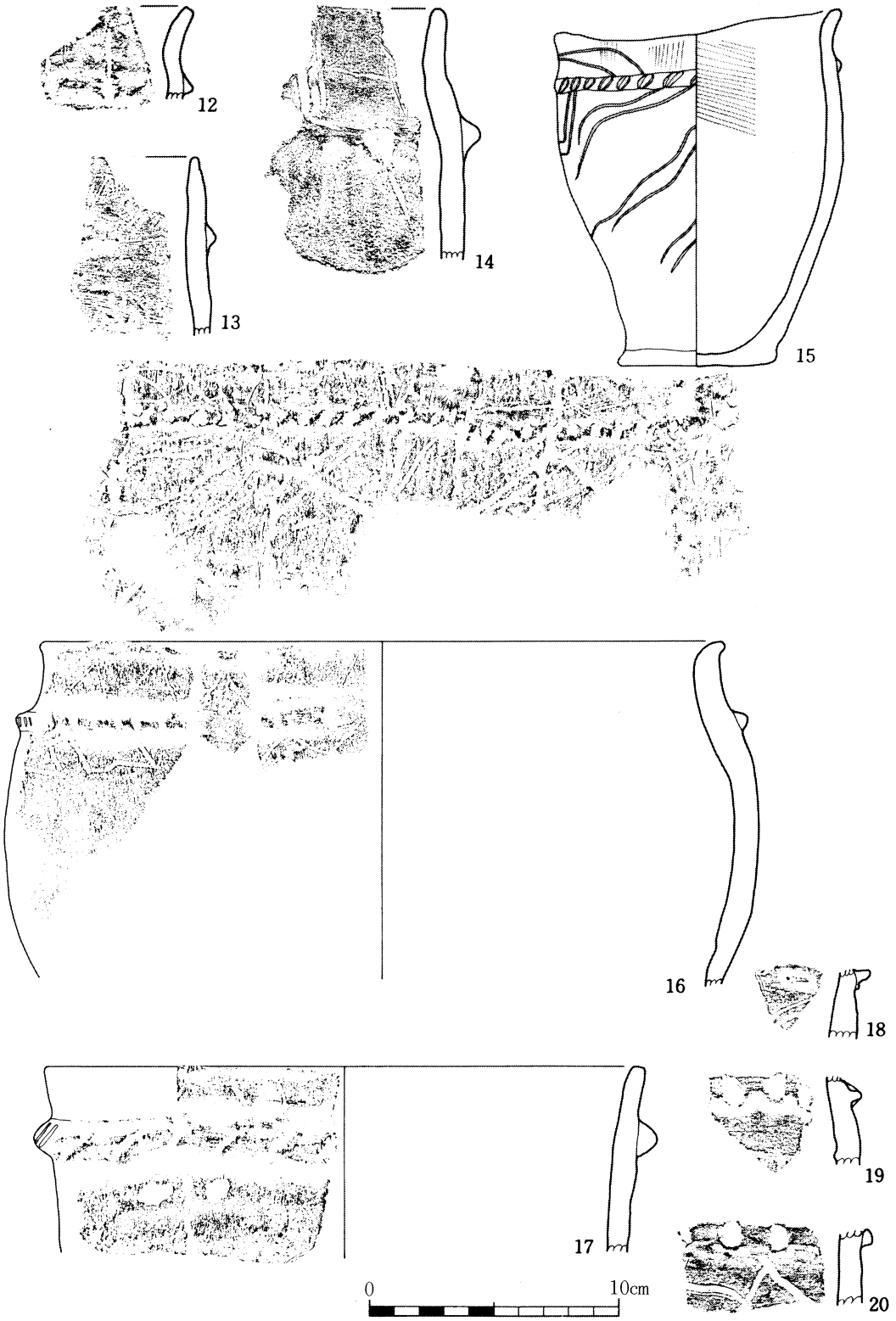
2）石器 (210～221)

石器は,36点出土した。主にタタキ石・凹石・スリ石の類であった。210は球状の石器である。211 ～ 221はタタキ石と凹石の二つの用途が行なわれている。また216 ～ 218・221は,スリ石の類でクガニイシと呼ばれている石器である。

第10表　石器諸訳 (1)

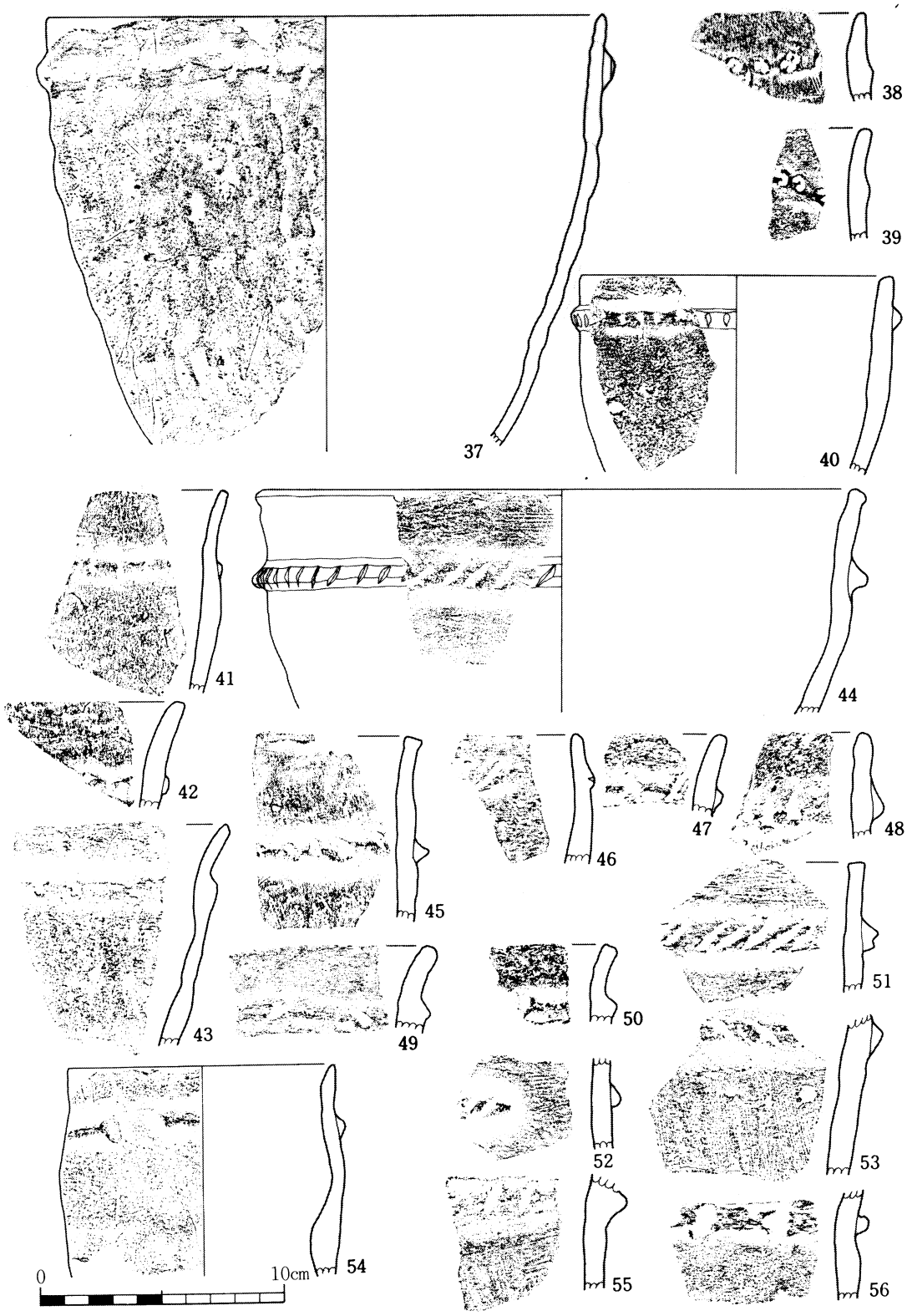
番号	挿図番号	出土区	層位	法量(cm)	重量(g)	石材	用途
1	210	J－24		7.1×6.9×6.0	440	泥岩	敲石
2	211	F－11		15.3×7.3×5.7	965	砂岩	凹石・敲石
3	212	L－30		20.4×12.0×8.1	2,850	砂岩	凹石
4	213	E－21		12.1×8.6×6.3	1,000	石英班岩	凹石・敲石
5	214	B－15		9.3×5.6×2.9	275	砂岩	凹石・敲石
6	215	J－24		14.0×9.7×4.9	1,150	安山岩	敲石

第22図　長浜金久第Ⅰ遺跡の土器実測図(1)　甕第Ⅰ類・第Ⅱ類

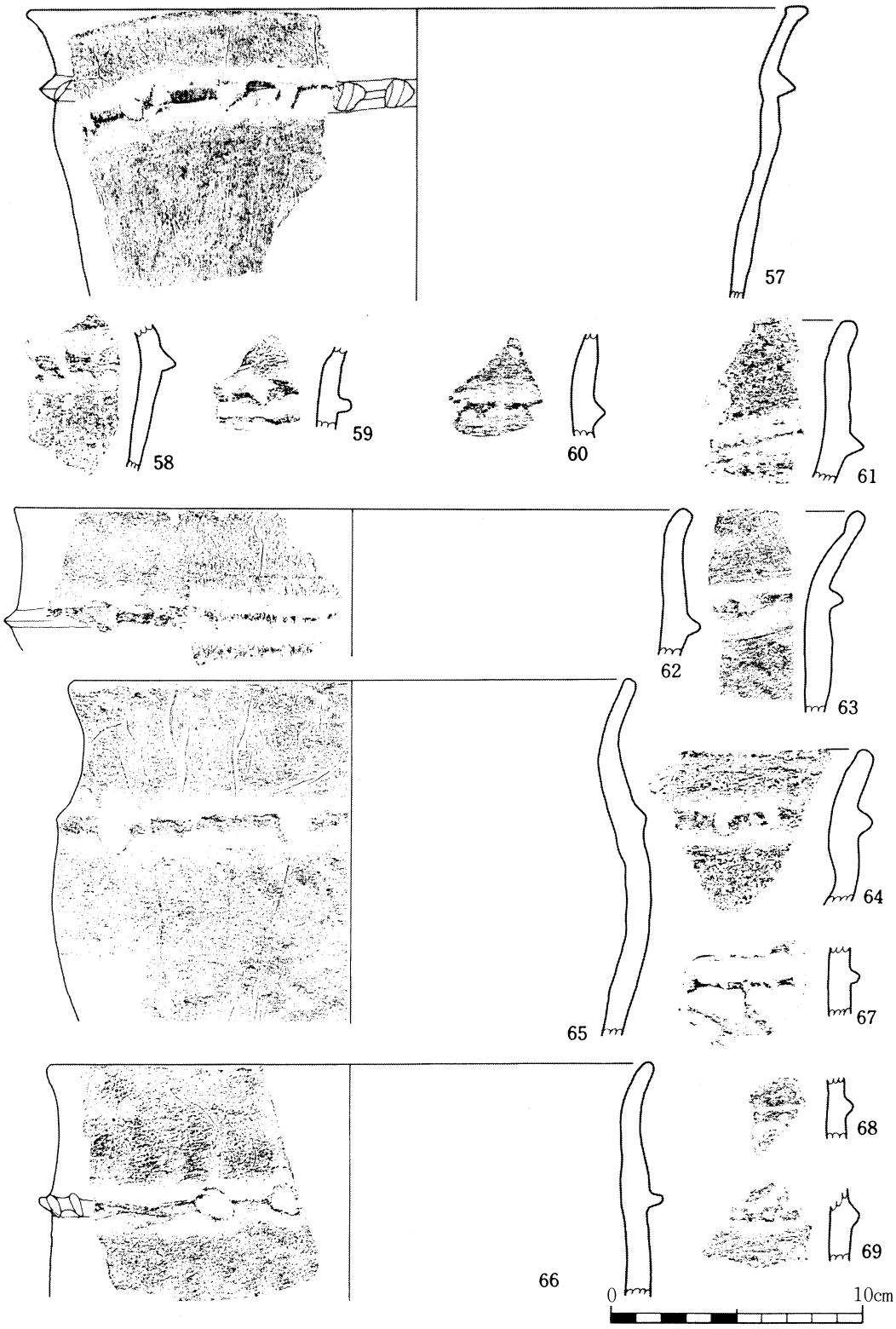


第23図　長浜金久第Ⅰ遺跡出土の土器実測図(2)　甕第Ⅱ類

第24図　長浜金久第Ⅰ遺物の土器実測図(3) 甕第Ⅱ類・第Ⅲ類

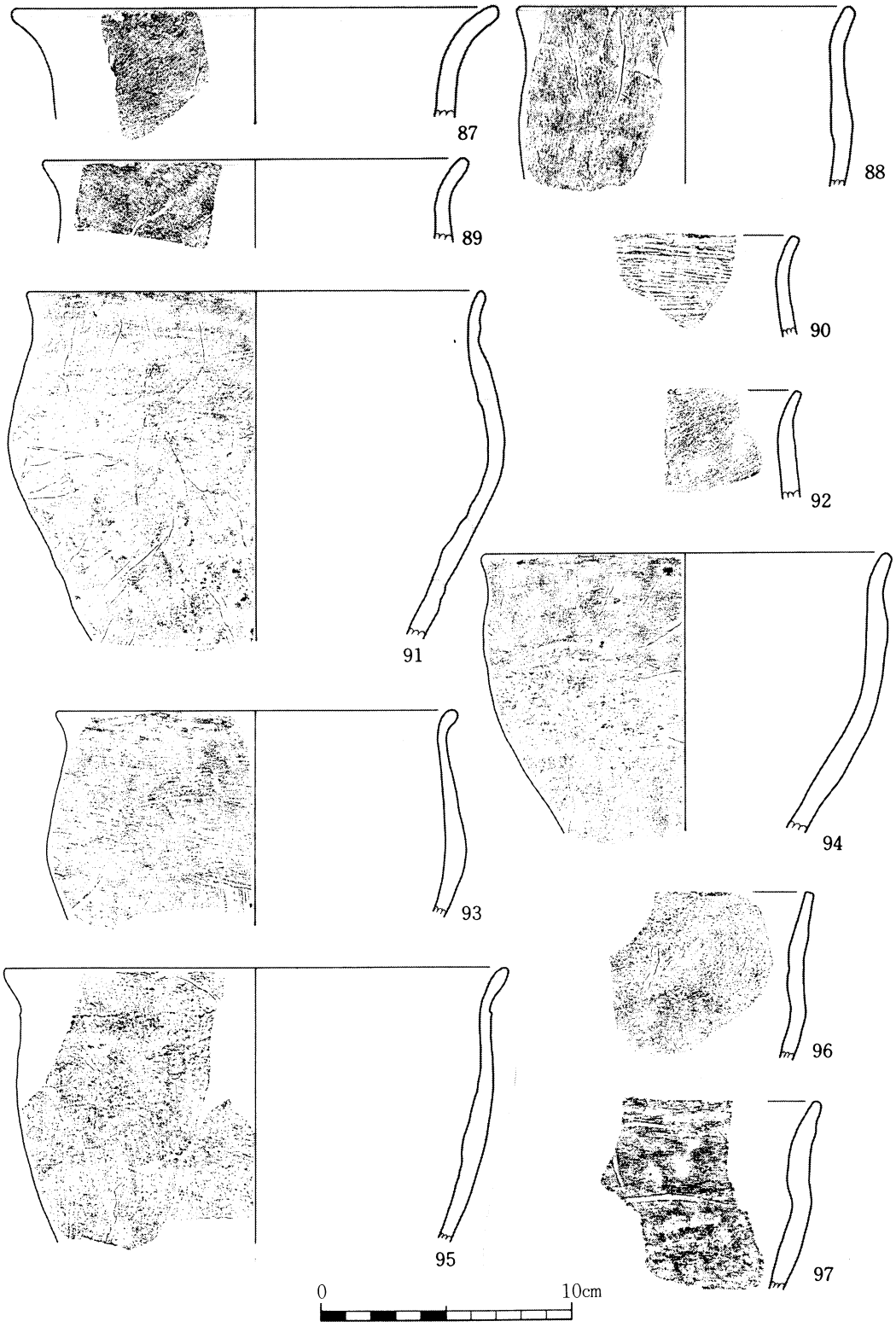


第25図　長浜金久第Ⅰ遺跡の土器実測図(4)　甕第Ⅲ類

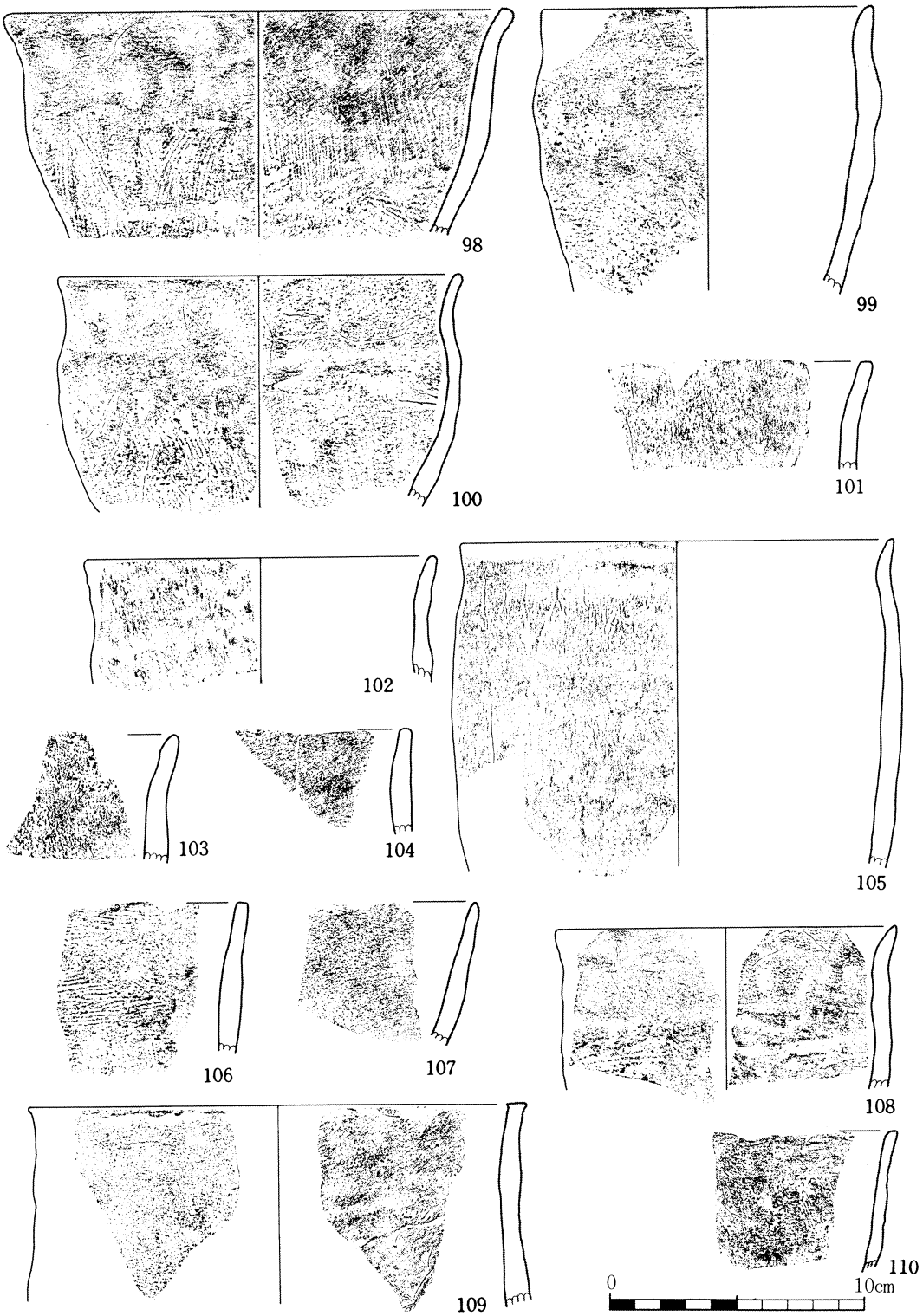


第26図　長浜金久第Ⅰ遺跡の土器実測図(5)　甕第Ⅲ類

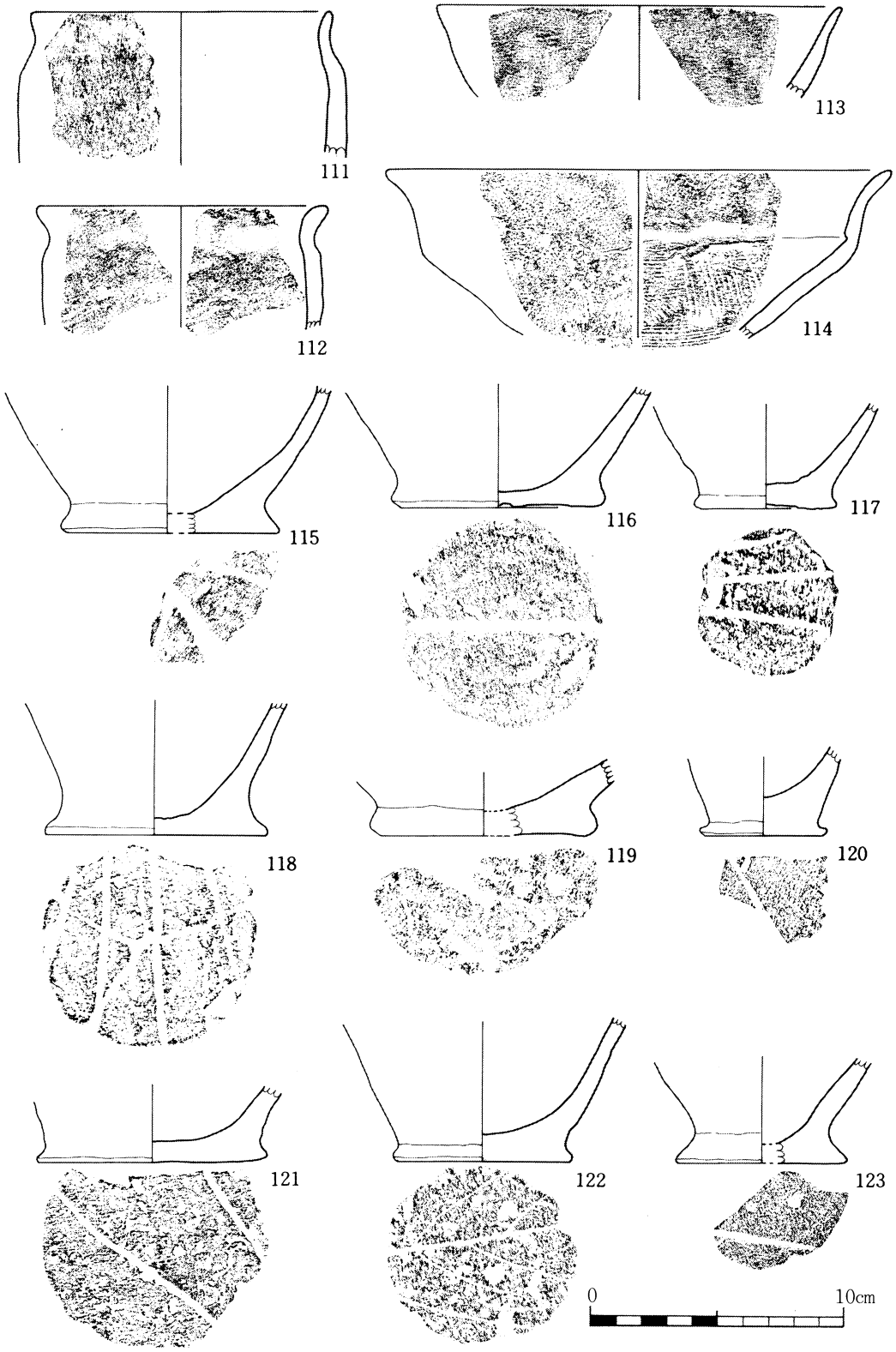
第27図　長浜金久第Ⅰ遺跡の土器実測図(6)　甕第Ⅳ類



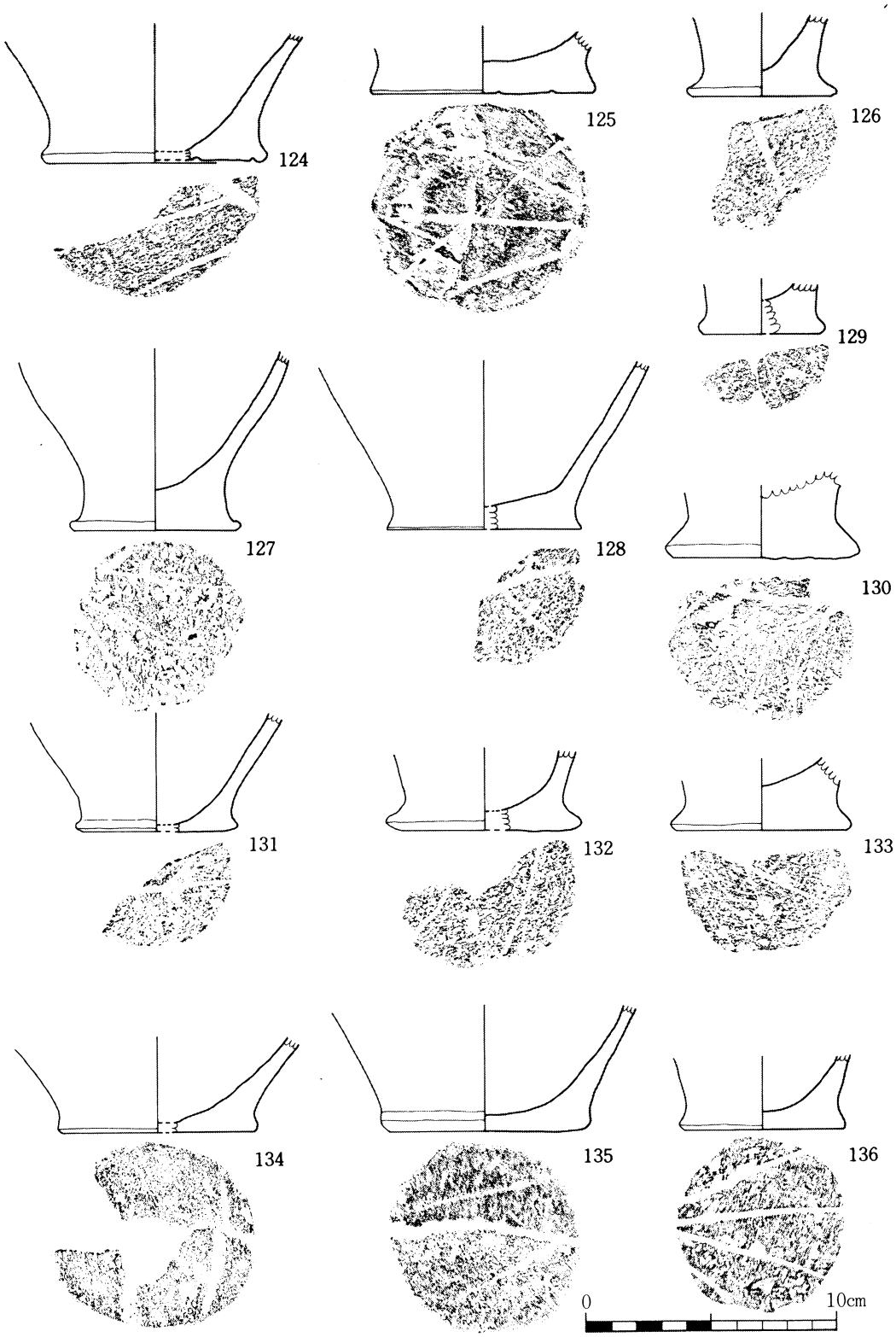
第28図　長浜金久第Ⅰ遺跡の土器実測図(7)　甕第Ⅴ類



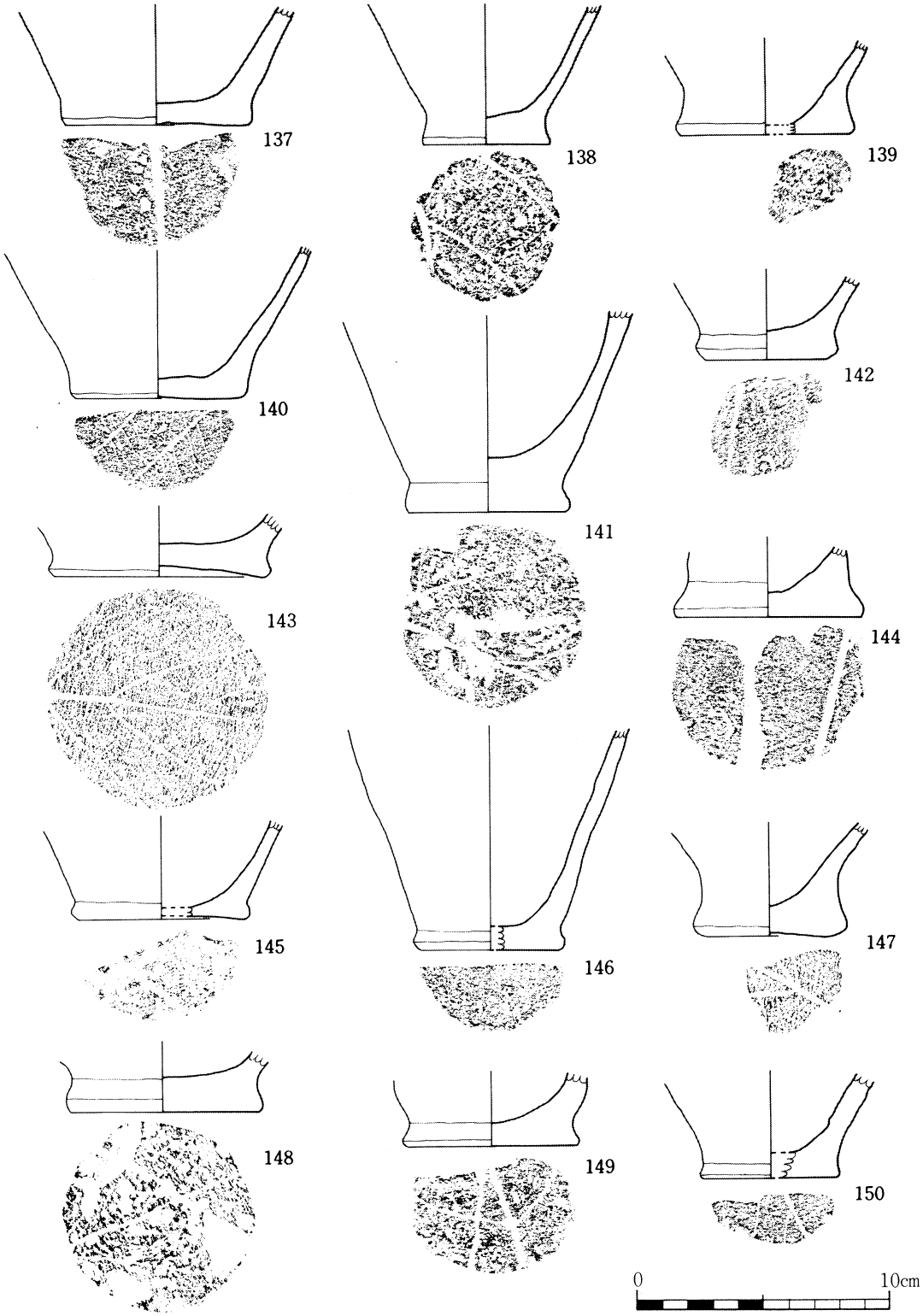
第29図　長浜金久第Ⅰ遺跡の土器実測図(8)　甕第Ⅴ類



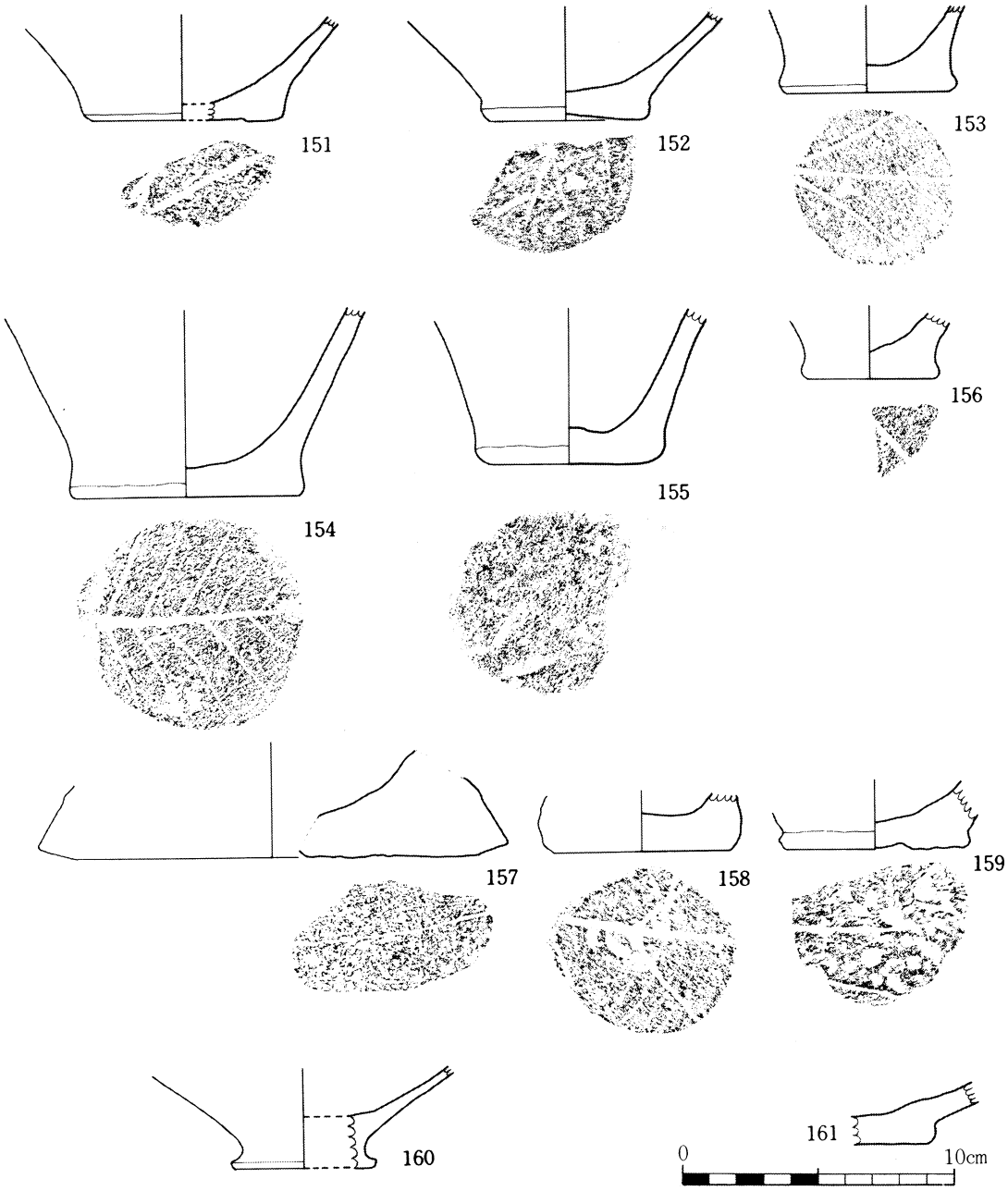
第30図　長浜金久第Ⅰ遺跡の土器実測図(9)　甕底部



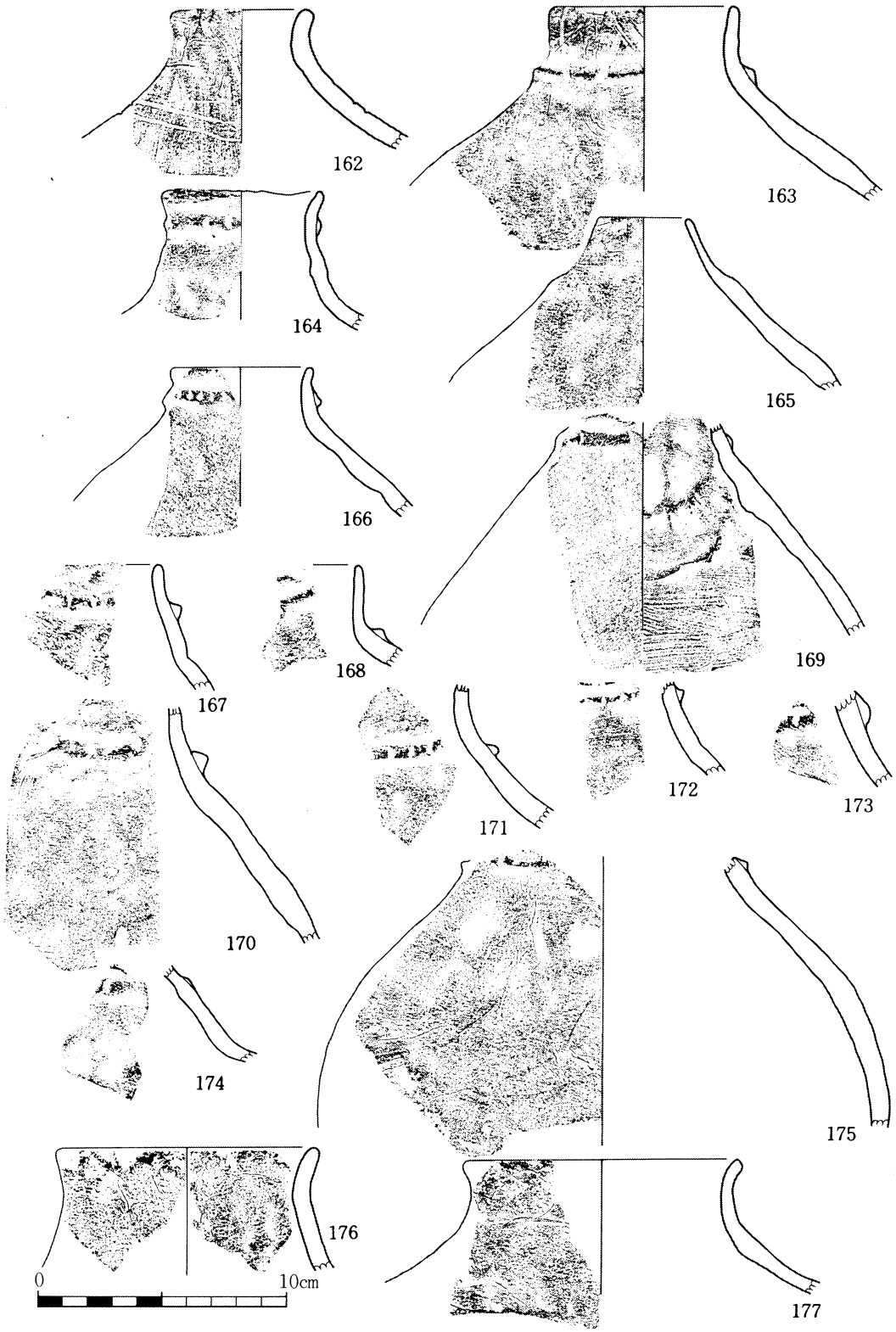
第31図　長浜金久第Ⅰ遺跡の土器実測図(10)　甕底部



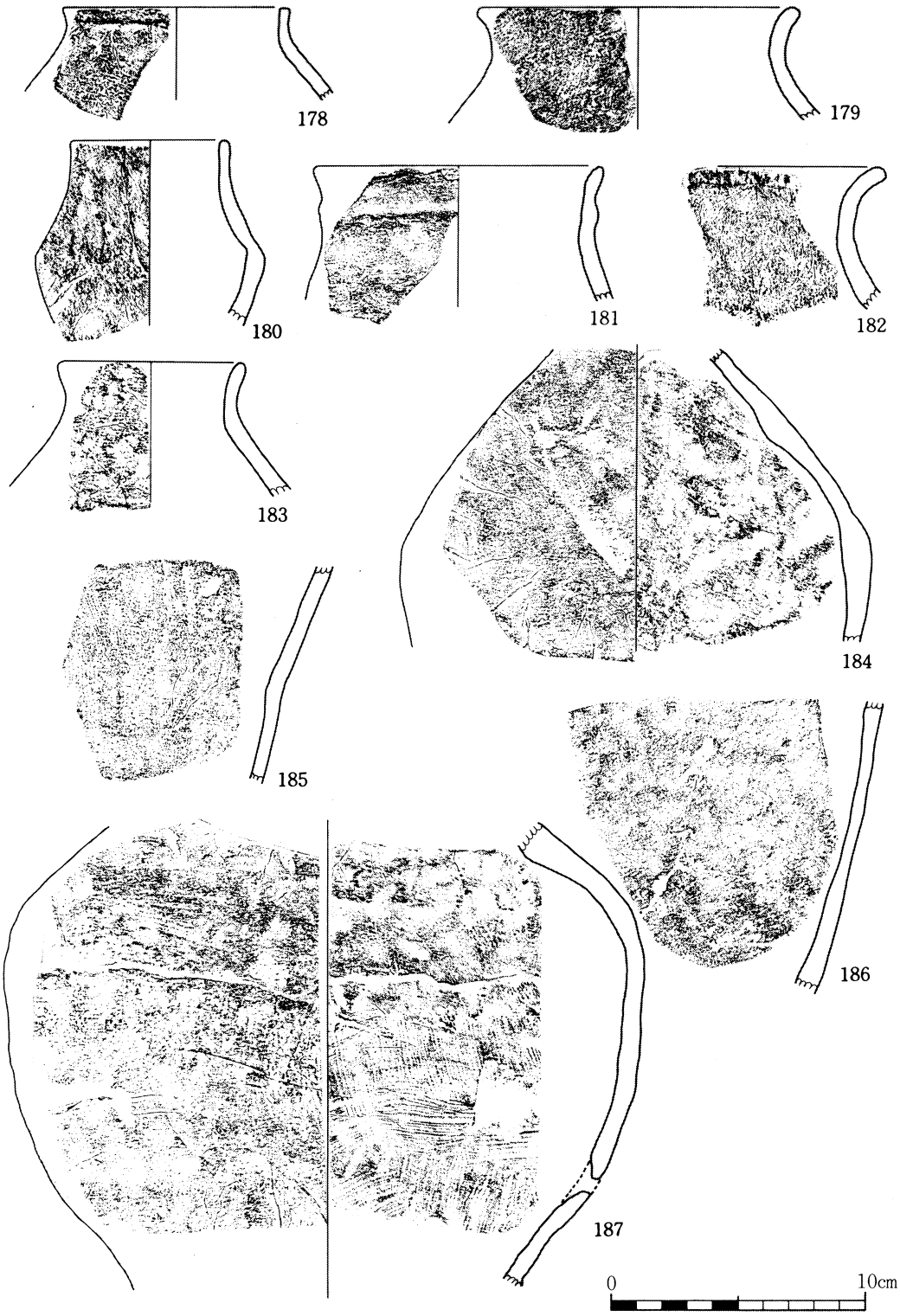
第32図　長浜金久第Ⅰ遺跡の遺物実測図(11)　甕底部



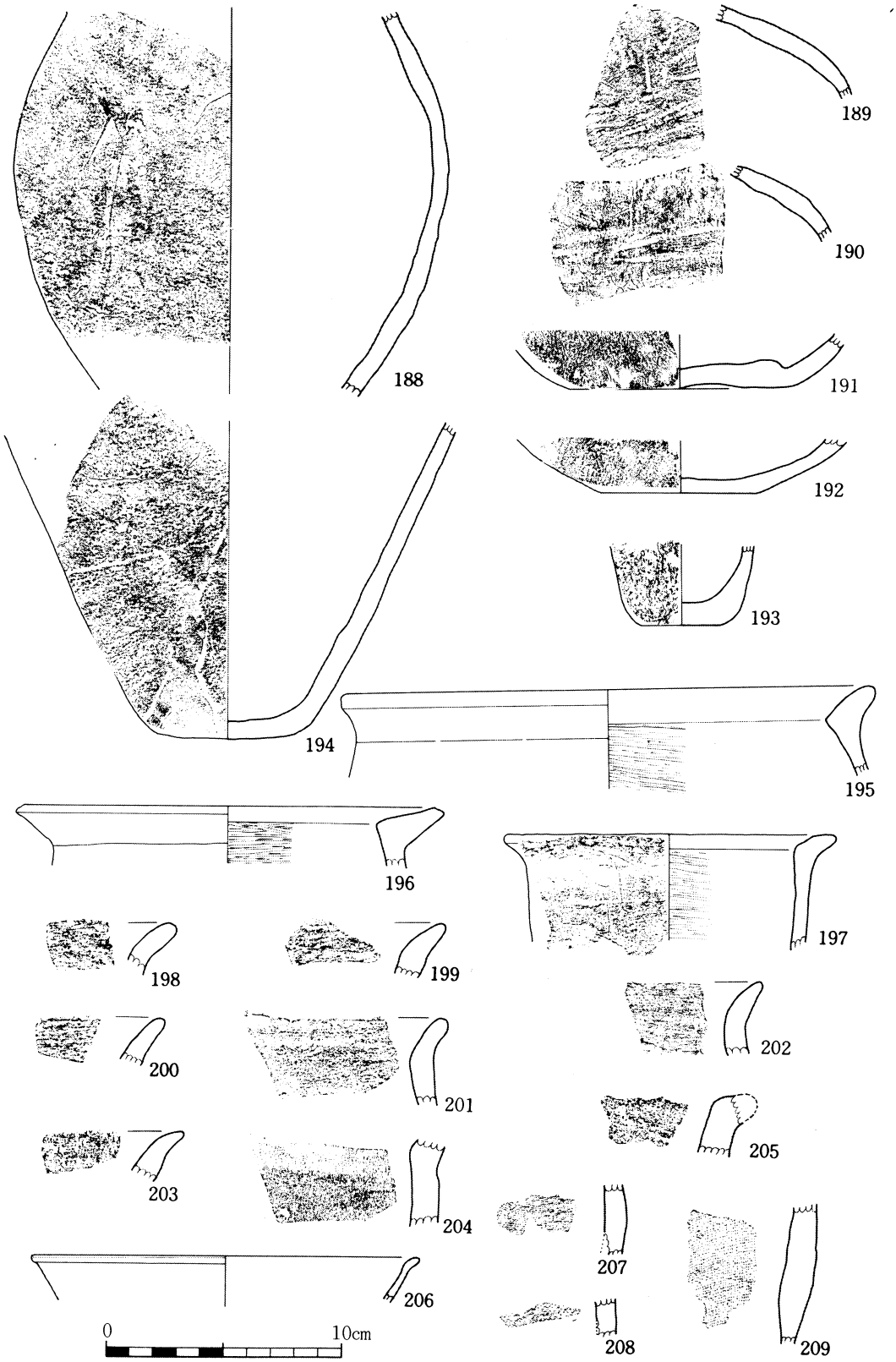
第33図　長浜金久第Ⅰ遺跡の土器実測図(12)　甕底部



第34図　長浜金久第Ⅰ遺跡の出土状況図(13)　壺Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ類



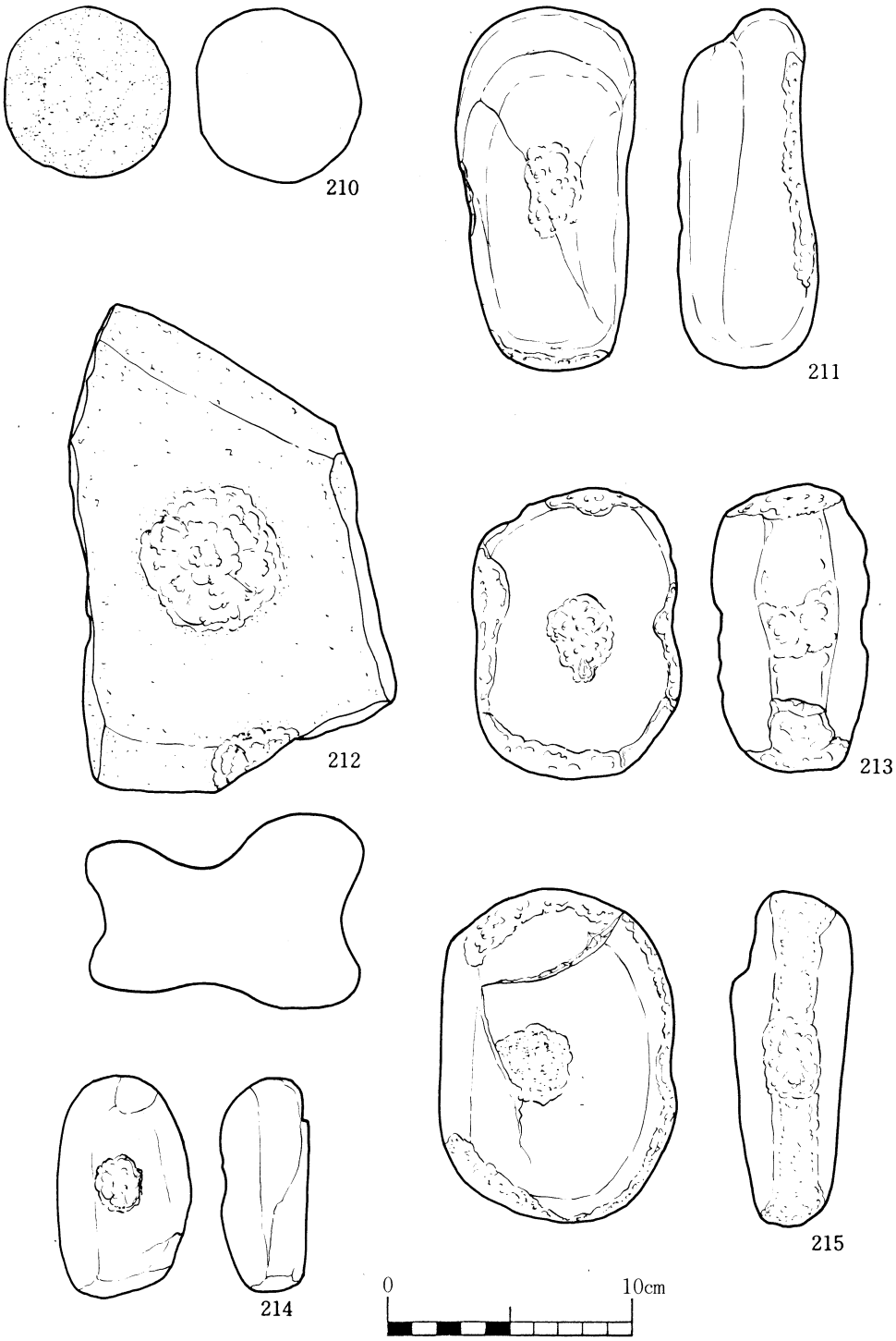
第35図　長浜金久第Ⅰ遺跡の土器実測図(14)　壺Ⅴ類・胴部



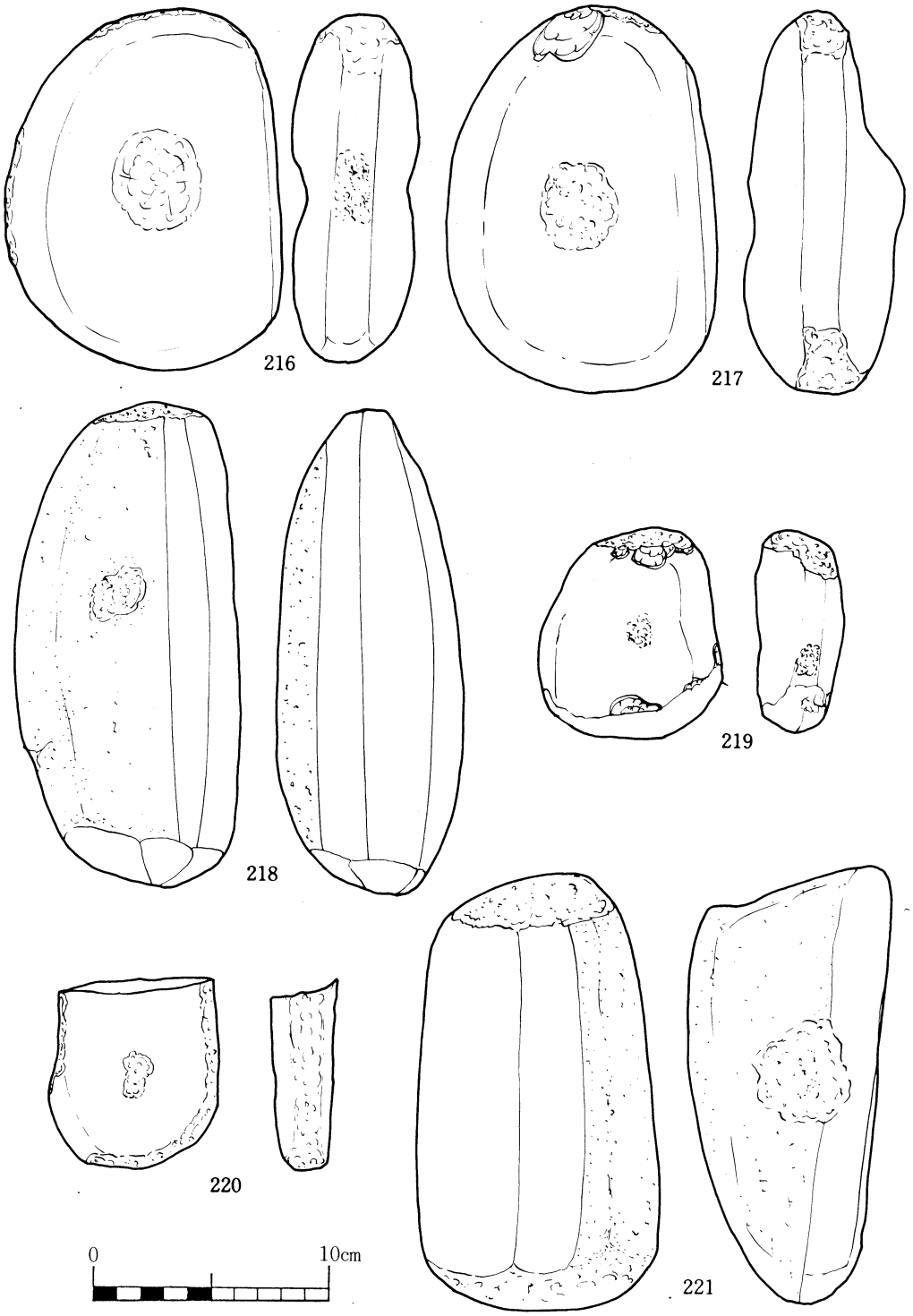
第36図　長浜金久第Ⅰ遺跡の土器実測図(15)　壺ー肩・胴・底部・土師器・布目圧痕土器

第10表　石器諸訳 (2)

番号	挿図番号	出土区	層	法量(cm)	重量(g)	石材	用途
7	216	D — 15	(19)	15.6×11.9×4.5	1,750	ひん岩	凹石
8	217	G — 8	(19)	16.9×11.4×6.7	1,800	安山岩	凹石
9	218	G — 50	(19)	21.0×9.7×5.9	2,280	粗粒砂岩	クガニイシ
10	219	C — 15	(19)	9.1×7.9×3.6	405	砂岩	凹石敲石・
11	220	K — 24	(19)	8.1×7.3×2.6	280	砂岩	凹石・敲石
12	221	G — 50	(19)	18.8×10.3×7.6	2,500	粗粒砂岩	クガニイシ
13		D — 11	(19)		610	砂岩	凹石
14		C — 15	(19)		160	砂岩	敲石
15		G — 5	(19)		321	砂岩	敲石
16		G — 44	(19)		354	泥岩	敲石
17		C — 13	(19)		272	石灰質泥岩	敲石
18		B — 17	(19)		239	砂岩	敲石
19		C — 14	(19)		423	砂岩	敲石
20		C — 15	(19)		321	砂岩	敲石
21		D — 17	(19)		360	砂岩	凹石
22		一般	(19)		76	軽石	敲石
23		D — 13	(19)		96	粗粒砂岩	敲石
24		E-16-9	(19)		1,370	粗粒砂岩	敲石
25		B — 11	(19)		240	砂岩	敲石
26		一般	(19)		28	軽石	敲石
27		B — 48	(19)		313	粗粒砂岩	敲石
28		G — 11	(19)		474	礫質砂岩	敲石
29		一般	(19)		268	砂岩	敲石
30		D — 11	(19)		530	花崗閃緑岩	敲石
31		C — 30	(19)		980	砂岩	凹石
32		M — 29/30	(19)		374	粗粒砂岩	凹石
33		M — 29/30	(19)		232	砂岩	敲石
34		L — 30	(19)		240	砂岩	敲石
35		K — 23	19		147	砂岩	敲石
36		F — 12	19		1,040	砂岩	敲石



第37図　長浜金久第Ⅰ遺跡の石器実測図(1)



第38図　長浜金久第Ⅰ遺跡の石器実測図(2)

3）貝製品

1．有孔貝

この貝製品は93点出土している。文化層が重なった場所に多く出土し，層が分かれた所では第19層が3点，第13層が1点であった。本遺跡ではB－9区に一括して紐を通した状態で37点が出土した。大きさは 6.4×5.0cm のメンガイ類が一番大きく，他は4～2cm位のメンガイ類が33点，他の貝が4点出土している。一括貝以外ではメンガイが37点，カワラガイが9点，ツキガイが1点，ヒメジャコが1点，イボアナゴが1点，アラスジケマンが1点，ウチワガイが3点，ソメワケグリが5点出土している。用途としては紐を孔に通して使用したと思われる。

第11表　有孔貝指訳 (1)

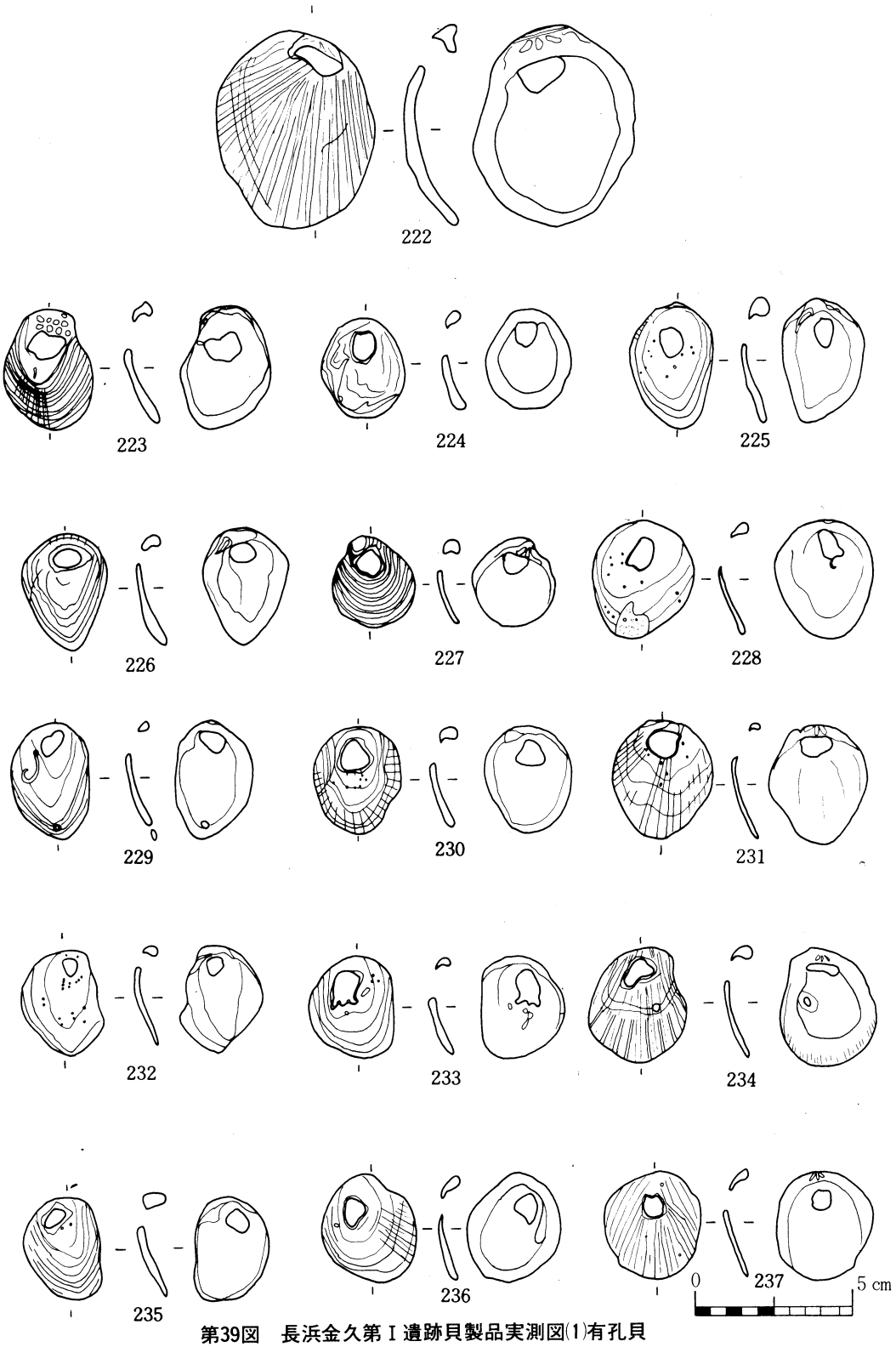
No.	遺物番号	挿図番号	出土区	層	大きさ(cm)	厚味(cm)	重量(g)	孔　径	貝の種類
1	56	222	B－9	(19)	6.4×5.0	0.35	26.5	1.3×1.5	ミヒカリメンガイ
2	36	223	〃	(19)	3.8×2.8	0.2	6.5	0.9×1.2	〃
3	21	224	〃	(19)	3.3×2.6	0.25	3.9	0.8×0.8	〃
4	20	225	〃	(19)	4.0×2.1	0.2	4.7	0.9×0.7	〃
5	37	226	〃	(19)	3.7×2.7	0.2	5.6	0.7×0.9	〃
6	29	227	〃	(19)	2.9×2.1	0.2	2.5	0.8×0.8	オイノカガミ
7	22	228	〃	(19)	3.8×3.2	0.1	5.5	1.0×0.7	ミヒカリメンガイ
8	38	229	〃	(19)	3.7×2.5	0.2	2.8	1.0×0.8	〃
9	30	230	〃	(19)	3.4×2.8	0.2	4.5	1.0×1.0	〃
10	24	231	〃	(19)	3.8×3.1	0.15	3.0	1.1×1.0	〃
11	39	232	〃	(19)	3.4×2.5	0.16	3.2	0.7×0.5	〃
12	31	233	〃	(19)	3.2×2.7	0.2	3.2	1.2×0.9	〃
13	23	234	〃	(19)	3.6×3.1	0.18	3.6	0.7×0.8	〃
14	40	235	〃	(19)	3.2×2.4	0.25	3.7	0.7×0.7	〃
15	32	236	〃	(19)	3.4×3.0	0.1	3.5	1.0×0.7	〃
16	25	237	〃	(19)	3.4×3.0	0.15	2.7	0.6×0.7	〃
17	26	238	〃	(19)	3.4×3.1	0.2	4.2	1.1×0.8	〃
18	27	239	〃	(19)	3.2×2.9	0.17	4.0	0.9×1.1	〃
19	33	240	〃	(19)	3.9×2.7	0.18	5.5	1.2×1.0	〃
20	28	241	〃	(19)	3.2×3.0	0.2	3.1	1.6×1.1	〃
21	41	242	〃	(19)	3.0×2.6	0.25	2.7	0.7×0.7	キクザル
22	34	243	〃	(19)	3.4×2.9	0.1	4.2	1.7×0　7	メンガイ
23	35	244	〃	(19)	4.4×3.1	0.3	13.0	1.1×0.7	ソメアケガシラ
24	42	245	〃	(19)	3.9×3.4	0.2	8.1	0.9×0.8	ミヒカリメンガイ

第11表　有孔貝諸訳 (2)

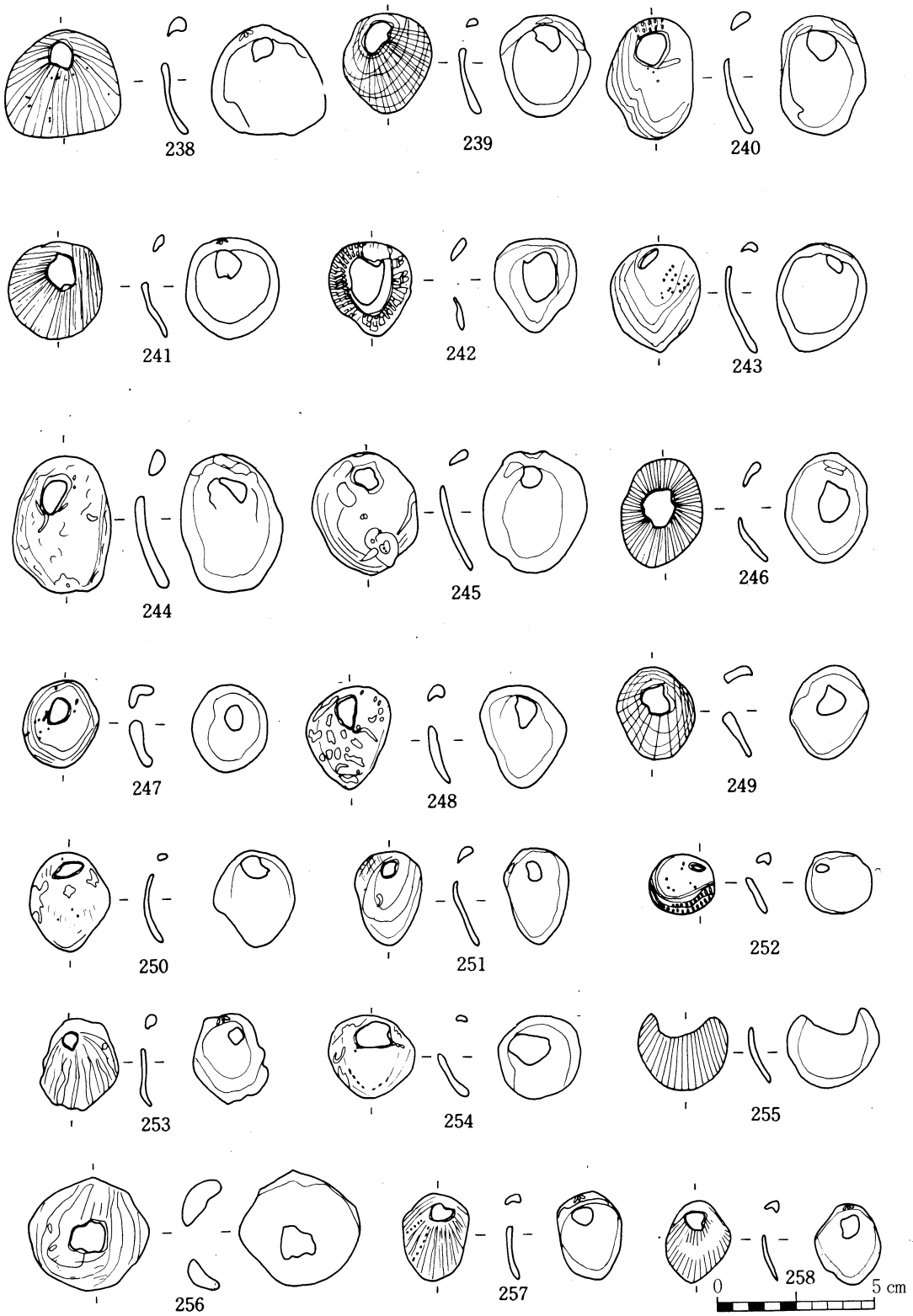
No.	遺物番号	挿図番号	出土区	層	大きさ(cm)	厚味(cm)	重量(g)	孔　径(cm)	貝の種類
25	45	246	B－9	(19)	3.4×2.6	0.2	3.1	1.3×1.1	オオツタノハ
26	43	247	〃	(19)	2.8×2.4	0.4	5.2	0.8×0.6	ミヒカリメンガイ
27	44	248	〃	(19)	3.3×2.2	0.25	3.9	1.0×0.6	〃
28	48	249	〃	(19)	3.0×2.5	0.35	3.8	0.9×0.9	〃
29	46	250	〃	(19)	3.1×2.6	0.1	2.9	0.6×0.6	〃
30	47	251	〃	(19)	3.0×1.9	0.15	1.9	0.6×0.4	〃
31	51	252	〃	(19)	1.9×2.1	0.2	1.7	0.4×0.4	〃
32	49	253	〃	(19)	2.8×2.4	0.15	1.9	0.5×0.5	〃
33	50	254	〃	(19)	2.7×2.7	0.2	3.5	1.3×1.0	〃
34	54	255	〃	(19)	1.7×2.7	0.2	1.5		〃
35	55	256	〃	(19)	3.6×3.9	0.7	9.7	1.1×1.1	〃
36	52	257	〃	(19)	2.9×2.0	0.15	1.7	0.6×0.7	〃
37	53	258	〃	(19)	2.6×2.11	0.1	0.9	0.7×0.5	〃
38	33	259	F—12	19	9.0×10.4	0.45	82	2.7×1.3	ツキガイ
39	26	260	K—23	19	5.0×7.2	0.3	59.9	0.9×1.4	ヒメジャコ
40	27	261	一　般	(19)	5.2×3.6	0.35	8.7	0.9×1.0	イボアナゴ
41	74	262	一　般	(19)	2.2×2.3	0.3	2.5	0.7×0.6	ウチワガイ
42	73	263	G－7	(19)	2.9×2.6	0.3	2.9	1.7×0.8	〃
43	29	264	D—16	(19)	1.8×2.2	0.25	1.7	0.5×0.7	〃
44	30	265	C—15	(19)	2.9×3.5	0.15	4.4	0.9×1.0	アラスジケマン
45	72	266	B－5	(19)	22．8×3.2	0.3	3.8	0.8×0.7	ソメワケグリ
46	22	267	一　般	一般	2.9×3.0	0.3	3.0	0.8×0.1	〃
47	28	268	C—15	(19)	3.5×3.6	0.3	6.2	1.1×0.9	〃
48	25	269	B－7	(19)	2.8×3.3	0.3	5.1	0.6×0 5	〃
49	23	270	一　般	一般	3.1×3.2	0.15	4.0	0.4×1.6	〃
50	37	271	G—25	(19)	5.0×4.5	0.25	16.9	0.3×0.9	カワラガイ
51	31	271	G—31	(19)	5.0×4.4	0.3	13.6	0.6×0.6	〃
52	1	273	G—31	(19)	5.0×4.2	0.2	14.7	1.6×0.9	〃
53	34	274	C—18	(19)	5.3×4.2	0.3	16.1	1.0×0.8	〃
54	36	275	G—12	19	4.6×4.0	0.2	12.0	1.3×0.8	〃
55	3	276	G—31	(19)	4.5×4.0	0.2	9.9	1.5×0.9	〃
56	35	277	H—11	13	4.1×5.5	0.3	8.7	0.3×0.7	〃
57	2	278	B－7	(19)	4.6×4.0	0.15	9.7	0.8×1.0	〃
58	19	279	一　般	一般	4.4×3.7	0.15	4.0	1.0×1.0	ミヒカリメンガイ

第11表　有孔貝諸訳 (3)

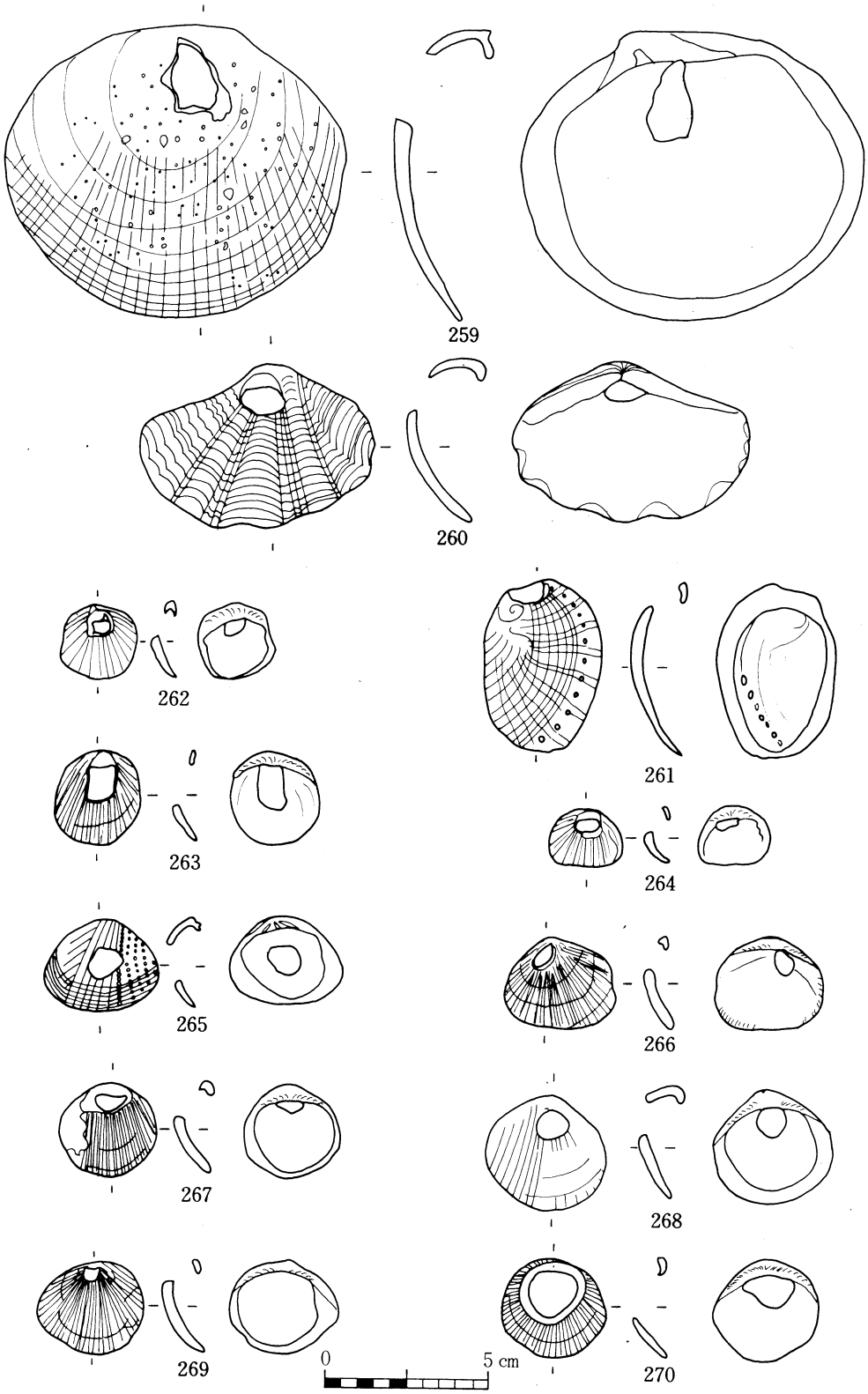
No.	遺物番号	挿図番号	出土区	層	大きさ(cm)	厚味(cm)	重量(g)	孔　径(cm)	貝の種類
59	5	280	D—12	(19)	5.1×4.5	0.2	13.0	1.6×1.0	カワラガイ
60	9	281	一　般	一般	3.7×3.7	0.3	6.2	0.9×1.0	ミヒカリメンガイ
61	8	282	一　般	一般	5.9×4.9	0.25	14.6	1.3×1.8	〃
62	7	283	C—11	(19)	8.4×7.7	0.9	69	2.1×2.3	〃
63	6	284	B— 5	(19)	7.9×6.7	0.7	64	1.7×2.2	〃
64	4	285	D—16	(19)	7.8×7.5	0.7	65	3.6×3.5	〃
65	11	286	一　般	一般	5.1×5.0	0.25	11.7	1.1×1.1	〃
66	10	287	〃	(19)	4.7×4.2	0.2	10.2	1.0×0.7	〃
67	12	288	〃	(19)	5.2×4.7	0.25	11.6	0.8×0.7	〃
68	13	289	〃	(19)	4.3×4.1	0.1	5.2	0.9×0.7	〃
69	6	290	B— 6	(19)	7.1×5.1	0.25	21.5	2.8×2.4	〃
70	70	291	一　般	一般	3.7×2.5	0.15	5.7	1.1×0.7	〃
71	18	292	〃	〃	3.7×3.3	0.15	3.0	0.5×0.6	〃
72	7	293	〃	〃	6.6×5.9	0.3	26.5	1.4×1.8	〃
73	16	294	〃	〃	5.1×5.3	0.25	16.6	1.0×0.9	〃
74	11	295	〃	〃	6.5×5.3	0.35	23.7	1.7×1.7	〃
75	9	296	〃	〃	4.1×3.4	0.2	5.0	1.1×1.2	〃
76	17	297	〃	〃	5.8×6.0	0.5	29.7	2.8×3.0	〃
77	17	298	〃	〃	3.0×2.3	0.2	1.7	0.6×0.5	〃
78	8	299	〃	〃	6.5×5.5	0.2	15.6	2.7×2.8	〃
79	19	300	〃	〃	5.9×5.2	0.2	13.1	1.2×1.7	〃
80	1	301	〃	〃	7.3×6.0	0.4	38.2	1.0×1.0	〃
81	15	302	〃	〃	3.1×2.1	0.3	4.6	0.7×0.8	〃
82	15	303	〃	〃	4.1×3.5	0.2	5.0	1.0×0.9	〃
83	2	304	〃	〃	7.0×6.1	0.5	41.0	1.0×1.1	〃
84	14	305	〃	〃	4.3×3.6	0.3	12.6	1.0×0.6	〃
85	16	306	〃	〃	4.0×4.3	0.3	7.0	0.6×0.7	〃
86	3	307	〃	〃	6.4×6.2	0.3	24.7	1.2×1.6	〃
87	71	308	G— 7	(19)	3.4×3.2	0.2	4.1	1.3×1.4	〃
88	14	309	一　般	一般	3.8×3.0	0.2	9.4	0.8×0.7	〃
89	4	310	一　般	一般	6.9×6.4	0.3	36.6	. × .	〃
90	32	311	C—19	(19)	6.6×7.1	0.4		1.0×1.5	〃
91	13	312	B— 6	(19)	6.7×6.0	0.4		1.2×1.1	〃
92	5	313	一　般	一般	7.3×6.2	0.3		1.6×1.1	〃
93	12	314	G—50	(19)	6.0×6.0	0.5		1.8×2.1	〃



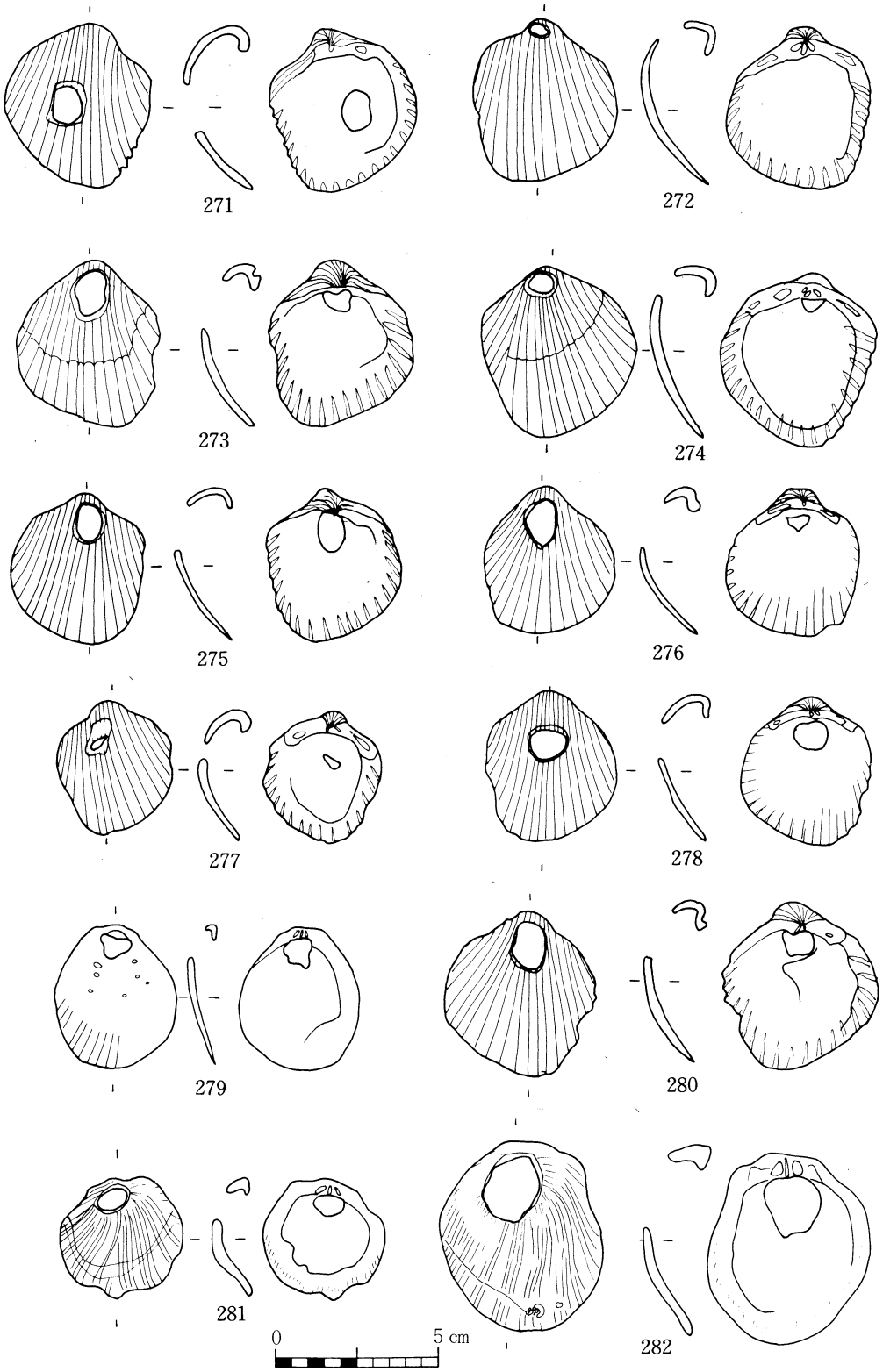
第39図　長浜金久第Ⅰ遺跡貝製品実測図(1)有孔貝



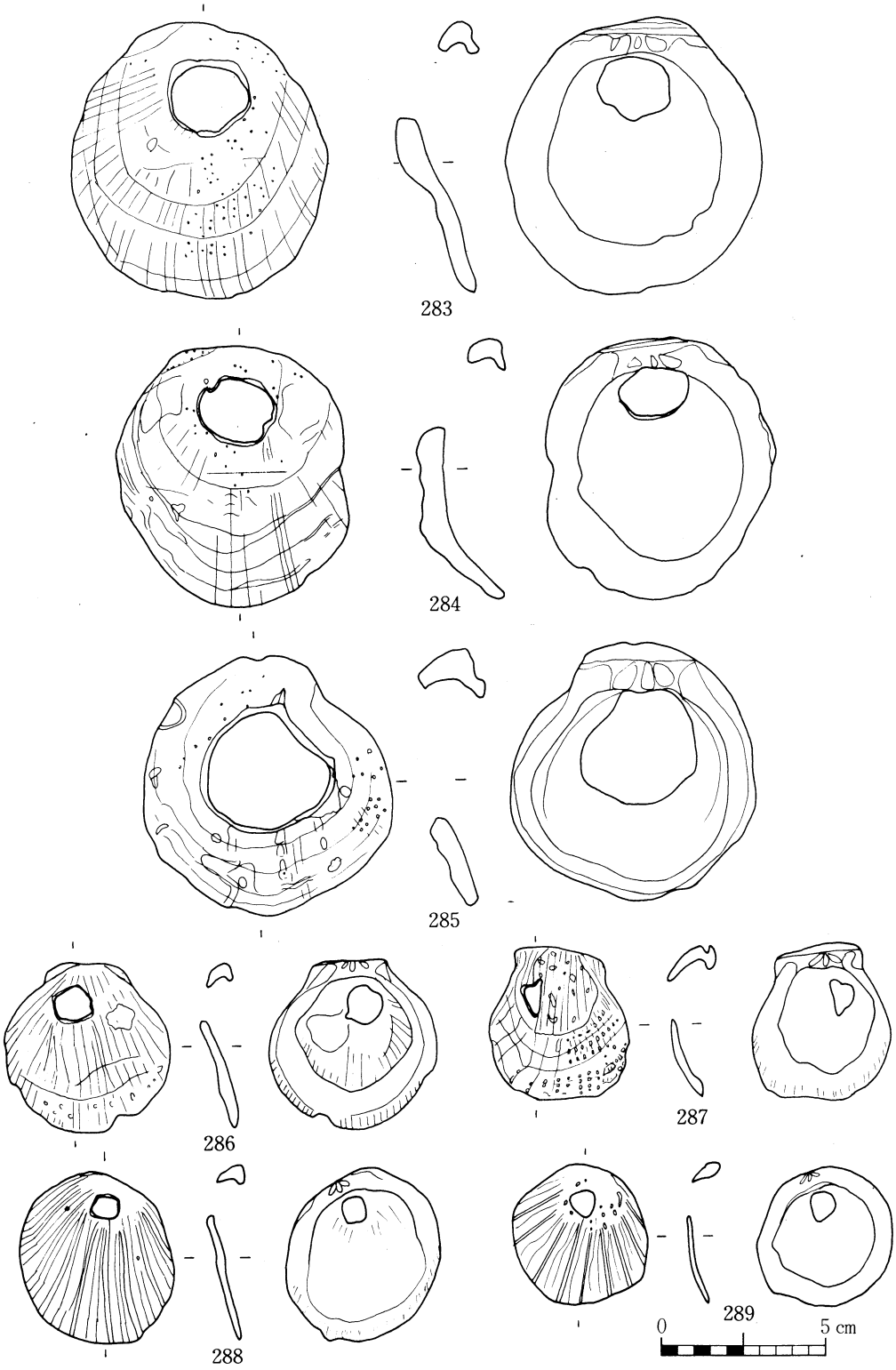
第40図　長浜金久第Ⅰ遺跡貝製品実測図(2)有孔貝



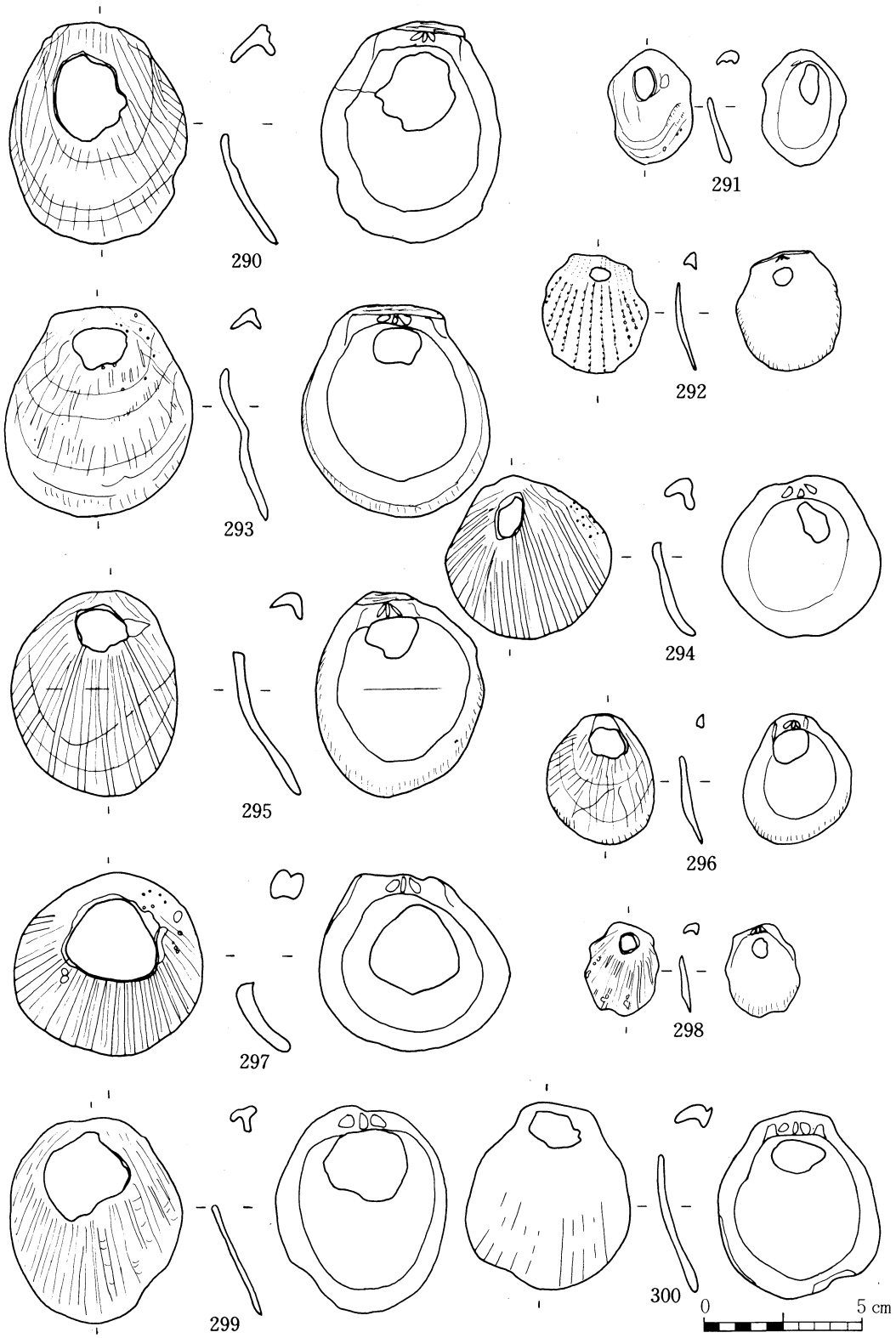
第41図　長浜金久第Ⅰ遺跡貝製品実測図(3)有孔貝



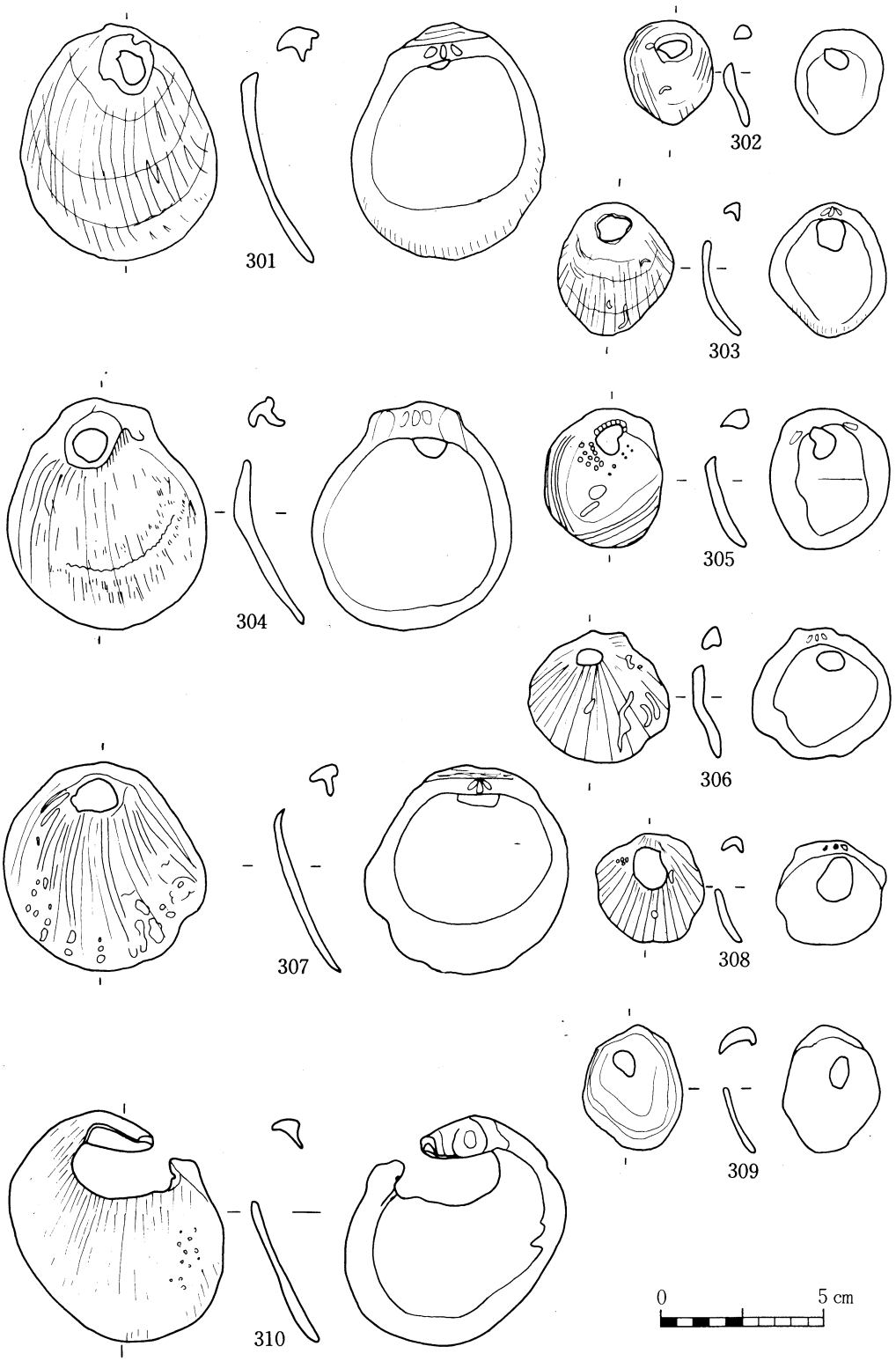
第42図　長浜金久第Ⅰ遺跡貝製品実測図(4)有孔貝



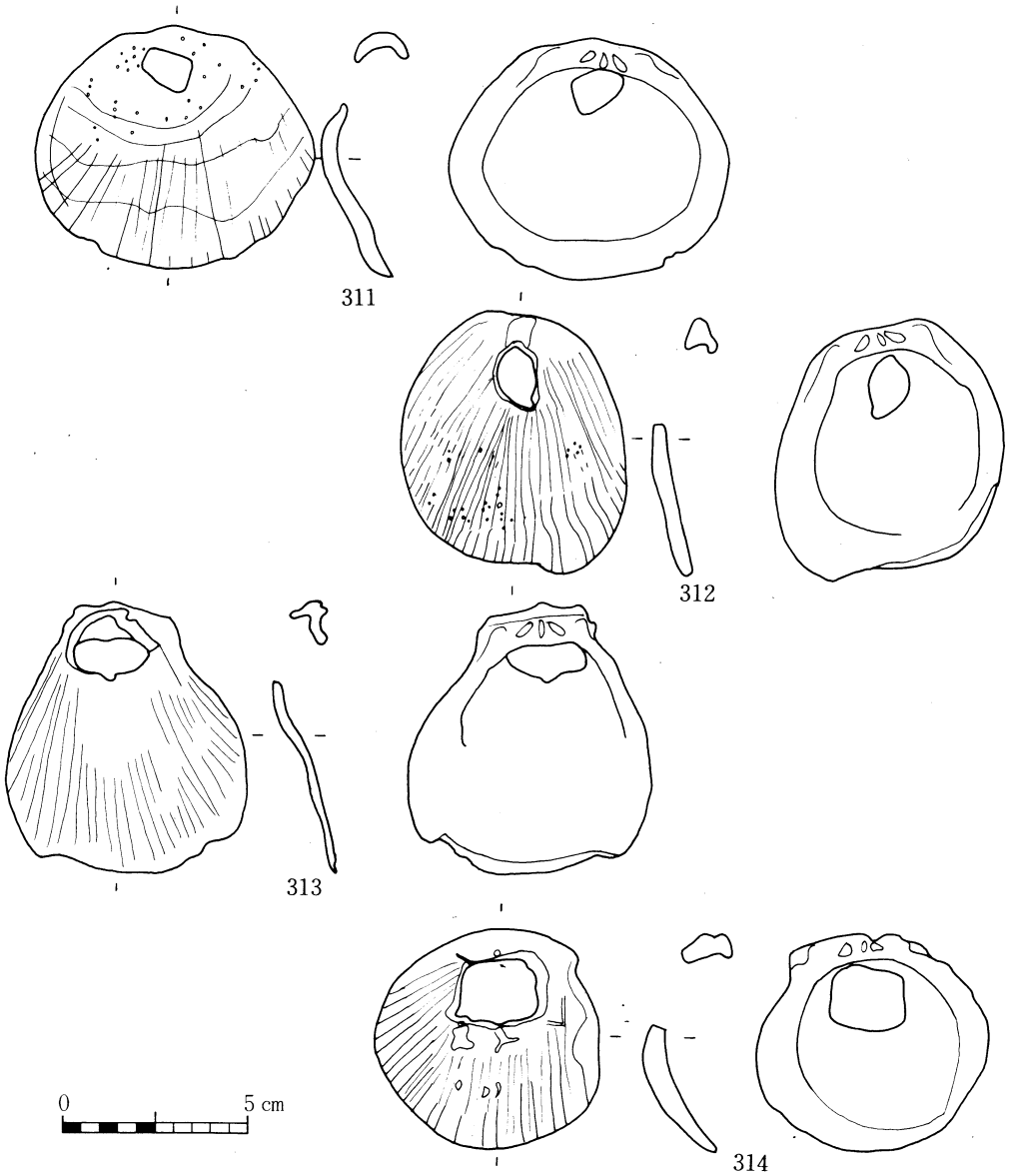
第43図　長浜金久第Ⅰ遺跡貝製品実測図(5)有孔貝



第44図　長浜金久第Ⅰ遺跡貝製品実測図(6)有孔貝



第45図　長浜金久第Ⅰ遺跡貝製品実測図(7)有孔貝



第46図　長浜金久第Ⅰ遺跡貝製品実測図(8)有孔貝

2．貝匙（ヤコウガイ製品）（315～320）

この貝製品は，ヤコウガイ製品で匙の形態をし，穿孔のあるものと無いものがある。315 は穿孔があり，柄部が狭くなっている。外皮は残っているが部分的に剝げている。316は穿孔が上部にあり隋円形の形態である。外皮は残り一部欠損している。317は柄部は欠損し，器部である。外皮は残っているが結節は剝ぎとられている。これは内側にヤコウガイの真珠層を露出させ，火に焼けた暗紫色を呈している。縁どりの調整は研摩している。318は柄部の一部は欠損しているが若干狭い柄部になっている。器部は隋円形を呈し，先端部が一部欠け落ちている内側は真珠層が露出し，外皮は剝がされてない。火を受け暗紫色を呈している。319は隔丸に近い隋円形で器部が大半を占める形態で柄部は短い。内側は真珠層が見え，外側は外皮があるが結節部は剝ぎ取られている。火を受け暗紫色を呈す。320 は柄部の先が締まり，器部は隋円を呈す。縁どりは悪く打ち欠け部が多く残っている。外皮はあり，結節部は残っている。白色を呈す。

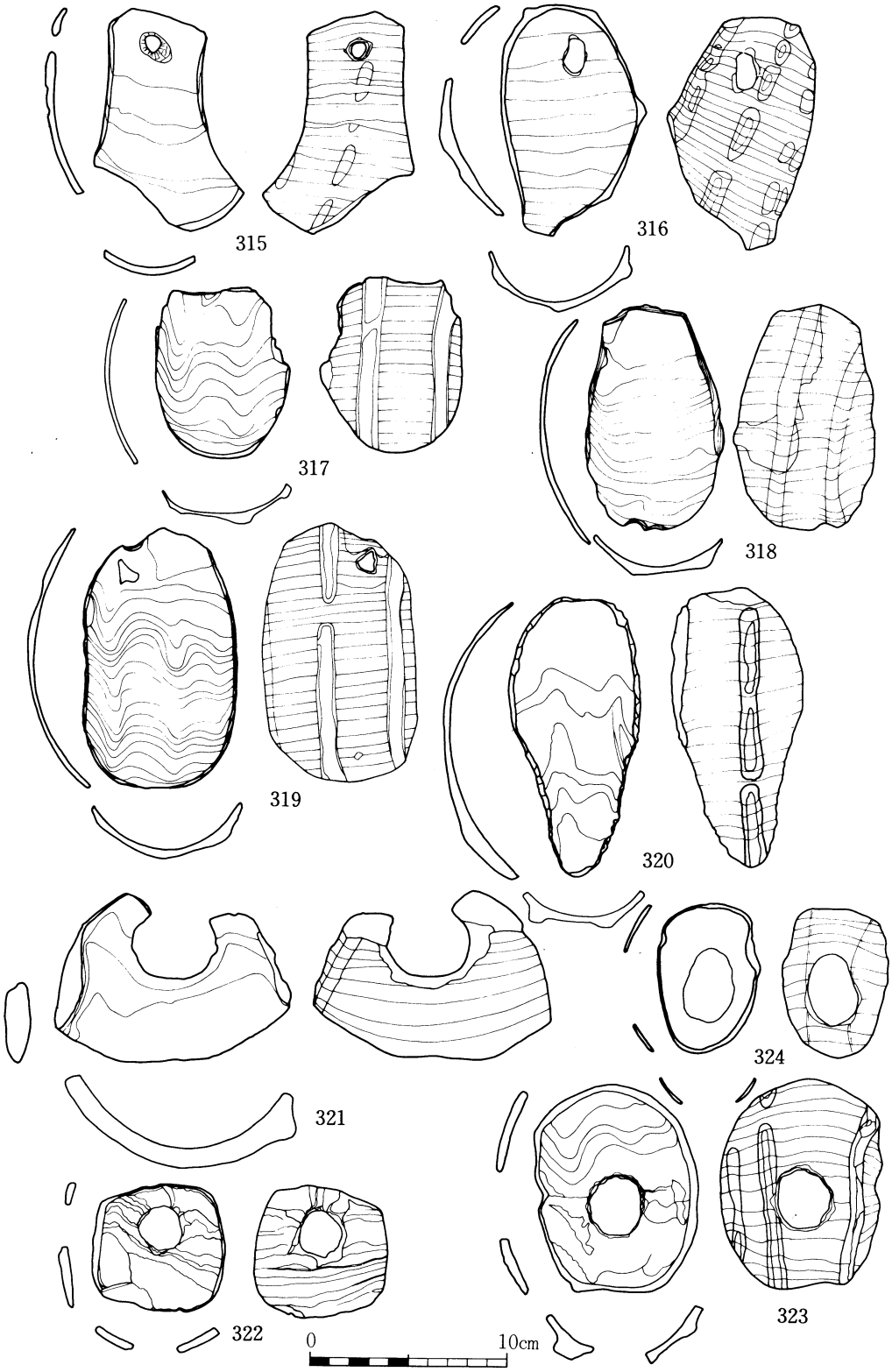
第12表　　貝匙諸訳

No.	遺物番号	図面番号	挿図番号	出土区	層	最身・最幅・深さcm	厚味cm	重量g	孔　径cm	備　考
1	12		315	一　般	(19)	10.5×5.2×0.8	0.4	57	0.9×0 8	ヤコウガイ
2	7		316	D—13	(19)	11.9×7.3×2.3	0.5	75	2.2×1.0	〃
3	5	451	317	B—16	(19)	8.5×6 8×1 9	0.2	46		〃
4	3		318	C—15	(19)	11.5×7.0×1.8	0.2	69		〃
5	1		319	一　般	(19)	13.2×7.6×2.3	0.2	87		〃
6	9	1,105	320	F—10	19	14.2×6.6×1.6	0.3	89		〃
7	11		321	一　般	(19)	8.5×11.8	1.2	168		〃
8	6	1,172	322	J—23	(19)	6.4×6.8	0.5	35	2.3×2.0	〃
9	8		323	一　般	19	10.5×8.0×2.4	0.4	109	3.0×2.4	〃
10	4	1,001	324	G—12	19	7.6×5.1	0.2	22	3.7×2.5	〃

3．円孔貝製品（321～324）

この貝製品はヤコウガイの体層部の一部を切り取り，中央部付近に円形ないし，隋円形の孔をあけたものである。321は上部が欠損しているが，ヤコウガイの口の付近を剝ぎとり，上位に径 4.3cmの円孔が施してある。幅は10.3cm，厚味は1.3cmである。322は5.7cm×6.5cm，厚さ0.4cmの方形に近い形をしたヤコウガイの体層部に径3.1cmの円孔を施したもので，その円孔は若干上位にある。323は10.5cm×8.3cmの隋円形をしたヤコウガイの体層部に径2.5cmの円孔を中央部に施している。324は5 ×7.7cmのヤコウガイの体層部に 3.7×2.5cmの円孔を施し外皮を剝ぎ真珠層を露呈している。なお全体としてヤコウガイの内面は真珠層を露呈している。

なおこの貝製品の使用法は有孔貝とは異なり，調整が良く，呪術的な用途が考えられる。



第47図　長浜金久第Ⅰ遺跡の貝製品実測図(9)

4．貝製容器（貝匙）

これはヤコウガイの殻を切断して器をつくったもので，137点出土している。

出土層位は第19層に79点，第13層に９点出土し，他は両層区別できない砂丘頂上部の腐植土層に出土している。

出土状況はC—14区にみられるようなヤコウガイの殻や蓋と接近して検出する所や，　—区のような小形貝のマガキガイ等の近くに検出する場所もある。そしてその中には　—　区—　区等のように貝殻集中箇所の脇にあるところもある。また，そのようなところには　—区にみられるようにシヤコガイも検出している。

この貝殻集中箇所は，第13層に於いて著しくみられ，炭粉や焼貝も中心部にみられるため，貝を採集し，その場所で火を入れ，調理した所というみかたが考えられる。そして，その脇にヤコウガイ製品や，シャコガイの殻がおかれている状況を考えると，貝に火を入れ，その中味を取り出し，いくつかの容器に入れて持ち帰る器としての役目が考えられ，このヤコウガイ製品やシャコガイの殻は器としての用途が強い。

この貝製品は，貝匙の名称で呼ばれていたが，最近，貝製容器・貝容器(面縄遺跡)の名称が見られる。貝匙は器形がスプーン状になっているためこの名称がつけられているが，説明では貝匙と名称を上げ匙の用途としては考えられない所見が行なわれており，食器（サウチ遺跡）としての利用を考えている。また，貝容器として上げた面縄第Ⅰ・第Ⅱ貝塚では貝容器の所見は説明されていないが名称に容器を使用している。貝製容器として上げた貝製容器小考で匙状貝製容器・ヒシャク状貝製容器・皿状貝製容器に分類して，容器の用途を考えている。

本遺跡で出土したこの貝製品は，出土状況からみると，食器としての貝容器と考えられ，ヤコウガイの体層部を利用しているため貝製容器として上げた。

この貝製容器は 325～351・353にみられるように，ヤコウガイの口縁部まで利用していないものと，口縁部まで含めたものとに分けられる。(351・352 ～ 365)。 前項の最身は平均12.57cmで，幅は平均9.2～15.8cmで，深さは平均2.59cmで，厚味は1.0～3.5cmのものがみられる。後項の最身は平均13.14cmで，幅は平均10.2～17.8cmで，深さは平均2.67cmで，厚味は1.3～4.6cmのものがある。なおこの数字は完形およびそれに近いものだけの結果である。

製作方法としては螺蓋利器を使用し，後でのべるヤコウガイの殻より切断して作るもので366は，前項の貝製容器を取ったものである。また図版第　図は後項を取ったあとである。

全体的にこの貝製容器は，縁を調整しているが切り取った状態で荒い縁をしているものもある。355・358～364は縁取りが荒く，未完成のものとも考えられる。とくに後項は全体的に縁取りが悪い。そして，この貝製品は外皮の調整はなく，内側の調整と内側の白質部もない。

第13表　　貝製容器諸訳（1）

No.	遺物番号	図面番号	挿図番号	出土区	層	最身・最幅・深さcm	厚味cm	重量g	孔　径	備　考
1	60	1,025	325	F—12	19	10.4×7.8×1.8	0.4	83		
2	32	222	326	G—16	13	11.6×7.9×1.8	0.55	85		

第13表　　貝製容器諸訳（2）

No.	遺物番号	図面番号	挿図番号	出土区	層	最身・最幅・深さcm	厚味cm	重量g	孔径cm	備　考
3	51	1,074	327	F—11	19	13.9×8.8×2.5	0.3	178		
4	57	1,187	328	J—23	(19)	11.0×6.8×2.3	0.5	96		
5	72	1,040	329	F—12	19	12.0×8.1×1.1	0.5	141		
6	55		330	E— 4	19	10.6×7.4×2.0	0.55	110		
7	28		331	G—18	(19)	12.4×8.8×1.6	0.4	119		
8	30	1,127	332	I—14	13	12.9×8.3×3.0	0.6	144		
9	59	96	333	J—24	13	15.3× 7.0×4.1	0.5	220		
10	36	1,293	334	K—25	19	10.7×7.7×2.0	0.45	125		
11	56		335	G—16	(19)	15.8×8.3×3.8	0.5	177		
12	58	1,208	336	J—24	(19)	11.9×8.0×2.6	0.5	127		
13	41		337	K—23	19	12.1×7.3×2.9	0.4	118		
14	49	1,253	338	E—11	19	10.9×7.8×1.8	0.3	127		
15	62		339	G—17	(19)	13.0×9.9×2.1	0.3	108		
16	45	1,189	340	J—23	(19)	12.0×7.4×2.7	0.4	82		
17	53	1,058	341	F—12	(19)	12.6×7.4×3.1	0.3	111		
18	54	1,042	342	F—12	(19)	12.9×8.2×2.1	0.5	127		
19	63	1,068	343	F—11	19	15.6×7.7×3.5	0.4	154		
20	44	1,118	344	E—10	19	12.1×8.1×3.1	0.4	131		
21	33	1,243	345	K—22	19	15.6×9.1×3.5	0.6	188		
22	52	2,314	346	I—23	19	13.7×9.2×2.6	0.55	170		
23	61	1,013	347	G—11	19	12.5×8.0×2.7	0.4	112		
24	27			G—18	(19)	14.1×8.2×3.5	0.4	130		
25	29	1,217		J—24	19	10.6×7.8×1.7	0.5	132		
26	34	1,109		E—10	19	11.9×7.9×1.9	0.3	115		
27	35	1,113		E—10	19	11.8×8.8×1.6	0.5	131		
28	37	1,023		F—12	19	11.3×8.3×1.7	0.3	107		
29	38	1,005		G—12	19	9.4×8.6×1.1	0.3	105		
30	39	1,171		J—23	(19)	11.9×8.7×2.0	0.3	121		
31	40	1,004		G—12	19	9.2×9.0×1.5	0.5	105		
32	50			E— 9	19	12.4×7.7×2.8	0.5	83		
33	46	1,078	348	F—11	19	12.7×8.1×3.1	0.45	173		
34	31	95	349	J—24	13	13.5×8.9×3.4	0.6	187		
35	10	1,147	350	B—14	19	9.2×7.8×2.3	0.4	84		

第13表　　貝製容器諸訳（3）

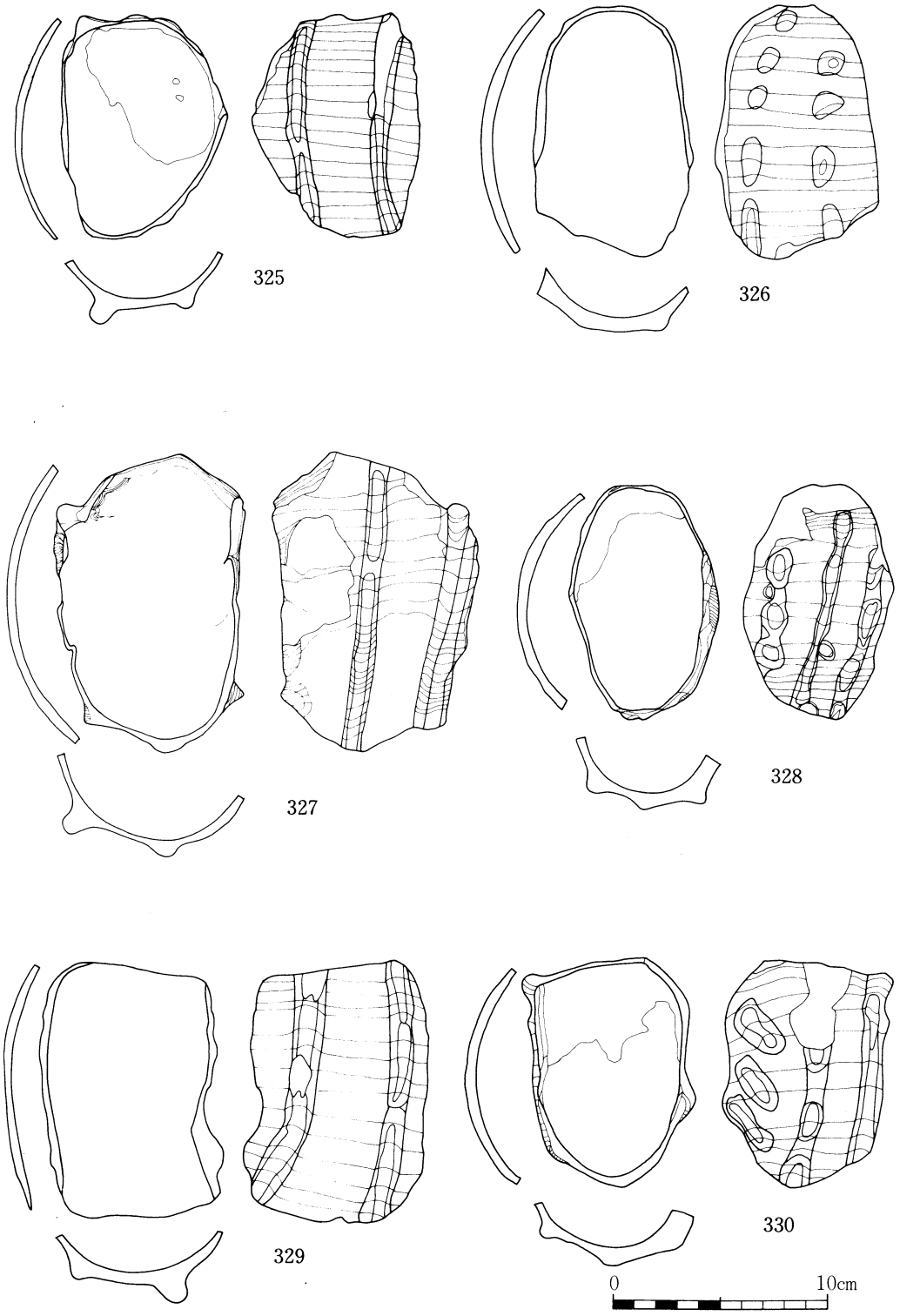
No.	遺物番号	図面番号	挿図番号	出土区	層	最身・最幅・深さcm	厚味cm	重量g	孔径cm	備　考
36	71		351		(19)		0.3	163		
37	17	1,096	352	F—10	19	12.7×8.7×3.1	0.4	144		
38	2		353		(19)	10.3×7.4×1.8	0.3	65		
39	66	1,063	354	F—11	19	13.2×9.4×1.5	0.4	152		
40	16	1,188	355	J—23	(19)	12.2×7.4×1.5	0.4	124		
41	69	1,211	356	J—24	(19)	12.1×9.9×1.3	0.5	157		
42	73	1,047	357	F—12	19	13.7×9.3×2.1	0.4	185		
43	65	1,083	358	E—12	19	16.6×10.7×3.3	0.5	230		
44	47	1,336	359	K—23	19	18.0×10.9×4.3	0.6	287		
45	43	1,055	360	F—12	19	15.9×9.4×4.5	0.75	246		
46	68	1,207	361	J—24	(19)	15.9×9.5×2.1	0.5	180		
47	42	265	362	F—14	(19)	17.8×9.0×4.6	0.6	251		
48	14	1,120	363	E—10	19	12.4×8.9×3.2	0.3	144		
49	70	1,016	364	F—12	(19)	16.2×10.8×2.6	0.6	205		
50	74	1,167	365	J—25	(19)	12.3×10.6×1.6	0.5	155		
51	15	308		G—14	13	17.1×7.2×3.7	0.35	300		
52	18			G—17	(19)	9.5×8.1×2.2	0.4	85		
53	19	1,073		F—11	19	9.6×8.5×3.3	0.35	118		
54	20	238		G—15	(19)	10.6×6.0×1.9	0.25	76		
55	21				(19)	13.4×10.3×2.8	0.4	162		
56	22			G—17	(19)	8.7×7.5×1.9	0.3	66		
57	23	1,112		E—10	19	13.6×7.2×1.0	0.5	154		
58	24	1,113		E—10	19	12.1×8.1×1.9	0.4	165		
59	25	1,110		E—10	19	9.9×7.6×1.6	0.7	127		
60	26	1,108		F—10	19	11.4×9.3×3.1	0.3	142		
61	48	1,092			19	18.3×8.7×3.5	0.4	216		
62	64	1,057		F—12	19	13.2×8.1×2.7	0.4	138		
63	67	1,218		J—24	19	11.7×11.0×1.5	0.4	141		
64	135	1,209		J—24	(19)	16.1×7.4×2.3	0.5	292		
65	146			K—24	(19)	13.5×15.6×4.9	0.5	433		
66	147	1,337		K—23	(19)	18.3×13.0×5.0	0.6	565		
68	148	285		F—14	13	19.7×13.4×5.0	0.3	505		
69	149	1,121		E—10	(19)	14.7×9.5×3.1	0.4	283		

第13表　貝製容器諸訳 (4)

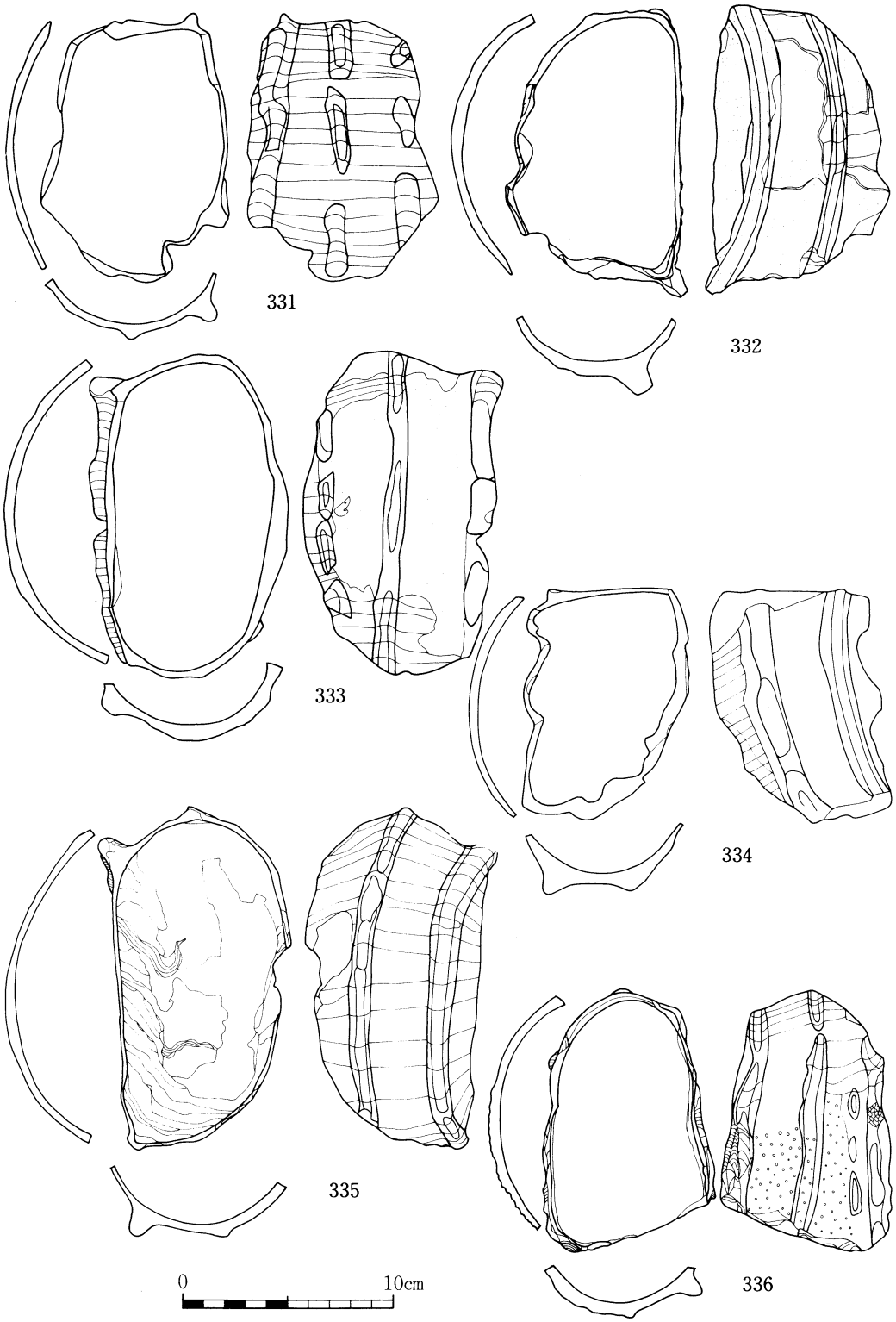
No.	遺物番号	図面番号	挿図番号	出土区	層	最身・最幅・深さcm	厚味cm	重量g	孔径cm	備　考
70	150	1,015		G—11	13	15.1×13.5×6.0	0.8	495		
71	151	307		G—14	13	17.7×12.7×4.3	0.5	515		
72	152	306		G—14	13	14.0×9.8×3.0	0 5	425		
73	153			C—15	(19)	18.2×12.1×4.8	0.4	475		
74	154	1,048		F—12	19	17.8×13.0×4.7	0.5	450		
75	127			E— 9	19	9.0×7.3×2.1	0.4	80		
76	128	1,046		F—12	19	10.3×6.2×1.9	0.6	85		
77	129	1,382		I—23	19	9.3×5.7×2.1	0.3	70		
78	130			E— 9	19	10.3×8.9×3.0	0.3	125		
79	131	1,012		G—11	19	14.7×7.7×2.4	0.4	200		
80	132			F— 9	19	10.9×5.5×0.9	0.4	92		
81	133	1,036		F—12	(19)	15.1×7.1×1.6	0.4	162		
82	134	1,201		J—24	(19)	13.3×6.7×1.7	0.4	139		
83	136			G—15	(19)	8.5×7.0×2.5	0.5	97		
84	137	1,197		J—24	(19)	10.5×8.0×2.7	0.35	98		
85	138	1,206		J—24	(19)	9.0×8.1×2.8	0.3	68		
86	142			J—24	19	9.6×9.0×2.6	0.4	119		
87	80			J—24	(19)	10.2×8.5×1.8	0.4	85		
88	81	1,213		I—23	19	13.7×6.6×1.2	0.5	120		
89	82	1,064		F—11	19	11.3×5.6×0.6	0.3	69		
90	83	1,062		F—11	19	7.8×5.8×1.1	0.3	27		
91	84	1,017		F—12	19	8.6×7.8×1.6	0.3	60		
92	85	1,224		J—23	19	7.0×5.4×0.7	0.3	42		
93	86	1,039		F—12	19	5.9×3.9×0.6	0.4	24		
94	88			E— 9	19	10.0×6.2×0.9	0.4	60		
95	89	〃		E— 9	19	8.0×5.7×2.6	0.25	36		
96	90	1,221		J—24	19	5.9×4.0×0.7	0.3	21		
97	91	〃		E— 9	19	7.0×7.6×1.3	0.5	43		
98	92	1,026		F—12	19	11.4×8.8×3.9	0.25	100		
99	94	1,045		F—12	19	15.5×8.3×2.0	0.35	157		
100	95	1,224		J—23	19	9.0×5.0×1.3	0.6	59		
101	97	1,043		F—12	(19)	8.6×6.5×2.1	0.3	59		
102	98			G—15	(19)	12.8×8.5×2.2	0.3	99		

第13表　　貝製容器諸訳　(5)

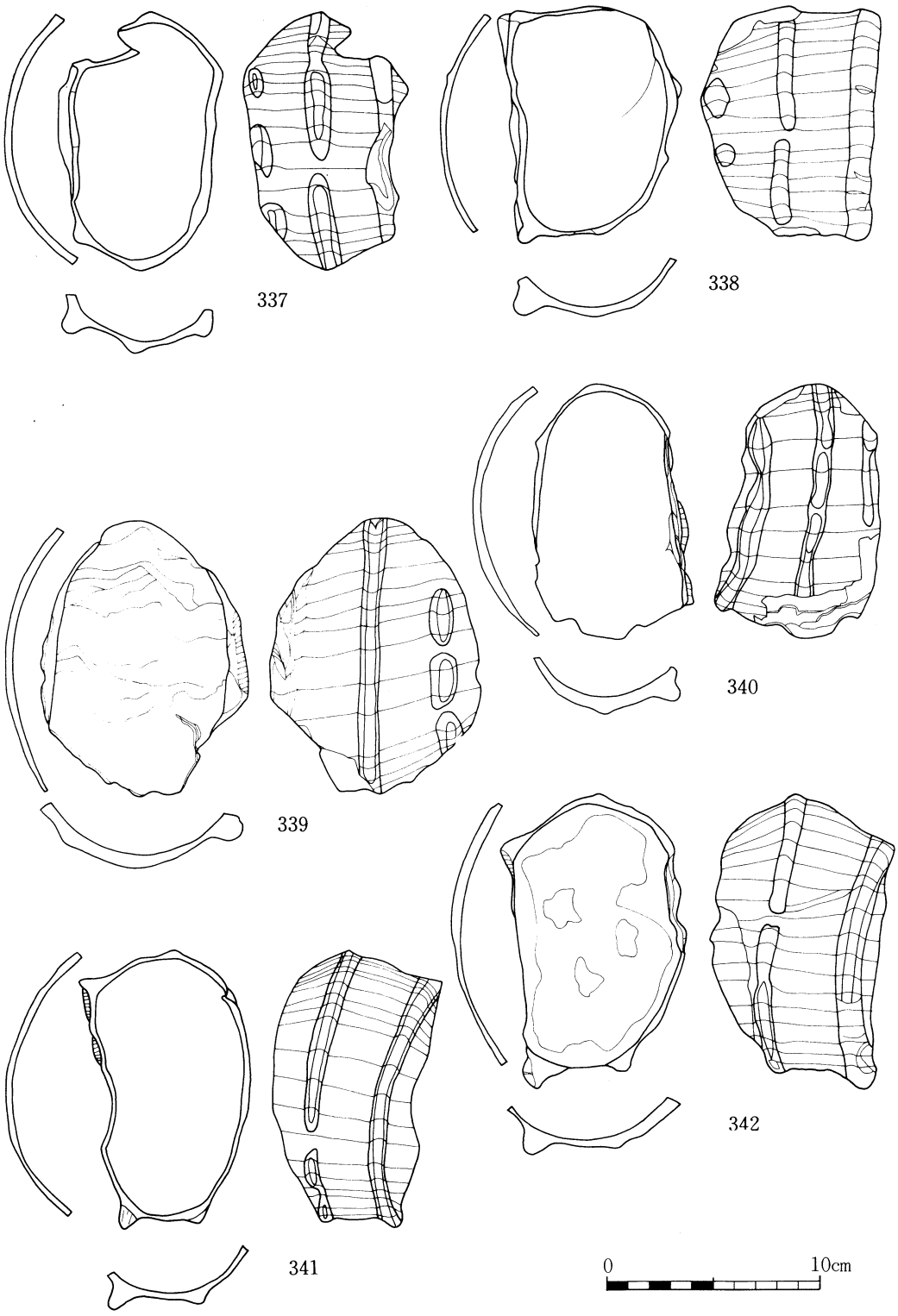
No.	遺物番号	図面番号	挿図番号	出土区	層	最身・最幅・深さcm	厚味cm	重量g	孔径cm	備　考
103	101	1,192		J—23	(19)	13.0×6.1×1.2	0.45	95		
104	102			J—24	(19)	9.8×5.8×0.6	0.45	79		
105	103	1,007		G—12	19	8.5×5.3×0.6	0.3	39		
106	104	56		J—25	(19)	7.5×5.5×0.6	0.4	58		
107	105	1,355		K—24	19	9.8×6.1×0.7	0.3	82		
108	106			J—23	(19)	10.5×7.0×2.4	0.5	110		
109	111	1,024		F—12	19	10.5×8.3×2.9	0.3	100		
110	113	1,014		G—11	19	9.5×10.7×3.0	0.3	82		
111	114	1,111		E—10	19	10.7×7.3×1.7	0.5	93		
112	115			E—11	(19)	10.0×8.0×2.6	0.4	101		
113	116			E— 9	19	12.0×7.8×2.5	0.3	62		
114	117	1,102		F—10	19	11.4×7.7×2.7	0.4	85		
115	118			D—16	(19)	6.8×5.7×1.4	0.2	23		
116	119	1,172		J—23	(19)	7.5×5.7×1.2	0.3	36		
117	120	1,045		F—12	(19)	5.7×9.0×1.8	0.25	25		
118	121			C—12	(19)	6.4×6.3×1.4	0.3	36		
119	122			E— 9	19	4.8×4.2×0.4	0.3	14		
120	123			E— 9	19	5.9×4.6×0.5	0.5	18		
121	124			E— 9	19	8.9×5.0×1.1	0.5	38		
122	125	1,069		F—11	19	10.5×7.1×1.6	0.4	62		
123	126	1,189		J—23	(19)	3.7×6.6×1.8	0.2	75		
124	87	1,038		F—12	19	7.5×8.9×1.3	0.6	79		
125	93	1,218		J—24	19	8.1×9.4×1.8	0.8	114		
126	96	1,261		K—23	19	16.3×9.0×0.1	1.2	401		
127	99	1,020		F—12	19	17.2×10.5×2.3	1.7	358		
128	100	1,103		F—10	19	14.3×4.4×0.6	0.5	100		
129	108	1,087		E—12	19	15.7×7.2×0.4	1.0	204		
130	109	1,171		J—23	(19)	8.0×9.4×2.4	0.5	84		
131	110	1,100		F—10	19	17.5×9.0×0.6	0.5	337		
132	112	1,191		J—23	(19)	13.5×9.0×4.7	0.8	203		
133	139	1,035		F—12	19	12.6×11.5×4.7	0.6	168		
134	140	1,060		F—12	19	8.6×8.5×2.3	0.4	82		
135	141	1,281		K—24	19	8.9×11.7×4.1	0.3	120		



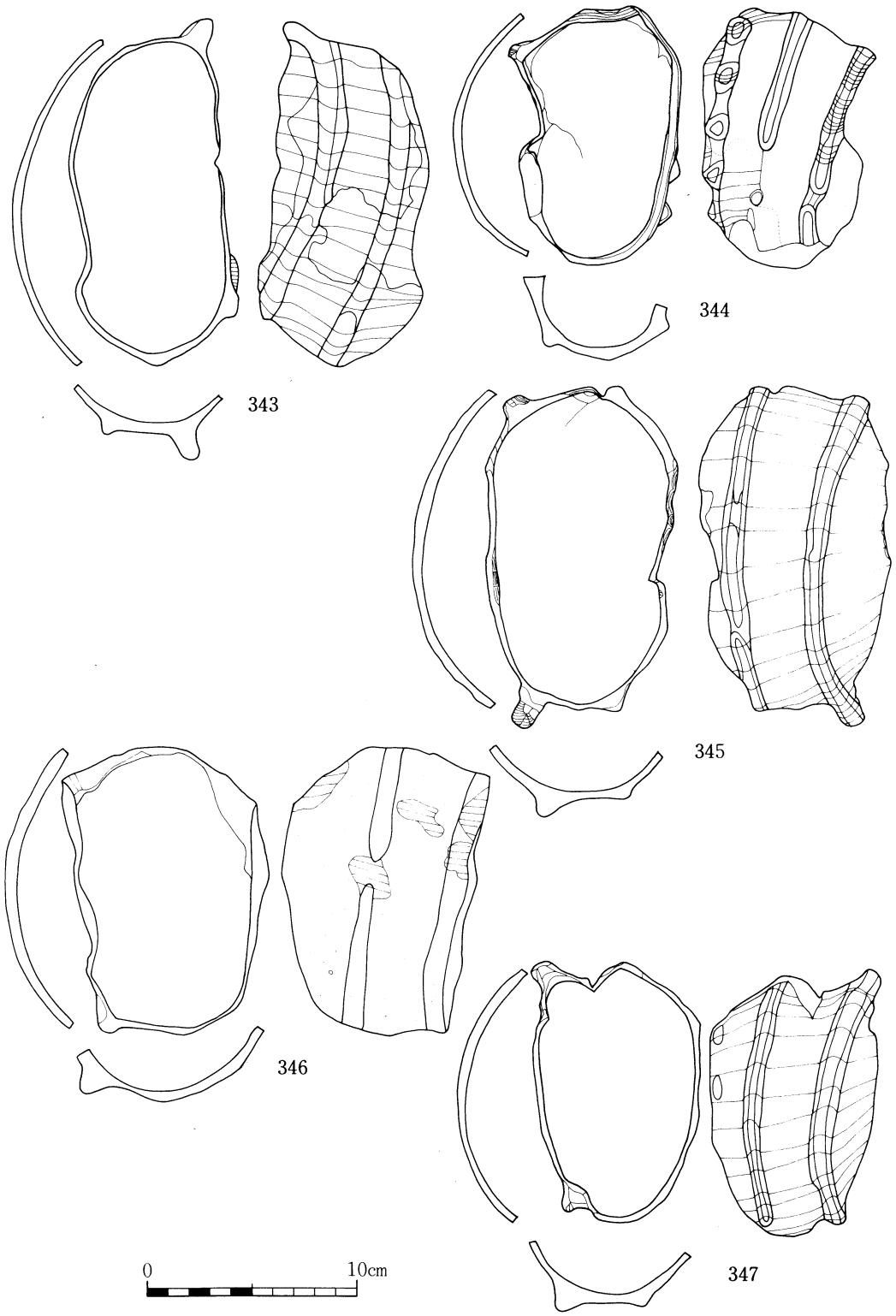
第48図　長浜金久第Ⅰ遺跡の貝製品実測図(10)



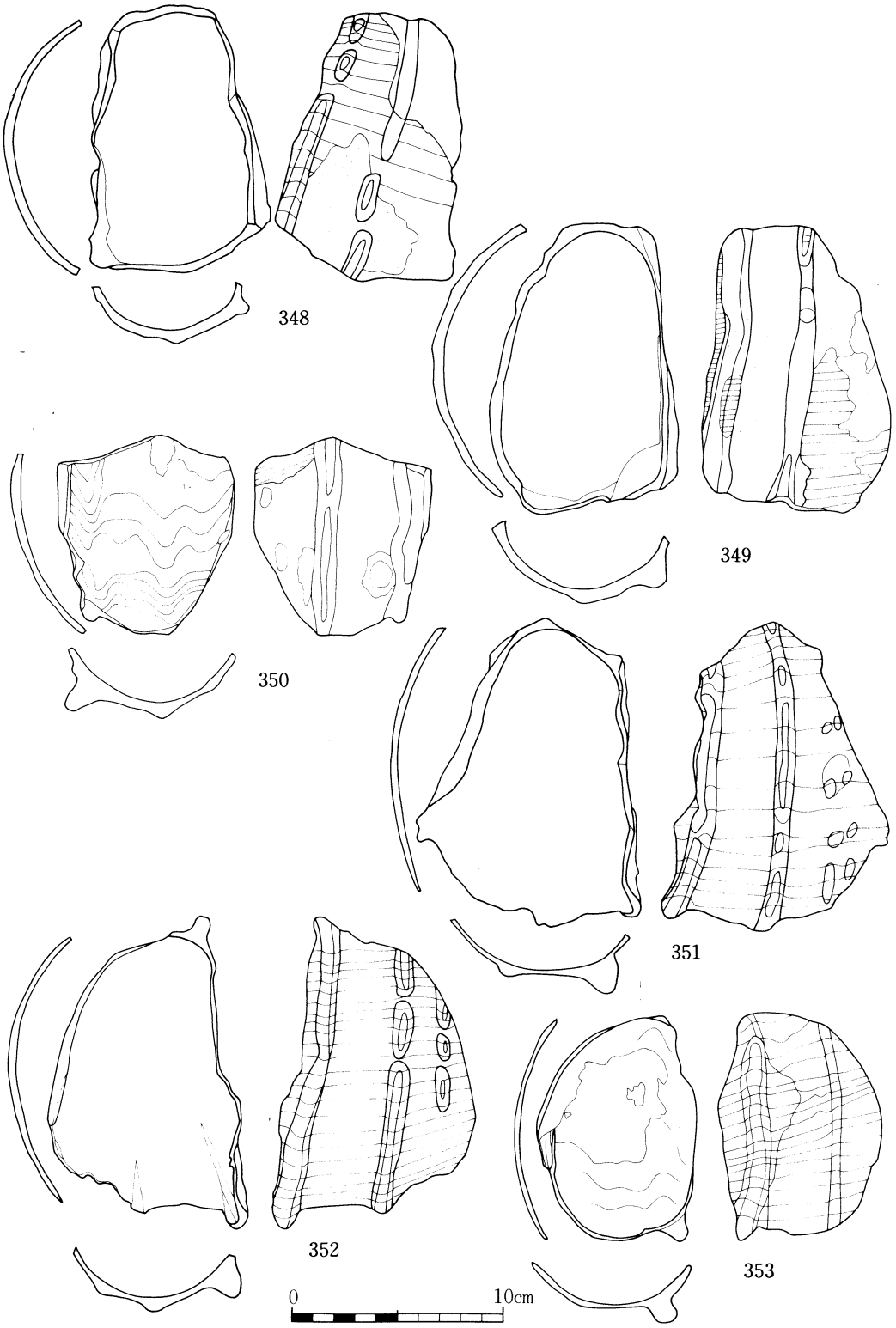
第49図　長浜金久第Ⅰ遺跡の貝製品実測図(11)



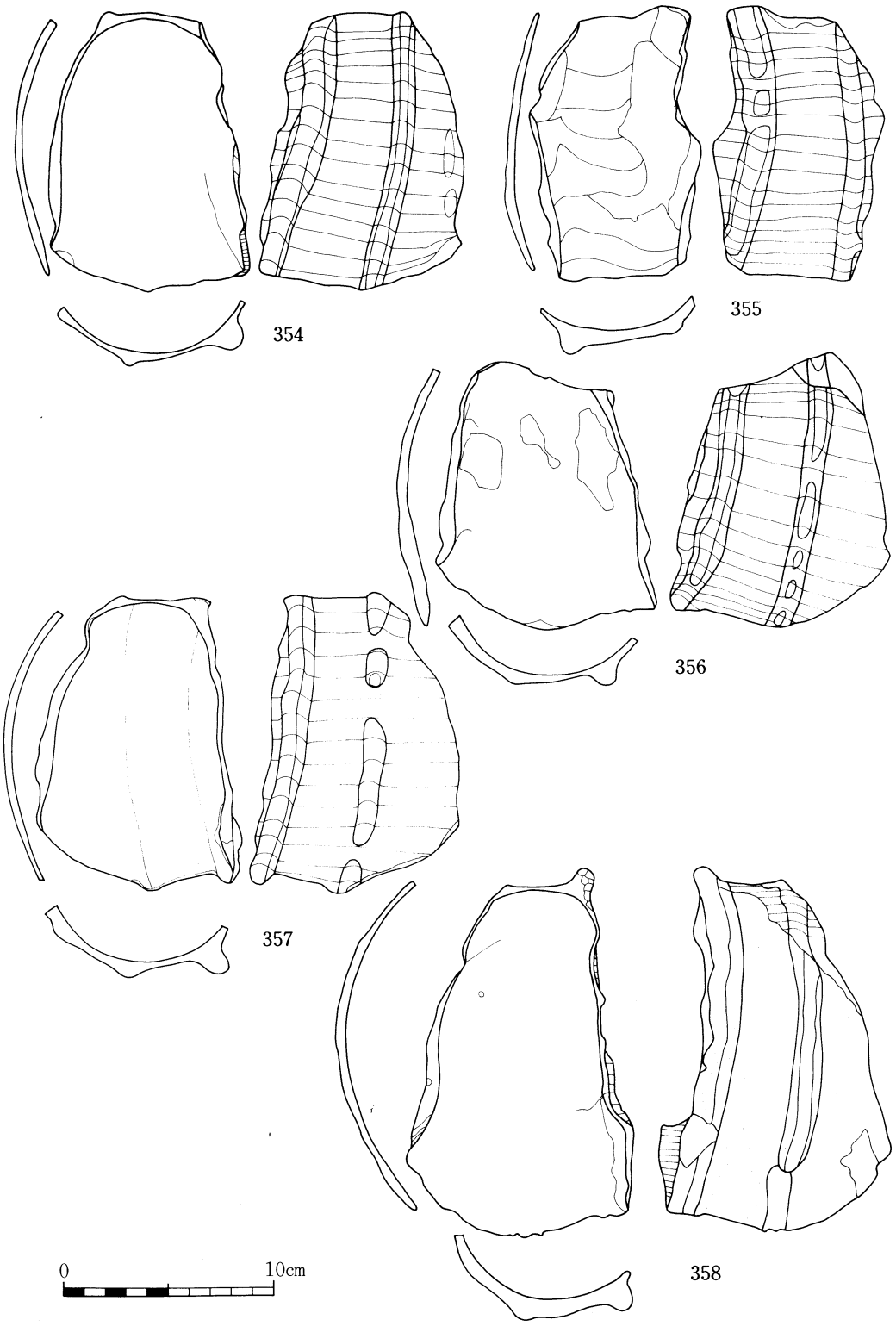
第50図　長浜金久第Ⅰ遺跡の貝製品実測図(12)



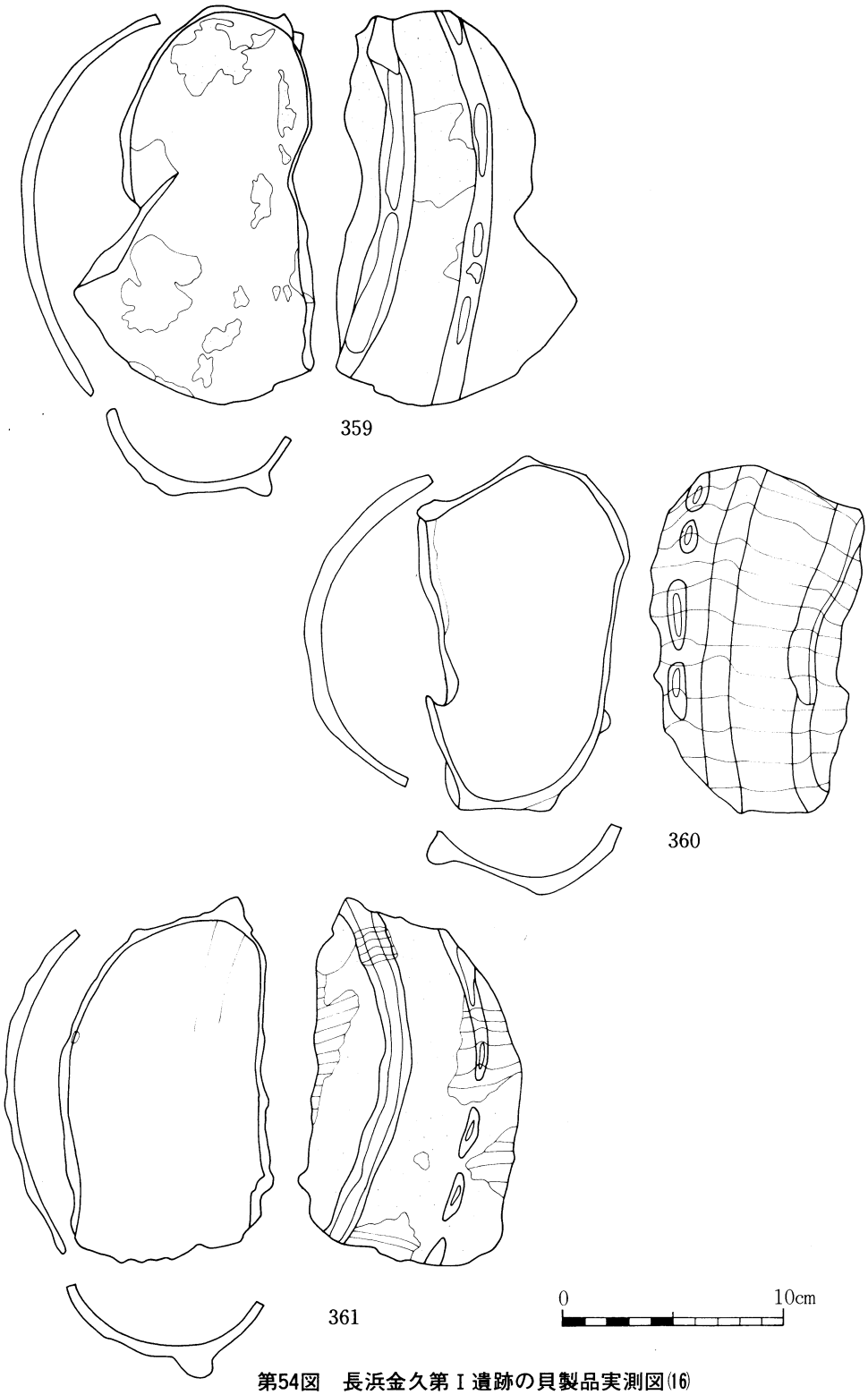
第51図　長浜金久第Ⅰ遺跡の貝製品実測図(13)



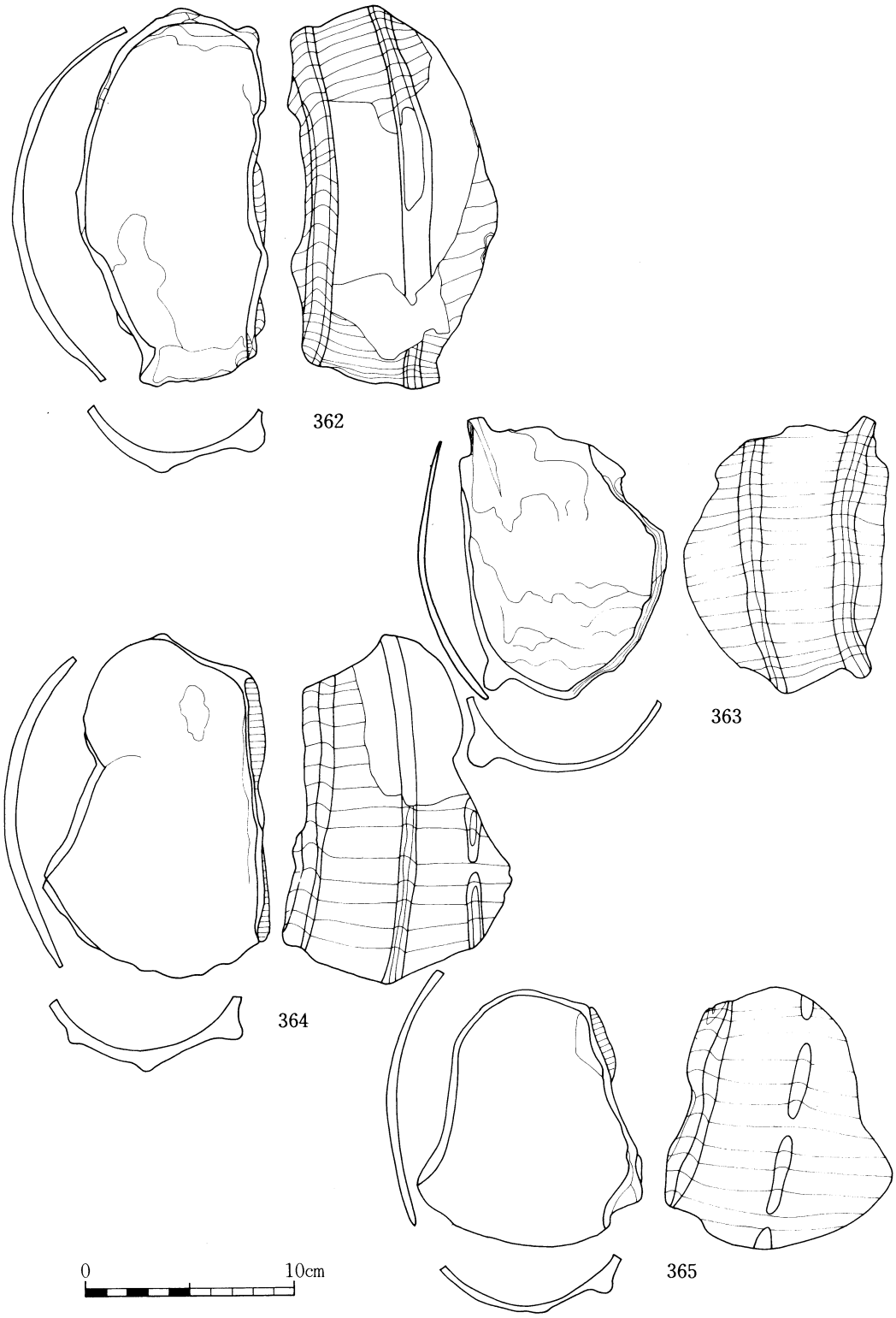
第52図　長浜金久第Ⅰ遺跡の貝製品実測図(14)



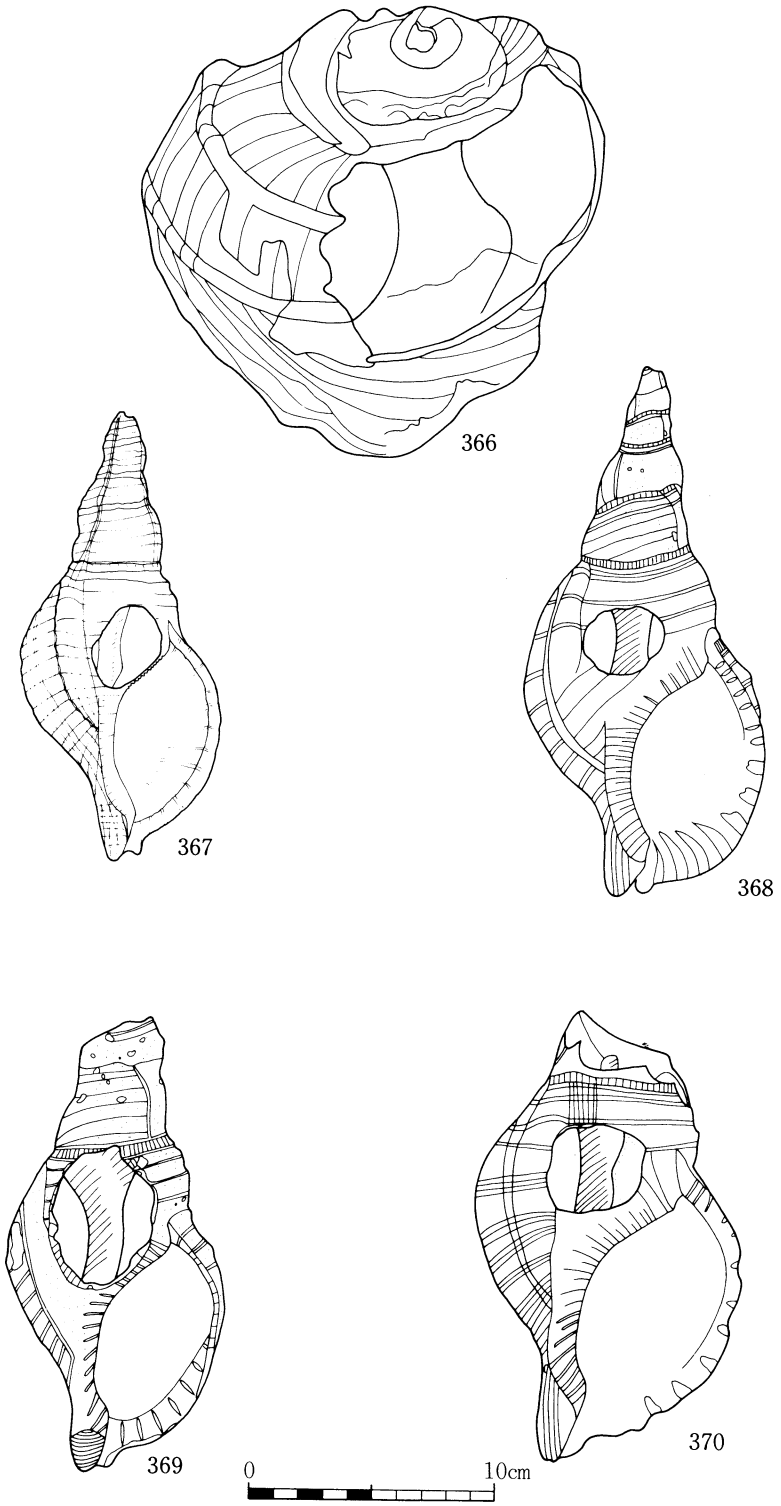
第53図　長浜金久第Ⅰ遺跡の貝製品実測図(15)



第54図　長浜金久第Ⅰ遺跡の貝製品実測図(16)



第55図　長浜金久第Ⅰ遺跡の貝製品実測図(17)



第56図　長浜金久第Ⅰ遺跡の貝製品実測図(18)

第13表　貝製容器諸訳 (6)

No.	遺物番号	図面番号	挿図番号	出土口	層	最身・最幅・深さcm	厚味cm	重量g	孔径cm	備　考
136	143	1,044		F—12	19	15.1×10.0×3.0	0.4	152		
137	144	1,175		J—23	(19)	9.0×6.3×1.3	0.3	44		

5．穿孔のある貝 (367～370)　(図版28)

この貝製品はホラガイとヤコウガイにみられる。貝殻本体に一部円孔を施すもので，367～370はホラガイ，図版28はヤコウガイである。全体的に貝殻の口部近くに孔をあけている。367 は径3.7cmの円孔で，368は径4.2×3.7cm，370は4.0×4.5cmの円で1ケ所に孔を設けている。370は4.7×5.5cmの円孔と径20cmの円孔で2ヶ所に設けている。図版28はヤコウガイの口近くに2ヶ所の円孔を設けている。円孔の大きさは径2cm前後である。またヤコウガイは他に2点出土している。この貝はホラガイとヤコウガイでは，用途の面に於いて異なる要素をもっていると考えられる。使用は不明であるが民俗例としてホラガイは煮沸器として使用していると聞いている。

第14表　穿孔貝諸訳

No.	遺物番号	図面番号	挿図番号	出土区	層	最身・最幅・深さcm	厚味cm	重量g	孔　径cm	備　考
1		97	367	J—24	13	18.2×7.8×5.3	0.2	123	3.3×3.1	ホラガイ
2			368	E—16	(19)	21.5×9.2×6.8	0.2	254	2.5×3.3	ホラガイ
3		1,205	369	J—24	(19)	18.1×8.5	0.15	190	2.1×2.6 5.3×4.0	ホラガイ
4			370	B— 5	(19)	10.1×18.3	0.15	220	3.5×3.8	ホラガイ

6．螺蓋利器

この貝器はいままで貝斧・貝刃・螺蓋製貝斧等の名称で呼ばれていたものである。この螺蓋利器の新名称をつけた理由は本遺跡の資料を上げて説明をすることにする。

この螺蓋利器は，ヤコウガイの蓋を利用しているのが特徴である。ヤコウガイの蓋は外面が半球状になり，上部がより球状に近い。内面は向って右側に中心のヘソ部があり，そこを中心に渦文を形成している。形としては左右に長く，上下に短い。厚さは上部が厚く，下部は薄い。また，左右に長いため，上下部より左右部が弧状の角度は小さく鋭角である。貝殻としての重量は大きさに比べ重く，手に持ちやすい。そして，表皮は質が濃やかで硬度が強く，内部の構成をみると前表皮・旧表皮の間は筋質が多くみられ，その筋質は比較的小さく剝がれやすい，これらから本遺跡で出土したヤコウガイの剝がれた部分を基本として分類した結果，Ⅰ～Ⅴ類に分けられた。なお本遺跡では 180点検出した。

Ⅰ類 (371～385)

この類は右縁，左縁のどちらかが剝がれ欠損しているもので，右縁欠損が371～380。左縁欠損が381～385である。またこの類は欠損部の長さが短く，1ないし2・3回の剝離痕がみられる。とくに375・382は剝離面が少ない。この類は　個出土している。

Ⅱ類 (386～400)

この類は右縁と左縁の両方とも剝がれ欠損しているものである。この中では 386～393 にみられる

剝離痕が少ないものと 394～400 のように，剝離痕が多く欠損部が大きいものとがある。また 394 は表部に剝離欠損しているものもある，なおこの類は22個出土している。

Ⅲ類（挿図番号 401～415）

この類は下縁部ないし，右縁部，左縁部が長く剝離欠損しているもので4・5回以上の剝離欠損がみられる。401・403・404・407の右下縁部まで剝離欠損し，422・405・406・408～411が下縁部の剝離欠損がみられるものである。また，412は左下縁，413～415 は右縁が剝離欠損。

Ⅳ類（挿図番号 416～430）

この類はⅠ・Ⅱ・Ⅲ類より，剝がれた部分が増えたり，拡ったりしたものである。416・417は右縁と下縁に剝がれた部分がある。418・419は右縁と下縁に2ヶ所剝がれた部分がある。420・421は右縁・左縁および下縁が幅広く剝がれている。422～426・428 は左・右・下縁の3ヶ所が幅広く剝がれている。427 は左右上下縁に剝がれている。429・430は右縁が著しく欠損して，上下・左右の縁が幅広く剝がれている。この類の特徴は2ヶ所以上剝がれていない部分が残っている。

Ⅴ類（挿図番号 431～455）

この類は剝がれた部分が全周の½以上で左・右・下縁に主に剝がれた部分があり，その部分は連続している。またこの類は，貝斧とか螺蓋製貝斧といった名称に合致するもので貝刃とかある。この中での 431 および 439は，Ⅳ類の形態であるが左・右・下縁に連続した部分があるためにこの類に入れた。また，434・438・442・443は各剝離面が大きく荒い欠損部分がみられ，直線的に剝離部があるのが特徴である。

次に各類の最大径と重量の分析を行ってみた。径は1cmごとに，重量は50g ごとに分析してみた。

Ⅰ類　46点

最大径 cm 未=未満							重量量 g 未=未満						
4～5未	5～6未	6～7未	7～8未	8～9未	9～10未	平均	50未	5～150未	100～150未	150～200未	200～250未	250～300未	平均
1	3	1	5	31	5	8.1cm	1	3	3	22	14	3	183.3g

Ⅱ類　22点

最大径 cm 未=未満							重量 g 未=未満						
4～5未	5～6未	6～7未	7～8未	8～9未	9～10未	平均	50未	50～100未	100～150未	150～200未	200～250未	250～300未	平均
0	2	0	4	12	4	8.2cm	0	2	2	7	11	0	183.8g

Ⅲ類　37点

最大径 cm 未=未満							重量 g 未=未満						
4～5未	5～6未	6～7未	7～8未	8～9未	9～10未	平均	50未	50～100未	100～150未	150～200未	200～250未	250～300未	平均
0	3	5	9	14	6	7.8cm	0	7	7	9	11	3	165.5g

Ⅳ類　48点

最大径 cm 未=未満							重量 g 未=未満						
4~5未	5~6未	6~7未	7~8未	8~9未	9~10未	平均	50未	50~100未	100~150未	150~200未	200~250未	250~300未	平均
0	1	3	1	38	5	8.3cm	0	3	2	21	21	1	187.8g

Ⅴ類　27点

最大径 cm 未=未満							重量 g 未=未満						
4~5未	5~6未	6~7未	7~8未	8~9未	9~10未	平均	50未	50~100未	100~150未	150~200未	200~250未	250~300未	平均
0	0	1	1	17	8	8.5cm	0	1	2	12	9	3	198.0g

全体　180点

最大径 cm 未=未満							重量 g 未=未満						
4~5未	5~6未	6~7未	7~8未	8~9未	9~10未	平均	50未	50~100未	100~150未	150~200未	200~250未	250~300未	平均
1	9	10	20	112	28	8.2cm	1	16	16	71	66	10	182.85g

これからみると，Ⅰ類は46点あり，最大径が８～９cm未満が最も多く，31点出土し，平均も8.1 cmになっている。 重量は 150～200g 未満が最も多く22点出土し，平均重量は183.3g になっている。

Ⅱ類は22点あり，最大径が８～９cm未満が最も多く12点出土し，平均径も8.2cmになっている。重量は200～250g 未満が最も多く11点出土し，平均重量も183.8g になっている。

Ⅲ類は37点あり，最大径が８～９cm未満が最も多く14点出土し，平均径も 7.8cmになっている。重量は，200～250g 未満が最も多く出土しているが，平均重量は165.5g である。

Ⅳ類は48点あり，最大径は８～９cm未満が最も多く，38点出土し，平均径は 8.3cmである。重量は 150～200g 未満と 200～250g 未満が共に，21点で平均重量は 186.8g になっている。

Ⅴ類は27点出土し，最大径が８～９cm未満が最も多く，17点出土し，平均径は8.5cmである。重量は 150～200g 未満が最も多く，12点出土している。平均重量は 198.0g である。

全体としては，180点のうち最大径が８～９cm未満が112点で，ずばぬけて最も多く，平均径は 8.2cmである。重量は 150～200g 未満が最も多く，71点出土しているが 200～250g 未満も66点で接近している。平均重量は 182.85g になっている。

こうしてみると，この貝器の現状に於いては，７cm～10cm未満の，ヤコウガイの蓋を最も多く利用している。しかし，欠損部の径も含めると，主に８cm～10cmのヤコウガイの蓋を利用していることが考えられる。重量としては，150～250g のものが現状では検出されているが，これも欠損部を考慮すると 200g ～300g のものも利用していることが考えられる。

次に欠けた部分や剝離の分析をすると，Ⅰ類は左・右縁１ヶ所に剝離欠損部がみられ，Ⅱ類は左・右縁の両縁に剝離欠損部がみられる。Ⅲ類は下縁部に長く剝離欠損部がみられるものである。この３つの類を比較すると，Ⅰ類とⅡ類は連続性があり，Ⅲ類とはそれがないと考えられる。Ⅳ類はⅠ・Ⅱ・Ⅲ類が各部にみられるもので，各部に欠損されていない部分があり，剝離欠損部がまちまちである。Ⅴ類は下縁および左・右縁が連続して，剝離欠損されている。

これらの類の特徴ではⅣ類がバラエテイに富んで，剝離欠損部が統一性に欠け，出土量も48点で全体の 26.66％におよんでいる。このことは計画的に剝離したのではない見方が考えられる。すなわちⅠ・Ⅱ類は蓋の鋭角部であるため剝離欠損部が狭い。Ⅲ類は蓋の純角部であるため剝離欠損部が広い。そして，Ⅳ類の一部をのぞき，Ⅳ・Ⅴ類の形が作られると考えられる。これは最終目的のために剝離するのではなく，使用してⅣ類（一部をのぞき）Ⅴ類ができあがることが考えられる。

この貝器は前にも述べたように，貝斧・貝刃・螺蓋製貝斧といった名称があるが，本遺跡での分析では，貝斧・貝刃といった製品的なものではなく，無欠損の螺蓋そのものが，利器で使用される過程で，いろいろな形になり，あたかも人工的に刃を付けた貝器に見えるのではないかと思われる。そして，使用螺蓋は最大径８cm～10cmで 150g ～250g のものが多く，手に握り易く，重量もあるものが選ばれており，敲打して使用する利器としての用途が妥当であろう。

では何に使用したかを考察すると，本遺跡では，貝製容器が多く出土している。この貝製容器はヤコウガイの殻を利用して 137点出土している。また他に，容器として考えられない貝匙等や割られた殻で製品になっていないもとも多量に出土している。このヤコウガイの殻や，製品を取ったヤコウガイの体部をみると，割り取った後がみられる。この割り取るための利器として，このヤコウガイの蓋を使用したと考えられる。そして，使用しすぎて直線的になっているものや，大きく欠損しているのもある。

第15表　　螺蓋利器諸訳（Ⅰ類）

No.	遺物番号	図面番号	挿図番号	出土区	層	大きさcm	厚味cm	重量 g	欠損部分	欠損部の長さ　cm
1	2		383	一　般	(19)	7.8×8.8	2.4	232	左　　縁	3.7
2	10			G－３	(19)	8.0×8.9	2.5	228	右　　〃	2.2
3	15		372	G－20	(19)	7.9×8.8	2.2	212	右　　〃	3.6
4	20			G－30	(19)	8.5×9.4	2.6	286	下　　〃	3.7
5	23		376	G－30	(19)	7.9×8.9	2.4	236	右　　〃	2.7
6	34		381	D－13	(19)	7.1×8.0	2.1	162	左　　〃	2.0
7	45			B－15	(19)	7.3×8.1	2.2	181	右下　〃	1.6
8	46			G－37	(19)	7.1×7.7	2.1	156	右　　〃	2.2
9	50			C－11	(19)	7.9×8.8	2.3	220	下　　〃	3.8
10	56			G－38	(19)	7.4×8.3	2.2	176	左下　〃	3.7
11	57			一　般	表	7.1×8.0	2.1	166	右　　〃	3.1
12	65			G－38	(19)	8.1×9.0	2.3	235	下　　〃	2.0
13	70			D－13	(19)	4.9×5.4	1.4	56	右下・下縁	2.0・ 0.6
14	75			一　般	(19)	7.5×8.2	2.0	181	右下　縁	1.7
15	77	141	385	F－21	(19)	8.0×8.7	2.0	190	左　　〃	3.6
16	82			C－15	(19)	7.7×8.5	2.2	196	左　　〃	2.4

第15表　螺蓋利器諸訳（Ⅰ類２）

No.	遺物番号	図面番号	挿図番号	出土区	層	大きさ cm	厚味 cm	重量 g	欠損部分	欠損部分の長さ cm
17	87		373	B—12	(19)	7.6×8.5	2.1	190	右　縁	2.7
18	93			C—14	(19)	8.0×8.9	2.4	234	左下　〃	1.6
19	94			C—13	(19)	8.0×8.9	2.0	211	右　〃	3.2
20	102			G—26	(19)	4.0×4.3	1.2	31	左下　〃	0.5
21	104			D—13	(19)	7.7×8.5	2.4	215	右下　〃	2.7
22	110			B—15	(19)	4.8×5.2	1.4	50	右　〃	3.0
23	112			一　般	(19)	7.4×8.1	2.1	168	左上　〃	2.7
24	114			B—15	(19)	7.4×8.2	2.1	180	左　〃	1.0
25	116		379	G—30	(19)	7.3×8.1	2.3	192	上　〃	2.4
26	122			D—15	(19)	7.8×8.7	2.1	192	下　〃	1.1
27	131	1093		F—10	19	8.1×8.9	2.5	242	右下　〃	3.1
28	132	1354		K—24	19	7.4×8.0	2.2	178	左　〃	3.0
29	133	1369		J—24	19	7.3×7.8	2.0	158	右　〃	2.5
30	134	1199		J—23	(19)	6.8×7.5	1.8	132	右下　〃	3.1
31	135	1301	384	L—24	19	7.0×7.6	2.0	154	左　〃	1.9
32	136			C— 7	(19)	6.1×6.3	1.8	104	右　〃	0.8
33	137		382	E— 9	19	7.2×8.3	1.9	165	左　〃	1.7
34	138			G—15	(19)	6.8×7.5	2.0	143	下　〃	2.8
35	139			E— 9	19	4.9×5.4	1.5	55	右　〃	2.7
36	140			E— 9	19	7.6×8.5	2.5	218	右下　〃	0.9
37	141			E— 9	19	7.5×8.2	2.1	177	下　〃	2.1
38	142	1239	378	K—23	19	7.6×8.2	2.1	187	右　〃	2.4
39	143		371	E— 9	19	8.2×9.0	2.6	255	右　〃	2.1
40	144		380	K—26	(19)	7.4×8.2	2.2	184	右　〃	3.0
41	145	1323		K—24	19	8.1×9.0	2.6	242	右　〃	1.7
42	146		375	E— 9	19	7.6×8.6	2.1	189	右　〃	2.1
43	147	1251	374	K—23	19	7.7×8.6	2.2	212	右　〃	3.1
44	148	1070	377	F—11	19	7.6×8.4	2.1	182	右　〃	2.4
45	149	251		G—15	13	7.8×8.6	2.3	222	左　〃	2.7
46	150	1215		I—23	19	8.4×9.2	2.1	258	下　〃	2.7

第16表　螺蓋利器諸訳（Ⅱ類）

No.	遺物番号	図面番号	挿図番号	出土区	層	大きさcm	厚味cm	重量 g	欠損部分	欠損部分の長さ cm
47	8		394	G－ 4	(19)	7.8×8.0	2.0	190	左・右縁	3.7・2.8 計 6.5
48	12			A－15	(19)	8.4×9.0	2.2	228	左・右〃	2.8・3.4 計 6.2
49	13		395	G－ 4	(19)	7.7×8.7	2.2	205	左・右〃	2.4・5.6 計 8.0
50	16		386	G－ 4	(19)	7.8×8.1	2.2	203	左・右〃	2.7・3.0 計 5.7
51	17		390	G－ 4	(19)	7.7×8.6	2.2	190	左・右〃	1.7・4.0 計 5.7
52	36		396	B－ 8	(19)	8.1×8.9	2.2	219	左下・右縁	1.7・5.2 計 6.9
53	52			G－ 6	(19)	8.1×9.0	2.3	210	左・右縁	1.3・6.8 計 8.1
54	66		400	一　般	(19)	7.7×8.3	2.2	200	左下・右下～右上縁	3.4・7.0 計10.4
55	69			B－15	(19)	5.3×5.9	1.5	63	左下・右縁	3.7・4.5 計 8.3
56	88			B－13	(19)	8.1×9.0	2.4	234	下縁	3.6　計 3.6
57	96			C－15	(19)	5.0×5.5	1.5	58	左・右上縁	0.5・2.7 計 3.2
58	97			D－13	(19)	6.8×7.4	1.8	136	左・右縁	2.0・3.8 計 5.8
59	98		389	C－17	(19)	7.1×7.9	2.0	153	左・右〃	2.2・0.8 計 3.0
60	108		399	G－20	(19)	7.2×8.4	2.3	204	左・右〃	3.4・4.7 計 8.1
61	109		388	D－16	(19)	7.4×7.8	2.0	174	左・右〃	2.4・2.5 計 4.9
62	113		392	E－15	(19)	7.7×8.2	2.0	186	左・右〃	3.4・2.8 計 6.2
63	152	1289	398	K－25	(19)	8.2×8.9	2.3	232	左・右〃	4.4・3.8 計 8.2
64	153	1320	393	K－24	(19)	7.7×8.6	2.1	189	左・右〃	2.6・3.3 計 5.9
65	154	1080	397	F－11	19	7.9×8.6	2.2	210	左・右〃	3.8・4.4 計 8.2
66	155	1325		K－24	19	6.7×7.5	1.9	128	左・右〃	2.0・3.4 計 5.4
67	156	1066		F－11	19	8.1×9.0	2.6	250	左・右〃	2.7・1.7 計 4.4
68	157	1081	387	F－11	19	7.6×8.2	2.1	181	左・右〃	3.0・1.7 計 4.7

第17表　螺蓋利器諸訳（Ⅲ類１）

No.	遺物番号	図面番号	挿図番号	出土区	層	大きさcm	厚味cm	重量 g	欠損部分	欠損部分の長さ cm
69	7		412	A－15	(19)	6.7×7.5	2.0	142	左下　縁	3.7
70	11			G－ 3	(19)	7.7×8.6	2.3	206	右下　〃	6.2
71	22			G－ 4	(19)	8.7×9.5	2.4	252	右下　〃	4.7
72	28		401		(19)	8.0×8.9	2.4	228	下～右下縁	4.8
73	29				表	7.1×7.9	1.9	155	右縁	4.4
74	39				(19)	8.0×8.6	2.2	210	左～左下縁	6.9
75	40		406	B－ 5	(19)	6.8×8.3	2.2	177	左下～下～右下縁	7.1
76	44			B－11	(19)	6.3×7.0	2.0	119	左上～左～左下縁	6.0
77	49		415		(19)	8.4×8.8	2.3	238	右縁	5.5

第17表　螺蓋利器諸訳（Ⅲ類２）

No.	遺物番号	図面番号	挿図番号	出土区	層	大きさ cm	厚味 cm	重量 g	欠損部分	欠損部分の長さ cm
78	59			一　般	(19)	8.6×7.9	2.1	189	右縁	4.7
79	64			一　般	(19)	4,9×5.1	1.4	60	下～右縁	5.7
80	68		410	D—13	(19)	6.7×5.9	1.8	92	下縁	5.8
81	67			G— 6	(19)	6.4×7.0	1.9	106	右下～右縁	5.8
82	78			B— 6	(19)	8.5×9.4	2.2	224	下～右～上縁	14.3
83	83		413	B—12	(19)	8.6×9.0	2.3	254	右下～右縁	5.8
84	85			C—15	(19)	7.2×6.6	1.9	118	左下～下～右下縁	8.3
85	99			C—14	(19)	6.4×5.7	1.6	79	下縁	3.8
86	100			C—15	(19)	5.7×6.6	1.7	87	下〃	5.8
87	101			C—15	(19)	6.0×6.6	1.6	87	下〃	4.8
88	111		408	D—13	(19)	7.2×7.9	1.9	136	下〃	7.1
89	117		414	G—15	(19)	8.4×9.1	2.7	278	右下・右縁	6.0
90	158	1202		J—24	(19)	6.7×7.9	2.1	150	下縁	5.8
91	160			J—24	(19)	7.8×8.6	2.0	185	右〃	5.2
92	161	1099	404	F—10	(19)	8.0×8.1	2.3	208	下～右縁	7.3
93	162	1319		K—24	19	7.4×8.3	2.2	165	左下縁	3.8
94	163	1322	402	K—24	19	7.3×8.2	2.1	172	下縁	4.9
95	164			E— 9	19	5.5×6.2	1.7	77	下縁	3.1
96	167	1380		I—23	19	7.7×8.6	2.0	216	下～右縁	10.5
97	168	1032		F—12	19	6.0×7.0	1.8	108	下～右下縁	6.0
98	170		405	E— 9	19	7.0×8.6	2.0	187	下～右下〃	7.7
99	171			J—24	(19)	5.8×6.1	1.6	83	左～左下〃	7.0
100	173	1119	411	E—10	19	7.6×8.3	2.2	186	下～右下〃	11.0
101	174			B—13	(19)	6.3×7.2	1.8	103	下縁	4.2
102	176			C—15	(19)	8.1×8.0	1.9	184	右上～右～右下縁	6.3
103	177	287	407	F—14	(19)	7.7×8.0	2.3	209	下～右下縁	9.0
104	178	1041	409	F—12	19	8.5×9.3	2.2	225	下～右下〃	7.2
105	179	1008	403	G—12	19	7.6×9.0	2.4	228	下縁	6.8

第17表　螺蓋利器諸訳（Ⅳ類１）

No.	遺物番号	図面番号	挿図番号	出土区	層	大きさ cm	厚味 cm	重量 g	欠損部分	欠損部分の長さ cm
106	9		G—21	G—21	(19)	8.5×9.4	2.5	268	下・右縁	2.7・4　計 6.7
107	14			G— 3	(19)	7.8×8.9	2.1	206	左・右縁	6・3.8　計 9.8
108	18			G— 4	(19)	7.5×8.4	2.0	170	左・左下・右縁	2.4・1.0・6.3　計 9.7

第17表　螺蓋利器諸訳（Ⅳ類２）

No.	遺物番号	図面番号	挿図番号	出土区	層	大きさ cm	厚味 cm	重量 g	欠損部分	欠損部分の長さ cm
109	21			一　般	(19)	7.5×8.3	2.2	184	下・右下縁	1.8・2.8 計 4.6
110	25		421	一　般	(19)	7.8×8.7	2.3	208	左・下　〃	5.7・6.0 計11.7
111	26			D—13	(19)	7.4×8.0	2.3	175	左・下・右〃	2.5・4.4・3.2計10.1
112	27			B—15	(19)	7.6×8.7	2.1	190	上・下・右縁	3.8・4.8・0.9 計 9.5
113	30	181		C—20	(19)	7.7×8.6	2.1	192	左下・下〃	1.3・3.7 計 5.0
114	32			B— 5	(19)	7.7×8.6	2.3	210	下・右　〃	2.8・2.2 計 5.0
115	33		416	C— 7	(19)	8.1×8.9	2.0	212	下・右下〃	2.8・1.8 計 3.8
116	35			G—50	(19)	8.0×8.9	2.3	216	下・右～上縁	5.2・4.3 計 9.5
117	37			D—13	(19)	7.4×8.0	1.9	163	左・下・右縁	5.8・0.7・3.5 計10
118	38		417	G—38	(19)	8.0×8.8	2.1	204	下・右　〃	1.1・4.3 計 5.4
119	41			D—16	(19)	7.4×8.4	2.0	164	左下・右〃	3.8・3.4 計 7.2
120	42			D—16	(16)	7.3×8.8	2.3	192	左・右　〃	5.1・6.7 計11.8
121	48		420	G—27	(19)	7.9×8.6	2.2	220	左下・右下縁	4.0・6.2 計10.2
122	51			A・B・C—15	(19)	7.7×8.4	2.1	180	左・下～右下縁	2.6・7.1 計 9.7
123	53			C—14	(19)	8.2×9.1	2.3	224	上・右上縁	6.2・2.7 計 9.9
124	58			B—14	(19)	7.4×8.7	2.2	201	左下・下縁	0.9・8.9 計 9.8
125	60		422	G—27	(19)	7.9×8.5	2.3	208	左・左下・右下　縁	2.8・3.8・4 計 9.8
126	61		427		表	7.7×9.0	2.2	186	左・左下・右下～上縁	3.2・0.6・0.7・10.5　計15
127	62		419		(19)	7.4×8.1	2.2	174	下・右　縁	4.1・3.8 計 7.9
128	63			G—31	(19)	7.5×8.0	2.0	178	左・下・右～上　縁	1.8・3.5・4.8・2.2 計12.3
129	71			D—13	(19)	5.5×6.0	1.6	73	左下～右下・右　縁	6.4・1.7 計 8.1
130	72		424		(19)	6.3×6.9	1.9	112	左下・右下・右　縁	4.2・2.6・2.8 計10.6
131	74			G—33	(19)	4.8×5.3	1.6	50	左上・左下～下　縁	3.0・5.1 計 8.1
132	79			G—47	(19)	7.3×8.1	2.1	170	左・下・右縁	2.1・4.3・5.3 計10.7
133	80			C—14	(19)	7.9×8.7	2.3	209	左・下　〃	0.8・1.4 計 5.2
134	81			C—15	(19)	7.4×8.2	2.2	181	下・右　縁	2.9・1.3 計 4.2
135	86	452		B—16	(19)	7.5×8.7	2.2	208	右下・右上縁	2.5・1.8 計 4.3
136	90			B—12	(19)	8.0×8.3	2.4	226	左・下・右縁	3.3・4.6・2 計 9.9
137	91	408		C—17	(19)	8.2×9.3	2.2	223	下・右　〃	6.8・2.8 計10.6
138	92	334	426	F—18	(19)	7.4×8.1	2.2	200	左・下～右下縁	2.8・9.4 計12.2
139	103				(19)	6.0×6.7	1.5	93	右下～右上縁	5.2　計 5.2
140	105			E—15	(19)	7.6×8.5	2.3	197	上・右上縁	2.8・1.5 計 4.3
141	106		423	B—15	(19)	7.5×8.7	2.2	203	左上・下～右　縁	1.4・11.6計13.0

第17表　　螺蓋利器諸訳（Ⅳ類３）

No.	遺物番号	図面番号	挿図番号	出土区	層	大きさ cm	厚味 cm	重量 g	欠損部分	欠損部分の長さ　cm
142	107		429	G—26	(19)	8.0×8.8	2.3	206	左～下・上～左上　縁	8.4・11.2計19.6
143	115			G—20	(19)	8.0×9.0	2.3	214	下・右縁	5.8・0.8 計 6.6
144	151	1077		F—11	19	7.8×8.7	2.3	207	左・右下縁	2.8・3.8 計 6.6
145	159			一　般	(19)	8.0×9.0	2.4	238	下・右　縁	4.7・1.0 計 5.7
146	165			F—11	19	7.8×8.1	2.1	220	左・右　縁	4.5・3.2 計 5.7
147	172			E— 9	19	7.3×8.5	2.0	166	左下・右〃	5.4・2.5 計 7.9
148	175		418	E— 9	19	7.5×8.4	2.0	181	左下～右下・右　縁	9.5・3.1 計12.6
149	195	317		E—14	(19)	7.4×8.3	2.0	187	左・下・右縁	1.7・1.8・0.9・2.0 計 4.6
150	196		430	F—19	(19)	6.9×7.0	2.0	131	左下～右下縁	21.2　　計21.2
151	197	1317	428	K—24	(19)	7.3×8.0	2.1	168	左上～左・下～右　縁	4.5・11　計15.5
152	198	1037		F—12	19	7.4×8.4	2.2	180	左～下・右縁	9.7・2.4 計12.1
153	199	1086	425	E—12	19	8.2×8.8	1.9	200	左・下～右下　縁	3.5・7.8 計11.3

第18表　　螺蓋利器（Ⅴ類１）

No.	遺物番号	図面番号	挿図番号	出土区	層	大きさ cm	厚味 cm	重量 g	欠損部分	欠損部分の長さ　cm
154	3		434	G— 1	(19)	8.3×9 3	2.6	242	左～下～右縁	13.2
155	4		432	C—11	(19)	7.7×8.7	2.2	197	左～下～右縁	16.7
156	5		431	D—18	(19)	7.5×8.9	2.2	196	上・左・右下縁	1.6・2.2・13計16.8
157	31		436	C—11	(19)	8.3×9.2	2.3	234	左～下～右縁	16.2
158	54		442	G— 1	(19)	8.0×8.9	2.4	206	左～下～右縁	17.8
159	55		433	一　般	表	7.7×8.5	2.3	178	左～下　縁	12.5
160	73	433	441	B—17	(19)	7.7×8.7	2.2	200	左下～下〃	10.3
161	76			C—11	(19)	7.4×8.4	2.1	177	左下～下～右縁	13.2
162	84	151	444	G—22	(19)	8.3×9.5	2.3	250	左～下～右下縁	13.8
163	89	321		D—18	(19)	7.3×8.2	2.2	178	左下～下～右縁	11.3
164	166			F—12	(19)	6.2×7.1	1.9	119	左～下～右下縁	9.2
165	169	1049		F—12	(19)	7.5×8.2	2.2	184	左～下～右下縁	10.6
166	180		440	E— 9	19	7.4×8.3	2.2	186	左～下～右縁	13.7
167	181		435	E— 9	19	7.3×8.1	2.2	172	左～下～右縁	14.0
168	182	1257	443	K—23	19	7.9×9.1	2.3	224	左～下～右縁	16.4
169	183		445	J—24	(19)	6.5×9.3	2.4	225	左～下～右縁	12.8
170	184			G—16	(19)	8.4×9.0	2.7	252	左下～下～右縁	10.8
171	185			E—15	(19)	7.3×8.2	2.0	169	左下～下～右下縁	11.2
172	186			E—11	(19)	7.6×8.3	2.0	180	下・右縁	7.8・1.7 計 9.5

第18表　螺蓋利器諸訳（Ⅴ類２）

No.	遺物番号	図面番号	挿図番号	出土区	層	大きさ cm	厚味 cm	重量 g	欠損部分	欠損部分の長さ　cm
173	187	1324		K—24	19	7.3×8.9	2.4	228	左～下～右縁	13.8
174	188	1241		K—23	19	7.1×8.5	2.0	172	左～下～右縁	13.2
175	189	1170		J—23	(19)	5.5×6.0	1.5	74	左～下～右縁	11.8
176	190	1202	438	J—24	(19)	8.6×9.4	2.4	259	左下～下～右縁	15.2
177	191	1085		E—12	19	7.4×8.4	2.2	191	左～下～右上縁	19.4
178	192	1098		F—10	(19)	8.1×8.9	2.1	214	左下～下～右下縁	10.2
179	193	99	439	J—25	13	7.8×8.9	2.2	194	左～下～右～上縁	23.8
180	194	1200	437	J—24	(19)	8.5×9.0	2.3	245	左下～下～右縁	17.5

貝札（446）

この貝製品は上辺 1.3cm，下辺 2.3cm，高さ１cmの台形に近い形をしている。中央部には台形の細刻を行ないその中に三角文を彫り込んでいる文様を施している。貝殻はイモガイの可能性が高い。

貝殻品

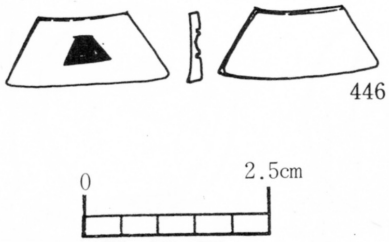
概報では貝小玉を６点上げた。これらは現在の海岸で簡単に採集されるため，今回は貝殻品として簡単に報告する。イモガイ類のもので 0.5cm～1.5cmの大きさである。

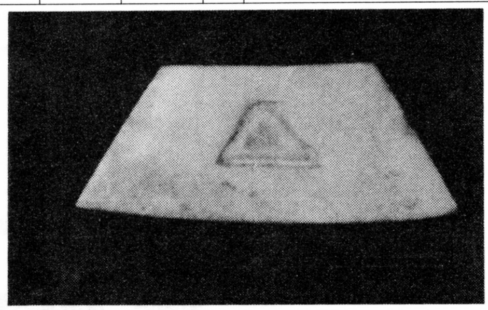
４）鉄製品（447～451）

鉄製品は10点出土した。鉄製品の中には完形品が２点出土している。447はヘラ状鉄製品で長さ10.0cm，幅５cm，厚さ 0.7cmのものである。柄の取り付け部が長さ 1.8cm，幅 1.5cmであり，繊維痕が残っている。先端部は90度の尖具合で厚さは薄くなっている。器種としては奄美地方に多いヘラが考えられるが，今後の調査で類例の検討が必要である。448はつりばりである。長さ 2.8cm，厚味は 0.4cmで，かえりは付いていない。他の製品は形態不明である。

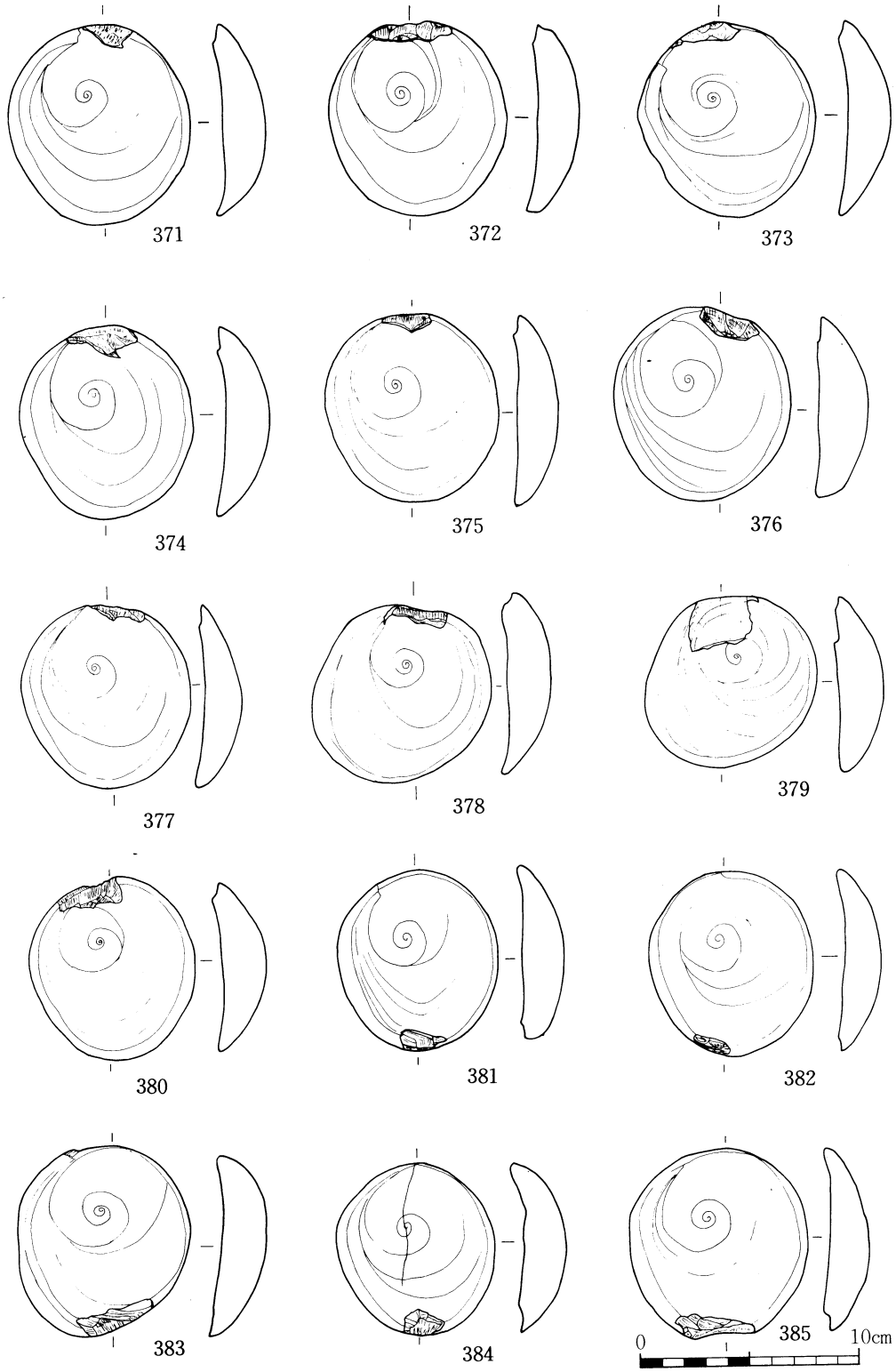
第19表　鉄製品諸訳

番号	挿図番号	出土区	層	特　　徴	番号	挿図番号	出土区	層	特　　徴
447	447	F—20	19	ヘラ状鉄器	450	450	K—23	19	L状に屈接・断面が方形
448	448	C—15	(19)	つりばり	451	451	G— 9	13	断面が円形
449	449	B—13	(19)	扁平状					

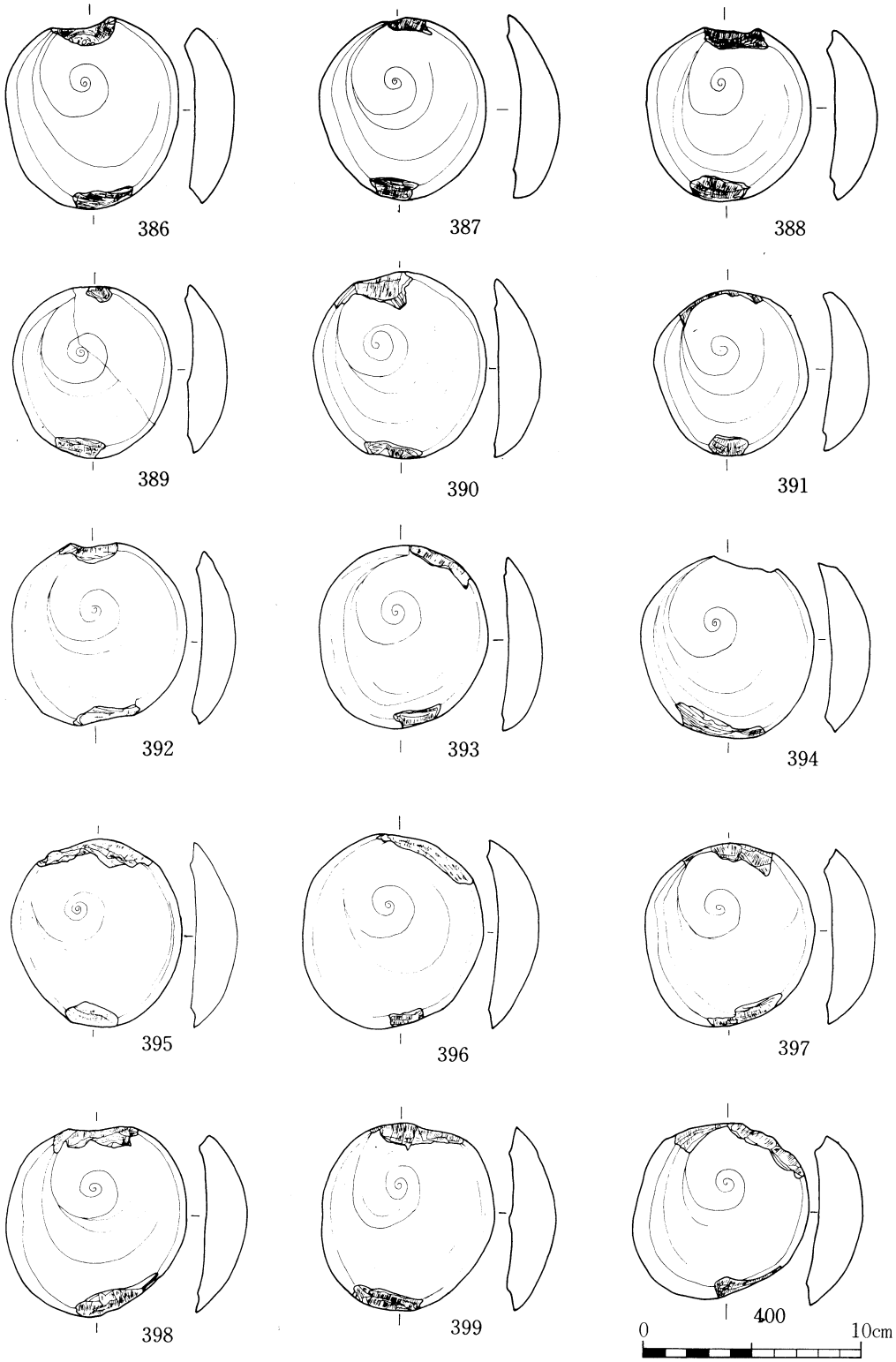




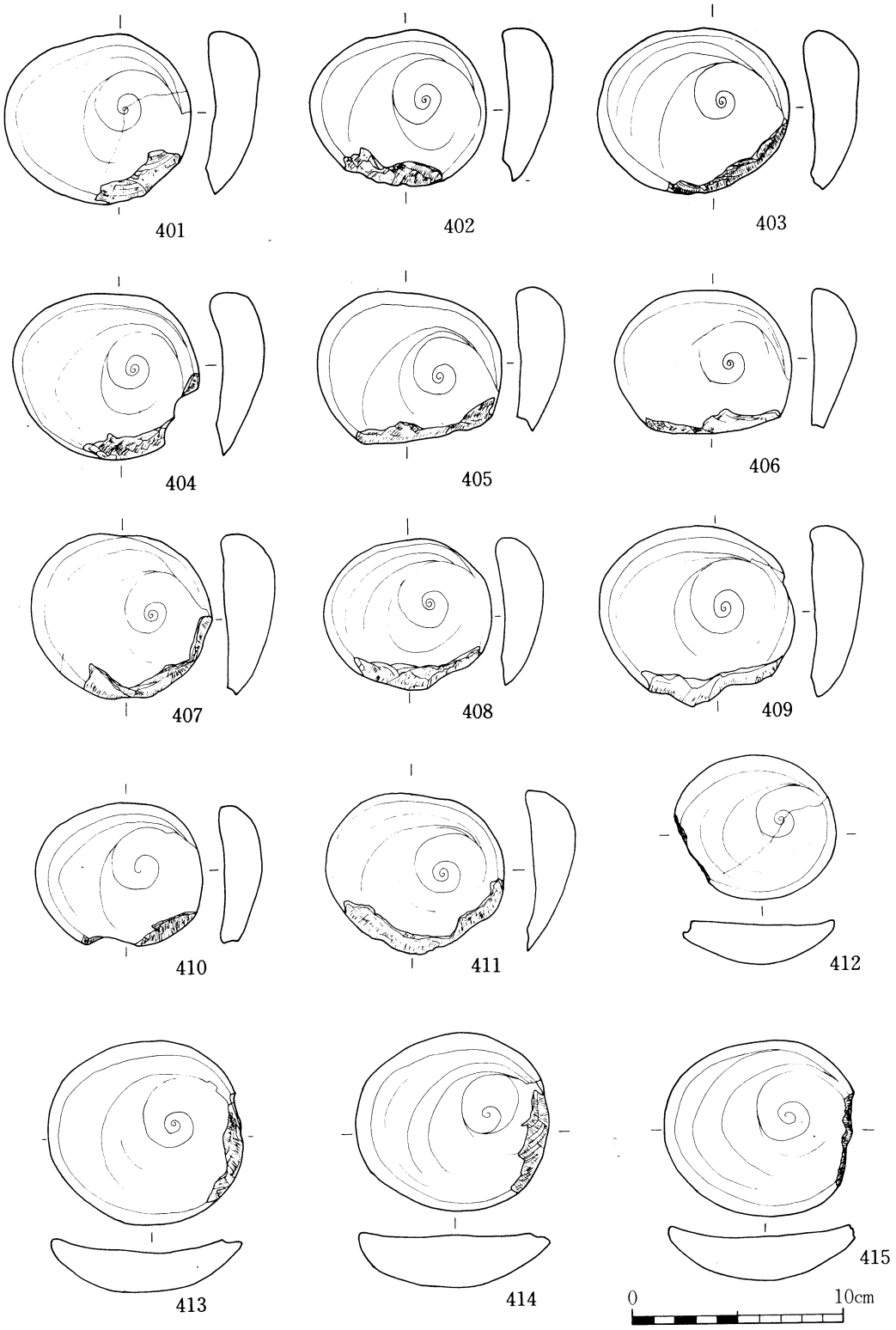
第57図　長浜金久第Ⅰ遺跡貝製品実測図(19)



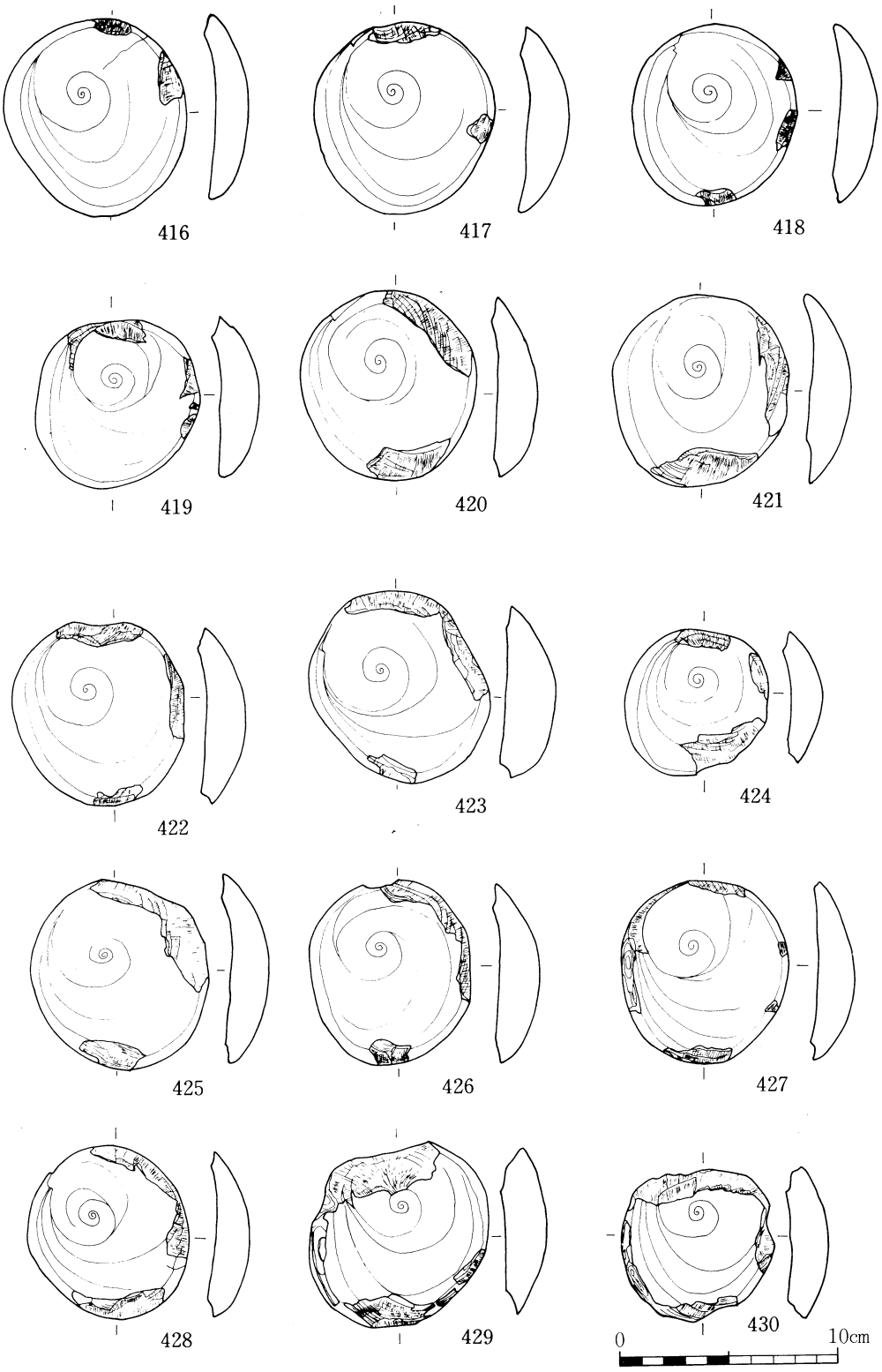
第58図　長浜金久第Ⅰ遺跡の貝器(1)　　Ⅰ類



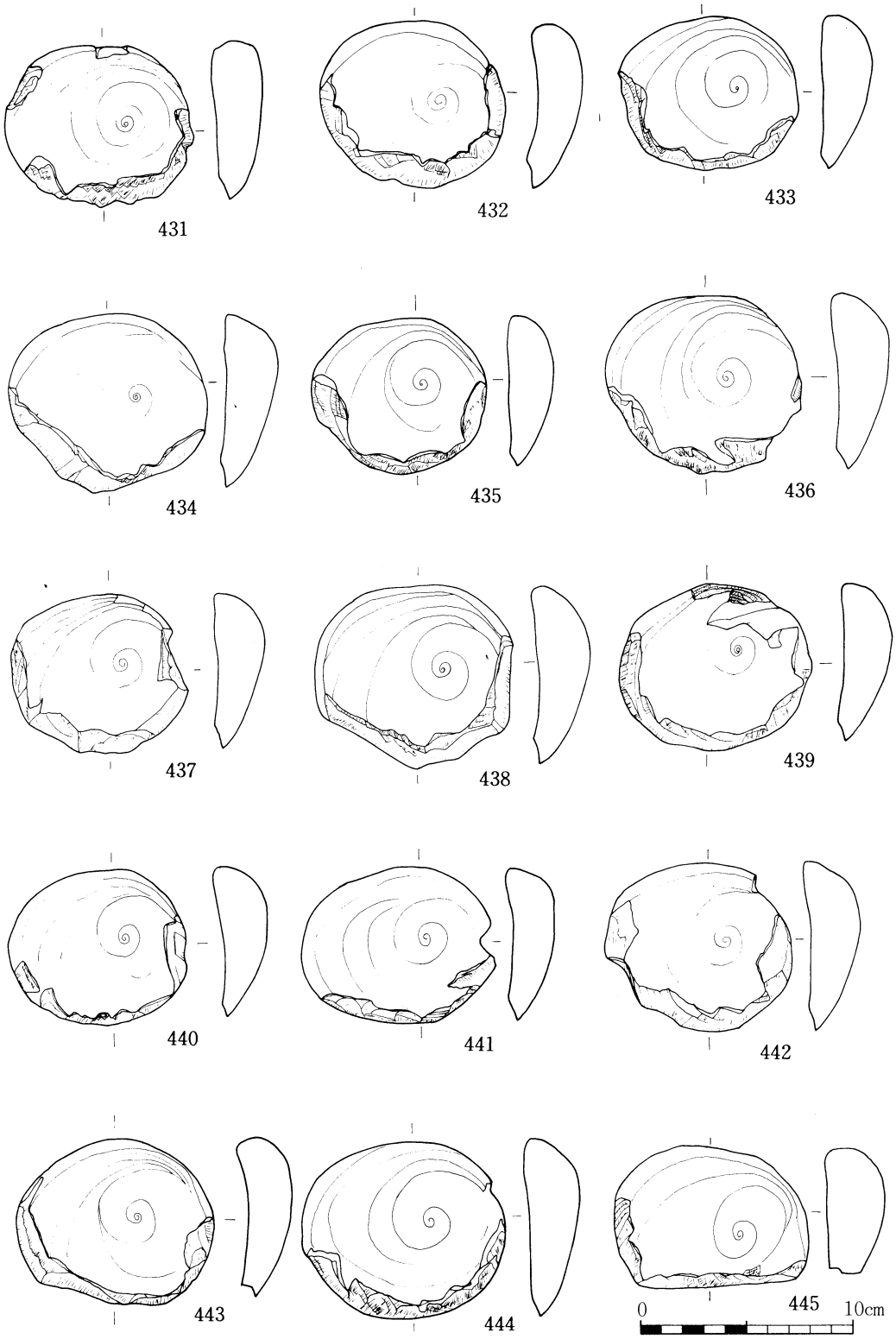
第59図　長浜金久第Ⅰ遺跡の貝器(2)　Ⅱ類



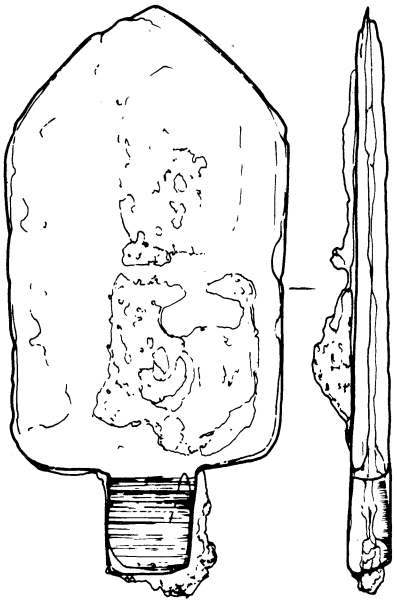
第60図　長浜金久第Ⅰ遺跡の貝器(3)　　Ⅲ類

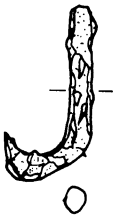


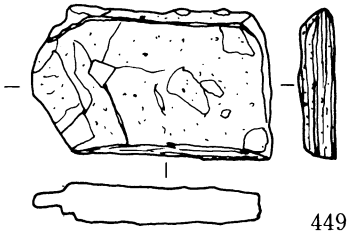
第61図　長浜金久第Ⅰ遺跡の貝器(4)　Ⅳ類

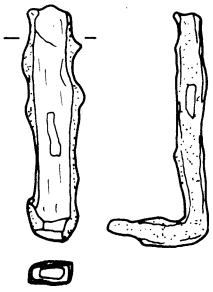


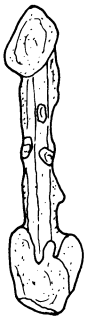
第62図　長浜金久第Ⅰ遺跡の貝器(5)　　Ⅴ類

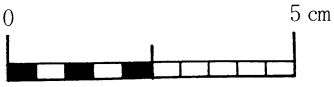












第63図　長浜金久第Ⅰ遺跡の鉄製品実測図

第２節　長浜金久第Ⅱ遺跡の概要

１．遺跡の概要

長浜金久第Ⅱ遺跡は第Ⅰ遺跡の海岸側に対して山手側の貝塚遺跡である。第Ⅱ遺跡は第１次調査で発見された第Ⅱ地点の遺跡である。

第１次調査では９ヶ所のトレンチを入れ，集石遺構と人骨及び包含層を確認した。第２次調査で土層断面を検討した結果，人骨は砂丘形成の状況から，本遺跡とは異なる時期のものと判断できた。（人骨は新砂丘内に検出）

第２次調査の調査面積は約 160㎡で遺跡を約４ｍ幅で東西に縦断する形になった。第３次調査では住居跡の部分を拡張し住居跡全体を確認した。西側は山手で住居跡，炉跡，土壙が検出され東側の海岸側に貝塚が形成されている。この遺跡は旧砂丘上にできたと考えられ遺跡の生活面が海岸側では２～３ｍ急傾斜し，旧海岸線と思われるところは表面が摩耗した貝殻やサンゴが多く出土した。この旧砂丘は幅が約30ｍで山手に向って薄くなっている。また住居跡や土壙のあるところは若干凹地になっている。（第14図参照）

包含層の標高は約 8.8ｍあり，厚さは約30～20cm，奥行は約８ｍ位で，部分的には貝の種類が異なるがマガキガイ，アマオブネ，スイジガイ，クモガイ等がみられ，とくにイソハマグリは９ヶ所貝殻集中箇所がみられ大きなものは３ｍにもおよぶ箇所もあった。また，貝塚の中に炭や灰が５ヶ所で認められ，50～70cmの円形状を呈していた。（第68図）

２．遺構

住居跡（第69図）

住居跡はＡ－５区で検出した。表面からの深さは約 1.5ｍで，旧砂丘を掘り込んであり，住居跡の規模は2.3×２ｍの角丸方形で深さ約20～30cmの竪穴住居跡で東側の壁と西側の壁には石が組み置かれている。この石は砂丘であるため壁の崩壊を防ぐためと考えられる。遺物は長浜金久タイプ（嘉徳Ib式も含む）の土器や骨角器が出土している。

炉跡（第69図）

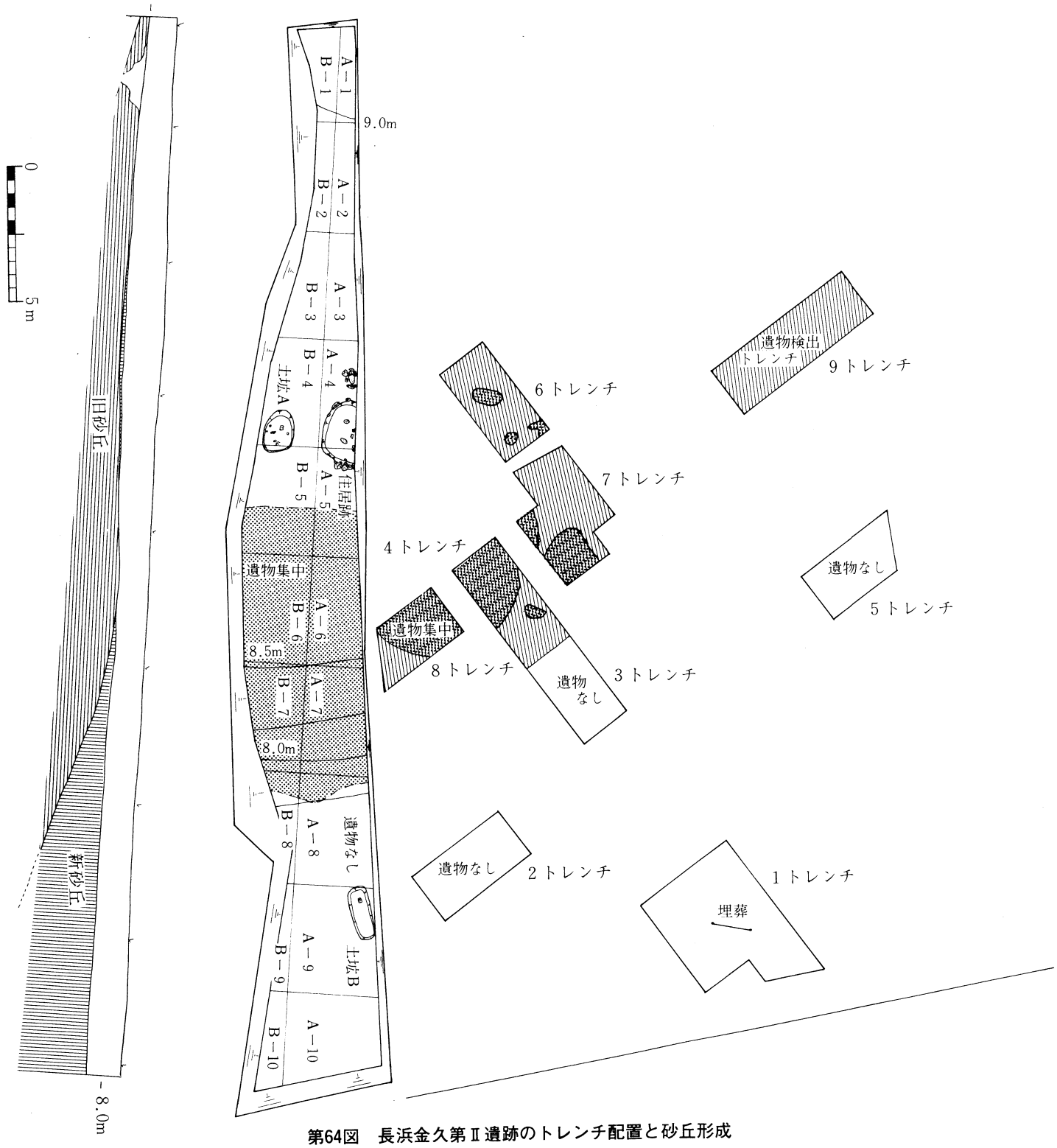
Ａ－４区で検出した。住居跡の西側で表面から深さ約 1.5ｍ下で発見した。20～30cmの石を敷いたもので中央は若干くぼんでいる。中には灰・炭が多くみられ，その上に40ｍ位の平たい石をかぶせた状態（破棄した石）で検出した。規模は直径80ｍの円形状である。

土壙Ａ・Ｂ（第69・70図）

Ａは径 1.4ｍ，深さ約18cmの円形で若干ゆがんだ形をしている。中には石や貝製品の壊われたもの，貝輪製作時に出る貝殻の破片や貝殻等が出土した。検出位置はＢ－５区で住居跡の南側にあたる。性格は不明である。ＢはＡ－８区に検出したもので縦約 2.1ｍ，横約 0.6ｍ，深さ約30cmで長方形をした土壙である。表面からの深さは約１ｍ位で新砂丘内に検出した。土壙の中央は黒褐色を呈する。土壙内に遺物はなく，土壙上面に石が検出した。性格は不明である。

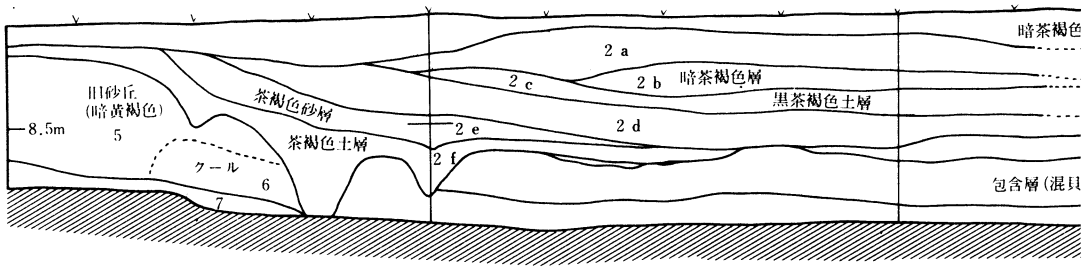
４）集石・遺構（第66図）

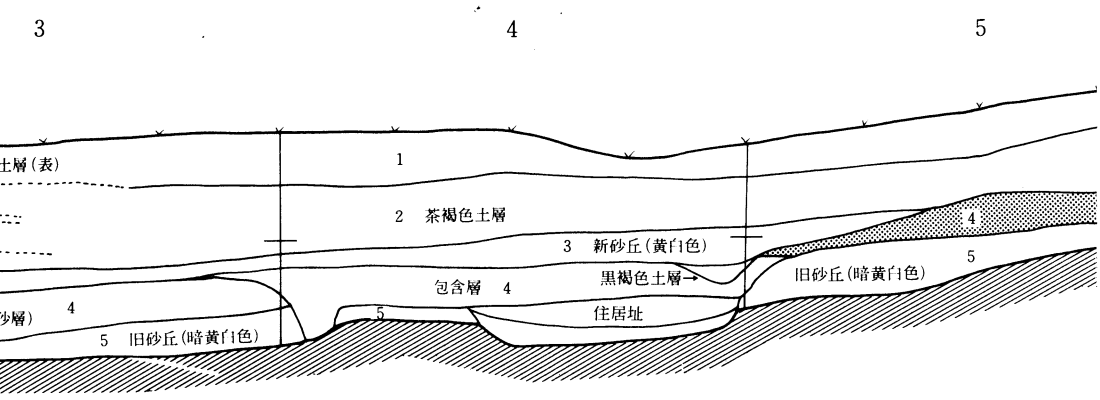
第８トレンチより第Ⅲ層に検出した。20cmの位の石を積み上げたもので，径は60cmであった。



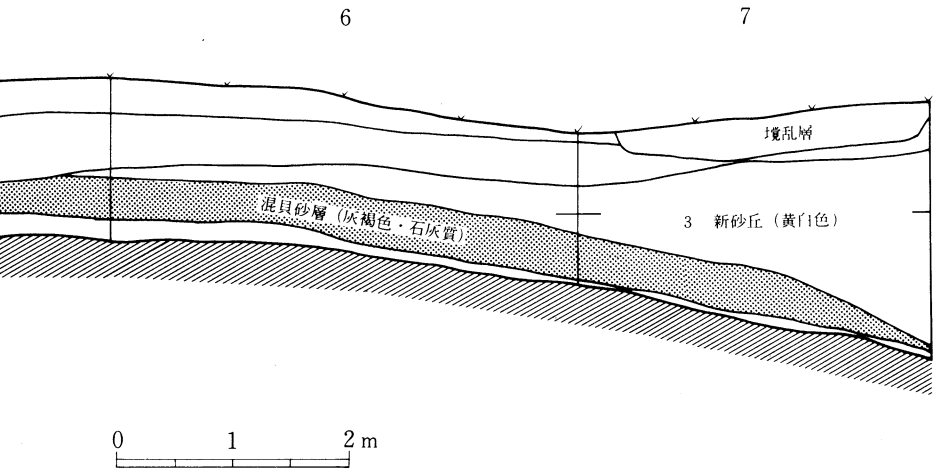
第64図　長浜金久第Ⅱ遺跡のトレンチ配置と砂丘形成

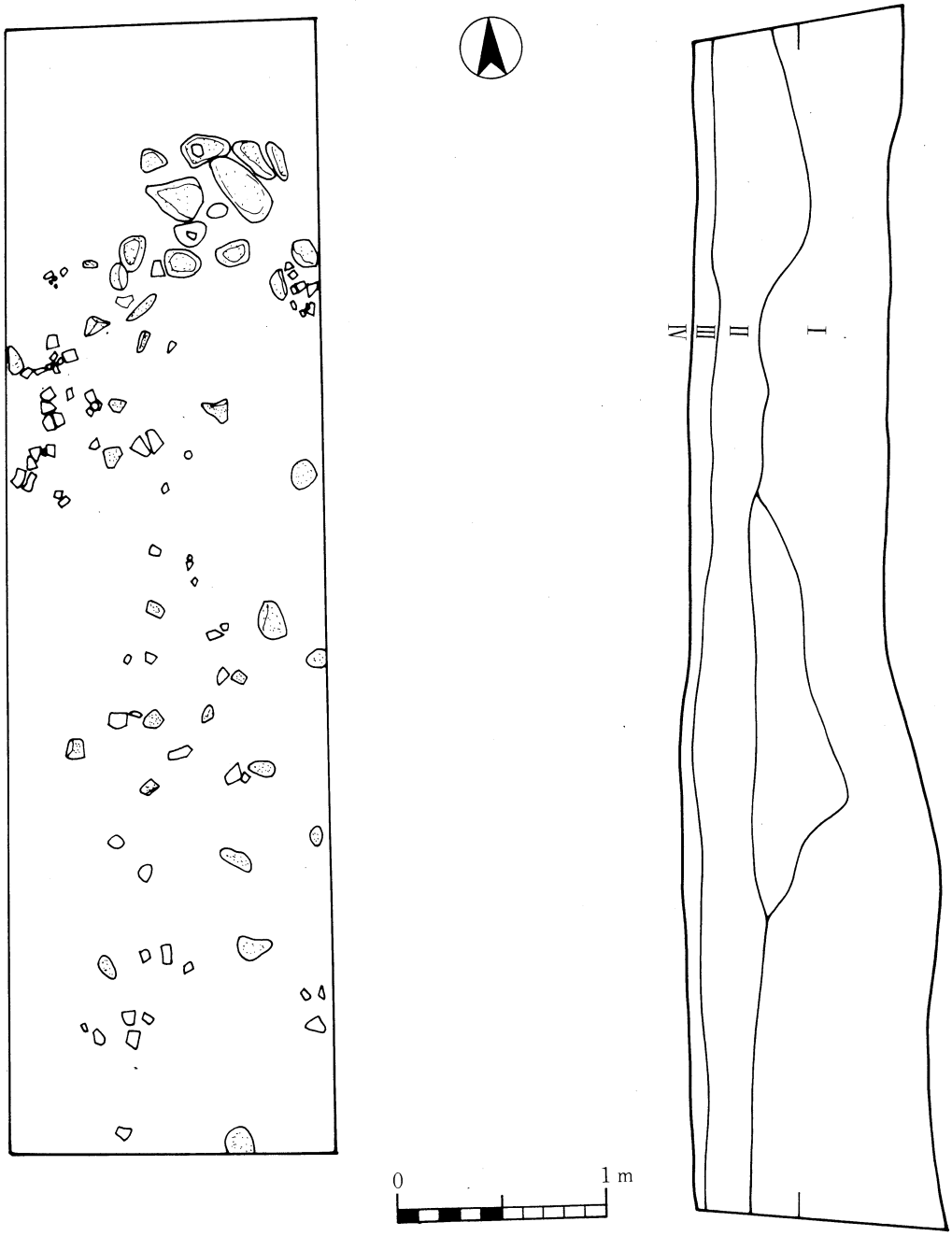
1　　2


暗茶褐色
2 a
2 c
2 b
暗茶褐色層
黒茶褐色土層
旧砂丘
(暗黄褐色)
5
8.5m
茶褐色砂層
茶褐色土層
2 e
2 d
2 f
クール
6
7
包含層(混貝

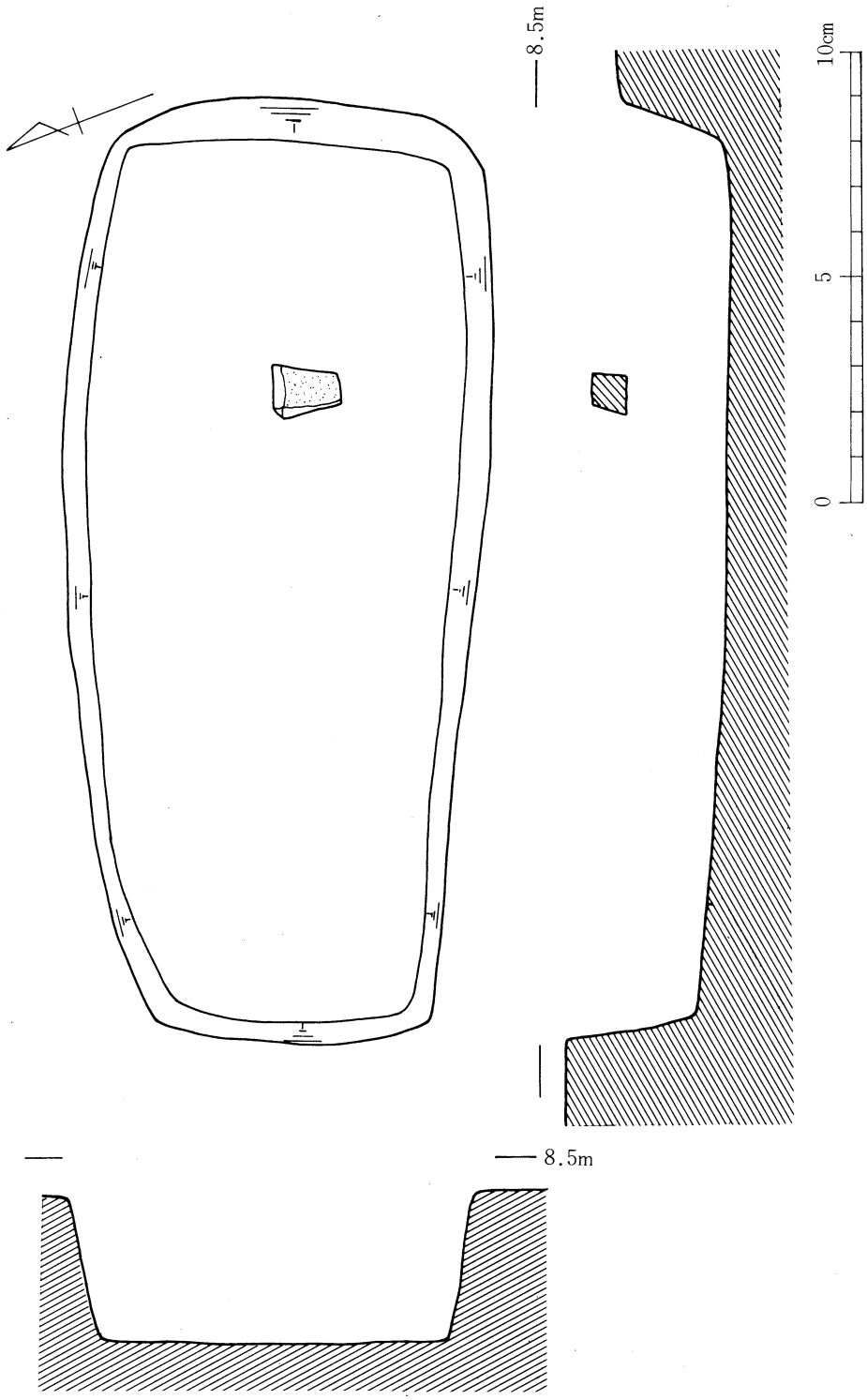


第65図　長浜金久第Ⅱ遺跡の土層図

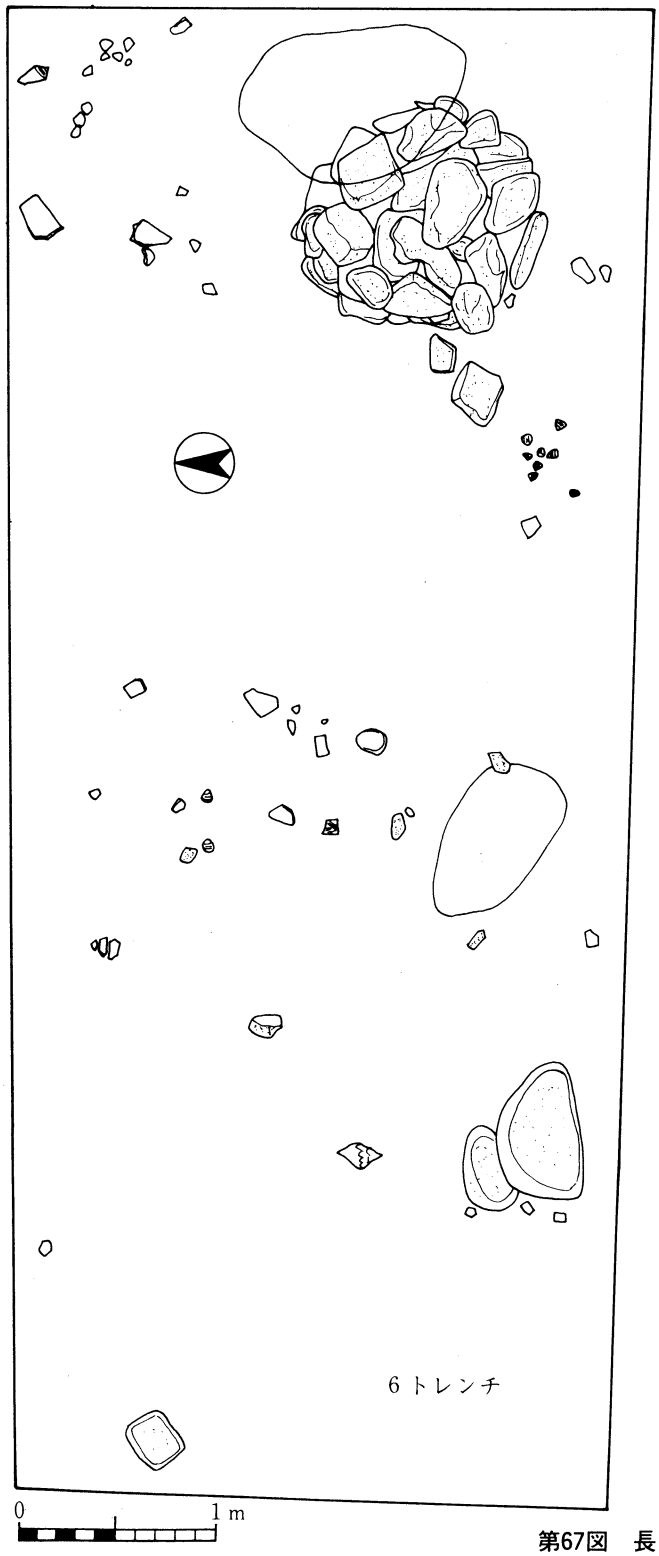

6
7
攪乱層
混貝砂層（灰褐色・石灰質）
3　新砂丘（黄白色）
0
1
2 m

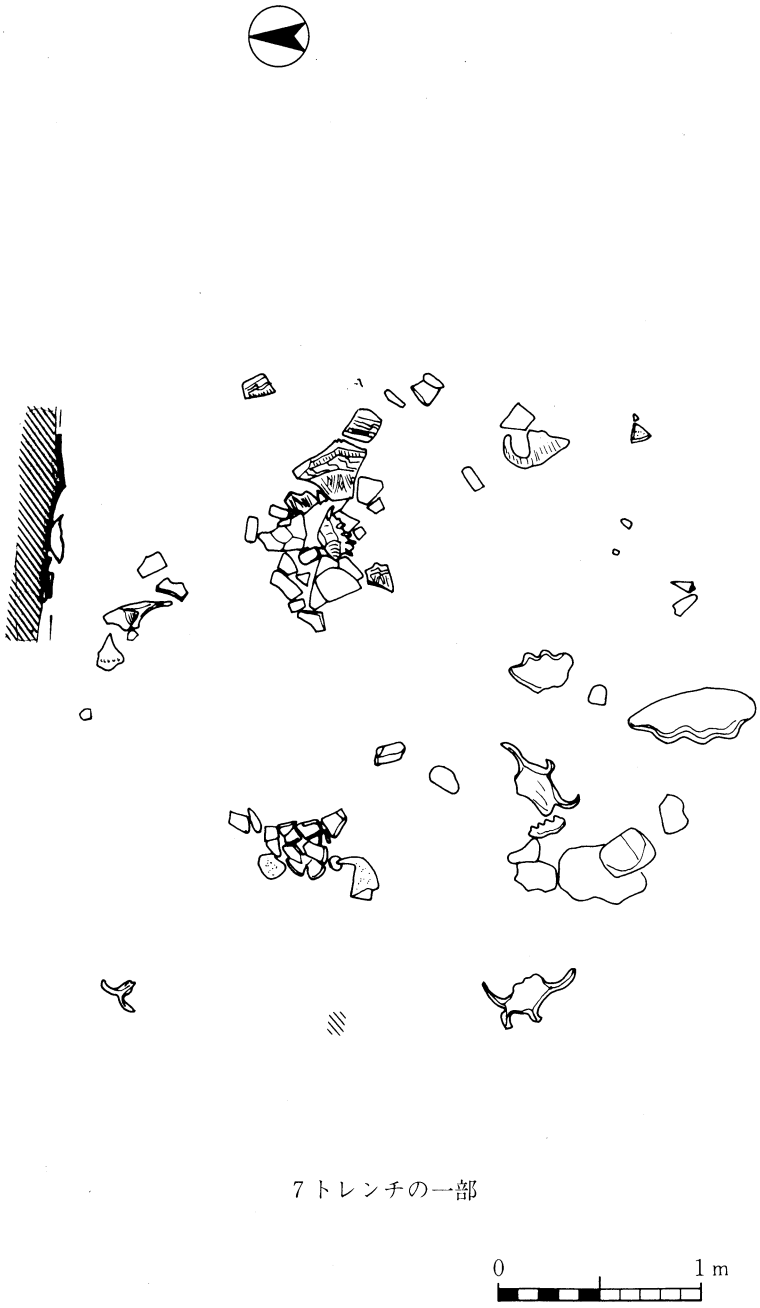


第66図　長浜金久第Ⅱ遺跡の遺構・遺物検出状況図(1)　9トレンチ

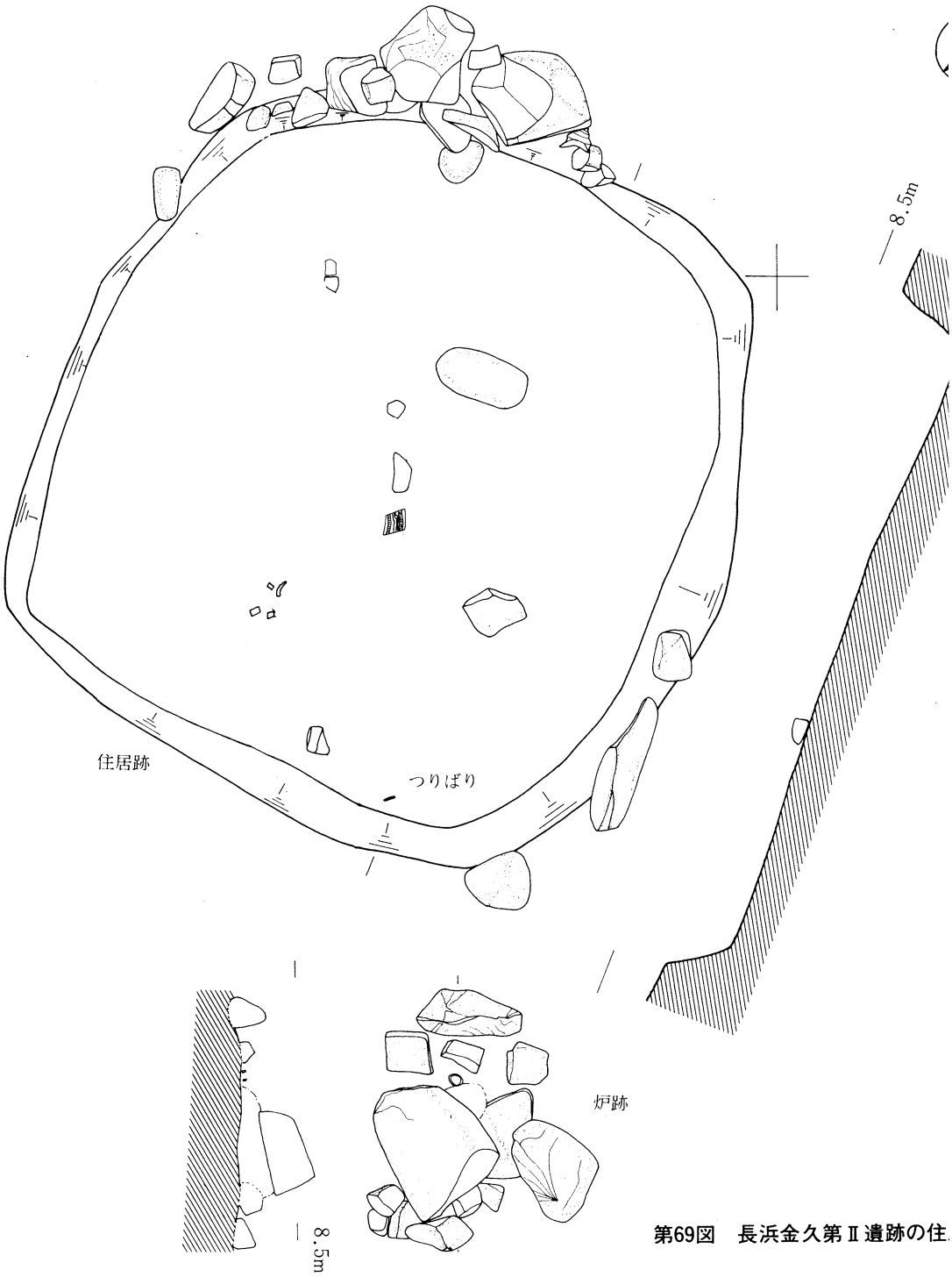


第70図　長浜金久第Ⅱ遺跡土坑Ｂ図（新砂丘）

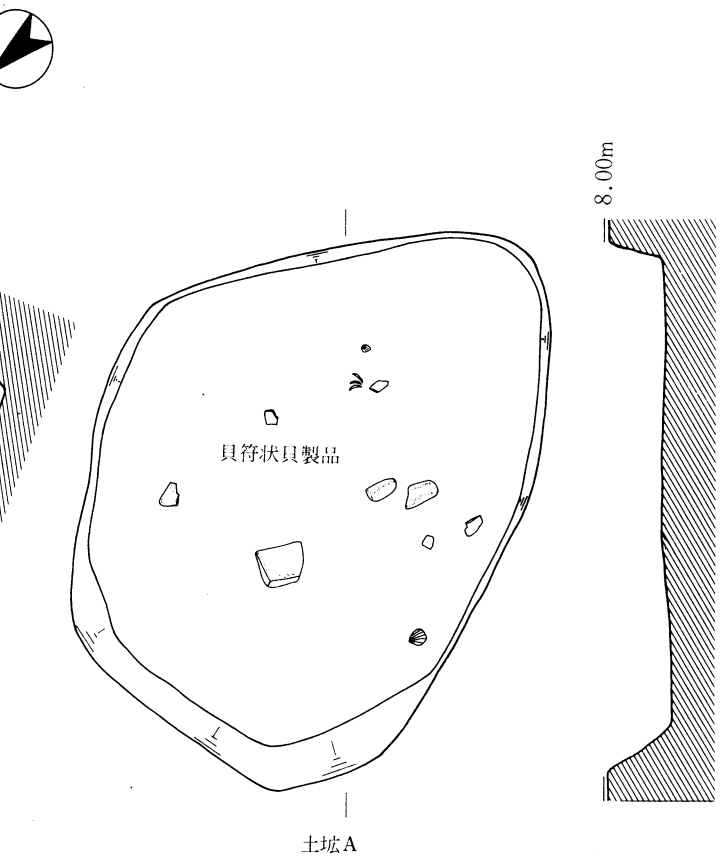


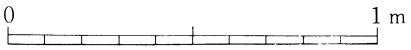


第67図　長浜金久第Ⅱ遺跡の遺構・遺物検出状況図(2)



第69図　長浜金久第Ⅱ遺跡の住





居跡・炉跡・土坑A検出状況図

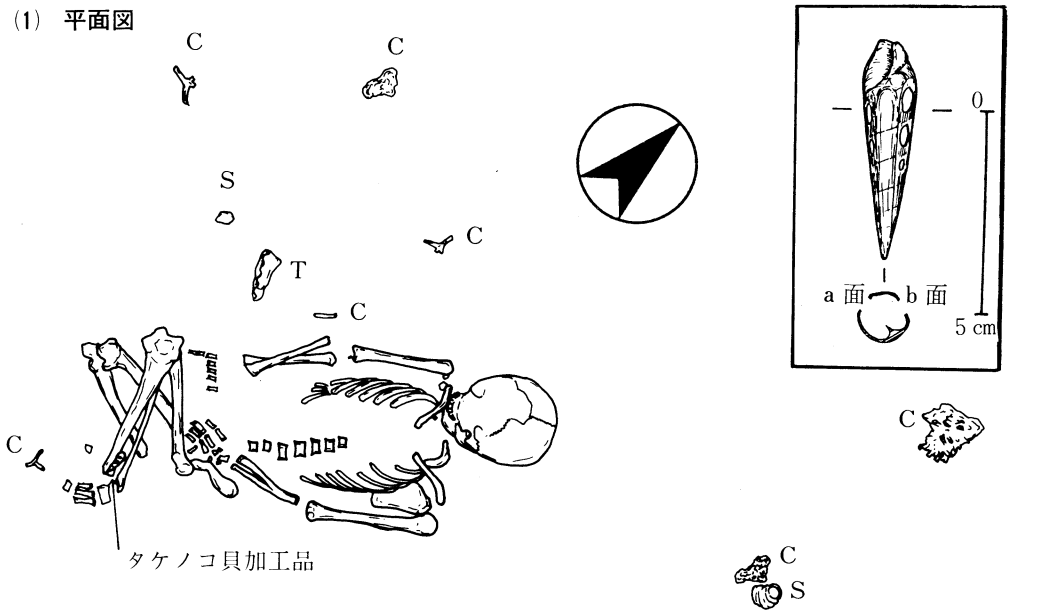
5）埋　葬（第54図，第61図）

1トレンチの南側壁面に深さ約 160cmの砂層中より頭蓋が発見されたのでトレンチを拡張して人骨全体の検出を行った。人骨の主軸方位はN—44°—E。脚は膝を強く折り曲げ，下腿を立てた状態にし，右膝の位置は左膝より若干高く，両膝は中心線より右側寄りに位置する。両足首は左側にそろえてある。椎骨はほぼ水平に近い。頭蓋はわずかに右側に傾斜しているが全体的にほぼ仰臥となる。腕は左右とも伸ばし，骨盤あたりに置く，埋葬形態は仰臥屈葬（下肢）となる。

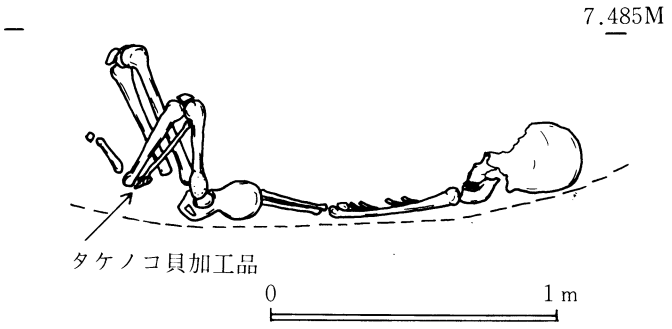
タケノコ貝製加工品（第61図）人骨の左側踝の下位から出土した。全長 5.4cm。「a」，「b」面をていねいに研磨し水平な面を作り，3対の穴6個が穿かれている。貝の径が大きい部分は必然的に穴も大きくなり，上位から下位へと穴も小さい。

この層より出土した遺物は外耳土器と丸底の小形土器が出土している。

(1)　**平面図**



(2)断面図



C　：サンゴ
S.H：イカのコウラ
T　：シャコ貝
S　：貝

第71図　長浜金久第Ⅱ遺跡埋葬状況図

3．人工遺物

1）土器

本遺跡で出土した土器を文様・器形・形態に分類した。452 ～ 456をⅠ類，457 ～ 465をⅡ類a，466 ～ 516をⅡ類b，517 ～ 521をⅡ類c，522 ～ 535をⅡ類d，536 ～ 543をⅡ類e，544 ～ 547をⅢ類，548をⅣ類，549 ～ 562をⅤ類，563 ～ 569をⅥ類，570 ～ 571をⅧ類，572・573をⅧ類，574をⅨ類，575をⅩ類，512をⅪ類とした。そして，底部は 576～607，土製円盤は 608～611 に示した。なお鹿児島県埋蔵文化財報告書31で分類したのは23・24・27がⅠ類にあたり前回報告書のⅠ類とⅡ類の一部になっている。Ⅱ類のaは25・26でⅡ類のbは28～36，Ⅱ類のcは42で前回と同じである。Ⅱ類dは43・52で前回のd・eを同じであり，Ⅱ類eは47・48・52で前回の分類と同じでⅡ類eと全体を変更した。なおⅡ類～Ⅹ類もそれぞれ変更した。

第Ⅰ類（452～456）

この土器は口縁部が直行ないし，やや外反する器形で文様は押し引きと，雷文にみられる折れ線と折れ線で区画しその中を押し引きする類である。452 はやや外反する口縁部で口唇部は平坦面をなしている。文線と上から6条は平行押し引き文を横走させて，8条目は折れ線に沿って押し引き文を折れ線状に施こしている。口唇部にも押し引き文を1条施している。453 はやや外反する口縁部で口唇部は平坦面をなし，器面には三角形の押し引き文と折れ線区画文の組み合せの文様を施している。454 は直行する口縁部で口唇部に突起を付けている。文様の最上段は横走の三角形押し引き文を付け，その下は折れ線区画文を横位に並べその区画文にそって折れ線状に押し引き文を施している。455 は直行する口縁部で押し引き文と折れ線で文様をつけ，口唇部にも押し引き文を付けている。456 は口縁部近くの土器で折れ線と押し引き文を施している。

第20表　第Ⅰ類土器諸訳

番号	出土区	層位	色調	胎土	焼成	番号	出土区	層位	色調	胎土	焼成
452	B－6 B－7	4	茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良	454	A－6	4	黒茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良
453	A－6	4	茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良	455	A－6	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良
454	B－6	4	茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良						

第Ⅱ類a（457～466）

この土器類は折れ線区画文と縦長の施文具による刺突（細長刺突連線文）の組み合せで文様を施している。また胴部には鋸歯文を数条で重ね描く（重鋸歯文）文様を付けている。457 は直行する口縁部で最上段には縦長刺突文を横走させ，その下には折れ線区画文を横位に連続させている。胴部近くには鋸歯文の一部がみられる。458 は口縁近くで下に細長刺突連続文を横走させ，その間は折れ線区画文の中に縦長刺突連続文を施している。459 は直行する口縁部で上位は沈線で挟む細長刺突連続文を付け，下位は折れ線で区画細長刺突連続文を施している。胴部の一部には鋸歯文がみられる。460 は口縁下部から胴部にかけての土器である。口縁部は

細長刺突連続文を沈線で挟み横走させ，下位は折れ線区画にそって刺突している。胴部は5条の重鋸歯文を施こしている。461も460と同じ文様帯を付けている。462は底部が欠けている土器であるが器形が良くわかり，高さ18.5cmの土器である。口縁部は口径16.8cmでやや外反する山形口縁で見込みは四角形になっている。山形部の口唇部には2本の刻みを入れ，3つの凸部をつくっている。口縁部の文様は上位に沈線で挟む細長刺突連続文を横走させ，下位は折れ線区画による構成をつくり，区画内も区画に沿って細長刺突連続文を施している。この文様帯は山形口縁に沿って付けている。胴部はややふくらみのある器形で，　文様は3条の重鋸歯文帯を廻らし，その鋸歯の間にも3条の鋸歯を上下につけ，あたかも重鋸歯文を2重に施した様にみせた構成をしている。なおこの文様帯の上辺に1本の沈線を山形口縁に沿って付けている。底部は平底しか出土しておらず，平底の器形と思われる。器面調整はヘラ調整によるハケ目文が上下にみられる。463は直行する口縁部で口唇部はややふくらみがある。文様は折れ線区画でなく，長方形の区画を施こし，中に区画に沿った細長い刺突連続文を縦位に施こしている。胴部は 462と同じ重鋸歯文を付けている。464は口縁部の一部で縦位と横位の細長い刺突連続文を施こしている。465は口縁部の一部で折れ線区画内に沿って細長刺突文を連続させている。466は口径27cmの若干口縁部が外反し，口唇部には4箇所に台形突起を付け胴部はやや丸味をもつ器形で高さ26cmの完形に近い土器である。文様は口縁部に2段の折れ線区画を付け，その中に長方形の刺突連続文を施している。胴部は3条の沈線による重鋸歯文を廻らし，鋸歯と鋸歯の間の下位に2条の鋸歯を施している。器面調整は篦調整によるハケ目文が胴上部に横走し，胴下部は縦走している。底部の底は接合しなかったが平底しか出土していないので平底の底部と思われる。

第21表　　第Ⅱ類a土器諸訳

番号	出土区	層位	色調	胎土	焼成	番号	出土区	層位	色調	胎土	焼成
457	一般		暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良	462	A・B-6.7	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良
458	B－6	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良	463	一般		暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良
459	A－7	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良	464	一般		暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良
460	A－6	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良	465	B－6	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良
461	A－7	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良	466	A-6.7	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良

Ⅱ類b（467～516）

この土器類は口縁部に沈線で挟まれた細長刺突連続文を上下に施し，その間は折れ線区画を付けるグループで，胴部の文様は重鋸歯文を施すものが主体である。

467は口径25cmの外反する山形口縁をもち，頸部で若干締まり，胴部は丸味をもつ高さ25cmの土器である。見込は四角形で山形口縁は4ヶ所ある。山形口縁の口唇部は2ヶ所刻みを入れている。口縁部の文様は上下に沈線で挟んだ細長刺突連続文を付け，その間は折れ線区画を沈線で施している。その折れ線の横線は2本平行である。胴部は3本沈線による重鋸歯文を付け，鋸歯部の反対側にも3本組の鋸歯を施し，あたかも2つの重鋸歯文を組み合わせた様な文様構

成をしている。468 は山形口縁部の部分で，口唇部には 2 つの刻みを入れ，やや外反する土器である。山形口縁の口唇部には 2 つの刻みを入れ，文様は上下に細長刺突連続文を付け，間には折れ線区画文を沈線で山形状に施している。胴部の文様は 3 条の重鋸歯文を付け，鋸歯の上部間に鋸歯を入れている。469 は 468 と同じ構成をしているが，口唇部の刻みは浅く，上位は細長刺突連続文を沈線で挟んでいる。器形は 467 と同じと考えられる。470 は細長刺突連続文を沈線で挟み上位に 2 段施し，下位に折れ線区画文がみられる。器形は467と同じと考えられる。471 は山形口縁の口唇部の刻みは浅く，細長刺突連続文は押し引き状に施している。器形は，467 と同じで文様構成は 469 と同じである。472 は山形口縁部で器形は 467 と同じと思われる。文様構成も 469 と同じである。口唇部は平坦で幅が広い。473 は口縁部から胴部にかけての土器でやや外反する山形口縁の器形である。文様は山形に沿った形で付けられ，上・下に沈線で挟まれた細長刺突連続文を付け，その間を折れ線区画の沈線で施している。その折れ線の横線は三本平行になっている。なおこの土器は胴部に重鋸歯文が施されていない。474 は 467 と 文様構成は同じであるが器形は口縁部の外反が少ない。475 は器形が 467 と同じ器形で口縁部が外反し，文様は 470 と同じで口縁部の細長刺突連続文は 2 段あり，刺突具は半截竹管状の施文具である。なお口唇部の刻みは 1 つで浅い。476 は器形は直行する口縁でコーナーの部分である。文様は 467 と同じ構成で上・下の細長刺突連続文を沈線で挟みその間には折れ線区画を施している。その折れ線の区画は 2 本平行になっている。胴部は重鋸歯文を施している。477 は薄手の土器で山形口縁をもつ外向する器形である。文様は 476 と同じ口縁の文様であり，胴部の文様はない。なお文様は山形口縁に沿って付けてある。478 は直行する口縁部で上位に細長刺突連続文を沈線で挟み，下位は折れ線状に細長刺突連続文を施し，中位は折れ線区画を横位に施している。479 は直行する山形口縁で文様は上位に細長刺突連続文を下位に沈線で挟んだ細長刺突連続文を付け、中部に 2 段の折れ線区画文を横位に施している。胴部には重鋸歯文の一部がみられる。480 は直行する口縁部で平坦な口唇部である。上・下位に細長刺突連続文を沈線で挟み施し，中位に折れ線区画を横位に施している。481 は直行する山形口縁部で上位に細長刺突連続文を付け，その下に 2 段の折れ線区画文を施している。482 は直行する山形口縁で細長刺突連続文を交互に施している。483 は直行する山形口縁部から胴部にかけての土器である。口唇部は平坦で幅が広い。文様は口縁部に沈線で挟まれた細長刺突連続文を上・中・下と三段に付け，その間に長さの長い折れ線区画を施している。胴部は 476 と同じ重鋸歯文を施している。484 はやや外反する山形口縁の土器で口縁部には上位に細長刺突連続文を施し，中部には 2 段の折れ線区画文を横位に，下位に沈線で挟まれた細長刺突連続文を付けている。胴部は重鋸歯文が施されている。485 は直行する口縁部で上位に細長刺突連続文を付け，その下に折れ線区画文がみられる土器である。486 は細長刺突連続文と折れ線区画文を施した土器である。487 は直行する口縁部をもち沈線で挟んだ弧状細長刺突連続文と折れ線区画を施した土器で，細長刺突連続文は若干曲形をしている。488 は細長刺突連続文と折れ線区画文と重鋸歯文があるが折れ線区画文と重鋸歯文とは接し，492 と同じ構成と思われる。489 は 2 段の折れ

線区画文の下に沈線で挟んだ細長刺突連続文を施し，その下に重鋸歯文がみられる。490 は直口する口縁をもち，口唇部には台形突起を付けた土器で，口縁部には沈線挟みの弧状細長刺突連続文を上・下位に，中位に折れ線区画文を施している。胴部の文様は箱形のＸ文をつけている。491 は弧状細長刺突連続文を折れ線区画文の下位に重鋸歯文がみられる。492 は山形口縁で口唇部に小さな突起をつけたやや内行する口縁部である。文様は口縁部に折れ線区画を上・下位に，中位に半截竹管状の連続刺突文を施している。胴部は重鋸歯文を施している。493 は山形口縁をもつ土器でやや外反する口縁部である。文様は沈線挟みの刺突連続文を上・中・下位にその間に折れ線区画文を施している。この文様は山形口縁に沿って付けている。胴部は重鋸歯文を施している。なお山形部は縦に稜線部がみられ，見込は四角形と思われる。494 は口縁に折れ線区画文，その下に刺突連続文をつけ，胴部に重鋸歯文を施している。495 は直口する口縁部で，刺突連続文と折れ線区画の組み合せの文様を施している。496 は外反する口縁で細長刺突連続文と折れ線区画がみられる。497 は直行する口縁部で細長刺突連続文と２段の折れ線区画文がみられる。498 は直行する口縁部で沈線挟みの細長刺突連続文と，折れ線区画文の組み合わせである。円形の補修孔もある。499 は小形の土器で直行する口縁で胴部は中側に曲っている。文様は口縁部に刺突連続文と折れ線区画の組み合わせを行ない，胴部は重鋸歯文を施している。500 は外反する口縁部で弧状の細長刺突連続文と折れ線区画文の組み合わせで，折れ線の横線は２本平行である。501・502 は 503 と同じ文様であるが外反が少ない。503 は口縁部が欠けているが 500～502 と同じ文様・器形と思われる。505 は直行する口縁部で細長刺突連続文と折れ線区画の組み合わせで，折れ線の横線は３本平行線になっている。 424 は住居址から出土した土器で直行する口縁である。上位２段に半截竹管状の刺突連読文がみられ，その下位に横線が２本平行になる折れ線区画を施し，その下に半截竹管状の刺突連読文を施し，その下にも折れ線区画の一部がみられる。506 は外反する山形口縁で口唇部に小さな突起が山形を挟んで２ヶ所に付けてある。文様は上位に２列の刺突連続文を施し，下位に折れ線区画の一部がみられる。507・508は直行する口縁部で細長刺突連続文と，折れ線で文様を構成している胴部には重鋸歯文がみられる。509 は刺突連続文と折れ線区画文の一部がみられる。口縁上位では外反する。510 は直行する口縁部で沈線で挟まれた細長刺突連続文と，重鋸歯文と組み合わせた文様である。511 は外反する山形口縁で沈線で挟まれた細長刺突連続文を上・下位に，中位には重鋸歯文をつけ，胴部にも重鋸歯文の１部がみられる。コーナーの部分であるため縦に稜がみられる，512 は直行する口縁部で上位２条の細長刺突連続文があり，その下に重鋸歯文が施されている。513 は 512 と同じ文様の下に２条の沈線で挟まれた細長刺究連続文がみられる。514 は直行する口縁部で沈線挟みの細長刺突連続文が２条みやれる。435 は若干外反する口縁部で沈線挟みの弧状の細長刺突連続文と，２～３本で構成されたＸ文の組み合わせの文様を施している。515 は 514 と同じ文様構成であるが器面に横走する条痕がみられる。

第22表　第Ⅱ類ｂ土器諸訳

番号	出土区	層位	色調	胎土	焼成	番号	出土区	層位	色調	胎土	焼成
467	7トレンチ	2(4)	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良	492	A－6	4	茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良
468	A－7	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良	493	一般		暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良
469	B－6	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良	494	A－7	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良
470	B－5	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良	495	A－2	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良
471	B－7	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良	496	A－7	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良
472	B－7	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良	497	A－7	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良
473	B－6	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良	498	B－3	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良
474	B－7	4	茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良	499	A－6	4	茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良
475	一般		暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良	500	A－7	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良
476	B－7	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良	501	A－6	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良
477	A－6	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良	502	A－6	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良
478	7トレンチ	表	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良	503	A－5	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良
479	一般		暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良	504	7トレンチ	表	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良
480	A－7	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良	505	住居址内		暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良
481	4トレンチ	3(4)	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良	506	7トレンチ	2(4)	茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良
482	一般		暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良	507	A－5	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良
483	A－7	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良	508	B－4	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良
484	4トレンチ	3	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良	509	A－4	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良
485	B－6	4	茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良	510	B－4	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良
486	A－6	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良	511	B－7	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良
487	7トレンチ	表	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良	512	B－7	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良
488	B－5	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良	513	B－6	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良
489	B－7	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良	514	7トレンチ	表	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良
490	B－7	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良	515	7トレンチ	4	茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良
491	B－5	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良	516	B－5	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良

Ⅱ類ｃ（517～521）

この類は数条の連点文と重鋸歯を組み合わせた文様をもつ土器である。

517は山形口縁をもつ外反した土器である。山形の口唇部には3ケ所に刻みを入れ装飾している。口縁部には2条の連点文を山形口縁に沿って施し，胴部には3条と2条の重鋸歯文がみられる。518は直行する口縁部で文様は4条の連点文を施し，3条の重鋸歯文が胴部についている。519は3条の連点文を施す口縁部で直行する。520は519と同じである。440は胴部で連点文と重鋸歯文の組み合わせである。

第23表　第Ⅱ類c土器諸訳

番号	出土区	層位	色調	胎土	焼成	番号	出土区	層位	色調	胎土	焼成
517	A－6 B－3	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良	520	A－4	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良
518	一般		暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良	521	B－6	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良
519	A－3	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良						

Ⅱ類d（522～543）

この類は口縁部に細長刺突連続文と連点文を沈線で挟み，胴部は重鋸歯文またはそれに類した文様を施す土器群をさす。

522は直行する口縁部で3条の細長刺突連続文を沈線で挟み，その下には三角区画の細長刺突連続文を施している。524はやや外反した山形口縁部で3条の細長刺突連続文を沈線で上下に挟んでいる。525は直行した口縁部で文様は524と同じ構成をしている。526は山形口縁でコーナーの部分である。文様構成は522と同じである。527は直口した口縁部で文様構成は，525と同じである。528は直行した口縁部で文様構成は525と同じである。529は山形口縁で山形部のコーナーには縦線を入れ細長刺突連続文の上下には2本の沈線で挟んであり，胴部の重鋸歯文は6本で構成している。530は外向する山形口縁部で文様構成は523と同じである。531は直口する山形口縁でコーナー部に縦位の連点文と横位の連点文を沈線で挟み，胴部は重鋸歯文を施している。532・533は直行する口縁で1条の連点文を沈線で挟み重鋸歯文を施している。534は外反する山形口縁をもち口径は22cmで高さ15cmの底部だけない土器である。胴部は若干丸味をもつ。文様は口縁部に2条の連点文を沈線で挟み，頸部に角を2重にし，胴部に4列の棒線を横位に並べている。535はやや外反する口縁でこの類では口縁部の沈線が最上段にない。536は535と同じ構成で3段の細長刺突連続文をつけ，最上段は沈線で挟ない。胴部は重鋸歯文を施している。口径は17cm，高さは15cmで底部がない。口縁はやや外反し，山形口縁である。456は外反する山形口縁で3段の連点文を施し，下位2段は沈線で挟み，その下は斜線で沈線内を埋めている。胴部も重鋸歯文である。537は直行する口縁部で3段の連点文があり，下位2段が沈線で挟まれている。539は538と同じで459も同一形態である。541はやや外反する口縁部で文様構成は537と同じで，頸部の沈線内を斜線で埋める文様が2段になっている。542は口径20.5cm，高さ15.5cmの土器で口唇部には4ヶ所に2つの突起を装飾している。器形は全体的に外向し，口縁部で若干外反する。文様は口縁部に2列の三角連点文を上・下に沈線で挟み，胴部には重鋸歯文を2重に施している。器面調整は箆によるハケ目調整痕がある。543は口径9cm，高さ7.2cmの小形土器である。全体的にやや外向し，平坦口縁である。文様は2段の連点文を口縁部に施しているが下段だけ沈線で挟んである。胴部は4条の重鋸歯文を施している，薄手の土器である。

第24表　第Ⅱ類d土器諸訳（1）

番号	出土区	層位	色調	胎土	焼成	番号	出土区	層位	色調	胎土	焼成
522	B－7	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良	523	A－4	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良

第24表　第Ⅱ類ｄ類土器諸訳　(2)

番号	出土区	層位	色調	胎土	焼成	番号	出土区	層位	色調	胎土	焼成
524	A－6	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良	534	A－7	4	茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良
525	A－6	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良	535	B－4	4	茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良
526	B－7	4	茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良	536	A－7	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良
527	A－2	4	茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良	537	A－5	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良
528	一般		暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良	538	一般		暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良
529	A－4	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良	539	A－6	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良
530	A－2	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良	540	B－6	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良
531	A－7	4	茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良	541	B－6	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良
532	B－7	4	茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良	542	B－6	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良
533	B－5	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良	543	A－6	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良

Ⅲ類（544～547）

この土器は口縁部が肥厚する土器で文様は沈線を鋸歯文状に施している。口唇部には押し引き文と沈線文がある。

544は山形口縁をもち，口縁部に肥厚があり，その肥厚帯に上・下の連点と3条の鋸歯文を施している。545は山形口縁で上下に沈線を入れ，その中に4条の重鋸歯文を施している。546は小さな段と重鋸歯文を施している。547は肥厚帯に重鋸歯文を施している。

Ⅳ類（548）

この土器は1点出土している。548は山形口縁で外反する器形である。文様は重鋸歯文を2重に施している。

Ⅴ類（549～562）

この土器は細い沈線で数条の文様帯で，縦・斜・横に組み合せる文様を施す類である。

549はやや頸部が締まった口頸部で平坦口縁である。文様は口縁端部に6条の横縁を入れ，縦にクサビ状の沈線を重ね，頸部から胴部にかけて6ないし9本の斜行する沈線帯を，上位より下位に施している。550はやや頸部が締まった口頸部で文様，斜線がみられる。551は口縁が外反する器形で文様は縦線と斜線で組み合わせている。552も551と同様である。553は横線と斜線がみられる。554は横線がみられる。555は縦線，横線がみられる。556は横線と斜線がみられる。557は縦線，横線，斜線がみられる。558は斜線がみられる。559は横線と斜線がみられる。560は横線と斜線がみられる。561は太い沈線の中に細い沈線が斜状に施している。562は横線と斜線がみられる。なお549～552は口縁部で553～562は胴部である。

Ⅵ類（563～569）

この土器は口縁に突帯を付け，口頸部に荒い沈線を縦・横・斜に施文する土器である。563は口縁部に突帯を貼り付け，口唇部は連点を施し，1本の縦と横の沈線に斜の線を入れている。564～566は口縁部で突帯を貼り付け，縦，横，斜の沈線を施している。なお565は口唇部に連点がある。567は568は頸胴部で荒い沈線を縦・横・斜に施している。

Ⅶ類（570・571）

この土器類は縦，横，斜の沈線をていねいし，短く，規則的に施している土器で，570 は縦と斜に，571 は横と斜に沈線を施している。

Ⅷ類（572・573）

この土器類は沈線文と下位に刻目突帯文を施す土器である。572 は頸部で口縁部に籠目文を曲線で描き斜の刻目突帯を横位に貼り付けている。583 は頸肩部で，肩部に刻目突帯を貼り付け，頸部に数本で籠目文を直線に描いている。胴部には文様がない。

Ⅸ類（574）

1 点出土している。縦と横の沈線を連点で文様を構成し，Ⅲ類の口縁肥厚の器形である。

Ⅹ類（575）

この土器は無文の土器である。

575は山形口縁で，口唇部には装飾された山形部が突起状にみられる。器形は直行する口縁である。

第25表　第Ⅲ～Ⅹ類土器諸訳

番号	出土区	層位	色調	胎土	焼成	番号	出土区	層位	色調	胎土	焼成
544	7トレンチ	2(4)	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良	560	B－4	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良
545	A－4	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良	561	4トレンチ	3(4)	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良
546	一般		暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良	562	B－4	4	茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良
547	A－2	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良	563	9トレンチ	3(4)	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良
548	A－6	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良	564	B－5	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良
549	7トレンチ	3(4)	茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良	565	9トレンチ上	3(4)	茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良
550	4トレンチ	3(4)	茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良	566	9トレンチ	表	茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良
551	B－4		暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	粗	567	9トレンチ	3(4)	茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良
552	B－4	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良	568	9トレンチ	3(4)	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良
553	B－3	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良	569	B－7	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良
554	B－4	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	粗	570	B－7	4	茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良
555	B－4	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良	571	B－5	4	茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良
556	9トレンチ	3(4)	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良	572	A－2	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良
557	B－4	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良	573	B－6	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良
558	B－4	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良	574	一般		暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良
559	A－4	4	茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良	575	A－3	3(4)	明茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良

底部（576～607）

深鉢の底部のみである。576 ～ 580・588 ～591・602 ～ 599・601・602 は底部の縁が丸味気味のものと，やや角味をもつもので，581～587・590 ～ 600・603 ～ 607 は角味ないし，張り出しのあるものである。581・590は底部の底面にイボ状突起を付けている。（590 は，5 ヶ所に

みられる。）また590と592・593・598は若干上げ底気味である。

第26表　底部諸訳

番号	出土区	層位	色調	胎土	焼成	番号	出土区	層位	色調	胎土	焼成
576	B－7	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良	592	7トレンチ	2(4)	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良
577	B－3	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良	593	A－5 B－3・7	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良
578	7トレンチ	2(4)	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良	594	A－7	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良
579	A－5	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良	595	一般		暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良
580	A－2	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良	596	B－6	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良
581	B－4	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良	597	A－6	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良
582	B－4	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良	598	A－6	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良
583	B－7	4	茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良	599	A－7	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良
584	B－3	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良	600	A－6	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良
585	A－6	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良	601	A－7	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良
586	B－6	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良	602	7トレンチ	2(4)	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良
587	B－6	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良	603	B－6	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良
588	A－6	4	茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良	604	A－5	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良
589	B－7	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良	605	B－4	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良
590	B－7	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良	606	A－6	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良
591	A－7	4	暗褐色	サンゴ・長石・雲母	良	607	一般		茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良

土製円盤（608～611）

4点出土している。608は7.3×6.4cmで隅丸方形を呈している。609は3.4×2.7cm，610は3.2×3.0cm，611は2×2.4cmの大きさである。

Ⅺ類の土器（612・613）

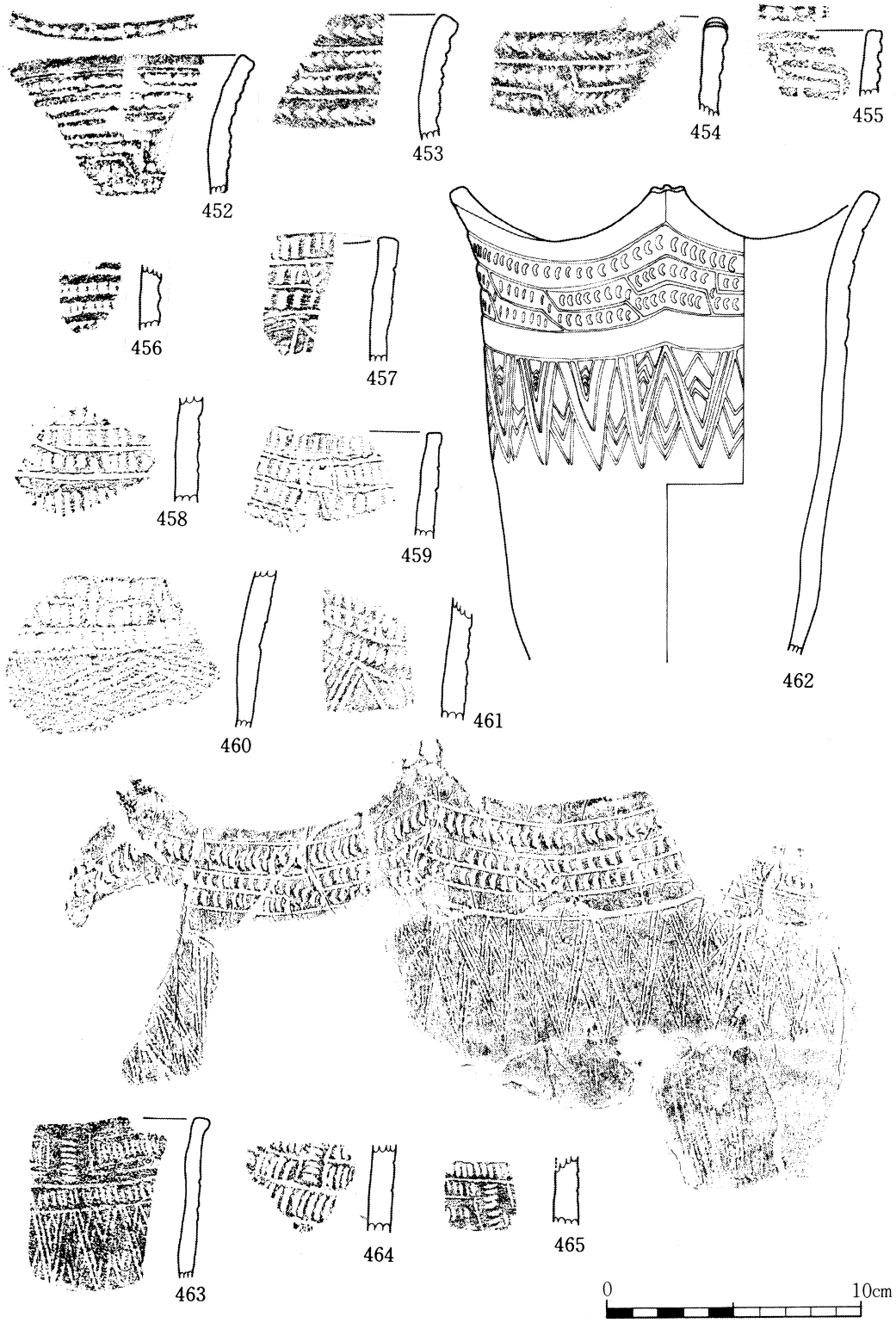
この土器は新砂丘出土の土器である。612は丸底の小形土器である。器面調整は良くない。色調は明茶褐色を呈す。613は耳付き土器で壺である。肩部に幅7mm，高さ5mmの紐状の短帯を施している。器面調整はていねいで色調は明茶褐色を呈する。

これらの土器は新砂丘から出土しているため，同じ砂丘から出土した人骨と関連があると考えられる。

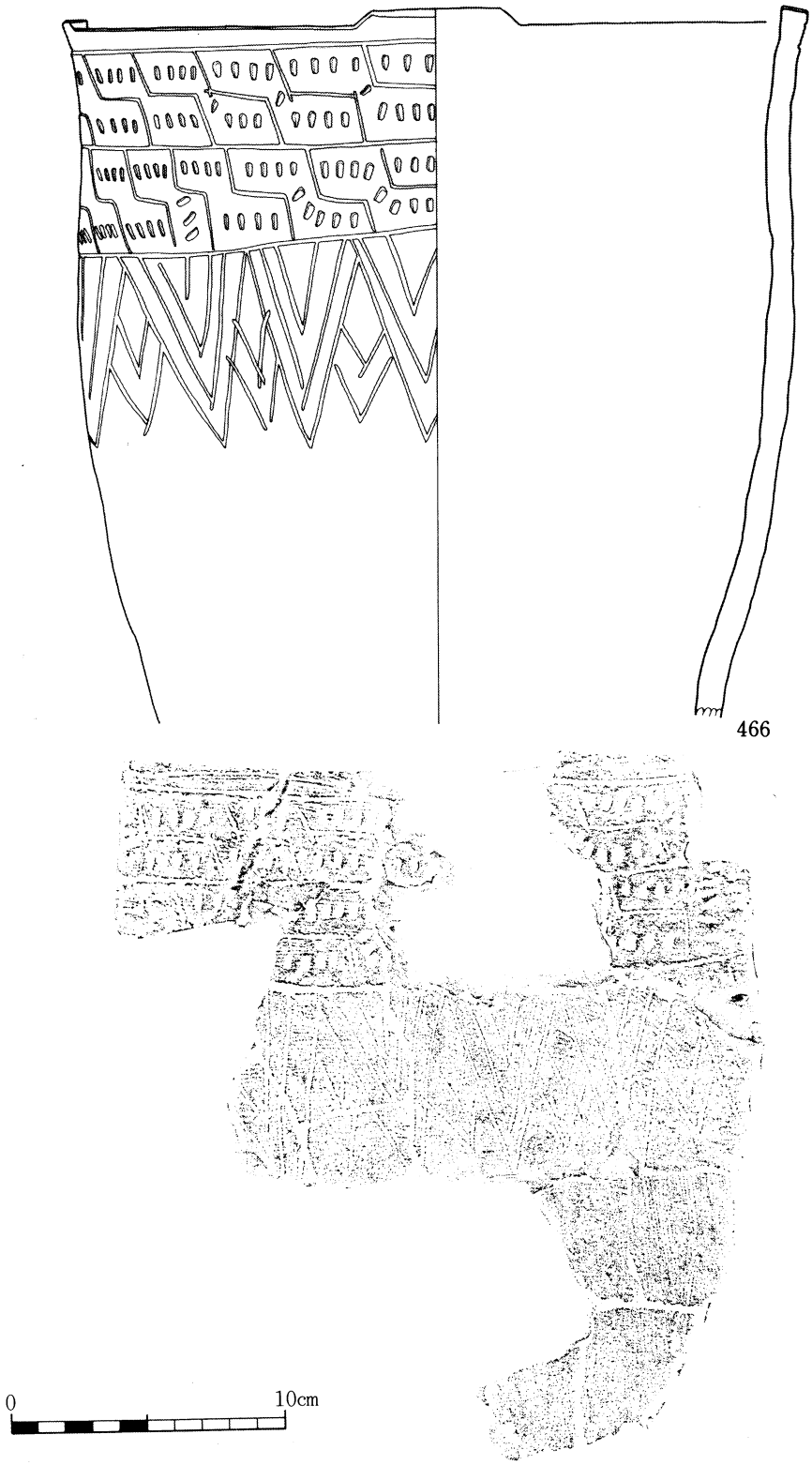
この耳付き土器は焼成，胎土から弥生期と思われる。同町のサウチ遺跡では耳付き土器の甕形土器が出土している。

第27表　土製円盤と外耳土器諸訳

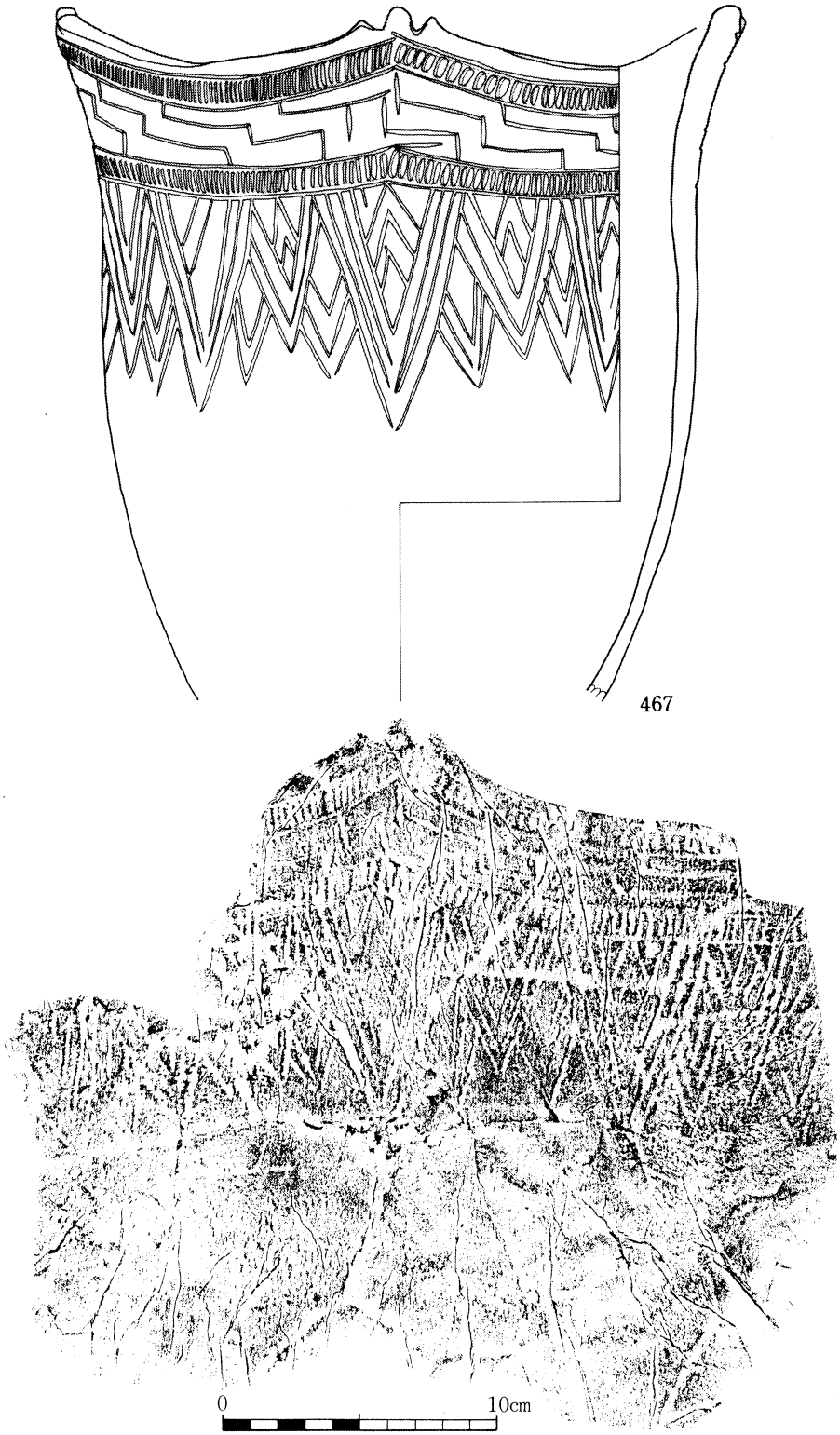
番号	出土区	層位	色調	胎土	焼成	番号	出土区	層位	色調	胎土	焼成
608	B－6	4	茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良	611	一般		暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良
609	B－7	4	茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良	612	A－8	新砂丘	明茶褐色	サンゴ・細砂・雲母	良
610	一般	4	暗茶褐色	サンゴ・長石・雲母	良	613	A－8	新砂丘	明茶褐色	サンゴ・細砂・雲母	良



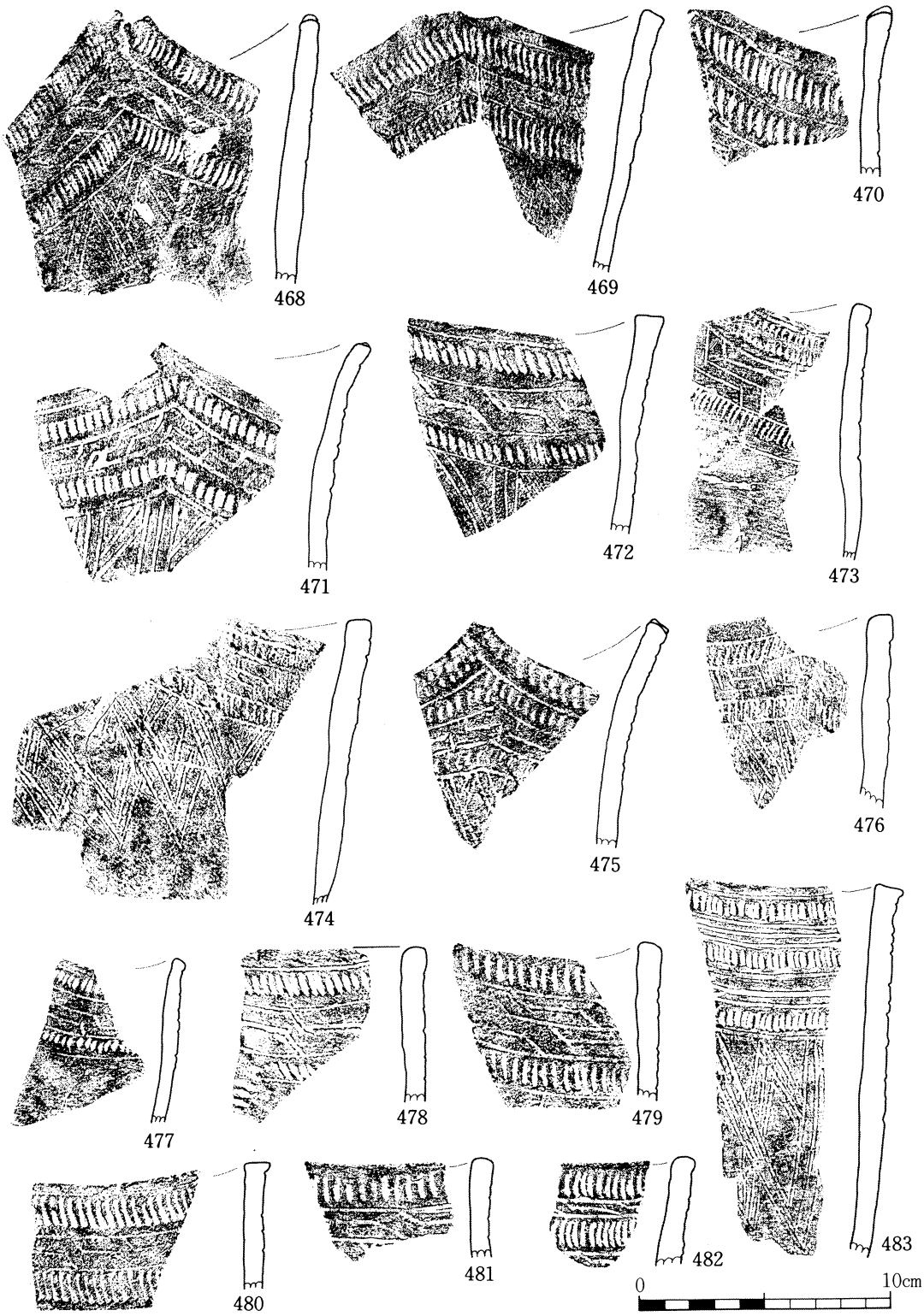
第72図　長浜金久第Ⅱ遺跡の土器実測図(1)　Ⅰ類(452～456)　Ⅱ類a(457～465)



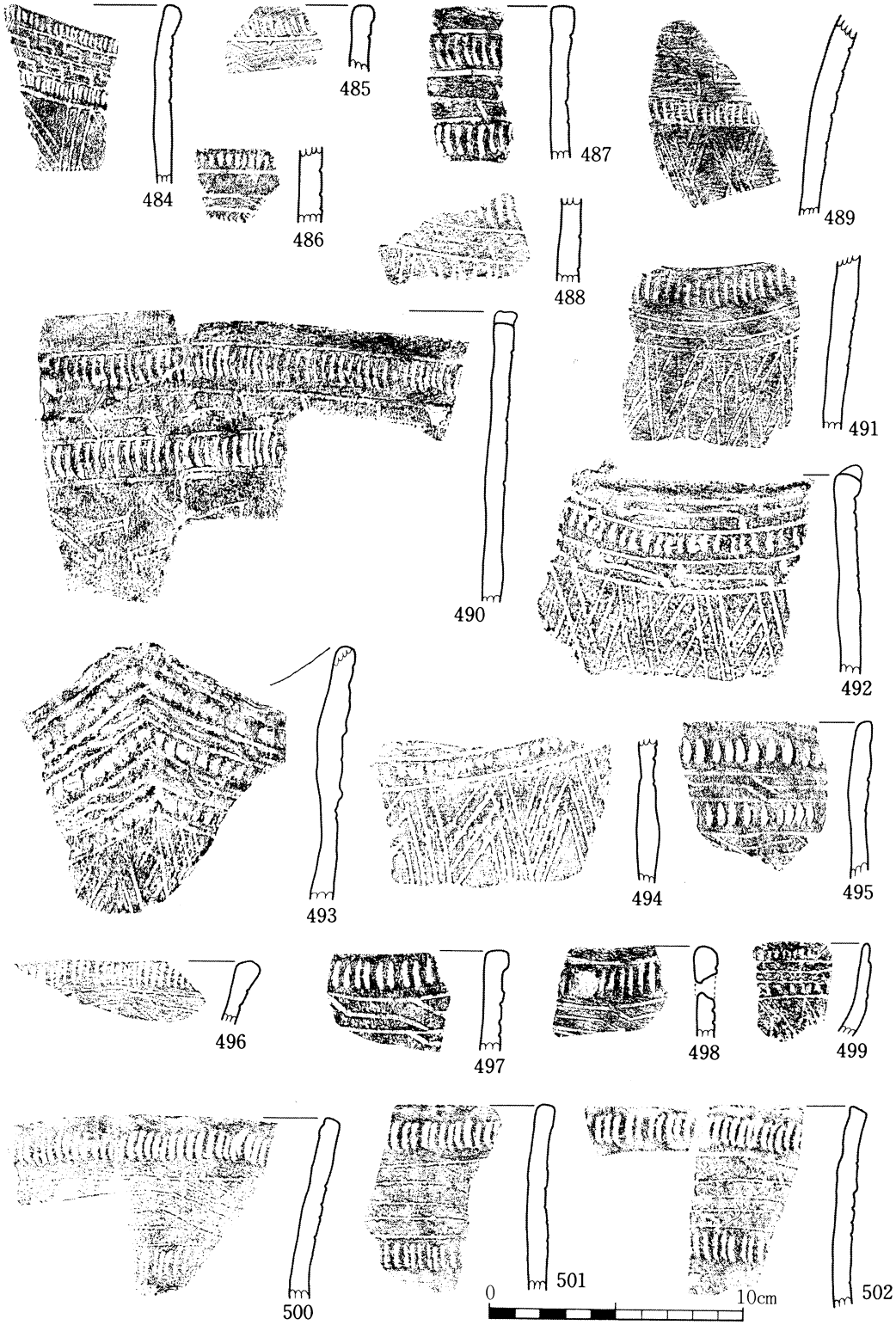
第73図　長浜金久第Ⅱ遺跡の土器実測図(2)　Ⅱ類 a (466)



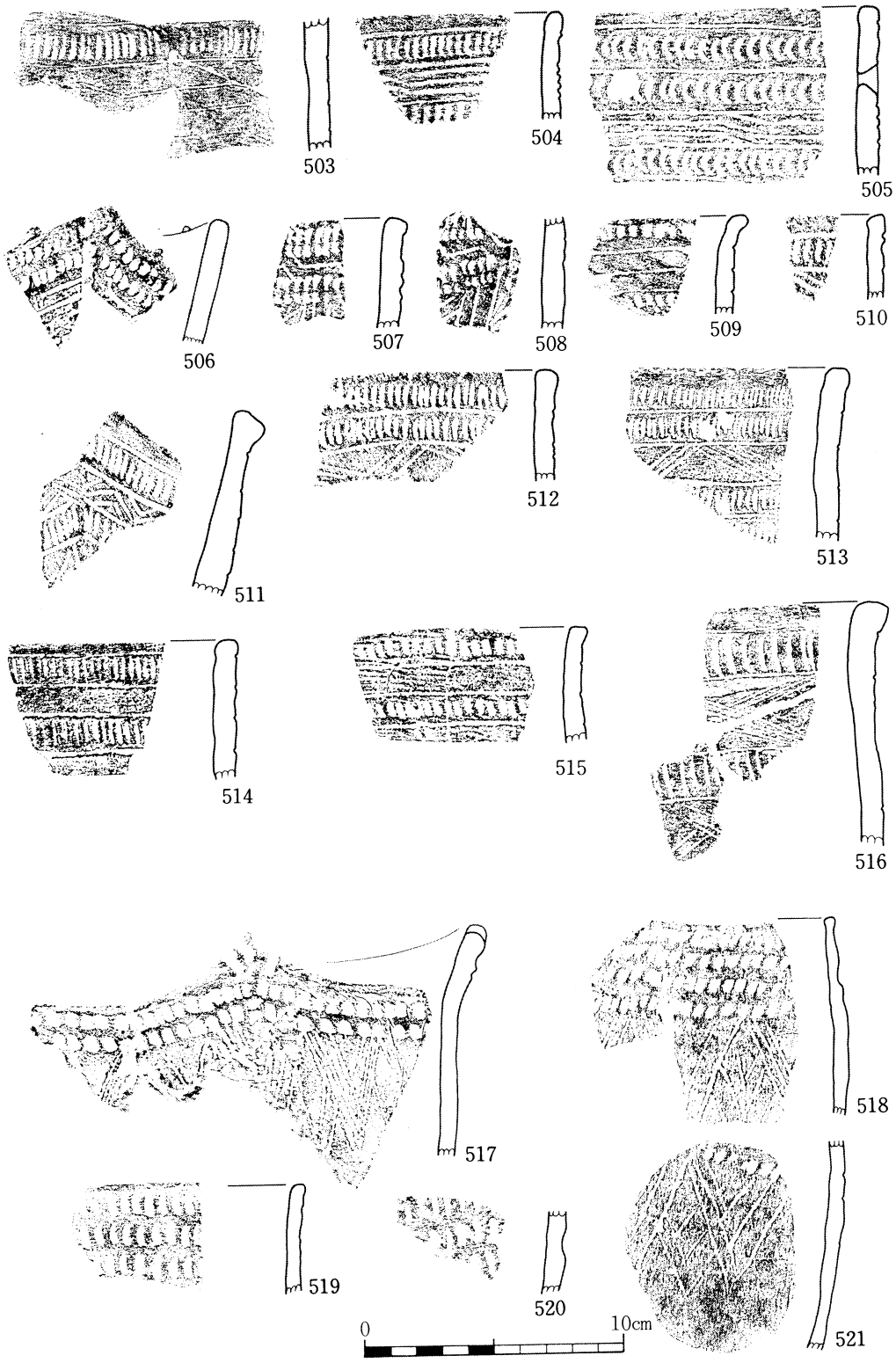
第74図　長浜金久第Ⅱ遺跡の土器実測図(3)　Ⅱ類ｂ（467）



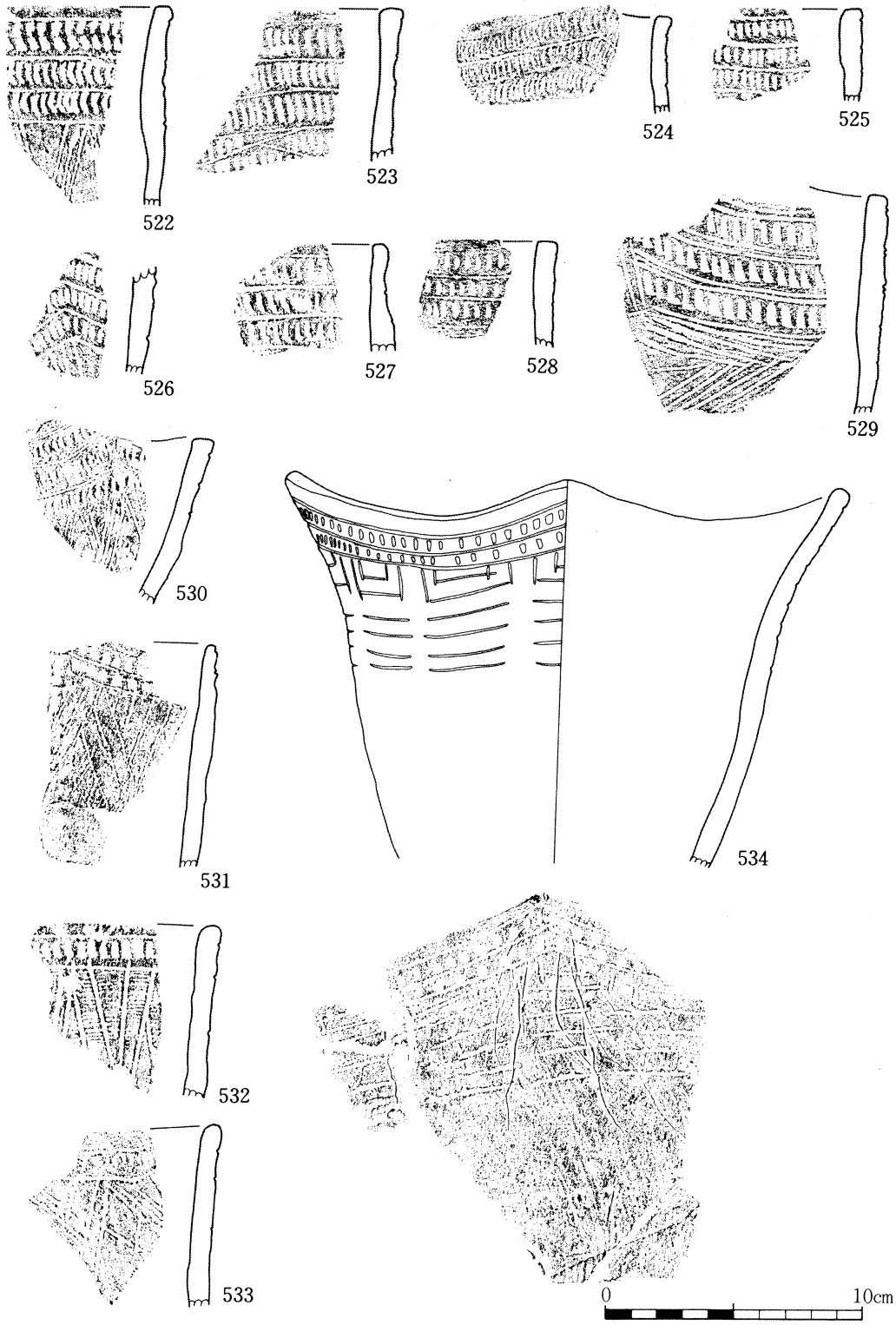
第75図　長浜金久第Ⅱ遺跡の土器実測図(4)　Ⅱ類ｂ (468～483)



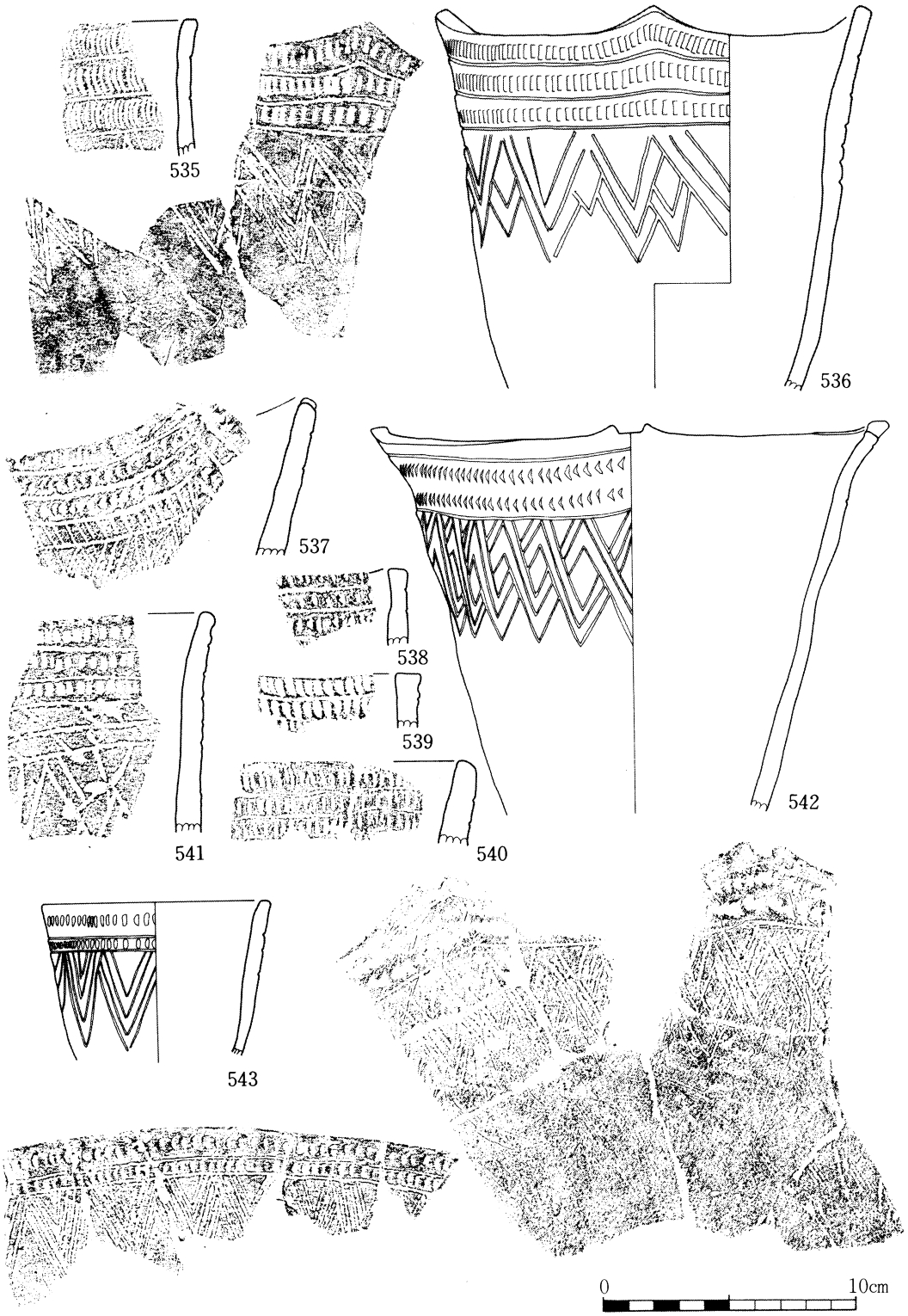
第76図　長浜金久第Ⅱ遺跡の土器実測図(5)　Ⅱ類ｂ（484～502）



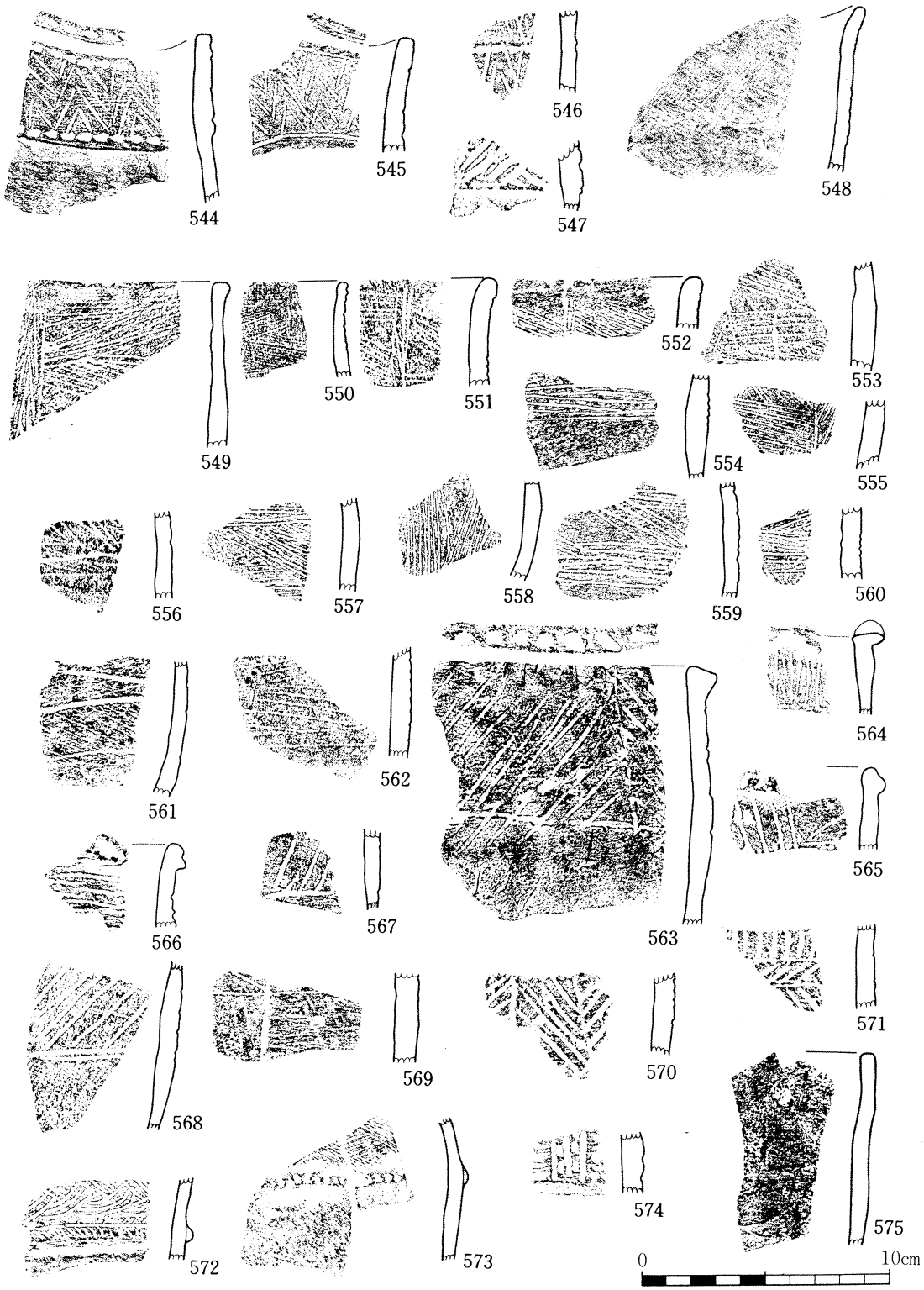
第77図　長浜金久第Ⅱ遺跡の土器実測図(6)　Ⅱ類ｂ（503～516）Ⅱ類ｃ（517～521）



第78図　長浜金久第Ⅱ遺跡の土器実測図(7)　Ⅱ類ｄ (522～534)

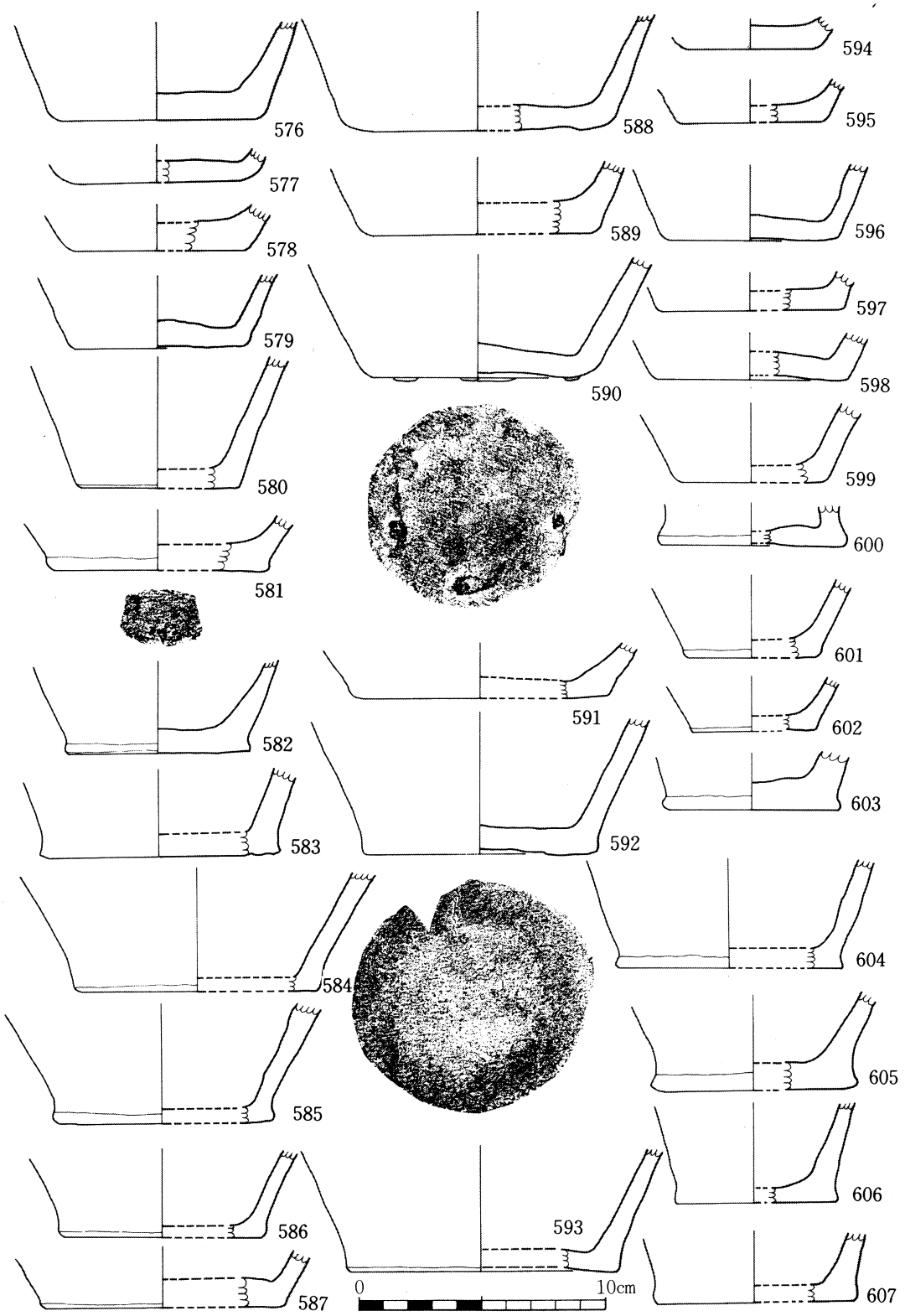


第79図　長浜金久第Ⅱ遺跡の土器実測図(8)　Ⅱ類d 類(535～543)



第80図　長浜金久第Ⅱ遺跡の土器実測図(9)

Ⅲ類(544～547) Ⅳ類(548) Ⅴ類(549～562) Ⅵ類(563～569)
Ⅶ類(570・571) Ⅷ類(572・573) Ⅸ類(574) Ⅹ(575)



第81図　長浜金久第Ⅱ遺跡の土器実測図(10)　底部

2）貝製品（614～727）

1．貝輪

貝輪は114点出土した。内訳はオオツタノハ製貝輪が113点，ゴホウラ製貝輪が1点である。すべて破損品で4組が接合した。その中の2組が完形になった（533～535・539）。大体は研磨され，白地に赤褐色の文様を出している。また，内縁・外縁も角を研磨されている。完形になった貝輪532は外周径が7.2×5.8cm，内周径5.8×4cmで，533は外周径が7.5×5.7cm，内周径が5.9×4.2cmである。他は復元して7.5×6.0cm位の大きさが多い。

第28表　貝輪諸訳（1）

番号	出土区	層	縦 縦 外周径	縦 縦 内周径	横 外周径	横 内周径	備考	番号	出土区	層	縦 外周径	縦 内周径	横 外周径	横 内周径	備考
614	A-6	4	7.2	5.8	5.8	4.0		640	B-6	4	長さ7.0				径不明
615	D-7	4	7.5	5.7	5.9	4.2		641		4	5.5	3.5	2.4+α	1.7+α	
616	B-7	4	7.2+α	5.2+α	5.7	4.0		642		4	7.1	5.8			
617	一般	4	5.9+α	5.2+α	6.2	4.7		562	A-4	4	7.8+α	6.0+α	2.9+α	2.2+α	
618	B-3	4	7.3+α	5.9+α	5.8	4.2		644		4	6.1+α	5.3+α	2.2+α	1.7+α	
619	A-4	4	7.0	5.3	4.3+α	3.3+α		645		4	5.6+α	4.0+α	2.8+α	2.1+α	
620	B-6	4	6.9+α	5.1+α	6.6	5.0		646	B-9	4	4.6+α	3.7+α	2.4+α	1.7+α	
621	A-6	4	7.4	6.5	2.3+α	3.0+α		647		4	5.6+α	3.8+α	2.7+α	2.0+α	
622	B-5	4	8.0	6.8	5.1+α	4.3+α		648		4	6.0+α	4.4+α	2.6α α	1.9+α	
623	B-5	4	7.2	5.6	4.2+α	3.6+α		649		4	長さ7.0				径不明
624	B-6	4	長さ5.3		3.0+α	2.3+α		650	A-7	4	長さ7.0				径不明
625	一般	4	長さ4.8		3.1+α	2.3+α		651	A-4	4	5.8+α	4.5+α	2.9+α	2.1+α	
626	A-4	4	4.6+α	4.2+α	3.7+α	3.0+α		652	A-5	4	長さ4.8				径不明
627	一般	4	長さ5.0				径不明	653		4	4.9+α	3.7+α	1.9+α	1.4+α	
628	A-4	4	5.0+α	4.3+α	2.5+α	1.7+α		654		4	7.5+α	6.2+α	3.5+α	2.7+α	
629	一般	4	長さ5.2	6.0+α			径不明	655	A-6	4	6.9+α	5.6+α	2.9+α	2.0+α	
630	G-6	4	長さ7.2	5.5+α	3.3+α	2.6+α		656		4	長さ3.5				
631	A-6	4	長さ6 3				径不明	657		4	7.6+α	6.4+α	3.4+α	2.6+α	
632	一般	4	長さ6.3				〃	658		4	8.2+α	6.7+α	3.9+α	3.9+α	
633	A-7	4	7.6+α	7.1+α	3.3+α	2.7+α		659		4	長さ5.8				径不明
634	B-7	4	6.6+α	6.0+α	3.1+α	2.6+α		660		4	4.8+α	3.7+α	3.2+α	2.4+ α	
635	B-6	4	長さ6.0				径不明	661	B-7	4	5.3+α	5.6+α	2.6+α	1.7+α	
636	一般	4	長さ5.7				径不明	662		4	4.2+α	3.0+α	2.7+α	2.0+α	
637	A-4	4	長さ6.0				〃	663		4	長さ5.7				径不明
638	B-7	4	長さ6.3				〃	664	B-6	4	長さ5.5				径不明
639	B-5	4	6.8+α	6.5+α	2.6+α	1.9+α		665	A-2	4	長さ5.5				径不明

第24表　貝輪諸訳 (2)

番号	出土区	層	縦		横		備考	番号	出土区	層	縦		横		備考
			外周径	内周径	外周径	内周径					外周径	内周径	外周径	内周径	
666	B-6	4	5.8+α	4.6+α	2.3+α	1.8+α	径不明	697	一般	4	長さ4.2				径不明
667	一般	4	長さ6.0				〃	698	〃	4	長さ5.4				〃
668	B-6	4	長さ6.1				〃	699	〃	4	長さ4.4				〃
669	B-7	4	長さ6.0				〃	700	〃	4	長さ4.2				〃
670	A-6	4	長さ5.1				〃	701	〃	4	長さ5.2				〃
671	A-6	4	長さ5.2				〃	702	〃	4	長さ4.7				〃
591	一般	4	長さ5.1				〃	703	A-6	4	長さ5.0				〃
673	〃	4	長さ7.3				〃	704	B-7	4	長さ5.1				〃
674	〃	4	長さ5.5				〃	705	一般	4	長さ3.7				〃
675	〃	4	長さ4.2				〃	706	A-6	4	長さ4.1				〃
676	〃	4	長さ4.6				〃	707	B-6	4	長さ5.1				〃
677	〃	4	長さ4.5				〃	708	A-4	4	長さ4.6				〃
678	〃	4	長さ4.8				〃	709	一般	4	長さ3.6				〃
679	〃	4	長さ5.0				〃	710	〃	4	長さ2.9				〃
680	〃	4	長さ4.3				〃	711	B-6	4	長さ3.8				〃
681	〃	4	長さ5.0				〃	712	A-6	4	長さ3.8				〃
682	〃	4	長さ3.3				〃	713	一般	4	長さ3.9				〃
683	〃	4	長さ3.8				〃	714	A-6	4	長さ5.3				〃
684	〃	4	長さ4.0				〃	715	一般	4	長さ3.5				〃
685	〃	4	長さ4.4				〃	716	〃	4	長さ4.4				〃
686	〃	4	長さ3.4				〃	717	〃	4	長さ5.1				〃
687	〃	4	長さ4.1				〃	718	〃	4	長さ5.1				〃
688	〃	4	長さ2.8				〃	719	A-7	4	3.3+α	1.9+α	5.8+α	3.9+α	
689	〃	4	長さ3.2				〃	720	A-2	4	4.3+α	3.1+α	7.1+α	5.0+α	
690	〃	4	長さ3.1				〃	721	B-7	4	4.7+α	2.8+α	6.4+α	6.2+α	4.
691	〃	4	長さ4.3				〃	722	A-7	4	4.1+α	2.7+α	5.7+α	4.2+α	
692	〃	4	長さ3.3				〃	723	一般	4	3.5+α	2.6+α	4.9+α	3.4+α	
693	〃	4	長さ4.1				〃	724	B-6	4	3.6+α	2.5+α	6.3+α	4.1+α	
694	B-6	4	長さ5.1				〃	725	一般	4	3.7+α	3.1+α	4.7+α	3.1+α	
695	A-5	4	長さ4.4				〃	726	A-6	4	3.2+α	2.5+α	4.5+α	2.7+α	
696	一般	4	長さ4.1				〃	727	一般	4			長さ5.7		ゴホウラ 径不明

3．貝符状貝製品（728～729）

この貝製品は土壙Aより出土している。728は2.6×4.6cmの大きさ，厚さは 0.5cmで大半は欠損している。左右の縁は尖り，一辺は一部剝られている。裏側の研磨は粗く，表側の研磨は良い。白色を呈し，コホウラ製品と考えられる。729は4 ×5 5cmの大きさ，厚さは0.95cmで上半分は欠損している。全面研磨され一部剝られ突起状になっている。白色を呈し，ゴホウラ製品と考えられる。

これらは貝符に近い形態をしているので貝符状貝製品とした。

3．垂飾品（730～737）

730は4.9×0.9cmの大きさで，厚さは 0.2cmあり楕円形を呈し，2枚貝で作られている。731は4 ×0.5cmの大きさで，厚さは0.25cmあり，尖端部は丸味をもち上部は一部剝られている。732は2 ×0.6cmの大きさで，厚味は0.15cmである。形態は731と同一である。733はクロチョウガイで作られたもので円孔は3ヶ所みられる。大きさは3 ×7.5cmで，厚さは0.55cmある。孔は 0.3～0.2cmで両方から穿孔されている。734～736はマキガイを磨き，孔を開けている。734はシマイボボラで両面磨かれている。735はソデガイで両面磨かれている。736はフデガイで片面磨かれている。3点とも紐ずれの跡はみあたらない。737はスイジガイ製品で3ヶ所に丸味をもった突起部をつくり丁寧にしあげている。用途は不明。

4．貝鏃（738）

ヤコウガイで作られた穿孔をもつ　である。2.1×1.3cmの大きさで厚味は0.15cmである。穿孔の大きさは径0.02cmで片方から穿孔している。

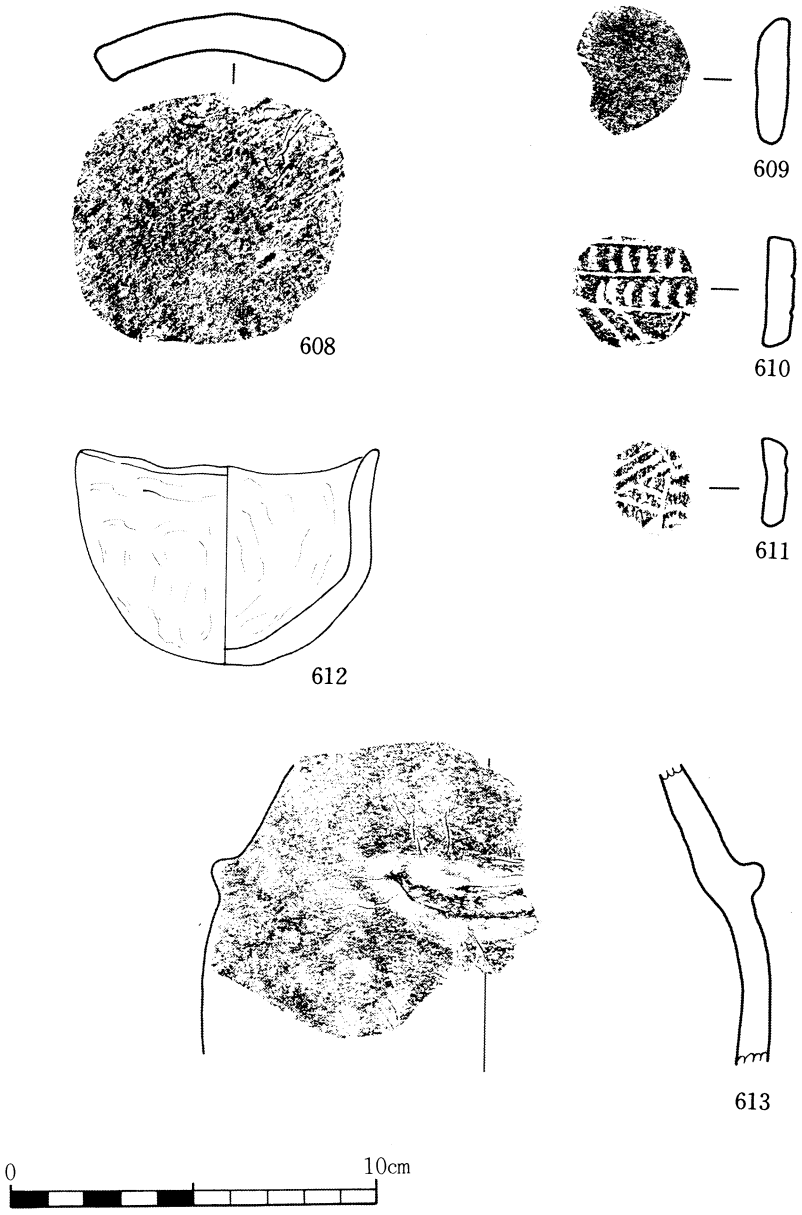
5．螺蓋利器（739・740）

これはヤコウガイの蓋である。739は 8.5×7.5cmの大きさで厚味は2cmである。下縁が孤状に剝かれている。740は角状に剝かれ，3辺の使用痕がみられる。

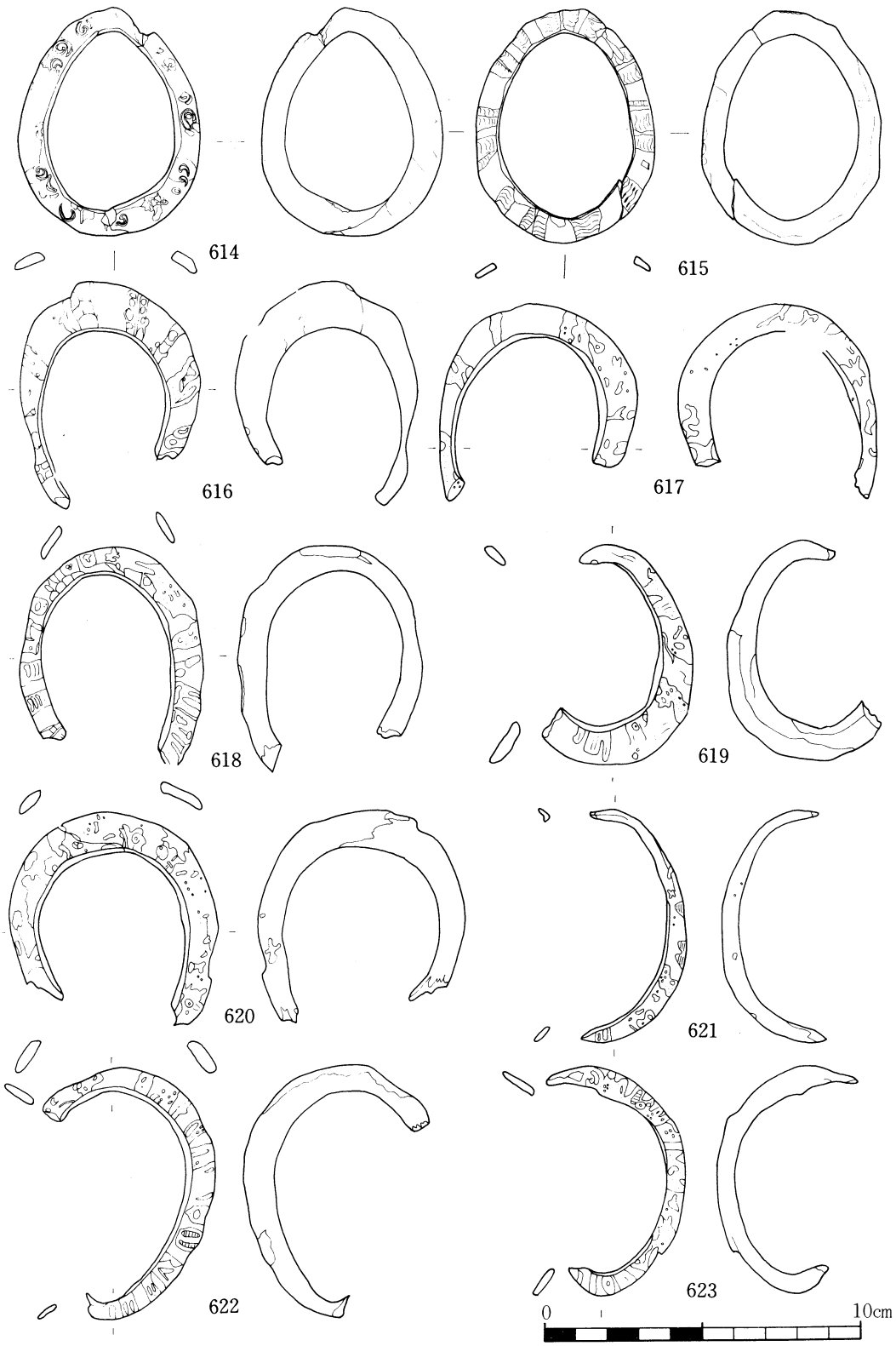
6．貝匙状貝製品（741～747）

この貝製品は貝匙と言われているものである。741～745は完成品が破損したもので真珠層のみである。746はまだ未完成品の破損部で真珠層を出しただけである。747は器形を整えただけで真珠層を出していない。741はきものの形につくり，中に穿孔しといる。大きさは 5.5cmである。742は穿孔のみで 4.7cmの大きさである。前の2つは上部で662は中部である。大きさは 6.1cmである。744・745は下部で尖端はやや尖り気味の丸の形をしている。大きさは，5.5cmと5.4cmである。746は中部で7cmの大きさである。外面に擦痕がみられる。747は9.8cmで上部は欠損している。

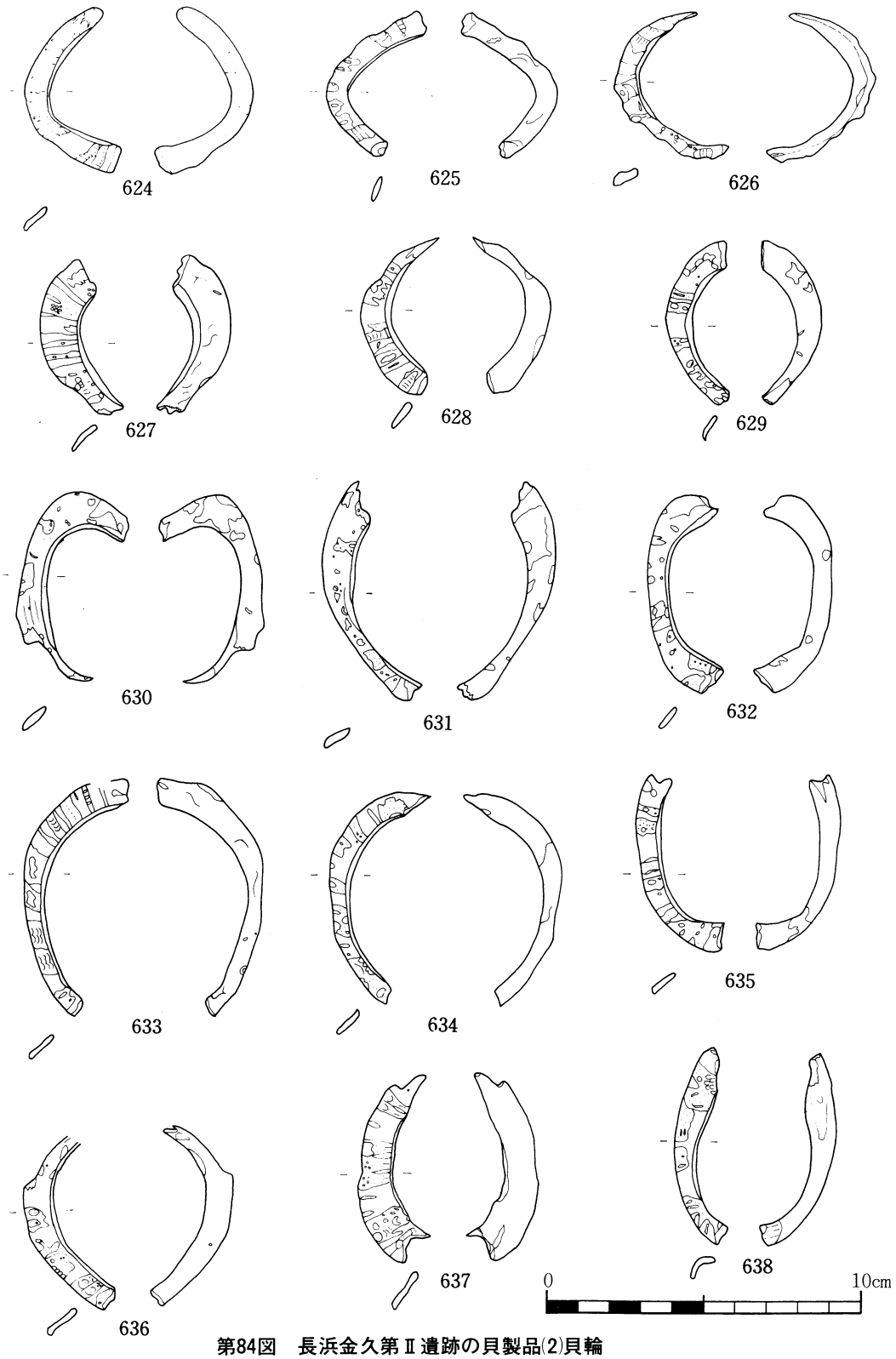
この製品は貝匙すなわちスプーンとしての用途が今まで考えられている。しかしこの製品はヤコウガイの外皮と内皮を剝ぎ真珠層のみを出して，丁寧につくられているので単なる日用食器としては丁寧すぎるのではないかと考えられる。むしろ呪術的なもので国分直一氏が考えている家文的なものの考えが強いと思われる。これは今後の研究課題の検討の一つと思われる。



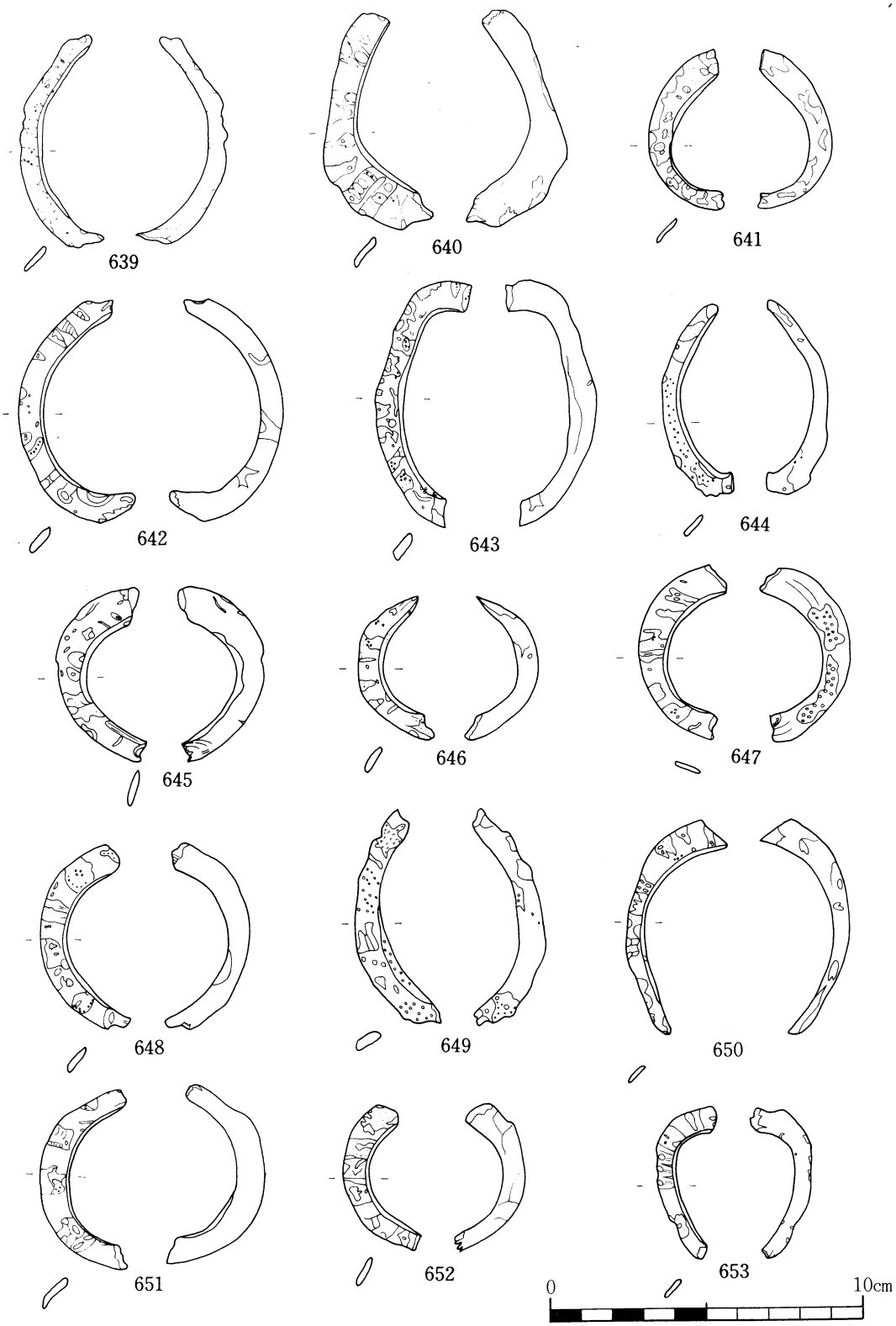
第82図　長浜金久第Ⅱ遺跡の土器土製円盤実測図(11)　ＸＩ類(612・613)



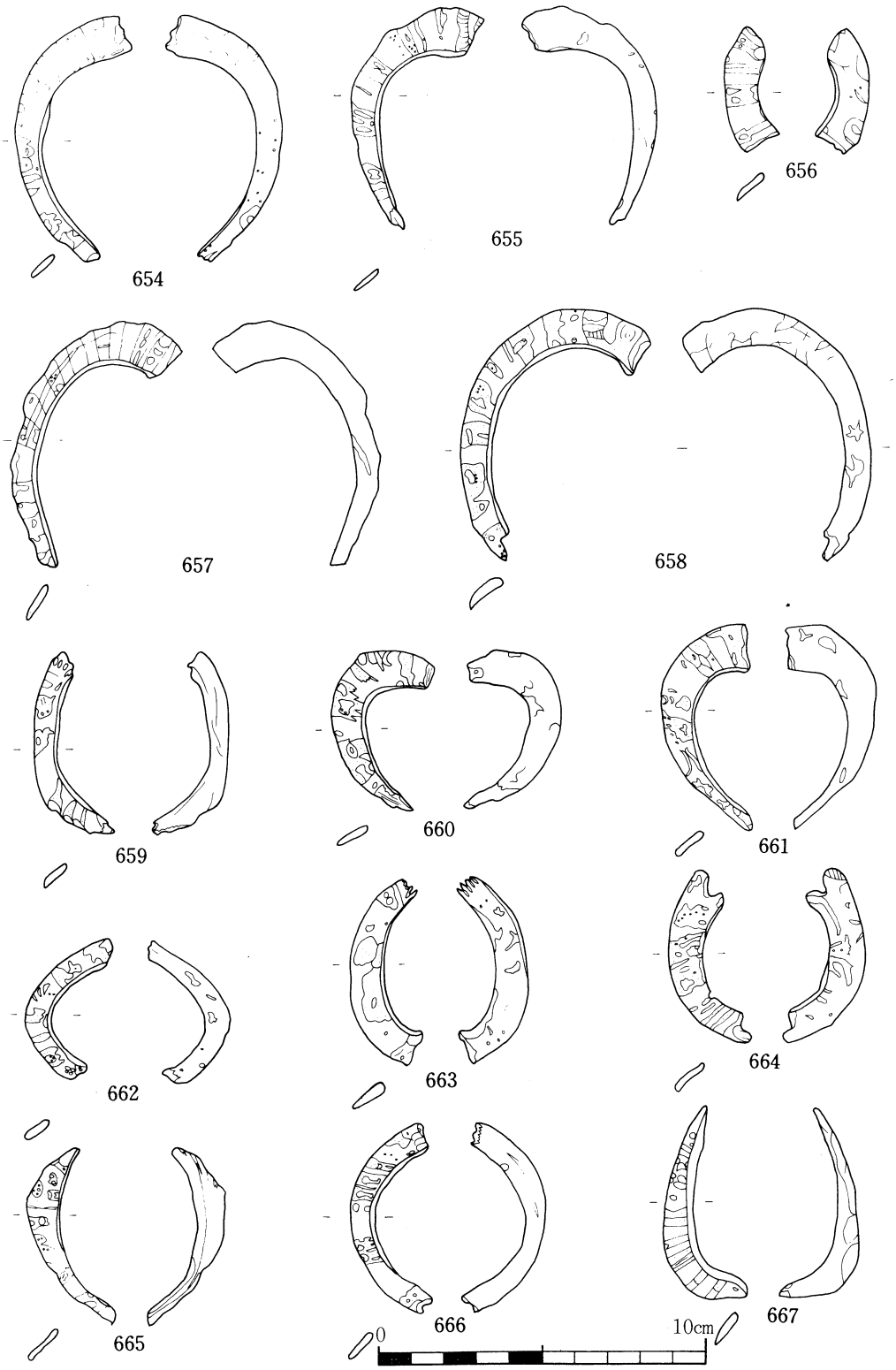
第83図　長浜金久第Ⅱ遺跡の貝製品(1)貝輪



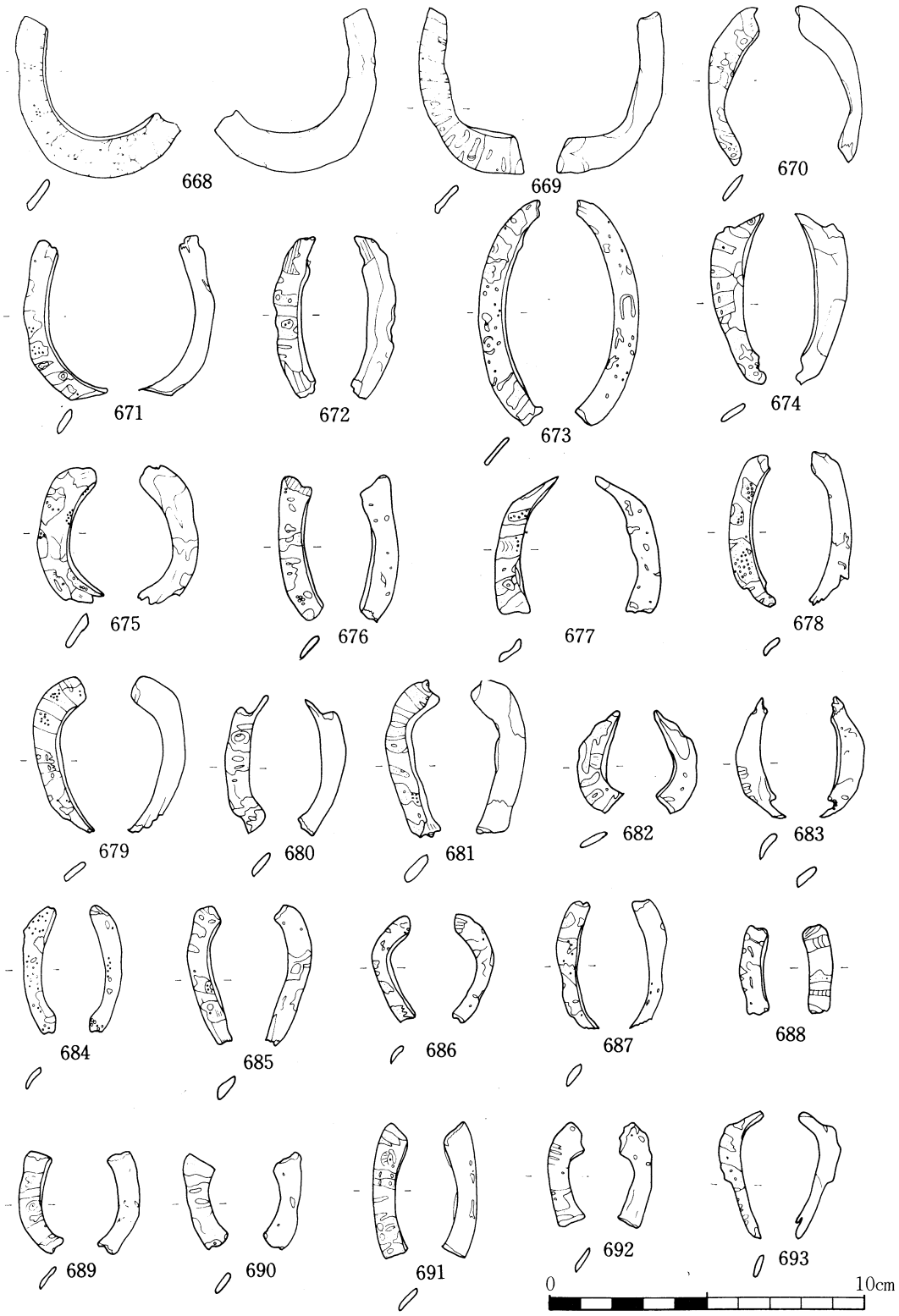
第84図　長浜金久第Ⅱ遺跡の貝製品(2)貝輪



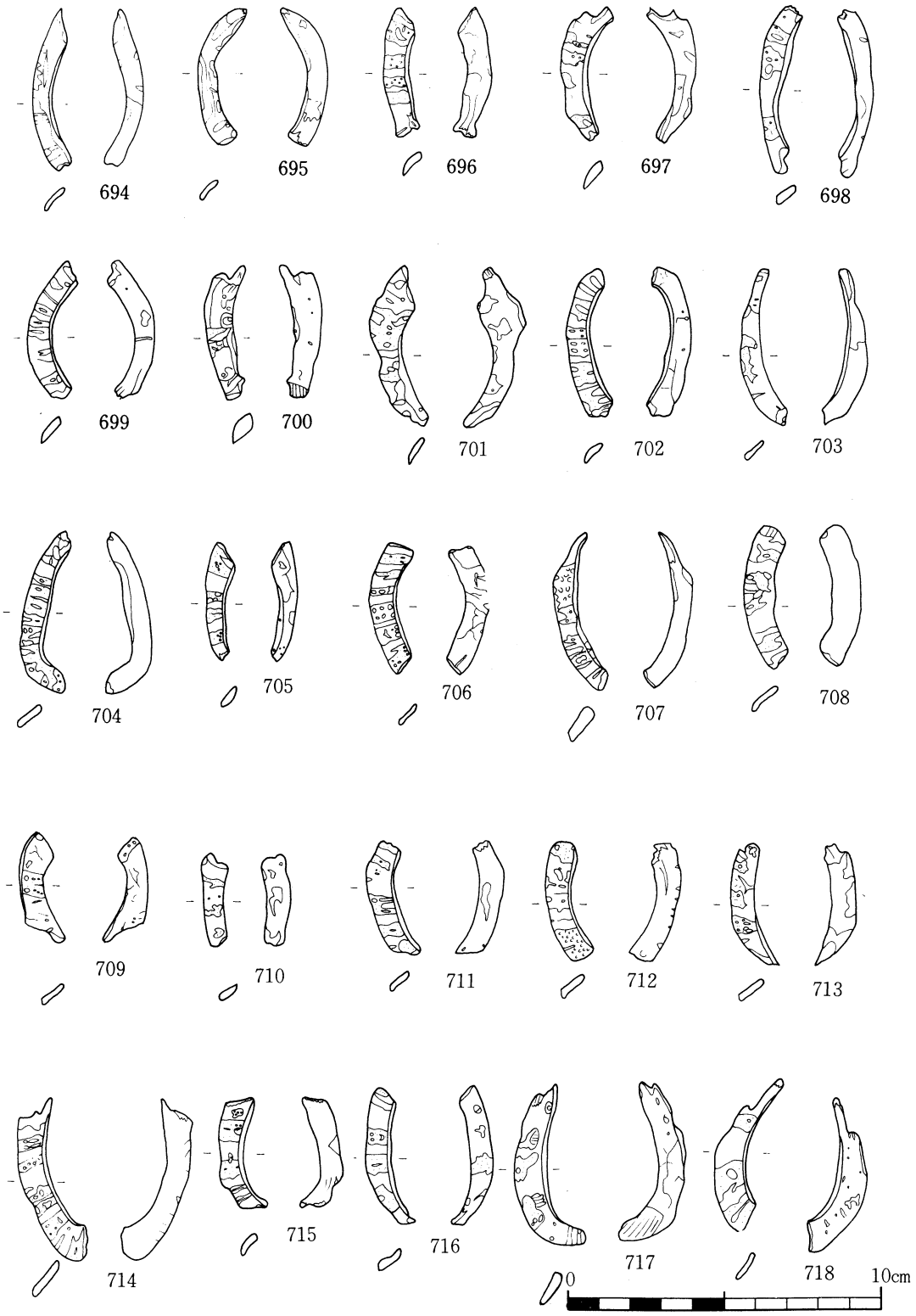
第85図　長浜金久第Ⅱ遺跡の貝製品(3)貝輪



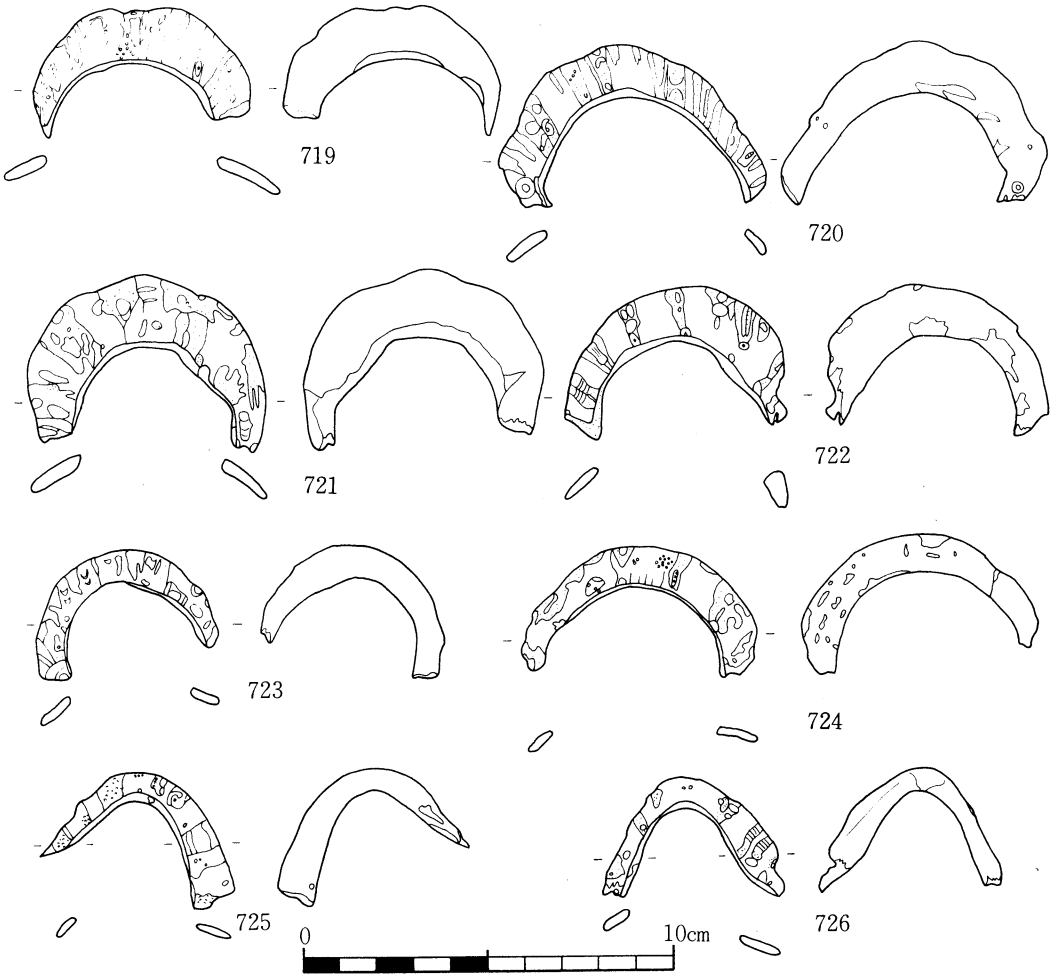
第86図　長浜金久第Ⅱ遺跡の貝製品(4)貝輪



第87図　長浜金久第Ⅱ遺跡の貝製品(5)貝輪



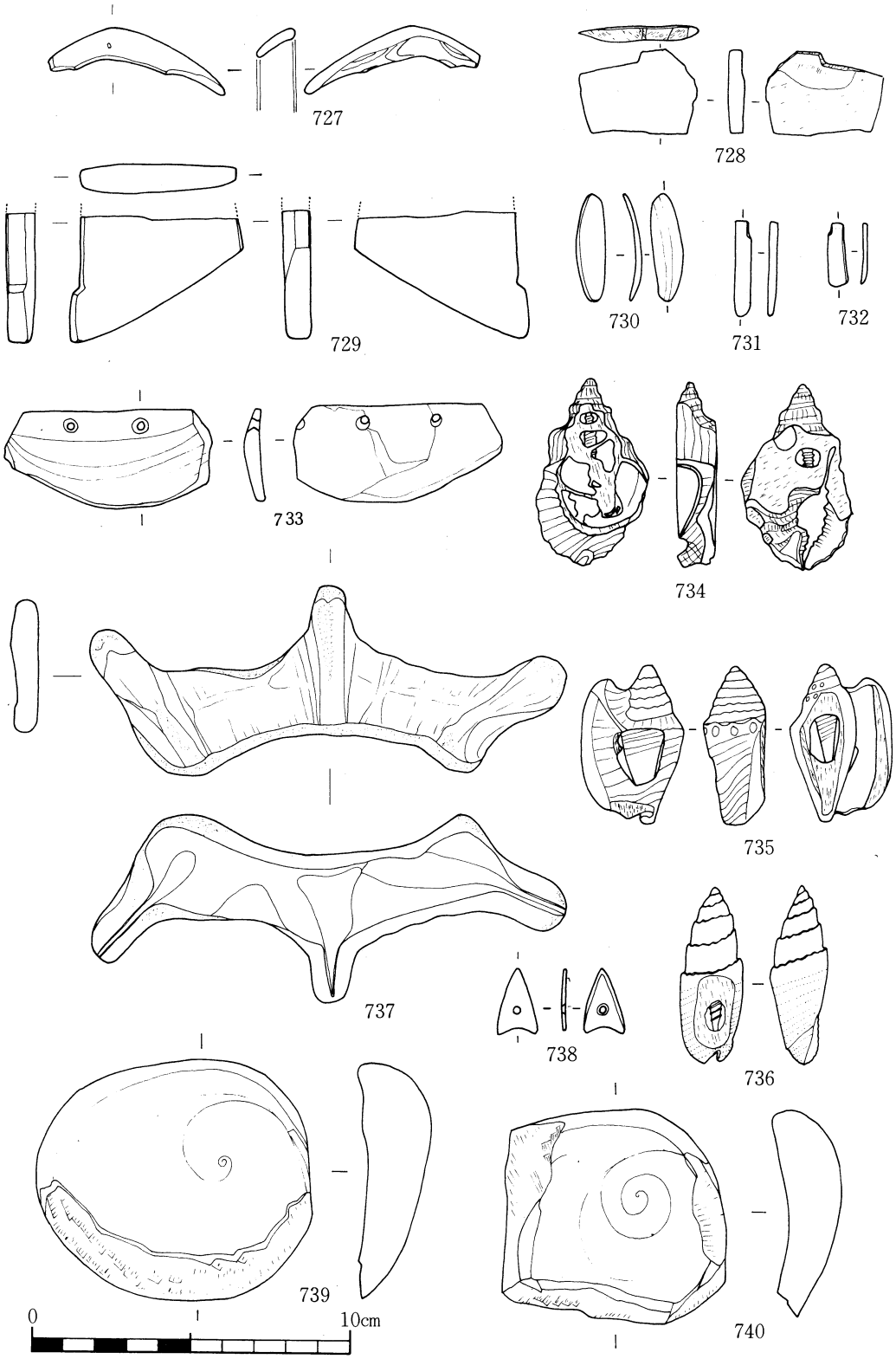
第88図　長浜金久第Ⅱ遺跡の貝製品(6)貝輪



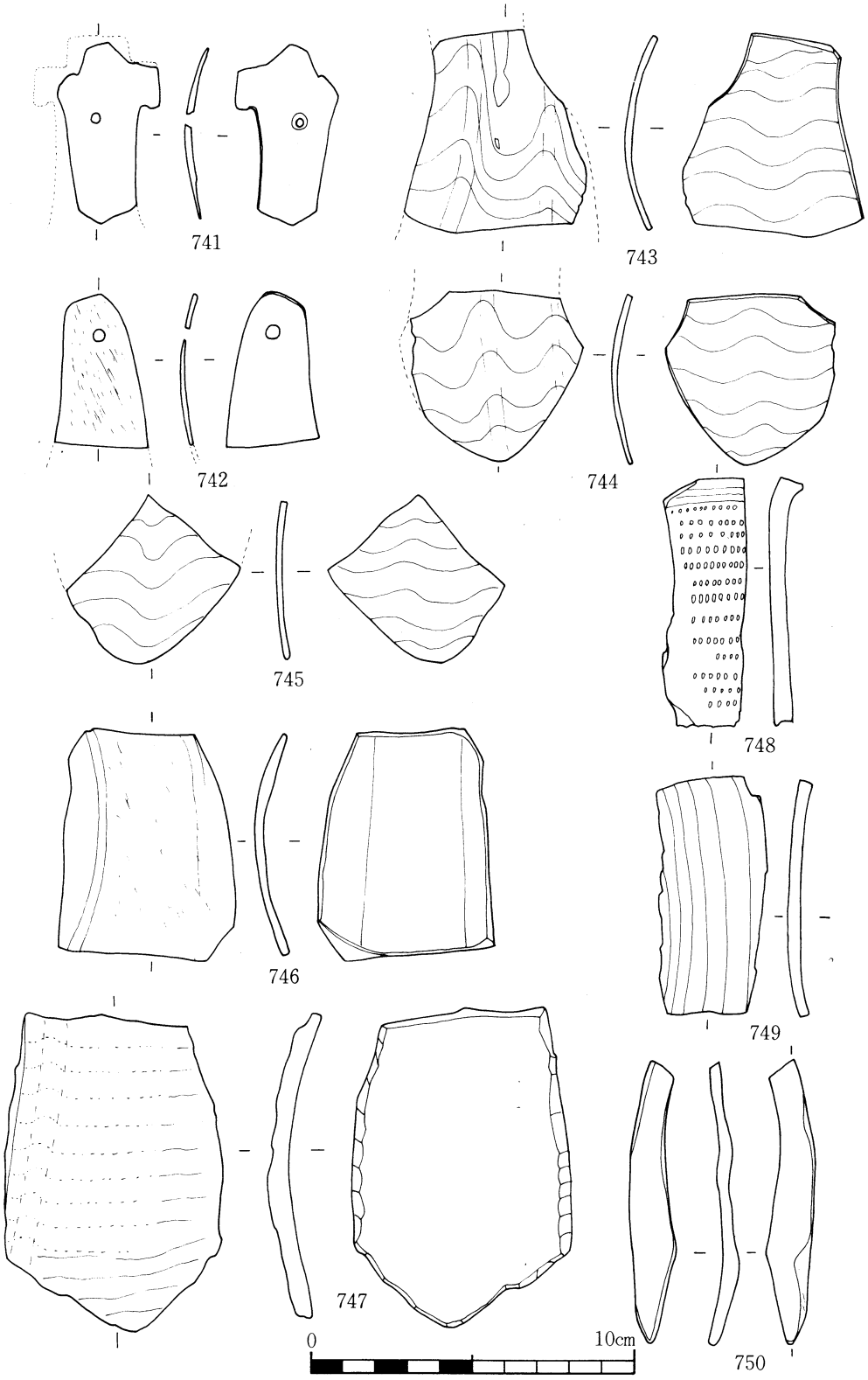
第89図　長浜金久第Ⅱ遺跡の貝製品(7)貝輪

7．その他の貝製品（667～669）

667・668はイモガイを短冊形に切った状態で 7.6×2.5cm，7.4×3.2cmの大きさであり，未成品と考えられる。669 はスイジガイの一部を切ったもので 8.8×1.4cmの大きさで，一部擦痕がみられて先端部は尖る。



第90図　長浜金久第Ⅱ遺跡の貝製品(8)貝輪・垂飾品・貝鏃・螺蓋利器



第91図　長浜金久第Ⅱ遺跡の貝製品(9)貝匙状貝製品

3．石器（751～758）

1）研磨器

この石器は5～7cm大で，厚さ1～1.8cmの破岩質の扁平石で8点出土した。幅4～5mmの溝が片面に1～7条みられる。751・762・764・765は両面に他は片面にみられる。この石器の溝は貝殻を研磨したときに，生じたものと考えて実験を他の石で行なってみた。水を付けながら磨擦して行くと，貝殻は研磨され，砂岩は溝が少しずつ深くなって，幅は4～5mmの溝になった。

この溝は直線的にみえるが若干曲線状になっていることから，曲った物を研磨していると考えられる。すなわち，貝輪等の縁の研磨をするための石器ではないかと思われる。本遺跡では貝輪は114点出土しているので，貝輪研磨器としての用途が考えられる。

第25表　研磨器諸訳

番号	出土区	層	法　量	重量	備　考	番号	出土区	層	法　量	重量	備　考
751	B－6	4	5.0×4.5×1.0	24g	溝7本	755	一　般	4	4.2×4 4×0.9	22g	溝3本
752	一　般	4	4.4×3.1×0.7	19g	溝5本	756	A－6	4	4.7×4.0×1.8	29g	溝3本
753	一　般	4	5.3×3.2×1.2	23g	溝4本	757	B－6	4	5.1×3.4×2.0	40g	溝2本
754	B－6	4	5.0×4.0×1.1	24g	溝10本	758	B－6	4	7.1×5.1×0.8	64g	溝1本

2）タタキ石・凸石（678～679）・

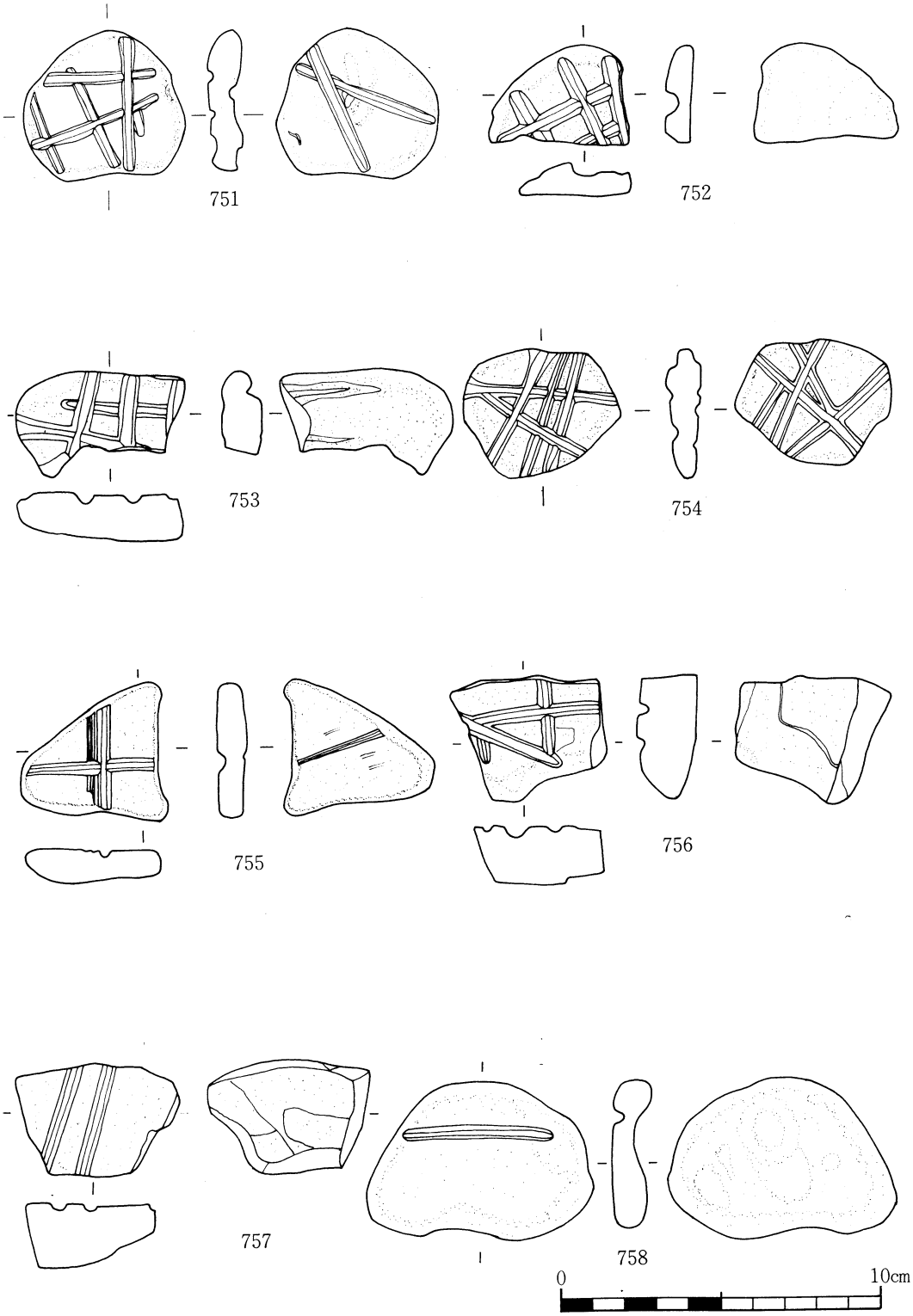
678はタタキ石と凹石の両用石器である。679はタタキ石である。

第26表　タタキ石・凹石諸訳

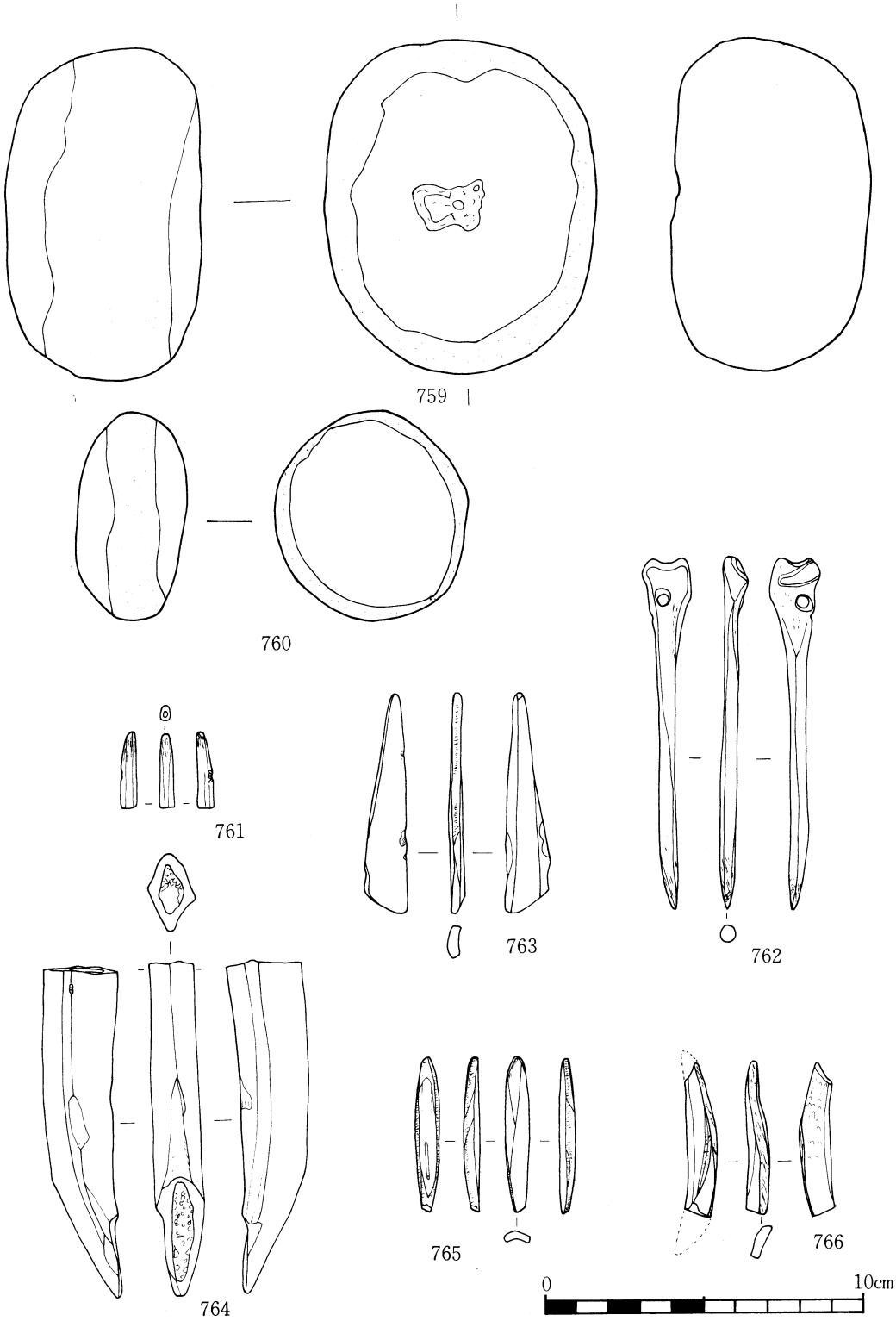
番号	出土区	層	法　量	重　量	番号	出土区	層	法　量	重　量
759	B－5		11.0×8.0×6.2	780g	760	A－5		6.7×6.0×3.5	190g

4）骨角器（680～685）

骨角器は6点出土した。761は猪の腓骨を利用したもので先端は尖らせている。762は猪の腓骨を利用したもので基部に3.5cmの穿孔を施したもので全身が11cm，径が5mmの製品である。これは針の一種で布に糸を通すために孔を開ける通孔具と思われる。穿孔は紐等をくくりつける部分で紛失防止のためと考えられる。763は長さ7.9cm，幅1.9cm，厚味4mmの三角形をしたもので刺突具と考えられる。764は長さ10.3cm，幅2.4cm，厚味1.9cmで骨の曲りを利用し，先端を尖らすようにカットしている。これは刺突具と考えられる。765・766は国分直一氏により教示された南方（台湾・華南地方）や，北欧に出土している原始的なつりばりである。763は長さ4.9cm幅8cm，厚味2.5mmで両端が尖り，直行している。一方の先端部は欠損しているが完形に近い。764は長さ4.8cm，幅9mm，厚さ4mmで，両端は欠損している。若干曲り気味である。762は足中骨が手中骨。763・764・765は大腿骨。766はケイ骨を使用している。獣はリュウキュウイノシシである。



第92図　長浜金久第Ⅱ遺跡の石器実測図



第93図　長浜金久第Ⅱ遺跡の石器，骨角器実測図

第３節　長浜金久第Ⅲ遺跡の概要

１．遺跡の概要

第Ⅲ遺跡は，第Ⅱ遺跡の南約 100m の所にある。標高は 9.9m で南北に長い砂丘の後面にあたる。後方地は小川が南北に流れ，湿地帯となっている。この遺跡は第１次調査では発見されておらず第Ⅲ次調査で確認した。

トレンチは東西に５本入れた。その結果第４トレンチで遺物を確認し，第５トレンチを入れ範囲を確認した。第94図はトレンチ配置図で，第１トレンチが２×８ｍ，第２トレンチが２×20ｍ，第３トレンチが２×10ｍ，第４トレンチが２×10ｍで，第４・５トレンチで表層の下，第Ⅱ層（深さ20cm）で土器・貝殻等を出土した。また，県道の断面にも遺物がみえ，２点の土器を断面より採集した。その結果，遺跡が道路側へ拡がることが確認された。

２．人工遺物

１）土器（767～772）

767は県道の断面より採集したもので，口径25cmの甕形土器である。口縁は「イ」字形の断面で内側が舌状になっている。765は第４トレンチより出土したもので，口径23.7cmで「く」字状に外反し，上下に孤状の連続文様を施している。769～771は５トレンチで出土したものである。769･771は厚味のある脚台で，770は厚味のない脚台であり，甕形土器の底部である。底径は769が 5.5cm，771は 5.6cm，770は10.5cmである。772は県道の断面より採集したもので壺形土器の底部である。若干丸底気味の平底である。焼成は良くない。これらの土器は茶褐色を呈し，サンゴや細礫を含んでいる。

これらの土器の時期は，甕形土器の口縁や，底部から考えると本遺跡は，767・769・771の弥生時代的な器形と，768と770の古墳時代的な器形があり，弥生後期から古墳時代にかけての時期と考えられる。

２）螺蓋利器

２点出土している。１点は半円状に剝がれ，１点は部分的に剝がれている。

なお本遺跡はトレンチ調査だけのため簡単に説明した。詳細は本調査後に説明したい。

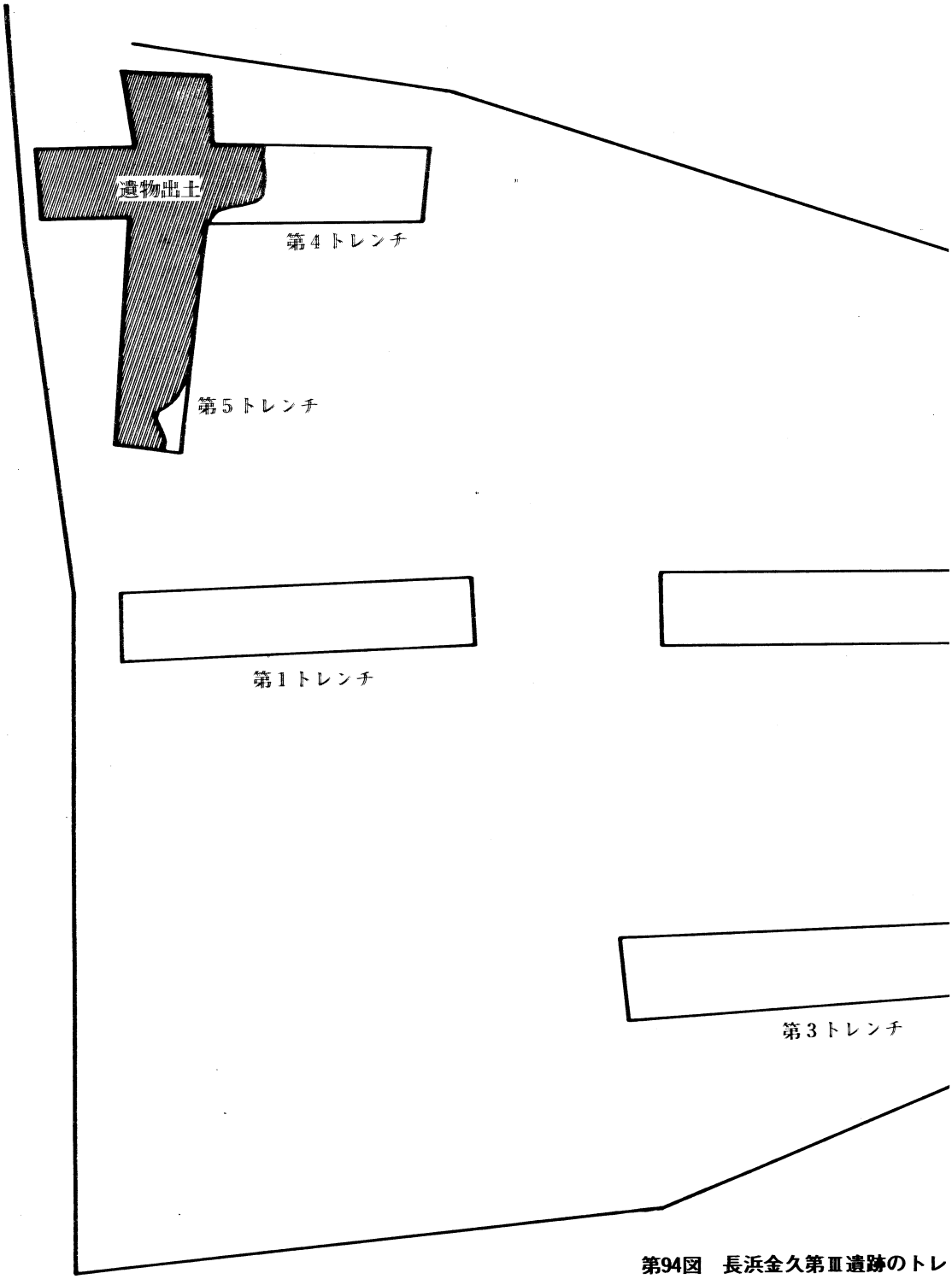
第４節　近代墓の概要

１．概要

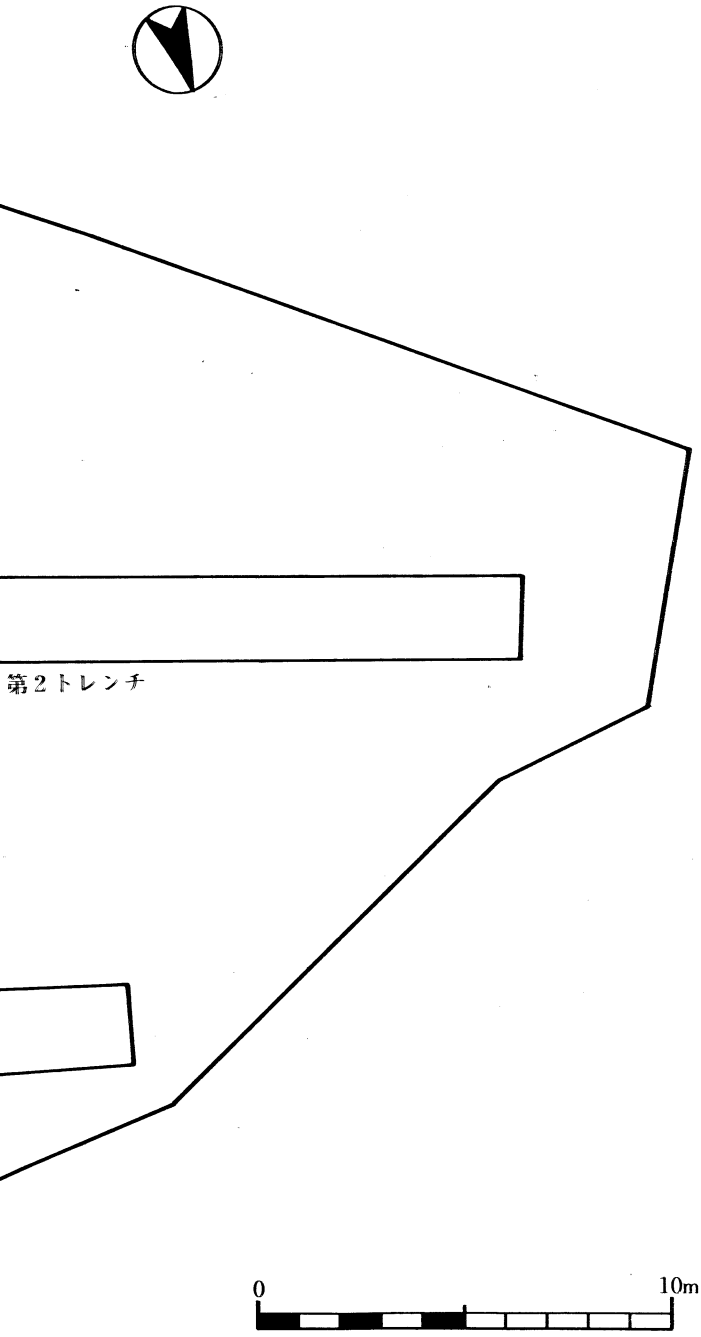
Ｇ―59区に２基近代墓が検出された。これは第Ⅱ次調査終了後，工事用道路の壁が砂丘のため風で崩れ一部露出したため発見された。発見当時は，笠利町教育委員会で応急処置をしてもらい，第Ⅲ次調査で調査した。

１号は幅50cm，長さ80cm，深さ12cm（上部はすべて剝がれていた）の土壙に埋葬されていた。供献品はギハ，クワ，ナベ，貝製のシャモジ，皿があった，人骨は女性であった。

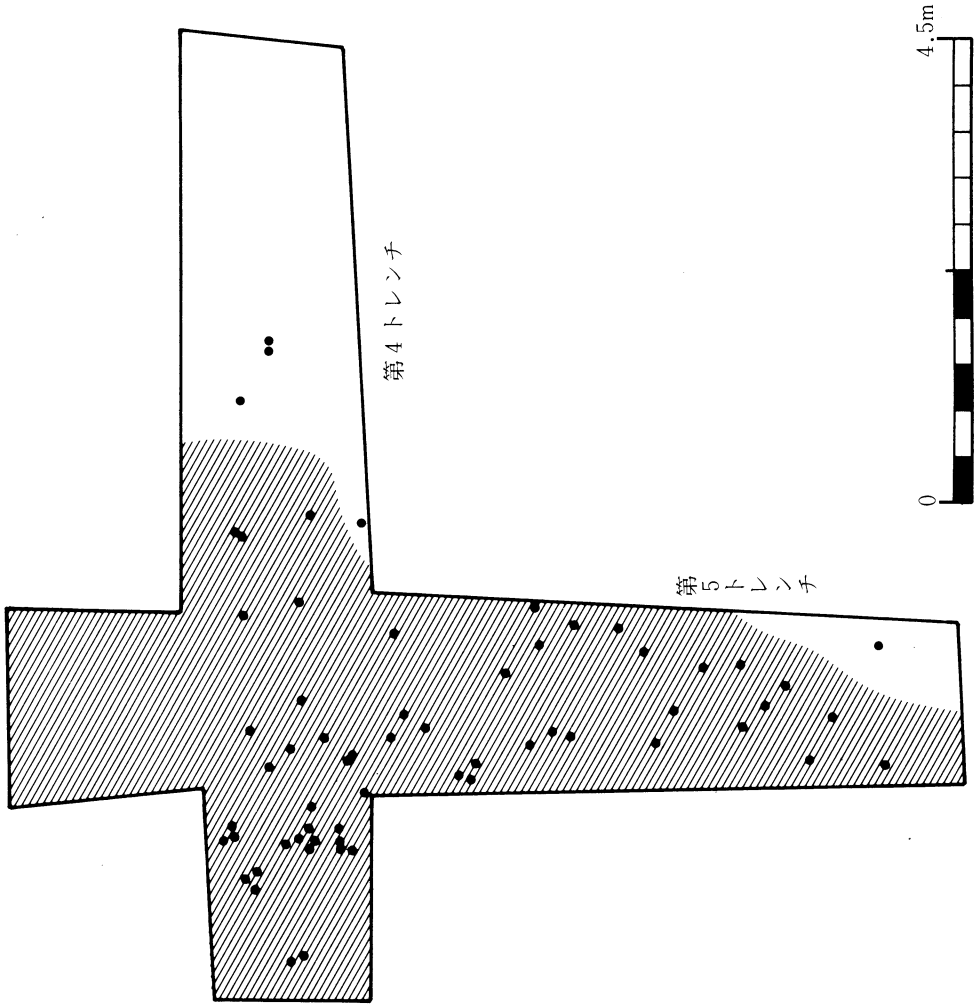
２号は幅40cm，長さ１ｍで，深さ12cm（上部はすべて剝がれていた）の土壙に埋葬され，供献品は茶碗，タバコ鉢，皿，チョコ，キセル，かやのつり金があった。また，シャツのボタン（ヤコウガイ製）や，クギが出土した。



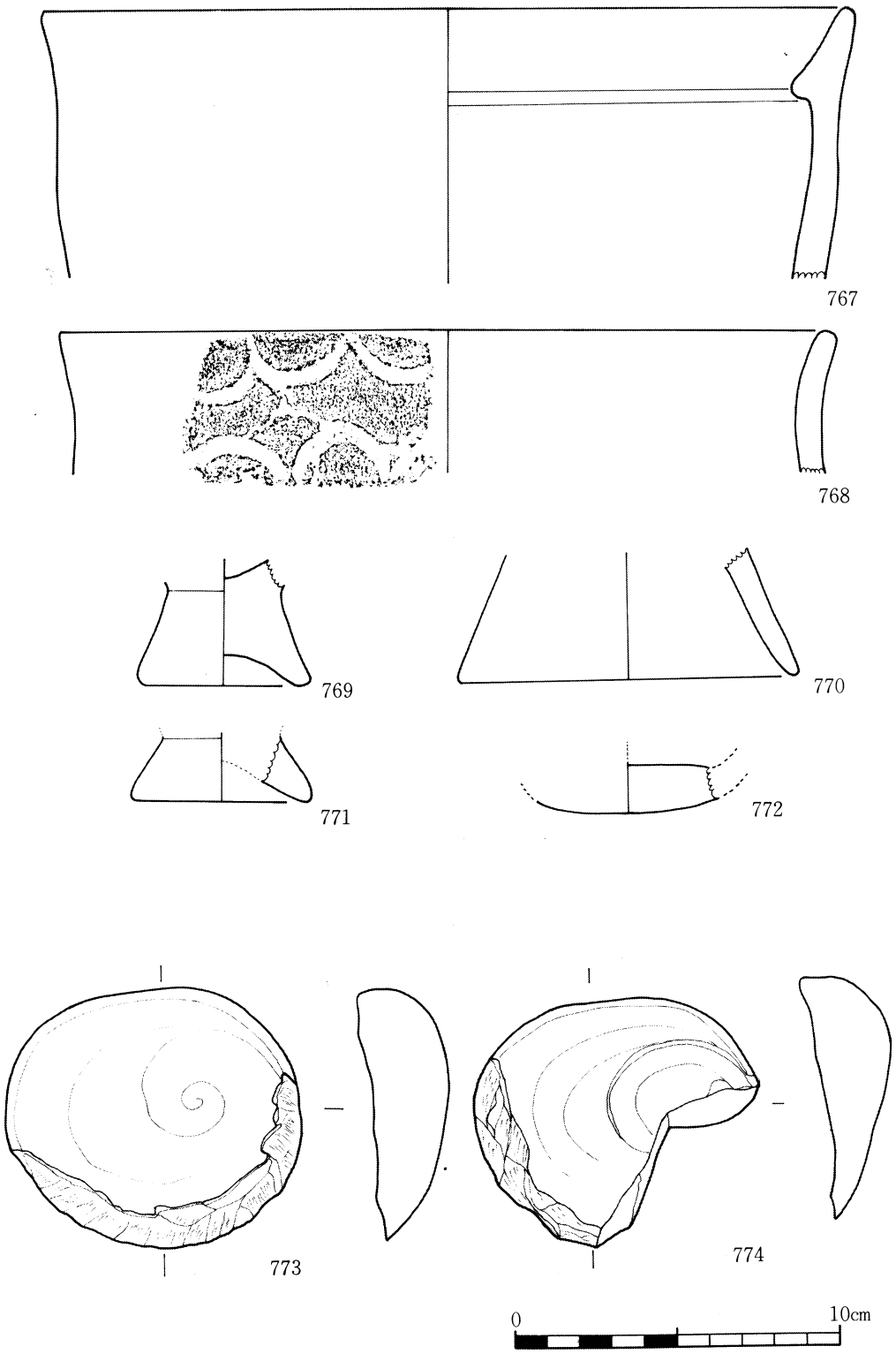
第94図　長浜金久第Ⅲ遺跡のトレ



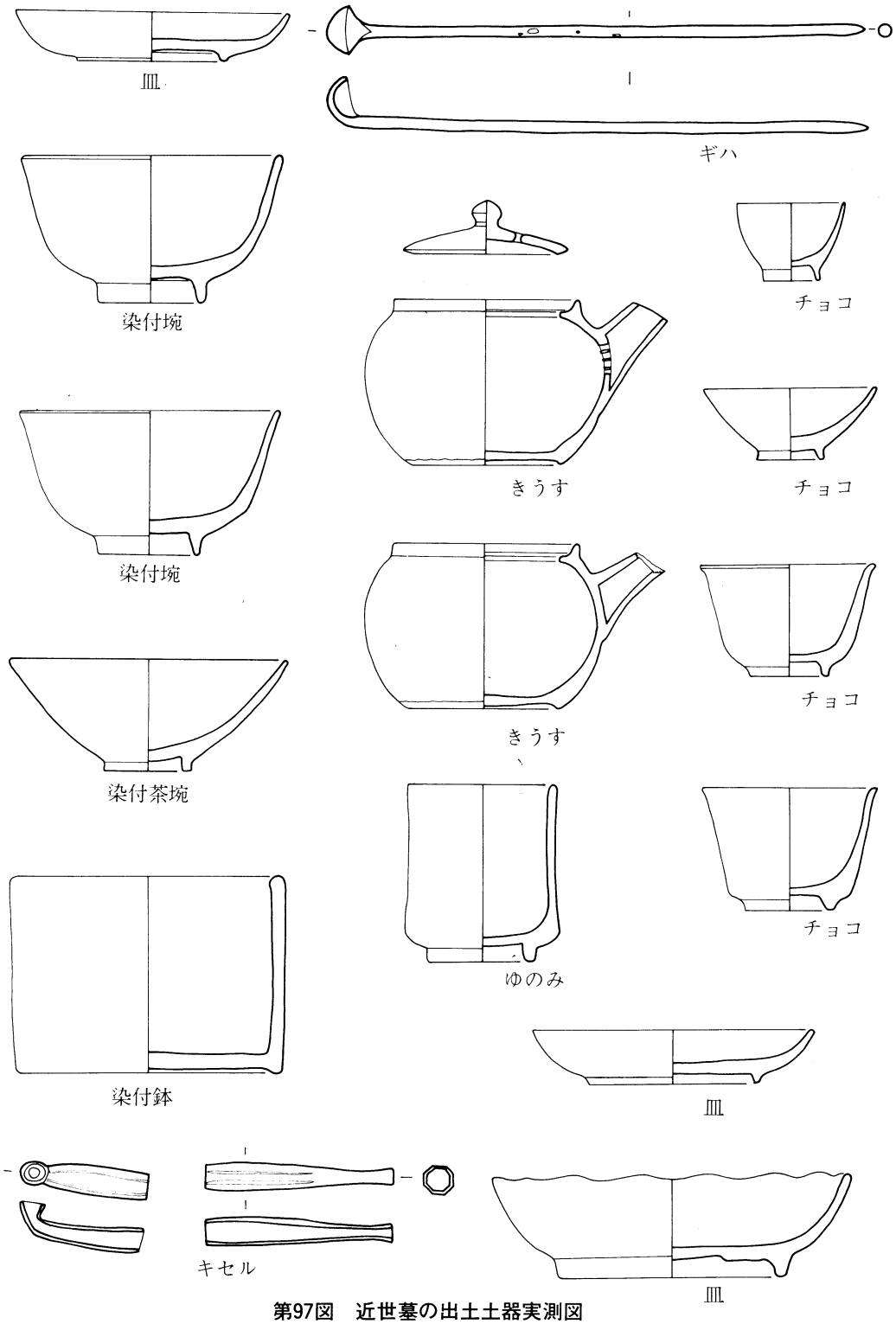
ンチ配置図



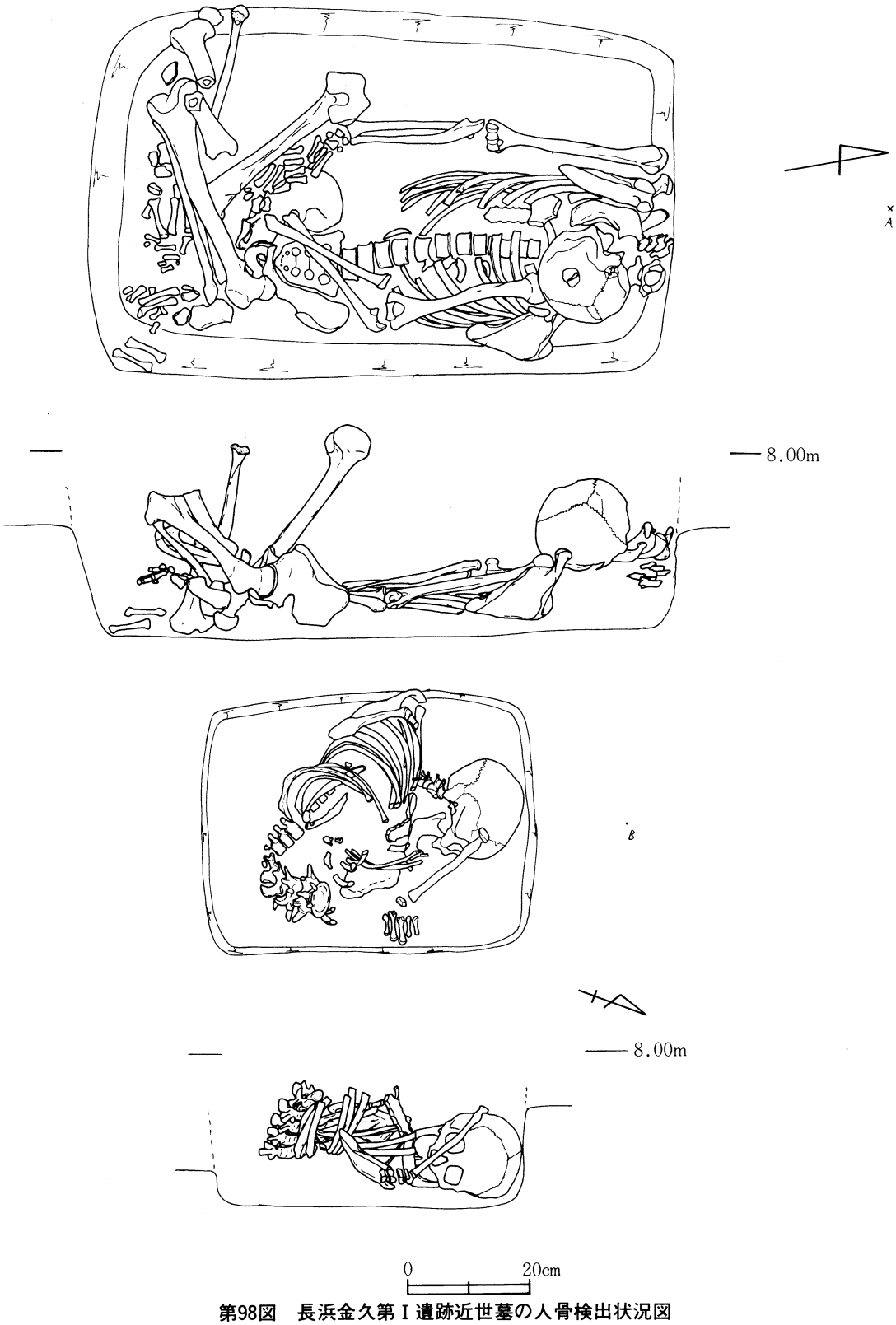
第95図　長浜金久第Ⅲ遺跡の第4・5トレンチ出土状況図



第96図　長浜金久第Ⅲ遺跡の出土遺物実測図（土器・貝器）



第97図　近世墓の出土土器実測図



第98図　長浜金久第Ⅰ遺跡近世墓の人骨検出状況図

第Ⅳ章　まとめ

長浜金久遺跡は，第Ⅰ遺跡・第Ⅱ遺跡・第Ⅲ遺跡，それに近世墓からなる砂丘遺跡である。

調査の結果，これらの遺跡は山手側より海側へ砂丘形成が，発達につれて生活地域が移り変る状況が把握され，第Ⅰ遺跡は最も海側の砂丘で，古墳時代末期より平安時代前期にかけての遺跡で，第Ⅱ遺跡は最も山手側の砂丘にあたり，縄文時代後期の遺跡であることが判明され，最後に，第Ⅰ遺跡と第Ⅱ遺跡の中間に位置する第Ⅲ遺跡が弥生後期より古墳時代相当の遺跡であることが確認された。

なお遺跡は他にケジ遺跡・下山田遺跡・和野トフル墓・泉川遺跡等も遺跡の存在が再確認された。

長浜金久第Ⅰ遺跡

長浜金久第Ⅰ遺跡は現在残っていた3,600㎡を全面記録保存調査を行った。その結果大量の貝殻と土器・石器・鉄器等が出土し，包含層が3枚確認された。3枚の包含層は放射性炭素測定を行った結果上部から第9層の 690±20 B.P.Y.(絶対年代ＡＤ1240～1290)，第13層の 930±20 B.P.Y.(絶対年代ＡＤ1020～1050)，第19層の1120±20 B.P.Y.（ＡＤ830～890）の年代が測定された。

各層の内，間層が認められる部分においては第9層には土器片は出土せず，第13・19層に土器片が出土した。しかし，第13層は土器片2点(細片で器形不明)と鉄器片1点だけであった。

貝殻の出土状況としては，第9層・第13層においてはブロック状に貝殻集中箇所がみられ，第19層には貝殻集中箇所と散乱箇所がみられた。貝殻集中箇所の附近には，ヤコウガイ製の貝製容器や，シャコガイが検出されている所が目に付き，貝殻集中箇所の中央部附近には焼貝，ならびに[註1]炭粉の拡がっていた。これらの様相から貝製容器は調理器としての可能性が高い況状を得た。

また，有孔貝は紐通しがあった状況に出土し，紐を通して使用したことが伺えられた。そして，貝刃とか，螺貝製貝斧と呼ばれている貝器は本遺跡の分析の結果，敲打器の類に属するものが妥当である見解を得[註2]て螺蓋利器とした。

土器は弥生時代後期に設定されていた兼久式土器が主に出土した。しかし本遺跡で放射性炭素測定の結果第19層[註3]1120±20 B.P.Y.(絶対年代ＡＤ830～890)[註4]が測定され，9世紀まで下ることが考えられた。しかし，他に面縄第Ⅰ貝塚Ⅳ層では1355±60 B.P.Y.(絶対年代ＡＤ650)，第2アヤマル貝塚では1100±130 B.P.Y.(絶対年代ＡＤ910)[註5]が測定されている。

本遺跡の兼久式土器の甕形土器は第Ⅰ類から，第Ⅴ類[註6]まで分けられ，第Ⅰ類・第Ⅱ類は面縄第Ⅰ貝塚の第Ⅳ層出土の類と同じで沈線文ならびに沈線文＋刻目突帯が付く土器である。この類は兼久式土器の初期の段階で7世紀の所産と考えられる。第Ⅳ類は本遺跡の放射性炭素測定値に属すると思われる。9世紀の所産と考えられ，突帯文に荒い大きな刻目と指圧で突帯をつぶした土器類がみられる。第Ⅴ類は突帯のみのもので器形的に口縁部が内傾している。アヤマ

ル第Ⅱ貝塚で10世紀の放射性炭素測定値が得られ，この土器の一部が第Ⅴ類に類似している。この第Ⅴ類の土器は突帯に刻目が施されていない。

また無文土器も多く出土している。無文土器は面縄第Ⅰ貝塚では第Ⅳ層出土の土器は口縁部が外向し，第Ⅱ層出土のものは内向し，肩部が下がっている。本遺跡では口縁部が外向・直向内向の３類がみとめられ，面縄第Ⅰ貝塚の傾向によって無文土器の分類を行った。[註7]

壺形土器も甕形土器と同様な分類を行った。ただ口縁部の傾向は第Ⅴ類において口径が広くなり，頸部が短い。

土師器においては甕形土器が10点出土している。９世紀から10世紀にかけての土器で内側にヘラケズリの痕がみられる。

黒色をした土器は，器形としては白磁の器形をしている。両面が研磨され，胎土も黒色である。時期不明である。

鉄器としてはヘラ状鉄製品が出土している。石器としては凹石・タタキ石・クガニイシが出土している。

第100図はこれらを分類を行ったものである。兼久式土器の前段階として，第21層より出土した土器をあてた。この土器は沈線文土器で器形も異なっている。また第Ⅲ遺跡の遺物は地形上それ以前の土器と思われる。

長浜金久第Ⅱ遺跡

この遺跡は最も山手側の砂丘遺跡で，新砂丘と旧砂丘に分けられている。縄文期と弥生期の遺跡である。遺構としては，住居跡・炉跡・集石・土壙が旧砂丘にあり，埋葬人骨・土壙が新砂丘に検出した。遺物出土状況としては旧砂丘上にあり急に傾斜し，最も低い標高６ｍラインでは海岸にみられるサンゴや貝殻が磨耗した状態で出土した。

住居跡は2.3×2m，深さ20～30cmの堅穴住居址で一部石囲いがみられた。炉跡は住居跡の西に検出された。

また，埋葬人骨の時期推定は，新砂丘内にあり，この砂丘の層より外耳土器や小形の鉢が出土したため弥生期の可能性が強い。[註8]

土器としては，本遺跡ではⅠ類からⅪ類まで出土した。これらは層位的に分けられない状態で混貝土層の包含層に出土した。そのため器形・文様で分類し，今後の検討資料として本遺跡の分類を試みた。第101はその図でⅠ期からⅥ期にわたり各類の流れが考えられた。

第Ⅰ期

この土器は第Ⅲ・Ⅸ類にあたり，口縁部が山形肥厚するタイプである。文様は押し引き類似の連点や沈線で施されている。胴部には文様は施されていない。これは面縄東洞式より一時期古いタイプと思われる。[註9]

第Ⅱ期

この土器は第Ⅰ類の土器である。胴部は不明であるが口縁部に押し引き文と折れ線文ならびに折れ線区画文を施している。これは嘉徳Ⅰ式にあたりその中でもＡタイプに属すと思われる[註10]

が，面縄東洞式の籠目文の延長上にあるもので折れ線区画があるため長浜金久Ⅱタイプに含めた。

次の土器類が本遺跡の主体をなす時期である。文様としては押し引きではなく，刺突連続文と鋸歯文を重ねた重鋸歯文を施すのが特徴である。第Ⅱ類のａ～ｅのバリエーションをもつ，長浜金久タイプの土器である。これには嘉徳工式Ｂも含まれる。

Ⅰ類からの流れとしてはａ類が考えられる。[註11]この類は口縁部に折れ線区画文とその区画内のすべてに刺突連続文を施し，胴部に重鋸歯文がある土器である。ａ類のあとにくるのがｂ類で折れ線区画文内に刺突連続文を施さないものである。口縁部と胴部の文様構成はａ類と同じである。ｂ類のあとにくるのがｃ・ｄ類で，ｄ類の折れ線区画文かなくなり，沈線と刺突連続文と重鋸歯文の文様構成の土器類である。器形的には山形口縁部の高さが低くなっている。ｃｄ類のあとにくるのがｅ類で，c-d 類の沈線が消えて刺突連続文と重鋸歯文の組み合せである。カーボン測定結果の3100±20 B.P.Y. はこの第Ⅱ期が妥当であろう。

第Ⅲ期

この土器はｅ類のあとにくる重鋸歯文のみの土器である。（第Ⅳ類）

第Ⅳ期

この第Ⅳ期の土器は第Ⅲ期の第Ⅳ類の重鋸歯文が変化したと考えられる文様をもつ。文様の沈線は細く，７～８本の沈線を縦・横・斜に施している。口縁部は平坦である。

第Ⅴ期

この第Ⅴ期の土器は第Ⅳ類で沈線がやや太く荒い。そして口縁部に突帯が付き，文様は第Ⅳ類の影響が考えられる。

第Ⅵ期

この第Ⅵ期の土器は第Ⅷ類で下に突帯が付き口縁部には沈線を施す。この土器は面縄西洞式に属すると思われる。

以上が土器類の変化である。なおこの中で第Ⅱ期にみられる本遺跡の第Ⅱ類土器はバリェーションが豊富であるため，これまで言われてきた嘉徳Ⅰ式Ｂをここでは，長浜金久タイプとして取り扱った。

出土土器の長浜金久タイプ（嘉徳Ⅰ式Ｂを含む）は時期としては縄文時代後期と設定され放射性炭素測定結果では，3100±20B.P.Y. で後期後半の時期が考えられる。

また本遺跡では面縄西洞式も出土している。この土器は犬田布貝塚(大島郡伊仙町)では3170±200B.P.Y, 2820±110 B.P.Y. の結果がでている。ここでは炭素[註12]使用量が前項0.938gに対し，後項の1.77g となっており，後項を使用したい。

第101図は長浜金久Ⅱタイプ（嘉徳Ⅰ式Ｂを含む）を中心として分類を試みた図である。

面縄東洞式の押し引き連続文は本遺跡に出土していない。

第Ⅱ期を本遺跡の長浜金久Ⅱ[註13]タイプとした。これは折れ線区画文と重鋸歯文の組み合せ，ならびに刺突連続文を施したものと，刺突連続文と重鋸歯文の組み合せをもつバリェーションの

土器である。図では面縄東洞式からの流として，Ⅰ・Ⅱａ～ｅ類の分類を行った。

貝製品としては貝符状貝製品が出土している。これは面縄第２貝塚[註14]や，犬田布貝塚でも出土している。考えかたとしては国分直一氏教示の「家文」的な取り方が良いと考えられる。

またソデガイや，フデガイの貝製品は紐づれ等が無く，垂飾品としても，どの様な形態のものか不明である。ただ埋葬の中に１点タケノコガイが出土しているため，貴重なものと考えられる。考えかたとしては垂飾品の内でも「笛」的なものも考えられるが，今後の研究を待ちたい。

他の垂飾品としては貝輪が 113本出土している。すべて破損品であり，112 本がオオツタノム，１本がコホウラ製である。破損品の内，２本が接合により完形になった。これだけの破損品があることから本遺跡は貝輪の工房も考えられる。

石器としては研磨器が８点出土し，貝輪工房としても十分考えられる。

骨角器の中ではつりばり[註16]が注目される。本遺跡では2点であるが今後資料が増えると思われる。

埋葬人骨は弥生期のもので[註17]同層に外耳土器が出土したので中期以後のものと考えられる。

長浜金久第Ⅲ遺跡

第Ⅲ遺跡は古墳時代が中心と考えられる遺跡であるが試掘にとどまった。

近世墓

近世人骨は２葬出土し，昭和初期としてあつかった。

以上，長浜金久遺跡の要点を上げた。詳細は本文中に記載した。

参 参考文献

註１．木下尚子　「貝製容器小考」南島考古№７　1981

２．三島　格　「螺蓋製貝　について」賀　　夫還暦記念論文集　19

３．河口貞徳他「サウチ遺跡」笠利町教育委員会　1978

４．河口貞徳　「奄美における土器文化の編年について」鹿児島考古９号　1974

５．牛ノ浜修他「面縄第１．第２貝塚」伊仙町教育委員会　1983

６．池畑耕一他　「あやまる第２貝塚」笠利町教育委員会　1984

７．５と同じ

８．３と同じ

９．４と同じ

10．４と同じ

11．４と同じ

12．吉永正史他　「犬田布貝塚」伊仙町教育委員会

13．４と同じ

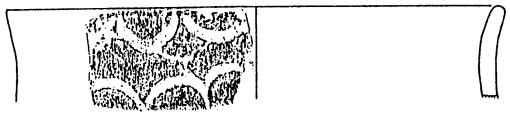
14．５と同じ

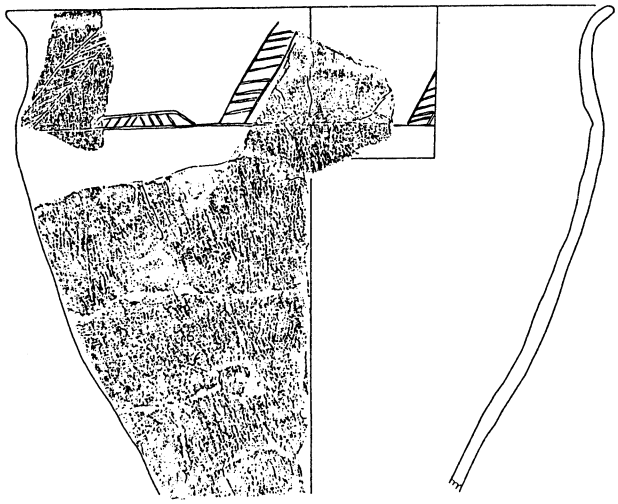
15．12と同じ

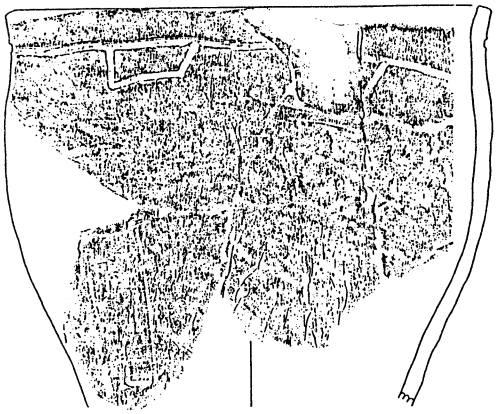
16．出口　浩他「宇宿貝塚」笠利町教育委員会　1979

17．国分直一教示

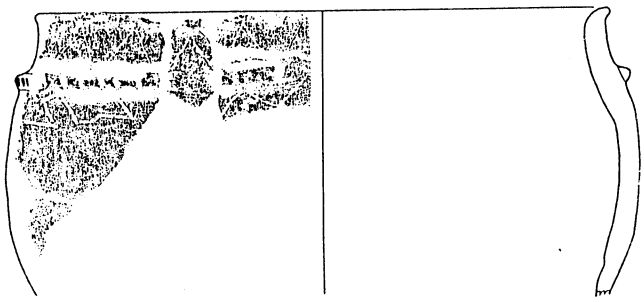
6 世紀頃

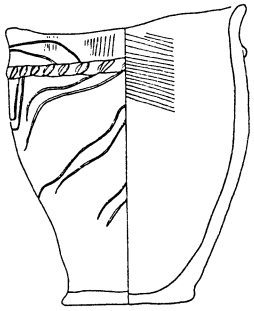


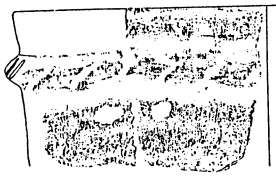


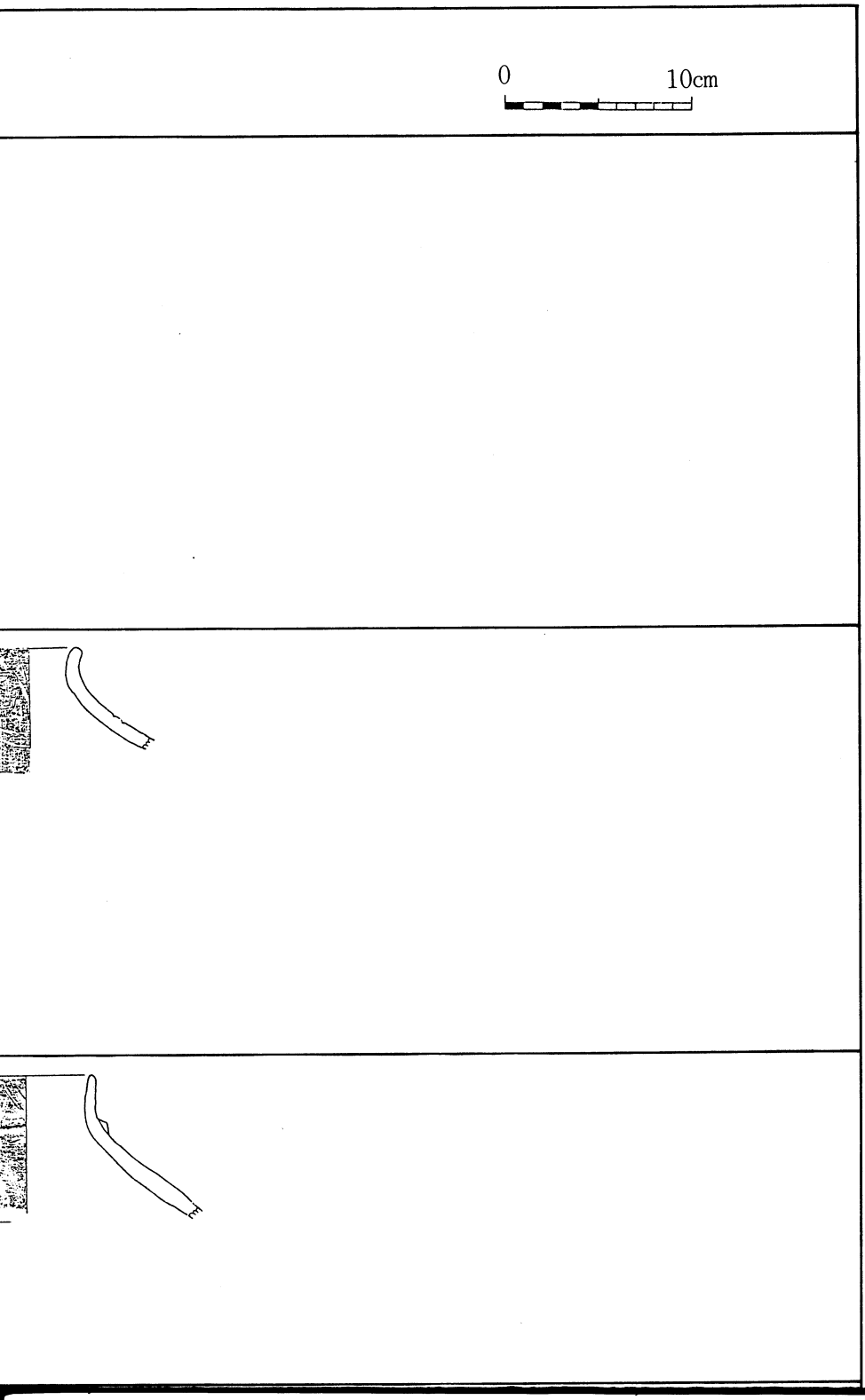


7 世紀
面縄第Ⅰ貝塚Ⅳ層
1355±60 B.P.Y.
A D 650

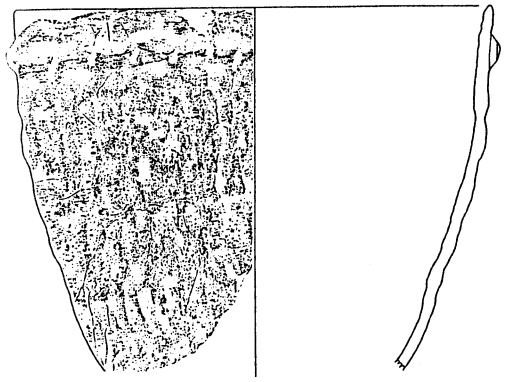


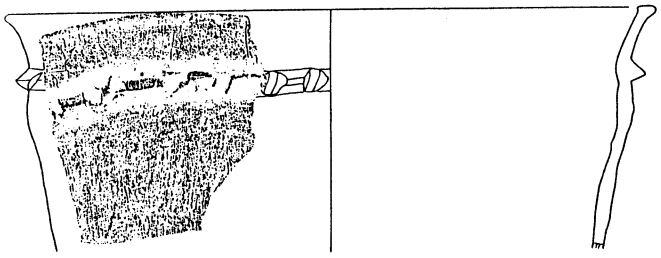





0
10cm

8 世紀頃

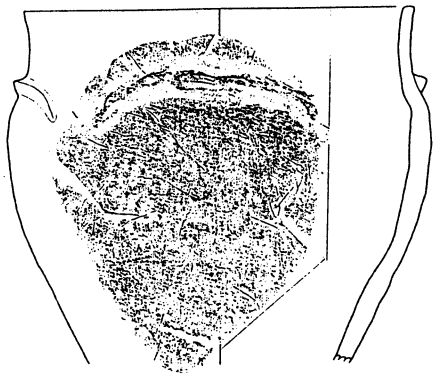


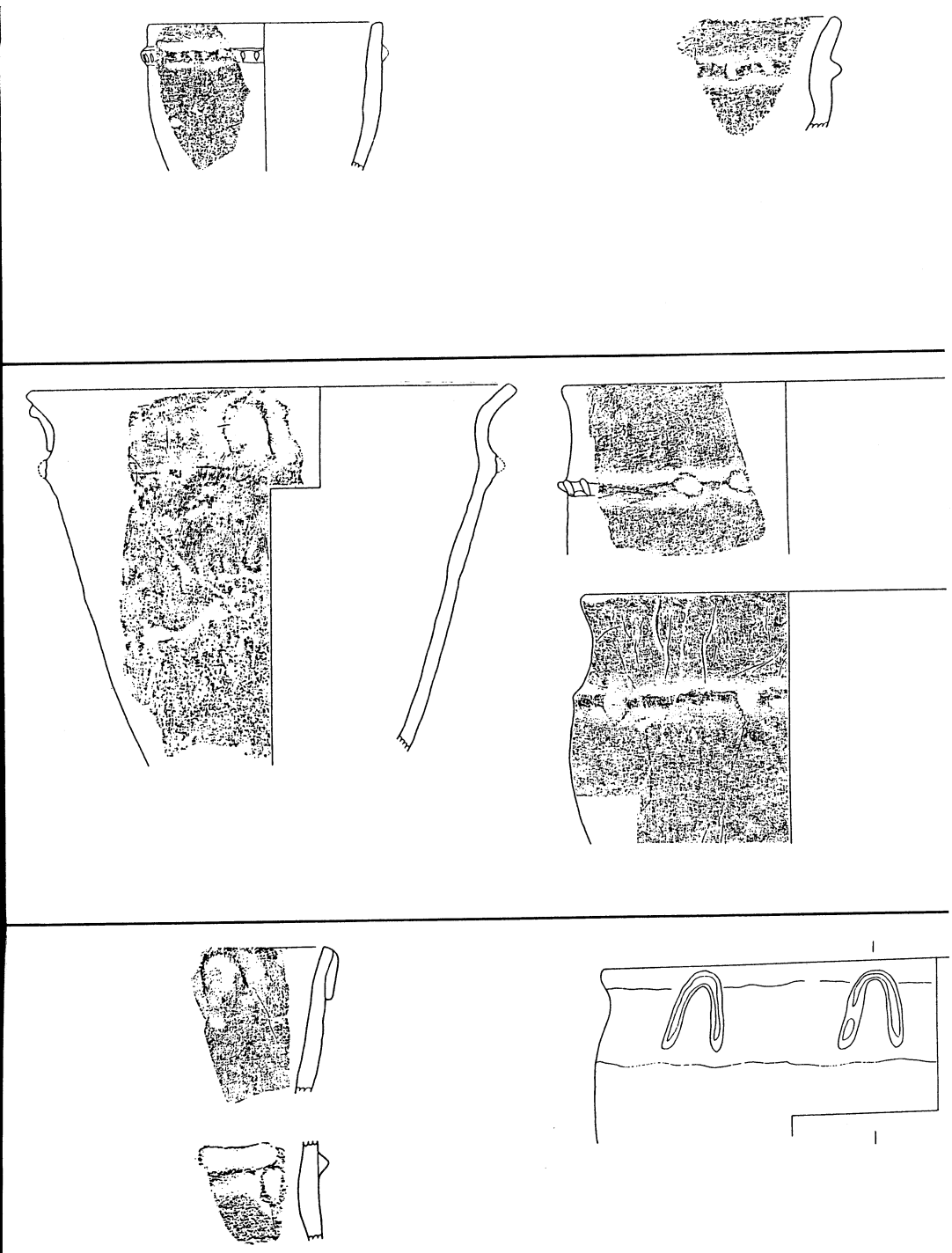


9 世紀
長浜金久第Ⅰ遺跡
第19層
1120±20B.P.Y.
ＡＤ 830～890

第２あやまる遺跡
第６層
1100± 130B.P.Y.
ＡＤ910

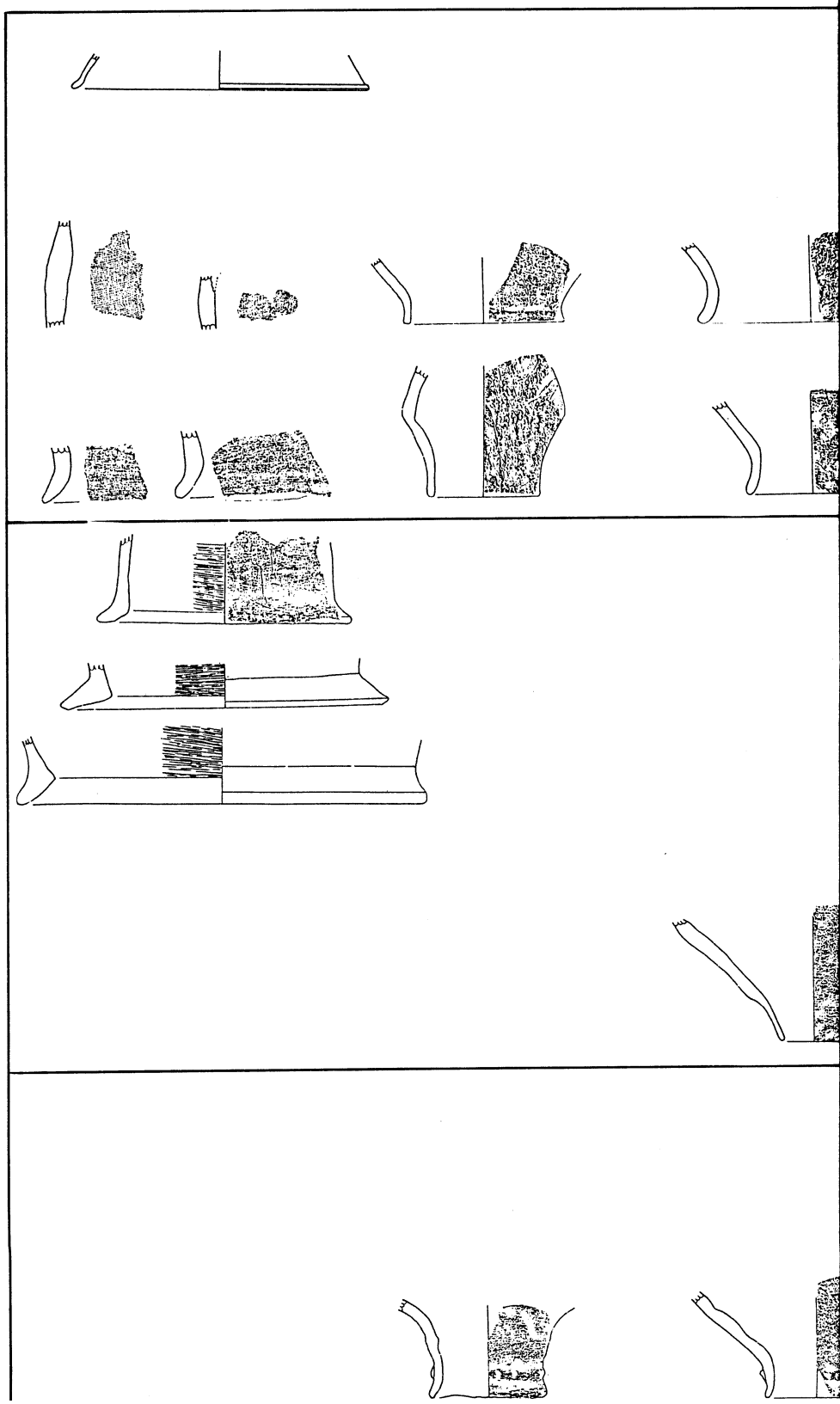
10世紀



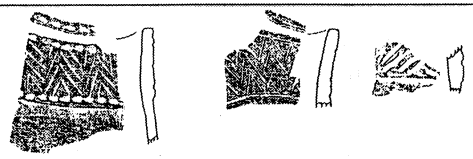


第100図　長浜金久第

Ⅰ遺跡の分類図



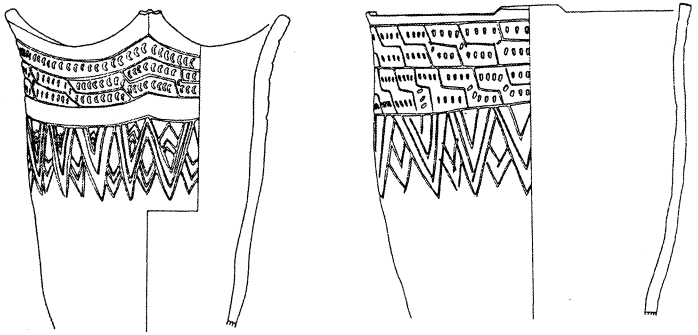
Ⅰ期



（Ⅲ類・Ⅸ類）

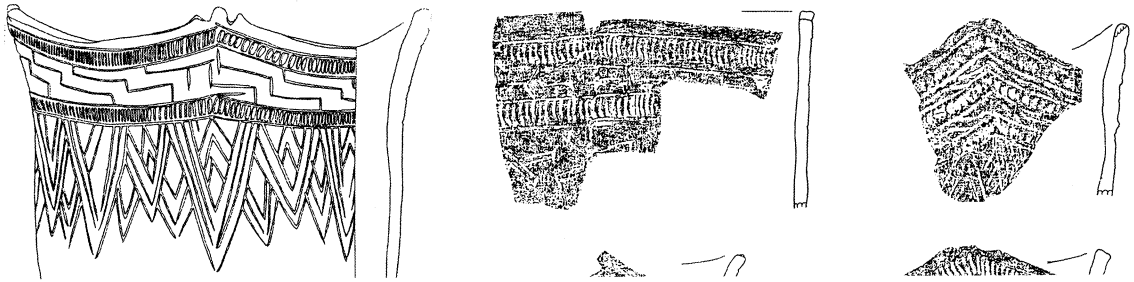
面縄東洞式　嘉徳Ⅰ式A（折れ線文のない土器）

（Ⅰ類）



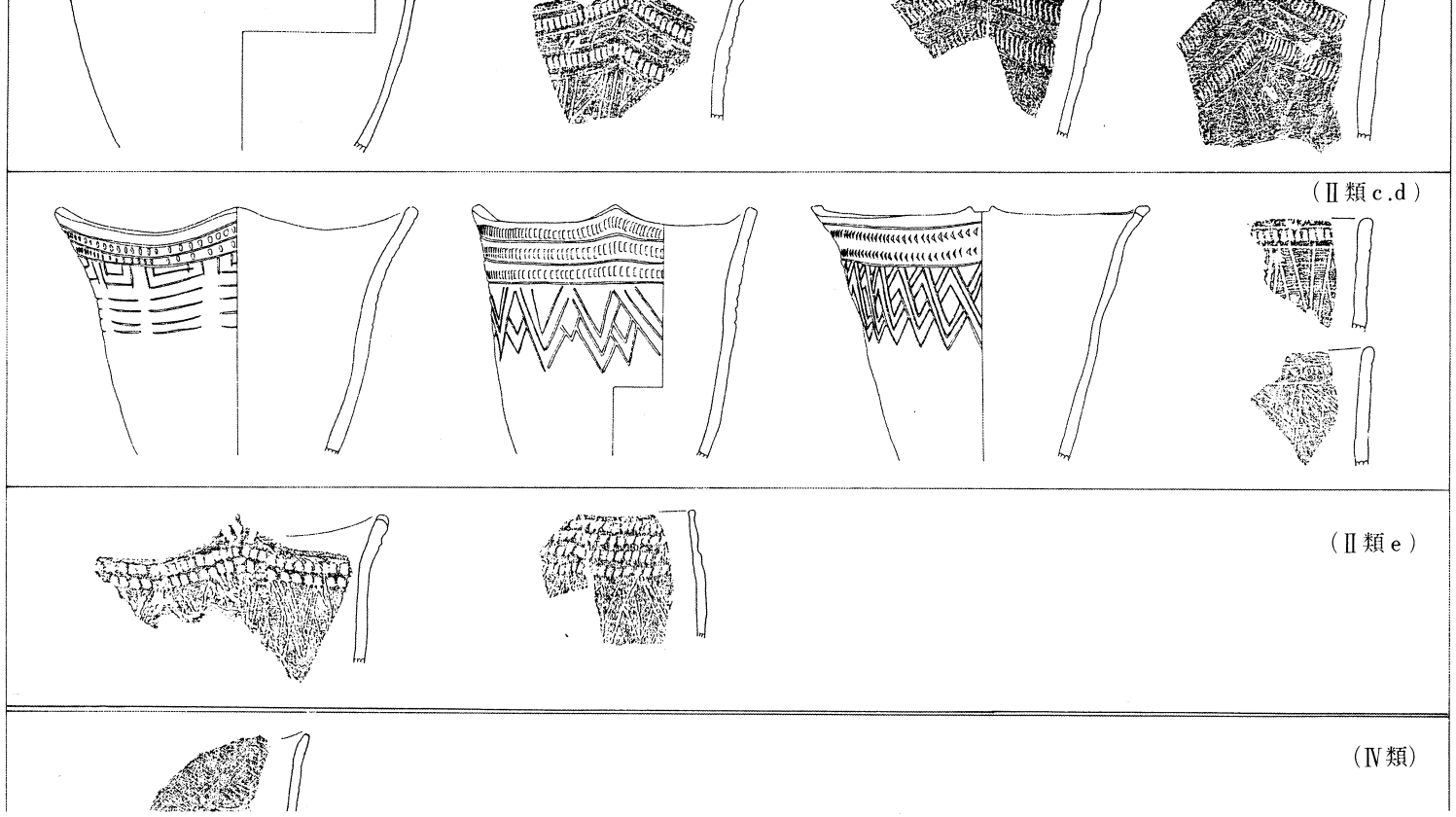
（Ⅱ類a）

Ⅱ期（長浜金久タイプ）

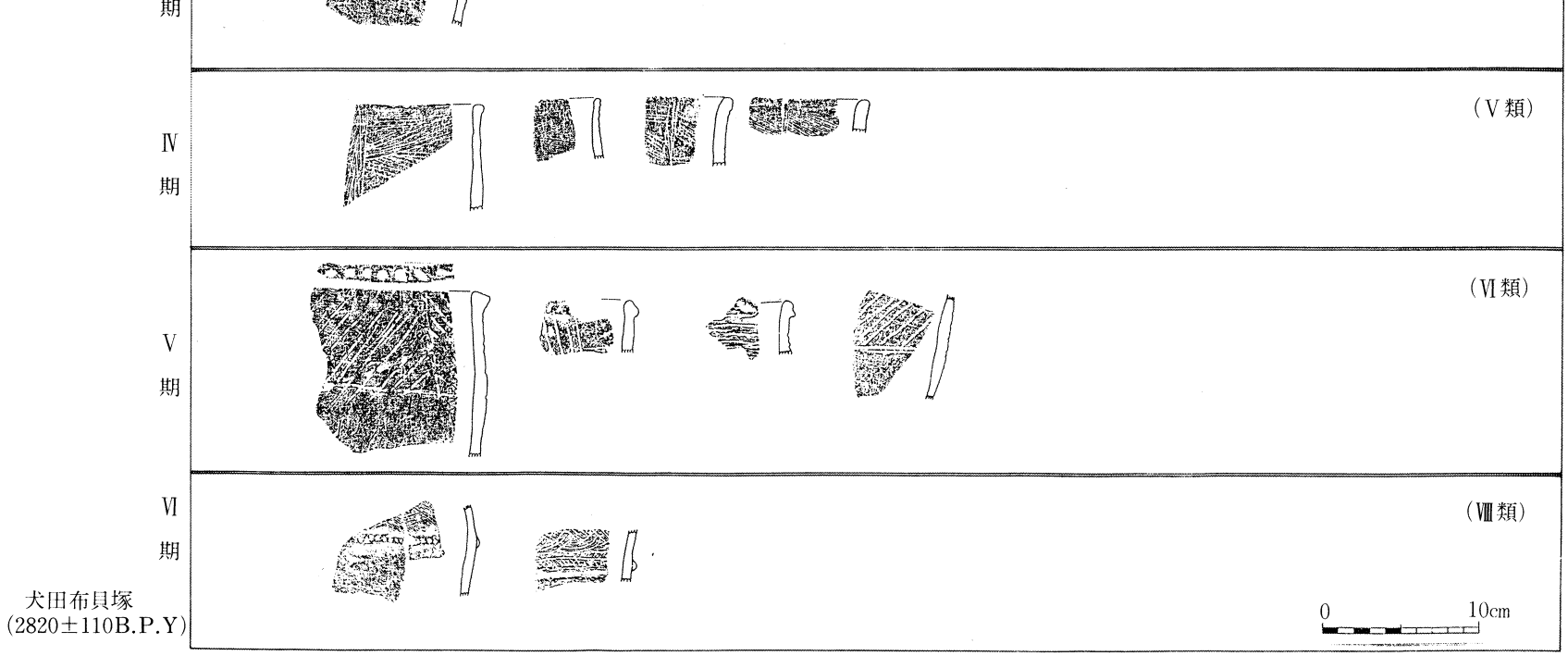


（Ⅱ類b）

(長浜金久第Ⅱ
3100±20B.P.Y)



Ⅲ



第101図　長浜金久第Ⅱ遺跡の分類図

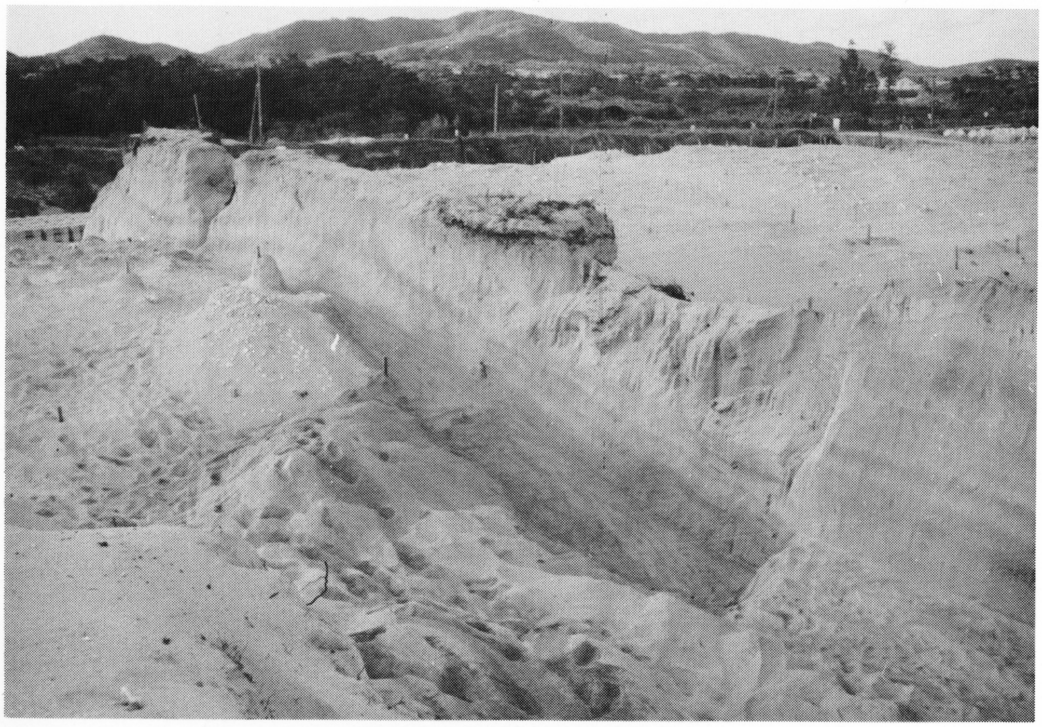
長浜金久遺跡全景

長浜金久第 I 遺跡近景

図版 2

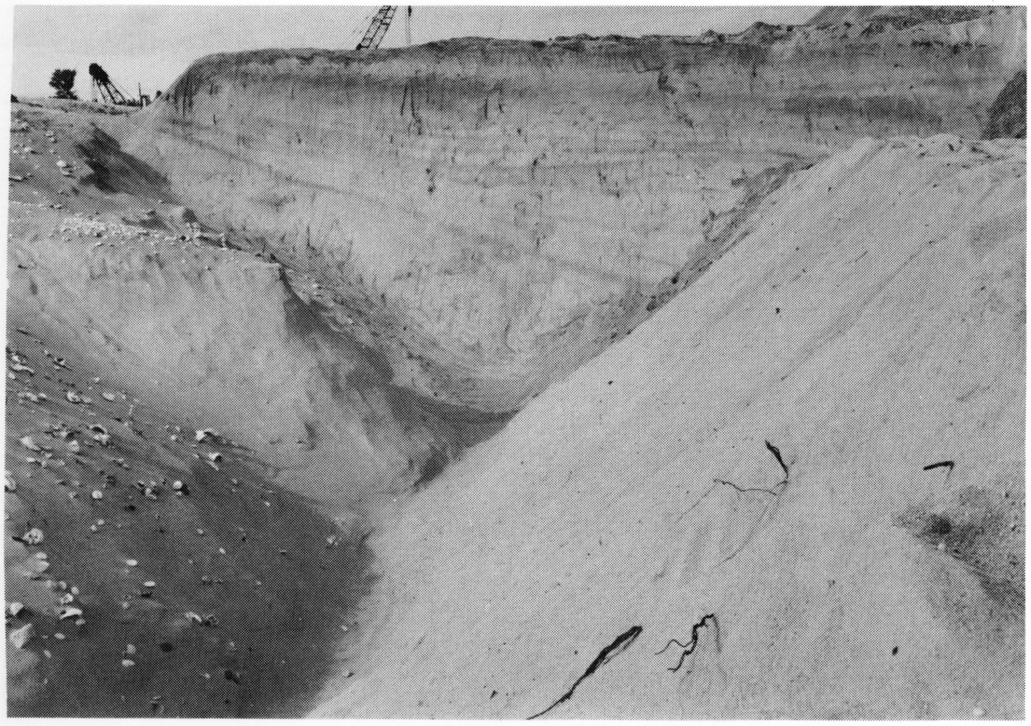
長浜金久第Ⅰ遺跡調査風景

長浜金久第Ⅰ遺跡調査風景



長浜金久第Ⅰ遺跡地層断面

長浜金久第Ⅰ遺跡地層断面



図版 4

長浜金久第Ⅰ遺跡第19層出土状況

長浜金久第Ⅰ遺跡第19層出土状況

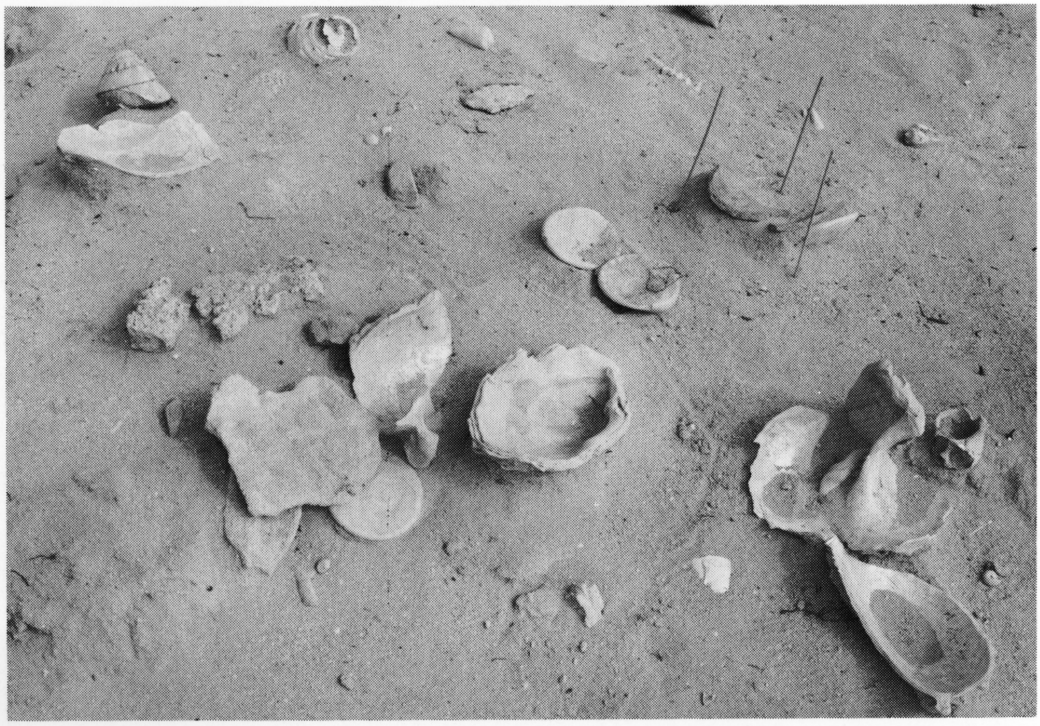
長浜金久第Ⅰ遺跡出土状況（頂上部）

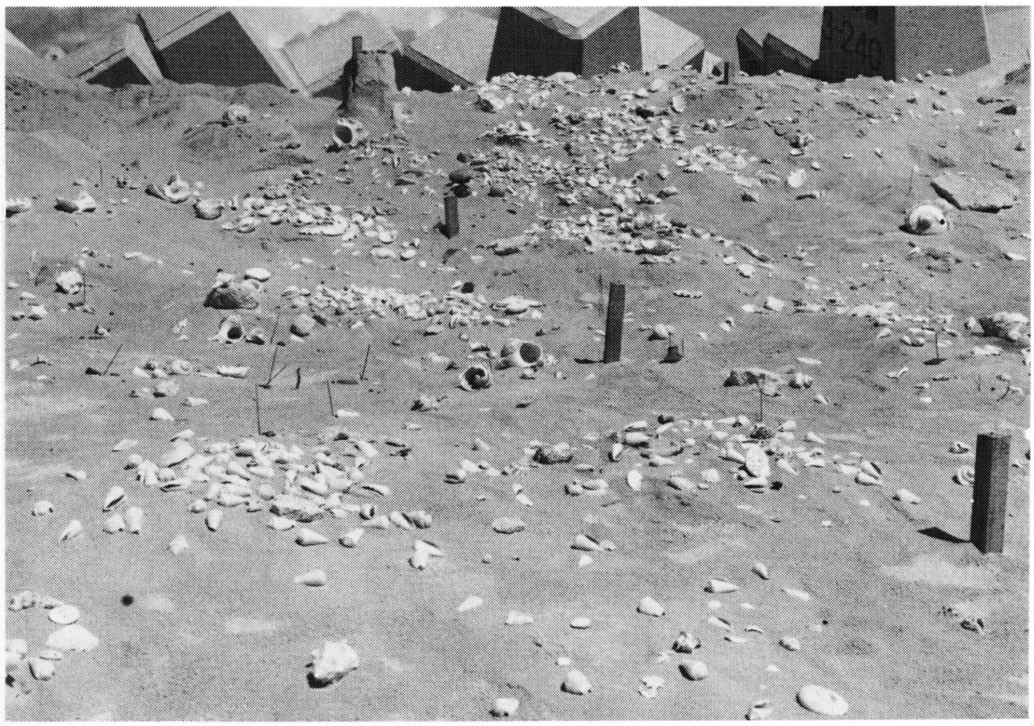
長浜金久第Ⅰ遺跡出土状況（頂上部）

図版 6

長浜金久第Ⅰ遺跡出土状況

長浜金久第Ⅰ遺跡出土状況

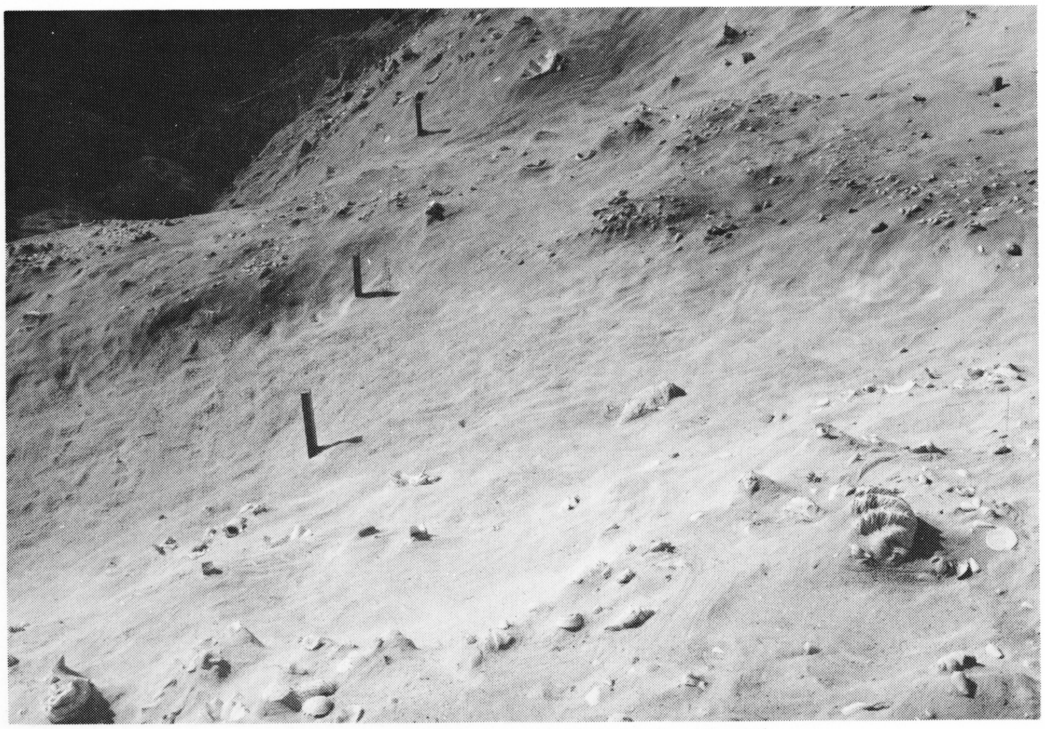




長浜金久第Ⅰ遺跡出土状況（第19層）

長浜金久第Ⅰ遺跡出土状況（第13層）

図版 8

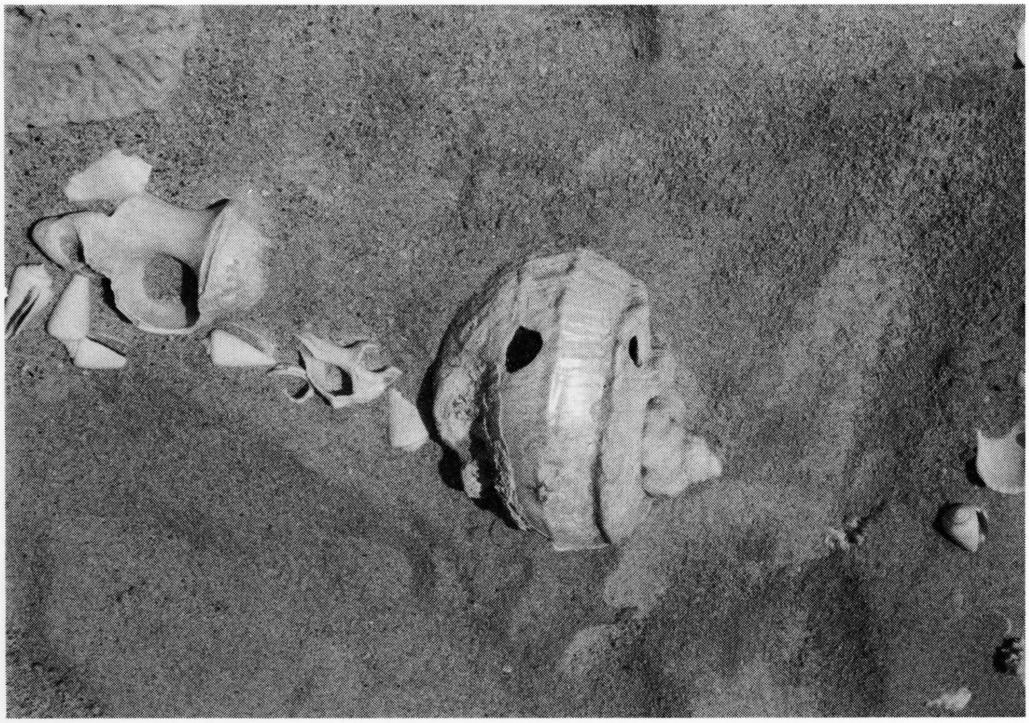


長浜金久第Ⅰ遺跡出土状況（第13層，第19層）

長浜金久第Ⅰ遺跡出土状況（第19層）

長浜金久第Ⅰ遺跡有孔貝出土状況

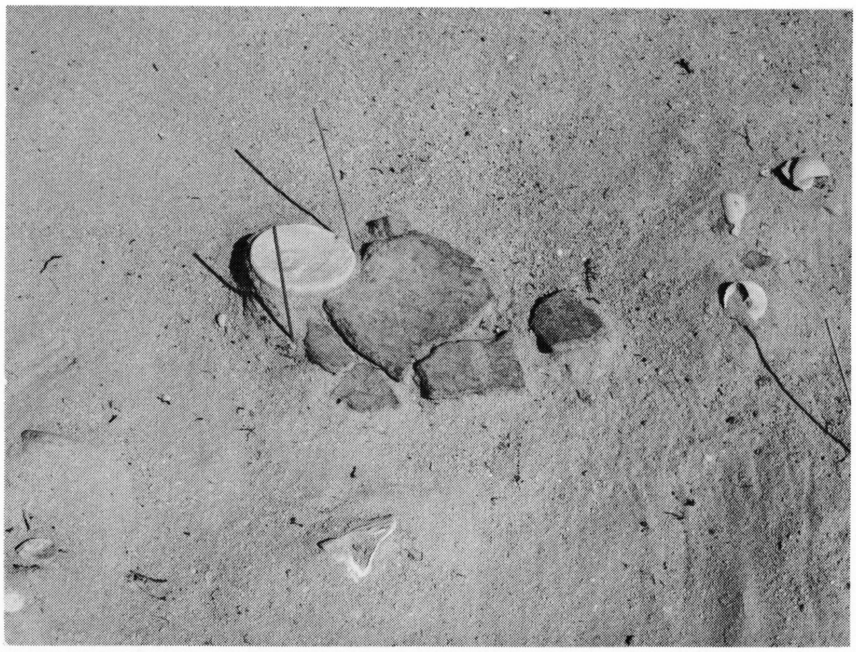
長浜金久第Ⅰ遺跡穿孔貝出土状況



図版10

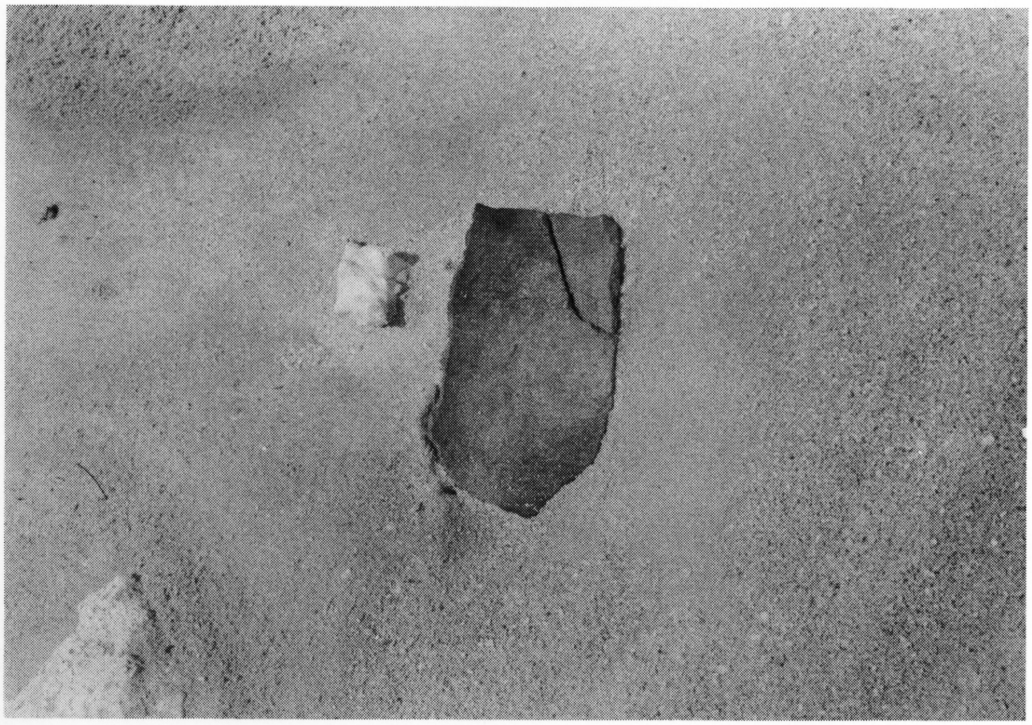
長浜金久第Ⅰ遺跡螺蓋利器出土状況

長浜金久第Ⅰ遺跡焼跡

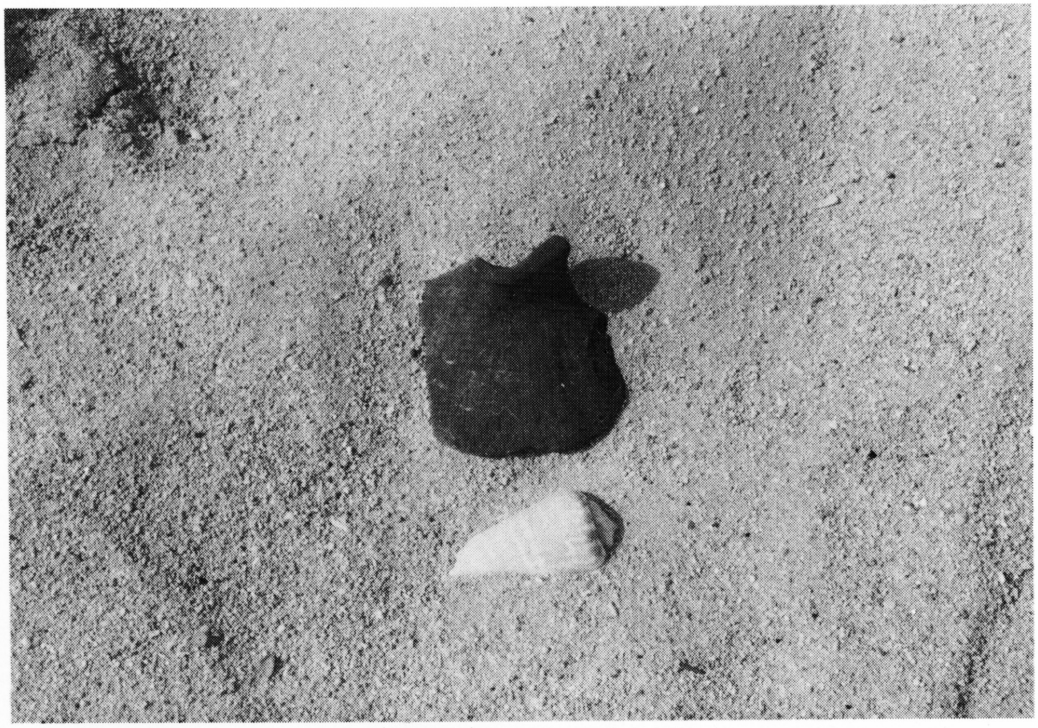


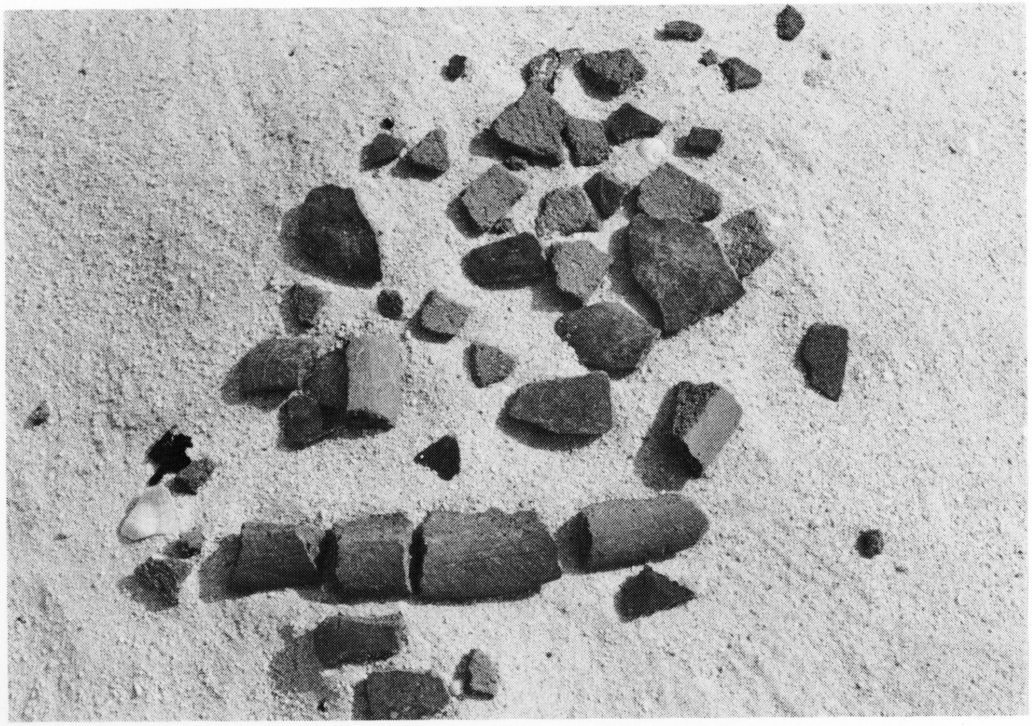
長浜金久第Ⅰ遺跡土器出土状況

長浜金久第Ⅰ遺跡土器出土状況



図版12



長浜金久第Ⅰ遺跡土器出土状況

長浜金久第Ⅰ遺跡土師器出土状況